尾崎久彌著

歌沢謾筆

東京 春陽堂壽梓

自敍

本拙著、所收七十八篇、長短樣々である。大凡そ既著「江戸軟派雜考」・「浮世繪と廢頽派」以外、當時若しくは最近の所謂謾筆である。本著の編に及んでの、新しき補記の類も數篇を數へる。概略左の七個に區分せられると思ふ。

第一より第二十九迄は、雜軟本の內容、異本の紹介、概說、雜感、發見等である。第三十より第三十七迄は、稍舊稿に屬し、雜汎論一束。第三十八より第四十三までは、浮世繪に關するもの。第四十四より第五十九に至る數篇の長短は、直接江戸軟派に交渉はないものゝ、此等は、自分の嘗ての徑路、趣味性感受性の推移の迹である。卽ち廣汎な意味の軟派に徂徊し若しくは潜入し以後の雜筆である。此の編著を成すに至り、割愛に忍びず以て收錄した。二三一身事に關するものもある。敢て自己を賣らんとの心意ではないが、辿りを自ら示す上に於て、また必要であつた。此の暴慢の態を、希くは容されたい。第六十より第七十四迄は、新著其他に關する雜評・雜記・敍の類であ

る。殊に鏡花氏・花袋氏の作品に關するものゝ如き、說いて至らざるものもあるが、自分の未だに消えやらぬ好尙の影として、今に於ても謂はんと欲する所のものである。第七十五・第七十六は、前は、既刊小冊子となした「小唄しんさく」の複載。後は、その續篇として脫稿、（此の續篇の創作、大正十・十一年頃）刊行の機會を失つてゐたものである。自分は、嘗て好んで所謂新しき歌を詠んだ。間もなくそれが、次第に江戸軟派趣味の沈潜と、その涉獵とに移りつゝあつた、その間の副產物である。歌詞は傳統に多く據つたけれども、盛られたるものは、その折々の實感である。一括して小唄と名づけた迄である。無論曲節など有り得る筈がない。その未發表の分續篇一卷も、此の機會に附したのである。自分としては、續篇に至り、多少の手法を變へた積りではゐる。附の第七十七・第七十八の戯曲二篇は、無論名の示す以上の戯である。「讀む戯曲」すらにもなつてゐないかも知れない。が本著に、あの頃の雜論雜記を收めたに比例して、其の頃の稚拙ながらも、心の辿（たどり）、幻を歌つた此の二篇を、以て附したのである。無論臺詞の未洗錬其他、滑稽な程所謂本物らしくないものである。が、嘗てかうしたものを作した時機もあつた、（無論此の種の戯々作は、まだ他に數篇はある。）その頃の幻を端

的に描いたものとして、(畢竟、今の雜筆考證は、それらの幻に被らせるに、古典雜著の形容と紙魚の臭とを以てしたに過ぎない。心の求むる幻は、あの頃の雜筆戲篇も、今の考證檢討も同樣である。)とにかく讀んで頂きたいと思うたまでである。

感傷的は、人間普通永劫の心の翳であらうと思ふ。既著の中「廢頽派」は、無論此の感傷的に富んでゐた。或る意味に於て一種の創作であつた。從つて「雜考」よりも「廢頽派」を愛するといふ諸兄もあつた。そのそれ以上の感傷味は、或は此の「謾筆」に低迷してゐるかと思ふ。正直な話、我々はいつも科學的な頭にばかり居られない。時に詩歌を欲する。しかもそは比較的萬人共通の、親染境地かと思ふ。――と謂はゞとて、此語、此の自著の存在を殊更づけるといふ不遜でもない。

唯、これを一契機として、自分と同樣の徑路、過去に現在に、求むるものに於て同樣の辿りを辿らるゝ諸兄と、一層緊密な繫がりを發見しようとしたまでである。

著述は、凡て他に自己の理解を求むるその現はれである。自分の如きは、特に此の感が深い。それだけ、著成るに際しては、待つ心のうら悲しさ淋しさに滿たされて、ち

やうど無限茫漠たる裏に喘ぐ孤鳥の痛さを感ずる。今、また然りである。

以上、直前の抱懷を述べて、自叙形式の代りとする。

久彌しるす

大正十五年晩秋

凡例

一、本著、大凡そ類聚、強ち執筆年次に據らず。

一、挿圖は、特に本文と交渉多きものゝ中より、計二十四圖を選びたり。他に割愛したるものまた多し。

一、挿圖に就て。その解説簡なるものを、別に附す。本文と牴觸なき程度に於てのもの也。但し浮世繪師の生歿小傳の如きは、凡てこれを略きたり。

一本著所收の中、從來嘗て鉛槧に附せざりしもの、「續篇小唄しんさく」。及び此の著を成すに就て、直接補遺として書きつぎたるもの、「都々一本解題抄」の後半。「よしこの本解題抄」全部。「飯盛女値段付」の其一。「夫婦岩の一つ」。「親鸞と歌麿」の歌麿。の數篇とす。他と雖も、補筆修正殆ど舊形を改めたるもの多し。

軟派護筆

品目

一、平賀源内の著作……一
二、風來山人名の僞作本……一八
三、酒落本改題本の異例……二四
四、初代一九の『旅眼石』……三〇
五、小三馬の賣藥披露……三六
六、梅亭金鵞の作物と晩年……四一
七、戯作者の逼塞と活動……六八

△

八、豐後節語物集七種段目……八九
九、「滑稽東都一圖繪」と「教諭謎々春の雪」……九四
一〇、都々一を浮世節といへる說……一〇〇
一一、都々一本解題抄……一一四
一二、よしこの本解題抄……一二二
一三、宮驛遊里沿革略……一三三
一四、飯盛女値段付（其一）……一四六
一五、飯盛女値段付（其二）……一四八

△

一六、『江戶軟派雜考』補遺……一五四
一七、茶菓詩について……一七二
一八、畫本柳樽の編者と畫家……一七五
一九、驪𩡫のひま……一八一

二〇、おぼえがき數則……一九七
二一、江戸軟派について……二〇八
二二、お伽草子の分類と代表作……二一一
二三、假名草子一斑……二一八

△

二四、歌舞伎小感……二二二
二五、「肥後の駒下駄」雜感……二二五
二六、「四谷怪談」の根本……二三二
二七、大南北の似顏……二四二
二八、捜索願……二五〇
二九、四代目澤村四郎五郎遺聞……二五五

△

三〇、「我」のあけぼの……二六四

三一、藝術の民衆化……二六九
三二、民衆とヘロイズム……二七四
三三、好色藝術の諸作家……二七八
三四、所謂軟派を辯ず……二八三
三五、割り氷……二八六
三六、秋光朗徹……二九〇
三七、碧落搖々……二九二

△

三八、久遠の處女性……二九九
三九、春信の一枚繪……三〇三
四〇、描かれしもの……三一〇
四一、大判横繪「忠臣藏」のいろ〳〵……三一三
四二、浮世繪の虎……三三三

四三、美人拾態……三四五

△

四四、親鸞と歌麿……三五四
四五、腎臟炎……三五六
四六、隱遁者の心理……三五八
四七、苦痛の谷か享樂の谷か……三六〇
四八、否定の疲れ……三六三
四九、幕開く……三六六
五〇、自製安全瓣論……三六九
五一、性愛と聖愛との相剋……三七四
五二、個の羅列……三八七
五三、好色者の自白……三九二
五四、著者より……三九七

五五、溫泉土產……………………三九九
五六、カリタさんの話……………四〇三
五七、夫婦岩の一つ………………四一一
五八、雙六谷と『神鑿』…………四一三
五九、見知らぬ町…………………四一六

△

六〇、人の顏………………………四二〇
六一、音樂會にて…………………四二五
六二、「幼ない時」から…………四二九
六三、鏡花の作品を褒む…………四三二
六四、『燈影』を讀む……………四三六
六五、『英一蝶』と廣重…………四四一
六六、松方氏將來浮世繪版畫展覽會を見る……四四四

六七、あぶな繪畫集を葬る……四四七
六八、典籍の燒却・古美術の壞滅……四五〇
六九、和本手入れ漫談……四五四
七〇、『江戸軟派文献』の解說……四五七
七一、『川柳江戸名物』の效用……四六〇
七二、『元祿歌舞伎傑作集』推挽の辭……四六四
七三、『江戸軟派研究』創刊の言葉……四七一
七四、小唄の會報條……四七三

△

七五、小唄しんさく……四七五
七六、續篇小唄しんさく……五〇三
七七、栗林のおさん（ぎきよく一まく）……五三三
七八、朧夜の卷（おなじく一まく二場）……五六七

——品目、畢——

挿繪目錄

第一圖　十返舍一九と僕太吉（榮水畫）　三四頁ノ次

第二圖　十返舍一九肖像（自畫）　同

第三圖　「北雪美談時代鏡」第四十編下挿繪（二代國貞畫）　七二頁ノ次

第四圖　「胡瓜遣」初編上の挿繪（曉齋畫）　同

第五圖　「新板百人一首吉原どゝいつ」表紙　一二〇頁ノ次

第六圖　「新作繪入よしこの初編」表紙　同

第七圖　一荷堂半水自筆選歌　同

第八圖　宮驛お龜の圖（罨山畫）　一三六頁ノ次

第九圖　神戸青樓の圖（松圃畫）　一三八頁ノ次

第十圖　掛川宿（英泉畫）　一五〇頁ノ次

第十一圖　上下六枚繪「踊形容樂屋の圖」「踊形容新開入之圖」（三代豐國畫）　一五八頁ノ次

第十二圖　「畫本柳樽」二編本文（五岳畫）　一七六頁ノ次

第十三圖　「古今笑句柳の翠」　本文（國直畫）　一七六頁ノ次
第十四圖　「新撰狂句圖會」　初編本文（廣重畫）　同
第十五圖　「繪本柳乃みどり」　貳編本文（英泉畫）　同
第十六圖　「柳の栞」自初編至五編　表紙（廣重畫）　一七八頁ノ次
第十七圖　「女男色遊」　一之卷挿繪（西川祐信畫）　一八二頁ノ次
第十八圖　「雅平家花枤」　上挿繪　同
第十九圖　山地々の圖　一九八頁ノ次
第二十圖　お菊むしの圖　同
第廿一圖　根本「四谷怪談」　後編五挿繪（北英畫）　二三八頁ノ次
第廿二圖　大南北肖像（國貞畫）　二四四頁ノ次
第廿三圖　忠臣藏　本望（廣重畫）　三一八頁ノ次
第廿四圖　同　十一段目（國芳畫）　同

已上

挿繪解説

第一圖　十返舍一九と僕太吉　榮水畫

本文第三十三頁――第三十四頁參照。畫者の榮水は、榮之（細田氏）の門人。版畫にも大錦判、大首美人畫などの佳作數圖がある。主に寛政末期の作である。享和以後、挿繪畫家として立つたらしく、殊に一九とは、親善の間柄であつたと見えて、彼の小說本に、をり〳〵口繪などをものしてゐる。

第二圖　十返舍一九　自畫

彼の自畫作「附會案文」（中本一册、序に云ふ享和四歳とある）の扉繪である。初版本は、此の扉、見返しへかけて色摺である。（此本、すべて滑稽に作した文學び樣式のものである。叙者、淺葉庵音芳、跋は豐年也。）丁數序九、本文三十一。形式、下が［天頭樣ゑ年頭狀］といつたもので、鼇頭は、書用無重寶記といつたものである。所々、細かい自畫挿繪をものしてゐる。序一表の「文字の由來」の下の「遊女文書く」。序七裏の「紙の由來」の下の、婦女二人、髮を梳き、鏡を見るの圖など、彼の畫技が窺へる。重政（北尾）ばりといふべきか。さて此の扉繪は、無論彼の自畫で、いかにも案文の體

である。上の文字は、每（カ）家籠中重寶煙管掃除用紙と讀める。胸から出た煙やうのものが、右の見返しの書名、版元（茶林堂梓）へかゝつてゐる。第一圖と對比してみる、いかにも表貌に於て酷似せりである。唯、年次若き享和二年の「旅眼石」の榮水畫の方が、やゝ老けて描いてあるのは、これは本來で、一九の自畫ではこれを少々若く描いたといふのではなからうか。卽ち此歲（享和四年）彼の年齡は、四十一歲、といへばこの比較的の若さは、少々自讃的である。

第三圖　「北雪美談時代鏡」の挿繪　二代國貞畫

本文第七十二頁參照。

第四圖　「胡瓜遣」挿繪　猩々曉齋畫

『胡瓜遣』初編上之卷本文第三丁ウラ（開運の身の上話の條）のヒラキ繪である。明治初期、洋服と丁髷との混同が、これにも現れてゐて、混沌氣分を十二分に打出してゐる。曉齋は、此頃盛んに挿繪本にその瑰腕を揮うた。これもその一である。（本文、第七十六頁以下參照。）

第五圖　「新板百人一首吉原どゝいつ」表紙

本文第百十四頁參照。丁數序とも七。中本。第一丁表の唄、「あきの野のくさふみわけてよしはらがよひしぼりゆかたもつゆにぬれ」。弘化五年版。挿繪は、普通本と違ひ、每表裏、半丁分の過半の大き

さに人物を描いてゐる。唄は、半丁に二首づゝ。

第六圖　「新作繪入よしこの初編」表紙

本文第百二十四頁參照。中本一册、年次不詳。畫家も不詳。十二丁物。毎半丁に上下にて二圖づゝ歌詞は文字大きく二首。第一丁表の上の唄、「ちやんとそなへてはつ〲しくもぬしのかげまつかゞみ餅」。かうした四季をり〳〵の風物によそへてゐる。歌詞、挿畫とも、比較的末期の香少し。大樣な、ぼやけた所がある。

第七圖　一荷堂半水自筆選歌

一荷堂半水は、半醉とも書いた、大阪に於ける幕末明治へかけての情歌選者の大家である。丁度東の歌澤能六齋と同樣の地位。半醉（半水）の選歌本、その版本は、主に細長横本に於て夥しい。よしこの他、一般俗歌大津繪ぶしの類にも及んでゐる。編集、又は創作交々あつたらう。中本で、繪入本謎々に關するやうなものもある。戲作（小說類）といつたものは聞かぬが、雜軟本に於て夥しい量である。その男の自筆選歌本を最近、當地（名古屋）巷間から、拾ひ出したから、此の機會に登載したのである、が此本に選ばれた作者どもが、大阪人か名古屋人かは不明である。

此本半紙に、選歌七十首、別に卷尾選者の一首計七十一首を、自筆で書いて、それに番號を打ち、

丁寧に一々等級を示す意味（カ）の捺印をいろ〳〵に捺してゐるものである。右下隅の文字は、朱書で發表後作歌者の名の書入れである。記入の形式は、初めに自序一丁半、そのうら、第七十番目、卷尾に至る程秀作である。卽ち此の登載圖は、選歌の中の最秀歌、卷逸と名づけたヒラキ一首である。（第十より以後は、ヒラキ卽ち一丁分に一首づゝである。第十以前は、半丁に一首づゝ。）その裏の自作は「袖の別れと此夕立もあわずばこんなに濡ぬ物」といふのである。登載したものは、竹枝といふ男の「本にうれしき夢見たあとはもとのつらさにかへる床」といふのである。

第八圖　宮驛お龜の圖　墨山畫

文化十二年序、東花元成著の中本上下二冊「名護屋見物四編之綴足（しへんのとぢたし）」、その上の第十五丁目のヒラキ圖である。此本は、尾張靜觀堂版。江戸から名古屋に僑居してゐた東花元成（不詳。例の大文字屋のかぼちやと何かの緣因がありはしないか。）が、十返舍一九の「東海道中膝栗毛」補遺の意味で作したものである。從つて主人公も彌次と喜多。挿繪、行文凡て彼に似たり。此本、元來、少くとも都々一が此の文化十二年宮に段々流行（はや）つてゐた證の一で、（然し自分の「どゝいつぶし根元集」に據つた發見ではその魁は遥か寛政末である。この「四編の綴足」より十五年以上の以前。）「どゝいつぶし根元集」程にはゆかぬが、とにかくどゝ一の流行が、江戸の文政天保より早いことを示すものとしては十分である。

現に、此本上卷第三丁表に、「どゝいつぶし　宮の宿から雨古わたり、ぬれてゆくぞへ名古屋まで」（此の古渡は、今、別院のある一帶。）とある通りである。

さてその都々一にも密接な關係を持つた、汎お龜の風俗畫が登載圖である。此の繪に關聯した本文を一寸拔いてみる。

「蓬萊と名こそめでたく聞つれどうかむ瀬もなき里にすむかめ。かく口ずさみ。笑ひを催ふし。ゆくほどに。神戸中ほどにもいたりぬれば。北「彌次さん。むかふからくる。しろものを見なせへ。中〳〵。やぼでねへ深川といふ形だぜ。是は此地の彼おかめといへる也。外の内へ。夕べかりられたると見へ、子買に風呂敷包ミをもたせ、紫ちり面の上ハ著、ち（さ）らさちり面のあいき二ツ、大巾厚板ともいへる、帶をメ縞ちりめんの前かけに、丁子茶ちりめんの紐をつけ、尤駒下駄にてむかふより來る　彌次「なるほどうつくしいものだ。しかし天窻を見なせへ。筑摩祭の鍋といふ。見立も古いから。烏が二三羽。あたまのうへで。じんくを躍ているよふだ。北「そふわるく。いはねへものだ。土地の風ならしかたがねへ（下略）といふ所である。倚、此の畫者の墨山は、墨仙（墨僊）、牧氏。北齋門人で、現に北齋名古屋滯在中は、牧氏の許にゐた。俗稱助右衞門、屋張藩の臣。北齋に學んで、北亭墨僊といふ。肉筆美人畫、繪本、挿繪本等多し。門人に玉僊（此の玉僊に畫技を學んだもの、小寺玉晁である。）を出だす。

第九圖　神戸青樓の圖　松園畫

元治二年初春の序、わか本是人大人撰並に序の名古屋版「よしこの戀のしをり」初編の口繪である。原畫は、本の右と左とヒラキの續繪を、掲載上此の上下に變へたのである。卽ち上の鳥居は、右へ續くのである。幕末、神戸の殷賑を傳へたものとしてふさはしい。此本、横中本、奥付は、竹林社藏、版元は江戸山城屋佐兵衞、大阪河内屋和輔、京田中屋治兵衞、尾張永樂屋東四郎と合梓の形式であるが、無論永樂屋本である。內容、ちらし模樣入の三版摺である。口繪は、極彩色。尙、此の左の圖の裏に、禿が三方を運ぶ廊下の圖がある。松園畫とあれど不詳。わか本是人は、當時京都版よしこの本に選者として多く見る所、これ京の選者。俚說には、時々神戸によしこの會あり、その都度上方より師匠が出張したとあれば、卽ちこの是人の謂か。とにかく此本、作歌者は、全部名古屋若しくは宮の者らしい。神戸の妓も加盟、作歌したものらしい。現に「地」の入選は、永樂屋色葉（妓名であらう。但しこの永樂屋は版元の永樂屋とは異り、神戸大樓の一たる永樂屋）とあつて、『おもひ切つても眼先に見えりやまたも心にかゝる風」とある。他、新桔梗屋、君鶴など（これが人の入選）の名も見える。表紙圖案も凝つたもので、熱田の鳥居の意味で、鳥居の柱を眞中に太く一本、右に榊と木綿、背は墨のボカシである。（尙、本文百二十五頁參照）

第十圖　掛川宿　英泉畫

本文百四十六頁、百五十頁參照。此の英泉の擶繪（東海道、竪繪大錦版）は、全部出たものか否かは不詳。たま〳〵にその端物を見うける。凡て一流の皮肉味暗示味に饒かである「府中驛」の一圖の如きも面白きものである。此圖、炬燵に散つた本は、外題は、里見八犬傳と讀める。が八犬傳らしい感じがない。例のといひたい所である。ところが、「値段付」の本文には、兩様とも、此の掛川は「めしもりなし」とあるが、このなしも、實はあてにはならない。准飯盛、飯盛の差は、大異なかつたらう。現に此の英泉の飯盛情調があるではないか。背の句は、炬燵あるおく間や晝もうすくらき　林車といふのである。此畫、村松と禍の副檢印、但し極印まで餘計に付いてゐる。此の名主の副印時代に極印附隨の例は聞かぬが、同時に此の變態があつたものか。又は、極印で初檢閲を經、そのまゝであつたものを、更に後に再檢閲、その時の副印と解すべきものか。とにかく、天保弘化の頃の作畫であらう。

第十一圖　上下六枚繪「踊形容樂屋ノ圖」「踊形容新開入之圖」　三代豐國畫

本文百五十八頁參照。及び拙著「江戸軟派雜考」四百五頁「踊形容に就て」參照。當時、劇場の樂屋を示したものとして、好個の典型であらう。

第十二圖　「畫本柳樽」二編から　八島五岳畫

本文百七十五頁參照。第二編の第二丁裏の圖である。句は、上より「あつぱれな山九合とはいゝは

かり」、「不二を見ぬやつがつくりし實語敎」、「三しま女郎三ごく一の化粧水」、「山ほどなうそをついたは徐福なり」、「師のかげを七尺さると人形かき」、「來はきたがはなしあいてのない徐ふく」、「師匠さま子をかきわけて客を上げ」といふのである。此本、表紙は、おかめ、十二重檜扇を持つの體である。

第十三圖　「古今笑句柳の翠」挿繪　國直畫

本文百七十八頁參照。本文では、英泉畫本と同名異本かに幾分の疑ひを持つてゐたが、英泉のは繪本、これは古今笑句、尙表紙の形からも無論であらう。此本口繪は、紅を混へた二版摺。表紙、重を前にして、男下に盃を持つ、女上に相手になり銚子を持つ處。所揭の挿圖の中、句は上から、「宿下り今度も灸をかこつける」、「隅田川連がわるいとかどわかし」、「八瀨小原きれいに牛を叱る所」といふのである。

第十四圖　「新撰狂句圖會」　初代廣重畫

本文百七十九頁參照。句は上より、「戶張の角に附紐のわび住居、淸よし」、「寒念佛せんきへひゞく大木魚」「浦島と傾城明て貌がはり　壽キ」、「おち合た刎に馬道おしかへし　おかし」、「張良のやうに奈良漬出してやり」といふのである。表紙は、一立齋廣重畫と圍みをとり、婦女、繪本を開く態である。

第十五圖　「繪本柳乃みどり」貳編より　英泉畫

口繪、例の粂仙の相手の婦女のコケチッシュな態をヒラキに描いてゐる。その第九丁裏の挿繪。句は「いゝ研屋劒の山に居るこゝろ」、「研屋の氣違ひ近邊でより付ず」、「ときやの小僧庖丁をむまくとぎ」「獨酒旨くもないが癖になり」、「獨もの猫とはなして酒を吞」、「火を吹て庇をもとめる佐倉炭」といふのである。表紙は、辨慶と夜鷹。

第十六圖　柳の栞」自初編至五編　表紙　初代廣重畫

本文百七十八頁以後參照。此の表紙繪、全五册とも極彩色。彼の大首繪美人の、自分の知る限りの唯一である。彼の美人の特徴が、十分現れてゐてなつかしい。上の右（初編）、上の左（二編）、下の右（三編）、下の中（四編）、下の左（五編）である。各美人の背に用ゐた圖案の中、初編と三編は、例の廣重の紋章、ヒロの繫ぎである。

第十七圖　「女男色遊」一の卷挿繪　畫家不詳

本文百八十一頁參照。一之卷の第二十五丁裏の圖、次の第二十六丁表とヒラキになるその右の圖である。「役めは鵜つかひ同前の身喰ぬ殺生」の中である。案内されてゆく男の背につかまつてゐるのが、豆男である。畫は不詳であるが、恐らくは西川祐信であらう。「西川が浮世繪のやさしきを云々。是ば

かりに心をうつし罪も欲もなく」とも現に本文の中にある。

第十八圖 「雅平家花籾」上から 畫家不詳

本文第百八十二頁參照。「淸もり榮花」の中の挿繪、佛の舞にうつゝをぬかす體である。古雅、掬すべし。上の豆男とは對照も甚しいであらう。此本挿圖數葉、卽ち忠盛油坊主の生捕、忠盛殿中劒の舞、淸盛船中白魚入り來る、登載の圖、鹿ケ谷密謀、行綱訴人、俊寬召捕、俊寬鬼界ケ島、山門御輿、以上であり、凡てヒラキの一丁分である。

第十九圖 山地々の圖 畫家不詳

「怪談雨夜の鐘」卷二の口繪である。氣味の惡い繪である。此圖、原畫は、色調ありてもつと凄味を帶びてゐるものである。上の詞は、「このもの人の寐息をすいあとにて其人の胸をたゝくとひとしく死するとなりされどもあいねまの人目をさませばかへりて命ながしといふ奥州におほく居るよしいひつたふ」とある。

第二十圖 お菊むしの圖 同

同四の口繪の中である。詞は、「皿屋敷のことは犬うつ童だも知れゝばこゝにいはず」といふ。（以上二圖、本文百九十八頁參照）。

第二十一圖　根本「四谷怪談」から　春梅齋北英畫

本文には、挿繪は略くこととしたというたが、割愛に忍びきれず、此の一圖を選んだ。隨分效果を擧げてゐると思ふ。お岩の顏、雪輪の中の、母親おくまの苦痛、巧い巧い。大阪畫家だからとて、此種根本の挿繪には、偶々にして莫迦に出來ないのがある。（尙、本文二百三十九頁參照の事。）

第二十二圖　大南北肖像　初代　國貞畫

本文二百四十二頁――二百四十九頁參照。その約二倍の擴大である。色調等、凡て原畫に近い。描線は、無論原畫と違はぬ事、表貌の感じもである事を保證しておく。

第二十三圖　忠臣藏本望　初代　廣重畫

本文三百十八頁參照。

第二十四圖　假名手本忠臣藏十一段目　國芳畫

本文三百三十二頁參照。以上の二圖、幸はひ忠臣藏の主要場面、此の炭部屋を對比させて見たのである。二者構圖色調等を違へてゐるのが面白い。雪を脊景にしてゐるは、二者同樣であるが、內、廣重のは、さすがに風景畫の手法に近いものが滲（にじ）み出てゐるのに反し、國芳のは、同じく脊景はあつても芝居繪に接近しつつある。が、師直の顏は、共に理想化である。――以上、大正十五年十月二日夜稿

補　遺

第三章、洒落本改題本の異例

歌妓洒戯を或は萬壽井山人、名古屋の增井棄齋のした仕事かと、萬□井山人の印から、疑つたが、其後棄齋の「津島土產」などの自叙の印とつき合はしてみると、一點一畫全くの同じだ。それに、朝倉氏は、此の剽窃作の完本を見られたのであらう、今度の新修日本小說年表には、增井山人と明かに名指してゐられる。疑ひが誠、結局棄齋の事であらう。が、此の序文の寅の春は、恐らく朝倉氏類推の寬政六年ではなく、文化以後の寅であらう。增井棄齋に、寬政六年はそぐはぬ感じがする。さうして尙、此の歌妓洒戯は、多分名古屋版、名古屋に於ける剽窃製作であらう。例の本町に店を持つてゐた松屋（まつや）が、古板木を江戸から買つてきたものゝ一の洒落本、改題本であらう。虛名にも卑吝であつたらしい增井と、地方の本屋とのやりさうな事だ。尙、增井は、名古屋の御園筋に住んだ彫師である。

（棄齋の傳記著作目錄は、他の機に讓る。）

第七章、戲作者の逼塞と活動

松村操の晩年の編著に、例の「實事譚」を脱かした。第一より四十まで、合本八冊に纒つてゐる。

極晩年明治十四・十五年頃、主に江戸時代戯曲小説類の中に現れる人物の實説集、といふが、左程の典據にはならぬ。然し此の「實事譚」は、餘りに流布せられてゐる。悉しくはいはない。が、これが松村の編著である事を、此の機會に更に記憶から呼び起したいのである。

其他、よしこの本、都々一本の如きも、其後新入手のもの數多くにあるが、凡ては割愛する。他日一括して更めて述べよう。

—十月一四日—

歌仙遺筆

軟派誹筆

尾崎久彌著

平賀源内の著作

——年表と解題——

「矢口の渡」の上演に因んで、作者福内鬼外即ち初世風來山人、天竺老人、鳩溪平賀源内の著作年表と解題とを物さうといふのである。源内が本草家究理家としてもまた偉大であつた、完成の傑れた原柱の一つであつたことは知る人も多からう。今は唯、彼の寧ろ餘事——であつたらう文筆生活（晩年には、多少眞劍でもあつたらう）に就て、主に述べたい。

上編　平賀源内著作年表。

□寳曆十一年（時に三十三歳）

三月「樹に餅の生る辨」成る。

　○右、文末に寶暦十一辛巳年彌生上の九日とあり。「飛花落葉」所收。

□寶暦十三年〔時に三十五歳〕

五月「物類品隲（しつ）」刻成る。

九月「根なし草」前編成る。〔黒塚處士の序に、寶暦癸未秋九月とあり。〕

冬　「風流志道軒傳」出版。〔獨鈷山人の叙に、癸未冬日とあり。〕

□明和元年〔時に三十六歳〕

十月「五百介圖考」成る。

八月「男色細見菊の園」出版。

□明和二年〔時に三十七歳〕

八月「火浣布略說」出版。

不詳「神農本草經圖註併倭名考」等成る。

□明和五年〔時に四十歳〕

不詳「痿陰隱逸傳（なえまらゐんいつでん）」成る。

十一月「嗽石香」引札を作る。〔此の引札「飛花落葉」に收む。〕

十二月「根なし草」後編成る。同時出版。〔大藏千文の跋に此年師走とあり。〕

□明和七年〔時に四十二歳〕

正月　院本「神靈矢口渡」成り、上演。

○右、作名「福内鬼外」。正月十六日より外記座興行。

八月　院本「源氏大草紙」成り、上演。

○右、同。八月十九日肥前座。

九月「天狗髑髏鑒定緣起」成る。

○右、文の初めに、「明和七つのとし菊月末の四日」とあり。但し、此物、安永五年十二月（カ）出版。

□明和八年〔時に四十三歳〕

正月　院本「弓勢智勇湊（ゆんぜいちゆうのみなと）」成り、上演。

○右、作名同。正月廿日より江戸肥前座。

□安永二年〔時に四十五歳〕

二月　院本「嫩榕葉（わかみどり）相生源氏」成り、上演。

○右、作名同。右、後序に二月三十日とあり、肥前座。

□安永三年（時に四十六歳）

正月　同「前太平記古跡鑑（かゞみ）」成り、上演。

○右、同。正月十二日より座元吉田專藏。

正月「嗚呼お江戸」を作る。

○右、細見の類カ。「六々部集」の中に右序ありて、午のはつ春とあり。

不詳「放屁（はうひ）論」前篇成る。出版。

○右、文中に「此年安永三年に至て」と年代の記入あり。

七月「里のおだまき評」成る。此の頃出版。

○右、文末に甲午の初秋とあり。跋に秋七月とあり。

□安永四年（時に四十七歳）

四月「清水餅口上」を作る。（「飛花落葉」に所收）

七月　院本「いろは實記」成り、上演。

○右、作名「福内鬼外」、七月十五日より、上場。（座元、不明。）

□安永五年（時に四十八歳）

正月　猥院本「長枕褥合戰」成る。

不詳　力婦傳一冊。出版。

○右、六部集に所收。

十二月「天狗髑髏鑑定緣起」出版。

□安永六年（時に四十九歳）

不詳「放屁論」後篇成る。此年出版。

□安永七年（時に五十歳）

九月「飛だ噂の評」一冊成る。出版（此年カ）

○右、序に、戊の九月とあり。文末、時に安永七の年、……菊月上旬とあり。

不詳「菩提樹の辨」成る。

□安永八年（時に五十一歲）

二月　院本「荒御霊新田神德」成り、上演。

○右、二月八日より結城座にて。四月上旬出版カ。

二月「金の生る木」稿成る。

不詳　院本「靈驗宮戸川」の稿成る。

十二月　源内歿。

○十一月二十一日。人を害して、入牢。十二月八日牢死すと云。

□源内死後の出版物。

□安永九年（死後一年）

三月　院本「靈驗宮戸川」上場。

○右、三月三日より座元不詳。

五月「風來六部集」成り、出版。

○右、風來門人二世天竺老人編。二卷。序に、安永九年五月十八日とあり。「放屁論」、「同」後編。「痿陰隱逸傳」、「力婦傳」、「蛇蛻青大通」、「お千代傳」（お千代傳、一に「太平樂卷物」といふ。）の六篇所收。此本、池之端仲町伏見屋（大觀堂）善六の出版也。現に二世風來（萬象亭）の「福神粋語錄」（天明六年）卷尾にも廣告あり。尚、寛政二年同版の「文選臥座」（洒落本）の末尾廣告にも、此の六部集二冊ありて、これには「此書は當世流行する洒落本の根元にして……世に平賀ぶりと稱す」とある。

不詳「金のなる木」出版。

○右、序、二世天竺老人にて、安永九甲子とあり。

□天明三年〔死後四年〕

正月「飛花落葉」出版。

○右、遺文集として。編者四方山人（蜀山人）。蜀山人、喜三二、菅江、東作の序。所收左の如し。

「江戸男色細見序」、（この序にきのえ申葉月とあり。こは明和元年八月にして、此の男色細見とは、例の「男色細見菊の園」を謂へるならむ。）「嗽石香報條」、「長枕褥合戰後序」、「道行瓜の妹背筋」、「神靈矢口渡跋」、「嫩榕葉相生源氏後序」、「きよみづ餅口上」、「風流米酒論」、「荒御靈新田神德口上」、「同口上後日」、「同後序」、「木に餅の生る辨」、「麥飯報條」、追加「吉原細見天の浮橋序」。尙、此本、天放山人、三平二滿藏、二世天竺老人（萬象亭）跋す。

□天明八年〔死後九年〕

十一月「風來假名文選（ぶんぜん）」成る、此頃の出版か。

○右、門人萬象亭の序。天明八の歲霜月廿日とあり。菩提樹の辨一篇を收む。（？）（但し「文選臥座」末尾には、此本「洒落本の序文狂文狂歌はしがき仕出し物の引札口上すべて即席のたわむれ文章をつゞる懷刀となる書也」といふ。）

□寛政十一年〔死後二十年〕

院本「實生源氏金王櫻」一出版。

○右、遺稿として、三段目まで出版す。風來の絶筆と稱す。

□年代不詳

「風來六々部集」全四冊。

○右、「風來六部集」に、「飛だ噂の評」、「天狗髑髏鑑定縁起」、「里のをだまき評」、「飛花落葉」、「菩提樹の辨」、「細見嗚呼お江戸序」の六篇を追加して、六々部集と改む。小膽山人跋す。

「虚實山師の辨」全五冊。

「祕術工夫箱」全三冊。

○此本「知惠の海などには一向なき珍ら敷祕傳なり」といふ。（「文選臥座」末尾）

「當世野夫論」全五冊。

○此本「故人平賀先生の趣向を繼、門人萬象亭の著述なり」といふ。（同）

□源内の著作として傳へらるゝもの。（在否未詳を含む。刊本ありや否やも。今、假りに、諸「書目」の記するがまゝに記す。）

●遊里大和詞。△男色細見三ツ巴。同三の朝。●當世さよ嵐　五册●同後編　五册。

○右の中、當世小夜嵐は、「根なし草」の改題ならん。藤岡氏既に之を謂はれたり。（近代小說史」）

△食物本草。　△日本彰譜。　△藥草木石禽獸魚介蟲譜。
●諸國自慢。　●風流出來料理。　●世間腰の鑵。
●當世袖の振合(あひ)。　●賢愚氣性鏡。　●產物蟲眼(め)鏡(がね)。
△普通一人案。　●金神論。　△金銀簇篋內傳一卷。
△嚴密錄一卷。　△萬國圖一卷。　（以上の中、●印の物、「福神粹語錄」卷尾の廣告戲作目錄に載す。）

□生前刊行せられたるも、年代不詳のもの三。

蛇蛻青大通(へびのぬけがらあをだいつう)　一冊　酒落本類のもの。
○右、「風來六々部集」の中に收む。

太平樂(らく)卷物　一冊　同
○右、お千代の傳。「風來六々部集」また所收。

里鶴風語　一冊　同
○右、風來山人酒落本類似作の中、最も酒落本（遊里描寫を中心としたる）に近似せるもの。他本に所收なし。

□風來山人著作飜刻本の表

飜刻本は、活字本の謂である。帝國文庫の「風來山人傑作集」、續帝國文庫の「江戸作者淨瑠璃集」、及び賞奇樓叢書、滑稽文學全集等に散見す。仍てこれを一括す。〔國民文庫本、有朋堂文庫本、袖珍名著文庫本等其の他なほあれど、今略く。但し、此等に、如上列擧せる帝文以下に飜刻せられたると異種なるもの一も見受けず。凡て重複也。〕

●滑稽本　〔洒落本様のものを含む。〕

○金のなる木｛帝文（風來傑作）
滑稽文學全集第六

○根なし草 前
後｛同

○風流志道軒傳｛同
同第七

○風來六々部集｛同
同第十二

○里鶴風語｛賞奇樓二ノ二
滑稽文學全集第十二

●院本

○神靈矢口渡（帝文、風來傑作）

○前太平記古跡鑑（同）

○弓勢智勇湊（同）

○嫩榕葉相生源氏（同）
○いろは實記（同、忠臣藏浄瑠璃）
○源氏大草紙（續帝、江戸作者）
○矢口後日荒御靈新田神徳（同）
○靈驗宮戸川（同）

以上。

□源内作として眞僞未詳のもの。

帝國文庫「風來山人傑作集」の中に收められた、「そしり草」なるものである。昨年十二月「新小説」誌上で小酒井不木氏が、此の中から或二三條を引いて論じられたのに、此の帝文本はけろりとして存在するに拘らず、共の頁だけは剪られたものである。此の帝文本校訂者蜃氣樓主人（岸上質軒氏）が、此の校訂（明治二十七年五月）より數へて一昨年、「偶然一古書舗に獲たるものにて、元は寫本二卷なりき。この書風來の著述書目にその名あらざるを以て……筆力も較脆弱にして、六々部集等諸作の犀利靈活なるに如かざれば、少しく疑なき能はずと雖も、その縱罵熱罵冷罵、痛罵罵倒罵殺し去りて……恐らく他人の企て及ぶべからざる所なるべし」として入れられたもの。卷頭に鳩溪平賀先生著とある。

第一、守屋大連から第三十七、正成までの后妃、貴紳、武將、高僧等に對する筆誅錄である。終りに三十八、仙人、三十九、宗論、四十、論語讀の三篇を附してゐる。自分が思ふには、鳩溪の罵世の態度をまねての後人の僞作であらうと見たいが、如何にか。源内流に物したといふ迄のものと思ふ。（然し此の形式は、これに依つたか否かは不明であるが、後世三馬の「忠臣藏偏痴氣論」などに踏襲されてゐる。）

下編　代表作の解題。

以下、代表作なるものに就て示さう、但しこれらは、飜刻本に殆ど收められてゐるし、且つ、藤岡氏の「近來小說史」、水谷不倒氏の「平賀源内」等に、委曲されてもゐるから、重複であるが、一般讀者の便を思うて、冗言を繰り返すのである。

「樹に餅の生る辨」は、まだ源内流の辛辣さの現れなかつた頃のもので、まだ眞面目な、木に餅が生つたといふ世上の噂に就て、天地異事なき事と、諄々として門人に說くのである。「根なし草」は、當時荻野八重桐というた女形俳優が墨田川で過つて溺れ死んだ、その事實を種にして、作したもので、當時瀨川菊之丞（三代目ならん）の綺姿に迷うた閻魔王が、河童（かつぱ）に命じて此の菊之丞を冥土へ引かうとす

る。それを知つて菊之丞の親に養育の恩を受けた八重桐が、その身代りで入水したといふのである。西鶴當時の「小夜嵐」などの地獄めぐりと同じ系統のもので、彼の不明作の一なる「當世小夜嵐」は無論これであらうと思ふ。この閻魔が俳優の繪姿に戀慕云々の條は、後代の柳亭種彦も摸して、(恐らくこれからヒントを受けたものであらう。)即ち彼の三代目三津五郎五代目菊之丞の追善冊子の一たる「三津瀬川上品仕立」の中に閻魔が五代目菊之丞(こゝも菊之丞。代は違つてゐる)の繪姿に平素あこがれてゐて、折よく冥土へ來た菊之丞を、同じく前後して來た三代目坂東三津五郎にとり持つてくれいと頼む所がある。(尙、此の「根なし草」は、彼の師事(?)した志道軒の「元なし草」に摸した外題であることは勿論。)「風流志道軒傳」は、深井淺之進なる侍を撚出して、その一生に物した怪異譚である。その主人公が大人國や小人國を廻るのは、後代の「和莊兵衛」「夢想兵衛」などに傳統を垂れたものといはれる。「痿陰隱逸傳」は、これだけは、帝文本にもその六々部集で本文を削除してゐる。本當に外題を讀むことも憚かるべきものである。が大した物でもない。殊に六々部集の明治の新刷(和本四冊)は比較的平凡、それにその儘出てゐる。「根なし草」後編は、明和四年の市川雷藏や翌年の坂東彥三郎の死んだ事を、八重桐の續き物語として物したものであるが、趣向に窮して、却つて平凡に終つてゐる。但し本人は、序によれば余程得意のやうであるが。此の本前後編とも、當時の男色なる變

態性慾方面の嗜好がまだ都下に遍く、語るも普通であつたことを示した材證として、最も面白い。
「放屁論」後篇になると、既に源內の罵世の調が烈しい。卽ち兩國の見世物曲屁で評判を取つた『花咲男』といふのに借りて、自分の不遇鬱憤を述べたものである。「お千代の傳」に於て、また最も然りで、これは、想嫁のお千代が萬丈の氣焰を吐くのである。（このお千代の傳は、山岡浚明の「跖婦傳」（帝文「珍本全集中卷」にあり）を摸したとはいはれるが、それは形式だけの話である。）「力婦傳」は、當時（安永五年）江戸の見世物であつた登毛與といふ女大力を材料にしたものである。このともよは當時餘程有名だつたと見えて、同年板の初期黃表紙の、淸經畫く、東西南北述、「風流友世車」といふのも、此のともよを材料にしたものである。（この「風流友世車」は當時痲疹の流行と、此の友世の評判と、それに劇の鳴神の筋を應用したものである。）

尙、洒落本型、又は初期の洒落本に近く、卽ち廣義の洒落本書目に入るべきものとしては、右の力婦傳、太平樂卷物（お千代の傳）、痿陰隱逸傳、里の苧環評、天狗髑髏鑑定緣起、飛だ噂の評、放屁論、里鶴風語、死後の遺文集たる飛花落葉、の類であるが、中、とにかく洒落本の洒落本らしいものに內容から近似してゐるものは、太平樂　物、里のおだまき評、里鶴風語の三篇であるが、就中「里鶴風語」はである。この「里鶴風語」は淺草のほとりの聖大悟和尙が、廓の雛鶴に逢つて、說法する身

が散々意見をきかされ、躍氣となつて問答の歌、喝やらを交したが、たうとう煩惱心が起つてふらふらする處を、雛鶴ついと飛退き、「近いうち曲輪へ御ざんせ、必ず待つぞへ」で見事素つぽ抜かされた話。それも五分も隙のない、齒切れのいゝ文で一瀉千里に書き流されてゐるのである。とにかく後世のやうな、純洒落本（遊里に主材）を生んではゐないが、やがてはその機運を作る元でもあつた。現に、純洒落本作家と目するに足る所のその弟子に、二世風來（森島甫齋が事。蘭學派の一、「紅毛雜話」等の著有名、本名中良、桂林と號す。戲作にては二世天竺老人、萬象亭。森羅萬象ともいふ。萬象亭の名を門人七珍萬寶に讓つてからは、卽ち晩年寛政六年頃築地善好とも稱した。狂歌戲作に於て竹杖爲輕の別名もある。黃表紙「夫從以來記」等の作もある。院本にも「驪山比翼塚」などもある。院本は、源平藤橘の名で物した。）を生んだ。卽ち二世風來には、「田舍芝居」、「眞女意題」、「當世導通記」、「富岡大論」、「どらの卷」、「福神粹語錄」、「二日醉大入盞」等の洒落本作があるのである。卽ち、此の二世風來を生んだ所より考ふるも、彼初代風來の、滑稽罵世文字は、文學過程上にも、相當の感化を後世に與へたものといつてよい。卽ち、黃表紙などの時事に對する諷刺題材、或は、後世多數の洒落本又は中本（滑稽本）共の他戲文作家に對し、滑稽諧謔罵倒の一種の文體內容を典型に近く示したるが如き、（少し過褒ではあらうが）我等また讀本の祖とは彼を目するに憚るが、洒落本黃表紙等の

源流の一個に（主支の論はあるにしても）彼を措くに躊躇しない。

最後に院本に就て、その解題。

「矢口の渡」は、諸君も知らるゝ通り、南朝の新田の遺子に同情した作であるが、此の作殊に評判を博したのは、始めて江戸の詞を主に採り入れ、殊に舞臺を江戸附近に取り、即ち當時江戸人の信仰好尙に打つてつけたものだつた點もある。「前太平記古跡鑑」は、將門亂後の舞臺で、左大臣高明、田原の千晴の惡心。賴光及四天王の活躍。それに例の美女丸（賴信）と仲光、仲光の苦衷。終りに將門の遺子將軍太郎良門の働きで御鏡が戻る。良門は奥州安堵といつた筋である。（この作、神田明神に縁ある將門の以後の物語殊にその遺子の奥州安堵、こゝにも江戸人に迎へられた理由がある。後の炯眼感ずべし〱。）「弓勢智勇湊」は、平家沒落に材を藉り、「嫩榕葉相生源氏」は、義經の生立、賴朝旗揚、政子と緣を結ぶに始終し、「いろは實記」は、忠臣藏物の一。「源氏大草紙」は、義經賴朝の不和から、最後景時一族を朝比奈が討捕るに結んでゐる。「荒御魂」は矢口の後篇、新田足利の和睦と南北兩朝統一とに結び、「靈驗宮戸川」は、淺草觀世音の緣起を說いたものである。

結び

以上、一走り、源内の著作に就いていうたが、源内の作、とにかくその科學的著述（寧ろ彼の本領カ）の數種を除き、滑稽本と院本に於ては、どちらも甚しい自信と獨創的良心とを以て成されたもの

らしい。(二三、他人の跡を倣つたのはあるが、例へば、「蛇蛻青大通」が、増穂殘口の「艶道通鑑」の一節から來たとか、「根なし草」が、前代の地獄巡り物に、お千代傳が蹠婦傳に。とにかく此等は彼が自ら謂つてもゐるから、此の弊は、あるにはあるが、然し全く彼一流の物に作り換へられてはゐる。)其の業蹟は、多方面なりし程、多端で、況して彼が司馬江漢に油繪を敎へたといふ一說が眞ならば、繪畫史の上にもである。まして科學的の方面や、田沼意次と接觸した所など、文學者であり科學者であり、畫家であり、且つ顯官の寵兒であり、凡てエレキテルと飛行機との差はあれ、例の伊太利のダ・ヴインチに似ると思ふ。唯彼には、ダ・ヴインチのモナ・リザ夫人の如きがないのが淋しい。然し何れ女色か又は若女形の、有數のリザ夫人的はあるにはあつたらう。

　彼も、性的に異常であつたか否かは知らぬ、とにかく心操に於てまたエロチツク文字を綴るだけの餘裕と興味とがあつた。(熱意はどうであるか。)とにかく人並の(當時の作者氣質としての)好色心理はあつたらう。即ち彼に、猥院本「長枕褥合戰」があるのである。これは、平政子に藉材した弓削傳說の例の物で、畑銀鷄の複刻本まであつて、猥本としては割合平凡な方である。がこれを見なくとも例の「矢口渡」等の普通院本などにも、從來あるにはあつたが、更に進んだより人間的な、ヘンな官能描寫が時々發見せられる事は、御存じであらうと思ふ。―大正十五年一月廿八日夜十時半(同二月、「歌舞伎」)

風來山人名の僞作本

中本一冊、「世の中善悪かゞみ」といふのがある。見返しには、「

風來山人平賀先生著
世の中善悪鑑　完
東都書林　玉養堂梓

」とあるが、さて此の善悪鑑、從來風來の著作書目には、さつぱり見かけぬ所のものである。二世風來（森島市齋、竹杖爲輕、源平藤橘、萬象亭等凡て同一人）かとも思はれるが、見返し、右の如くきつぱり平賀先生とあるによつて、矢張り初世風來の積りでゐるらしいことは明かである。ところが、これはまた隨分御念の入つた僞作である。が、僞作にしても何だか餘りに突拍子もなくて、類がないから、問題には多少なるだらうとも思はれる所のものである。先づ序を紹介する。

人善なさば善かならず返る、惡をなせば惡かならずむくふとは、聖のおしへなり、予もまた小冊を

つくりて、世のなか善悪かゞみと、なづけて、いさゝか好事の家に、是見よかしのたわとをいふ

頃は心のこまの

ひものゆるめるなか月

風來山人誌

本文は、世の中善悪鑑、風來山人作前　世の中善悪鑑、風來山人作後と二篇となり、共合本である。丁數は、前後を追うて、前が十六丁目迄、後が廿八丁目迄である。外に序の一丁である。さて此の前後二篇の本文が、如何に念の入つた一寸類の無い（乏しい）僞作であるかは、本文前篇の一二丁を紹介するから、それを讀まるれば直ちに諒解が出來ようと思ふ。

世の中善悪鑑　　風來山人作前

五重の天守雲に聳へ金の鯱日に耀て朝鮮人さへ馬をとゞめ日本一よかく\とゆびさして通りたる事嘘でない本國の繁昌批杷橋より宮まで三里の間市町軒をつらね行程三筒の津に續たる大都會外にあらばいふて見給へ都といへば海なくして生た魚は見馴ず江戸は水あしくして酒造らず夫をひとつに兼たる白山尤外より取集て京も江戸も事は欠ねども其地に産するは風味格別にて色をも香をも知る人はしるべし第一米穀天下に勝れ薪は堀川に入船あらそひ木曾のざいもく白鳥に山をなし塩

は南野に焼出し陶は瀬戸より運ぶ川魚は西より集り山の物は東北より入るかゝる目出たき城下に遊女町のなきは玉に疵と浮氣人の殘念がれどそれも又有難き國例百何十年終になくて外に贖き夫もなしもとより押出して悪所と號すれば佛なぶりの祖父婆々も後生善處とこそ願へ悪處はねがふ所にあらずまだ云たき自慢もあれどさのみはと口をしめたる袋町筋に大黒屋二俵衛とて商賣は搗米や一に俵積ならべ二に賑やかな見せ付三人の娘を持て世渡りにかしこく明暮の碓ふむ足に味噌とやら次第に内證も暖に成空も彌生の節句過ちかきころ聞ばいかなる好事か千もとの櫻を移し植て八事を花の山となしけるとかや夫終に見ぬも癡人一年の氣延しにと娘どもいざなひてたま〳〵の花見の趣向是は米櫃から駒が出たと供の調市も我を折斗朝はとふから出たれどもめづらしき道草に時を移し山へ着たは晝の日脚炙かしこと梢を詠れば、（下略）

これは、何處を主題にして作したものであるか、分りましたか。金の鯱で分つたでせう。でも分らなければ、嘘でない本國の繁昌批杷橋より宮までとある、その宮で思ひ付かれませう。謂ふ迄もなくこれは全部、名古屋の事である。枇杷橋といふのは、正しくは枇杷島橋といふべきであらう。青物市の立つ枇杷島町の西の橋である。もとは名古屋の西隣であつたが、近來は、市と併合して市の西區となつた。宮は現在の南區熱田、「都といへど――」「江戸は水あしくて――」都と江戸との缺點を捉へ

て、お國自慢に耽つてゐる。こんな風來山人があつたゞらうか。宛然、我郷よしの態度、風來が名古屋者であるとは勿論、また名古屋に住んだとも、聞かぬ事だ。ほんとに御叮嚀な作である。然しそれにしても、此の僞作は、名古屋の勝手を知つてゐる自分から謂へば、一々正鵠を得てゐる。地理上の事は勿論、風俗上の史實にも、大凡そ此の記述のやうである。以上引いた所に就て、今少しく謂ふなれば、米穀の自慢は、例の尾張米。堀川は、小つぽけな、今では市の糞尿の捌け場になつてゐるが、もとはそれでも兩岸に櫻があつて、風致のあつた、隅田川の三分の一程の川。木曾は御承知。白鳥は堀川の熱田に入つた所。附近に材木町といつた町もある。瀬戸は東春日井郡、例の瀬戸物の元。遊女町がないと云ふのは、是も事實で、享保十八年頃以來禁ぜられて、後寛政末に、おかめを宮の神戸・傳馬に許した事は、諸君が自分の飜刻した小寺玉晁の「どゝいつぶし根元集」で知らるゝ如しである。袋町、町名である。「八事を花の山となし」。八事は、名古屋の東郊、春秋の散策地。と數へて來ると何が興味で風來が、こんな名古屋を舞臺にして書いたか。眞赤な僞せ者と云ひたいがこれを一寸控へさせるのは、見返しの風來山人平賀先生著の文字である。殊に名古屋版であることか、東都書林とある。玉養堂といつたやうな書肆は、あらうか。井上和雄氏の書賈集覽を尋ねてみよう。探したが、無い。愈々正體不明と來る。書き出した序でゝあるから、本文梗概を一走り書いつけておかう。處々文

體筆致が、なる程風來を眞似てゐるなといふ處はある。

二俵衞と娘と調市と、八事の山奥を尋ねてゐると「竹一村の奥、世にすねたらしき庵あり。門の明たるを幸に内へ入て樣子を見れば主は五十余りとゞら兀たる天窓つき、僧でもなし俗でもなく、夢借舍と額打たる世を遁れし男とは見へたり」其庵を借りて辨當を使ひたいと頼み込むと、主も存外氣さくな性で、中へ呼び入れ、互ひに酒を酌みかはして、その男が勸善懲惡めいた芝居の功德話をする。二俵衞も共鳴する。轉じて二俵衞が願ひによつて、娘に聞かする爲の、女子道の敎訓話をしつゞける。いたづらをする女の粹の通り者のといふのは、不義をしかける男の言譯で、傾城茶屋女の身の上の事。堅氣の女房にはあるまじき事といふのである。其の外これに類した長談義が續いて、弱つたのは調市、「勝手の隅に肘枕二寢入程やつて起たれどまだいつ立れそふな氣色もなし窓元見れば彼岸のすへのこりか艾の有を幸ひに丹那の草履の裏にたばこ呑顏して一火見しらせたれど聾ほどもきかぬにこそ道理なれ、さめやらぬ目に取違へ、庵主が草履の裏をこがせし、菴主はなしの内にもゝ尻して、我等常々小便にはかたいが何としてやらけふは頻に立たふ成ますとて二三度も裏へ立しが、これ灸穴のまちがひとは後にそおもひ知られたり」といふのである。

後篇は、雪の日に、伊勢町の座頭古市が來て、さる武家方の堅い叔父が、父の留守中、悴の二人に

武士の心懸を說く、それを隣部屋で聞いた話をするのである。前篇後篇とも繪入、話の中に現れる人物の描寫である。唯、前篇のはじめの挿繪、夢借舍の庵の戸を窺る二俵衞と、後につゞく娘二人、辨當を提げ傘を肩にした調市との姿は、挿話以外のものである。描線、凡て拙、北齋派と思はれる。それにしても此の本出版年次不明が殘念である、無論風來の死後であらうと思ふ。稿成は、古いかも知れぬ。序の「心の駒」は午であらうが、すれば安永三年頃か。其他の類推では、前篇、夢借庵主の物語の中に、「近年靜觀房が下手談義、單朴翁が雜長持經口のなぐさみ本に仕立、結構成教訓あらゆる世間の人情をつくせしが、女子の訓いまだこまなやかならずと日比おもひし事いわでふくれし腹けふは云々。」とある一項である。卽ち（當世）下手談義（靜觀房）は、寶曆二年東都版、大本五冊である。—大正十五年三月「江戸軟派硏究」

洒落本改題本の異例

——新織歌妓酒戯に就て——

最近、洒落本改題補刻本の甚しい例を見た。即ち命題の「歌妓酒戯」である。この本、作者不明である。（原本、蟲喰ひ本。序文は、万□井山人と讀める。例の名古屋の万壽井〔增井彙齋の事。名古屋文化頃の戯作者。委しくは、未刊拙著「江戸軟派叢說」所收の增井彙齋雜考に出づ。〕かと直覺されるが、すれば此本名古屋版かとも思へるが、慥かでない。）小本一冊、純然たる蒟蒻本、然るに内容を見るに及んで、端なくこれが、前作あるを知つた。剽窃ではない。剽窃にしては余り無作法大膽だ、寧ろ改題補足ともいふべきである。即ち一向不通替善運〔天明八年版。甘露庵山跡蜂滿作といふ。〕の補刻本かと思はれるのである。それが如何に補足したかは、次に確證を擧げよう。然るに、滑稽なるは、此の「一向不通替善運」がまた前本ある事である。即ち此の「一向不通」は、江戸時代文藝資料第一巻洒落本の部に飜刻されてゐるが、その校訂者の朝倉無聲氏の此本解題には、左の如くある。

一、一向不通替善運　一巻　本書は、安永六年版本「淨瑠璃稽古風流」の趣向及び文章を剽窃せしもの

にして、當時新作を競ひて出せし洒落本界にありては、實に稀有の事なれば、重複ながら玆に收載せり。剽窃者甘露庵蜂滿の傳詳ならず。天明八年の版本也。

とある。幸はひ、同書に、この前本と稱する「淨瑠璃稽古風流」も飜刻されてゐる。今此の、「淨瑠璃」と「一向不通」とを比較するに、成程筋に於ては、多少踏襲した點も見えるが、大體に於て別物たるの感が著しい。卽ち前者に於ては、後段、淨瑠璃の故實、議論で以て大半を埋めてゐるに拘らず後者は、師匠の三勝に情夫の半七、此の二人の情事を搦ませてゐる。三勝が姙んでゐて、半七が買つてきた中條流の藥を袂に貰ふ所など、かうした人情氣分は、前者に毛頭にない。趣向の類似といふのは若い女の師匠、その稽古場の氣分を襲いだといふに過ぎぬ。これを剽窃といふのはちと酷だ。類想にして寧ろ脫胎である。然るに、此の「一向不通」と「藝妓洒戲」の程度は、こんな生優しいものではない。全然、「一向」をとり入れて、唯、申譯に序の變更と首尾を少々殖やしてゐるに過ぎぬ。「藝妓洒戲」の原本、蟲喰ひ激しく、大分准落丁であるが、とにかく之に據つて、その改補の迹を擧げてみよう。

序（この序文、「一向」と全然別物也）

「初メ、序一丁欠」儒者も□（以下三字位欠）。酒を吞むことかと思ひ。奥（二字位欠）いへば先生も。舞の手かと心得たるは。實大通

の世界にあらずや。則ち此小册は。何某が著述にして。色男の忍び駒。野暮なお客の調子はぐれを。よく書とつたる奇作なれば。□も三弦の緣をもて。其緖を爰にしるす。

寅の春　万□井山人［　］

新織歌子洒戯

〔以下、第一丁、表全欠字。裏最後二行、殘存〕

聲を發せんとお〔以下六七字欠〕あげてかぞふるにいとまあらず。〔以上、本文第一丁終〕斯くひとごゝろのうつり變りしも普く見聞するものゝ多ければ〔以下三字位欠〕りぬべきことなりかし。〔以下四字位欠〕に女を見んほどこゝろの〔以下五六字欠〕うじ、しゐたけは〔以下半行欠〕な〔以下三字位欠〕一トしほ〔以下約十字欠〕したひ〔以下約十字欠〕かゝる（以下欠）いふも（以下欠）うら山しく（以下欠）の（以下不明）傾城の（以下半行欠）たは何にたとへんかたなし、（以下四五字欠）唯藝子の意氣なるほど、ことにうれしきものはあらじ。ひとのよく馴れひとのよくもて興ずるものは、藝子を最〔以上、本來は本文第二丁の終り也。〕第一といふべけれ。そも地ものに似て地ものにあらず。けいせいに似てけいせいにあらず、いづれ一方にかたよらざるは、實に是を茶といふべし。そのゆへいかにとなれば、下戸も上戸もおしなべて、一口もいかぬといふひとあるべからず。仍て茶は藝者のもちま

へにて、茶にうかさるゝは、〔次ヒラキ即ち第三裏より第四表へ挿圖。藝者稽古場の風。弟子の若い男たち二人。師匠の歌妓。女弟子の子供三人。第四丁の裏も半丁全面繪、歌妓、男と相傘。下に犬まつはる。次に、本文以外の、［後忍こま篇］などゝあり。次、第五丁の表、第四丁裏の繪とツヾキ。半ペラの紙一枚、それに中央輪廓をとりて、師匠の勝手口。師匠の母らしき老婆、水差を手に提げて入らうとする所。〕〔以下第五丁のウラ〕又世のひとのならひなるべし。されば萬事にうつりやすき人ごゝろより、かゝるうれしきものを見るだにあるを、ましておもしろく引きかたりなどせんには、誰れかたましゐを奪はれざらんや。われも人もたちまち青銅貳百の弟子入して細腰の傍に寄らば百のさらひも惜しむにたらず。百疋の摺物も更に痛ごとゝおもふべからず。あしたに五ン合を持參し夕べにけんどん箱をまねきても一トたび笑顔を見るにいたらばをのづから糸代たゝみせんと共に、風前の塵なるべし。三味線の皮の離るゝはりかへあれば、はりつめてしばしはなれぬ櫻紅葉あり。士あり町人あり色男あり不男有り。思ひ／＼に意氣をつくしてこゝにかよへるにぎはひも、大平の代のいさをしとはいふべけれど、是皆無益のさかひに心のうつりゆくなれば、ひとり辨ふべき所にこそあなれ。さは云へもとより善惡不二にて迷ふもさとるも一やうなれば、こゝろにまかせて呑めうたへ、聖賢の道をまなぶも豊後長唄のけいこにかゝるもさのみたがひはあるべからず。青表紙の道理をも更に道理とわきまへずば、淨るりにもおとるべく、淨瑠璃のあはれなるもあはれと知りて勸懲の益をとらば、なを青表紙にまさるべし。されば其益なきことに益あるなら

ひは此道をこゝろざして已待にてれぼうとなる事なく、又三線箱の角なるも忽撥皮の角のとれたる通子となるべし。通子となれるうへならでは、彼の靑べうしの意味深長なる事をも覺ゆべからず。故に人情を知らんと思はゞ、此所書をもて、かしこに行べし。本町〔以下『一向不通』と全然同一也。一字一句川違なし。卽ち『一向』の「長町の新道に舂米屋……」の「新道に」にかゝる。（國書刊行會本、三二三頁上の六行目、上より五字目）但し補刻本の證據には、こゝまでの本文七丁の文字は以下に較べて稍大字、文字も太し。書風も別である。又、以前は版よく、以下は惡し。卽ち以下は、後摺の證歷然たり。勿論、三勝も半七も、一切人名もその通り也。何ら改刻の所なし。唯最後、『一向』は、「御袋の足おとが路次へきこえると……」の所が、「歌妓酒戲」では、「お袋の足おと」までが、元版本で、是迄廿八丁、以下の最尾の一丁、廿九丁が改刻されて、『一向』が、二行半程であるに拘らず、約一丁表裏全部に文を續け、大尾としてゐる。それを蟲喰の欠字をそのまゝ、載せておく。卽ち、此本、序二丁と本文七丁、最尾一丁と改刻、以外は繼足し也。」

「バタ〳〵〳〵 [三かつ] はっとおどろきヱ、もうぢれつてへ。いつその事逃やしよう [半七] はてマアそうせずとも今いふ通りに [三] アレサそれでも此まゝ（以下二字欠）なれちやア毒だハナ（以下四字位欠）うなづく折ふし雨ふりくる三かつはかい〴〵しく（以下五六字欠）〆壁にかけてある傘をとつて（以下四五字欠）たす [半] ひらいて三かつを覆ひかくし（以下同）外へ出る [おふくろ] すれちがふて門口を覗き（以下同）とんだくらい晩だぞ、これはしたり火が（以下同）そとさぐりながらうちに入り三かつやこの子はマアどこにゐる（以下同）とつさんは二階に寝てか、三かつや（以下同）歸へんなつたか三かつやとよべどさけべとなしもつぶてもなければ、さてはにげしと心えてそんなら今の傘がホイ [半][三] 兩人はあとをも見ずして「行空の

新織げいこ洒戯

といふのである。即ち第四丁裏第五丁表のヒラキ續畫は、この最後の光景である。本文中途、第十五丁裏と第十六丁表ヒラキの往來の男女の圖は、「一向」翻刻本の如し、寸違はず。但し「一向」のうた麿筆の文字を削り居る。以上、版元承認の上、或は新版元求版の上、某作者に依囑して、改題、前後だけ更へ、版木を新舊繼ぎ足し、新本の如く見せかけたものかと思ふ。本屋の惡戯か、作者の不德義か。とにかく改題本（くはしくは、改題補刻）の異例として、此に示したのである。

—大正十四年十二月、「江戸軟派研究」

初代一九の「旅眼石(たびすゞり)」

曩に江戸軟派叢書初篇で自分の飜刻した「馬士の歌袋」は、其後發見する所に據ると、博文館文藝叢書本の膝栗毛全集（饗庭氏訂）に、同名（但し袋を嚢とす）の下に飜刻されてゐた。然るに其後更に神戸の頴原退藏氏藏本「旅眼石」を借覧するに及んで、この本「馬士の歌袋」と殆ど同本、題名と序と本文の一二丁のみ相違せるを知つた。しかも此の「旅眼石」には明らかに、自序中に享和壬戌の記入がある。即ち享和二年の稿たる事明らかであるが、即ち此等を綜合すると、此の「馬士の歌袋」は、「旅眼石」の改題本であり、後版であるのである。自分が「馬士の歌袋」を飜刻した責任上、此の頴原氏本（即ち初版本）の自序題詩、凡例、並びに「馬士の歌袋」に欠けたる初二丁の全文を掲げて、世に傳へようと思ふのである。以下折々註をもて丁數の異同を示していかう。〔尙、江戸軟派叢書四編卷尾の、同初編補遺を參照せられたし。〕

表紙、青。中本(ちうほん)。外題「南總記行旅眼石(たびすゞり)」。

序

さゝ鳴のうくひすもあら玉の春たつかとに哥口をしめしてさえつり水にすたく蛙もあらかねの土こ

ねかへす田のくろにあつまりてたはれうたの會をやすらむくつかた〳〵にかふりことはのとりかなくあつまふりの歌ふくろひらけしより（以上、序一ノ表）よにひろこりて犬うつわらはむしろうる翁までこの道くさの種うふることになむおのれも千秋のつらねにうち交りて今やふもとのちりひちよりたはれ哥の道しる石のみきに左をはせありきぬされや去年の春明ほのゝ紫匂ふふさくにゝ杖をひきたるも鹿嶌香（以上、序一ノ裏）取息栖のみつのやしろに詣侍らん事をおもふにこそそれか中に覊旅のよしなしことをよみ出たるうた將風土のさまのことやうなる名ところのあやしきまてかいつけたりしを茲に書肆の乞ふにまかせてひとまきのとちものとなしたるはいとおこかましくも（以上、序二ノ表）おのれにゝけなき

わさおきならすや

享和壬戌初春　自誌（以上序二ノ裏）

〔この享和壬戌は、同二年である。〕

握杖回跡雲
水僧記事箋

出頭陀嚢

大喜陸稿　□□　（以上、序三の表）

〔此の序三の表、松葉散らしの縁をとりたる角(かく)の中に、右の如き體裁に刻す〕

凡　例

一此に著するものは。當意の卽興を詮として。其鄙言。手爾をはの拙きは。概(おほむね)落首體に相同じ。仍て此道に名たゝる君子の覽に備ふべくもあらず。只兒女の爲に。悉く畫をまうけて。是に投ぜむことを欲す。是を以て。視る人の哢言は。敢て予が非とするにも。足らざるべし。

一幽僻佳境の奇事珍話等は。見聞に任せて誌す。就中本城。松岸。潮來。等の倡家遊戯の風流。遊女の風情を口づさみて。舊時の殘膏をおもふ而已。

一山川の佳景。風土の秀麗なるは。予があらはす。總行奇談に精しければ。此に强て詳にせず。

已上　〔以上、總振假名附、序三の裏〕

『此の凡例中の自記、並に前の題詩によれば、彼に、「頭陀嚢」、及び「總行奇談」などの、此の本以前の著があつたやうである。』

〔以下、本文〕

南總記行 旅眼石 十編舍戲著

發語

ことしむつきの末つかた俄にしもあらず。おもふことのありて。常陸。しもつふさのうちなる。鹿島。香取。息栖の。みつのみやしろに。詣侍らむとて。旅のまうけ。あらましにものし侍りて。なには江のよしあしくとも。おもひたつ日をきちにちとなしつゝ。鳥がなく。あづまのみやこをあとになし。玉くしげふたつの國の橋をわたり。立川を（以上、本文壹の表）ますぐに。ほそ竹のしもとをすゝめて。やがてさかさいのわたしを。あなたにこへて。たどり行ほどに。朝もよゐ。如月ちかく。所まだらに。きへのこる。野つらの雪に。若くさのいと青う見へたる。うつはりの聲。ほろ〳〵ときこへて。糸あそぶ空のうらゝかなるに。おのれどちの。こゝろにかゝる雲もなし。くはへぎせる。はゞかるべくもあらねば。すり火はなたず。たばこのけふり。霞むかとおもほゆるばかりになん。はやくも市川の御關所をうち過けるに（以上、本文壹の裏）

（次に、十返舍一九と僕太吉の旅姿の圖あり、榮水畫と款す。太吉、肩に、天秤の前後に荷を結びたるを負ひ、一九、頭巾を冠り、合羽着用、脇差一本、手に笻をもてり。背景は、鳴子の繩わたす田。「我

なからりゝしく見ゆるあしもとはこれあつらへの紺のたびたち」と賛あり。この一九の表貌、頗る彼の自畫作「附會案文」（文化元年）の自畫像と相似したり、彼の肖像の一として信ずるに近きか。此の挿圖半丁、本文二の表」

舟ぼりのわたりより。道づれになりたるひとは。おなじたはれ哥の道くさくふ。厩（うまや）の豆成（まめなり）といへる人のよし。これかれをかたり合ッ、行徳のさとにいたり。笹屋といへるに。やすらひはべる。こゝはうどんの名所にて。ゆきゝの人。あしをとゞめ。うどんそば切。たうべんことを。せちに乞ひあへれば。うつもきるもあるじひとり。いまたそのこしらへ。はてしもあらず見へはへれは

御てしゆの手うちのうどんまちかねて

いづれも首をながくのばせり

〔以上。本文二の裏。以下、予が翻刻「馬士の歌袋」本文第三丁表以下と全く同一也。既に、此の本文第二丁の裏「乞ひあへれど。うつもきるも……」以下は、二本全く同一、同刻也。即ち、今かく「旅眼石」本と比較し來れば、改刻修補の跡が著しい。即ち「馬士」本は乞ひあへればの前までが、比較して太字で、畫も大きく、乞ひあへれば以下の板木と丁數とに、強いて合せようとして、附け合はせの跡歴然たりである。即ち「馬士」は、序の別丁數なく、直ちに本文の丁數にうつり、即ち「馬士」



一



二

の序以下この「乞ひあへれば」までの二丁が、丁度「旅眼石」の本文二丁に相當させてゐるのである。
さて、この「旅眼石」本文の第三丁以下、馬士の第三丁以下、凡て同板木、從つて卷尾も一切同樣、（奧附、共に無し）共に三十二丁にて終つてゐるのである。」以上。

—大正十四年七月、「江戸軟派研究」

小三馬の賣藥披露

弘化三年新版の式亭小三馬作三代豐國畫の「戯作花(げさくのはな)赤本世界」四冊の處々に、小三馬の自家營業の披露を兼ねてゐる。その中の幾部分が（例へば江戸水など）親の三馬讓りで、幾部分が小三馬の新案かは不明であるが、とにかく小三馬の當時これだけの賣藥其他を爲してゐたことは明らかである。左にその全部を摘錄しておく。これも何かの資料にもと。（尚、此の「戯作花赤本世界」四冊の內容に就ては、他日別に謂ふ所があらう。親の三馬の文化八年版「腹の內戯作種本」三冊（美丸畫）の飜案であるが、然し小三馬の述懷境遇がとり容れられて面白いものである。殊に赤本全部の通覽概說を兼ね加ふるに三代豐國の、國貞より師名を襲うたに就て重要な資料ともいふべき記事をも含んでゐる。此等は他の機會に讓る。）

式亭製藥御ひろう

○江戸の水　▲大箱代百五十文　つめかへ百文▲中箱代百文　同六十文▲小箱代五十文、同三十二文

にきびの大妙藥、御顔のできもの一切によし。夏冬ともに白粉はげず、きめこまかにしてつやをいだし、白粉のうつり悪しき御顔によくのりて、はげざる事請合なり。

○天人香　一匁　百五十文

この上なしの清淨極製、かほりに殊に芳ばしく、年へて失せず、つやを出だす事世にすぐれたる白粉の奇方、まづ一ト包求め、試み給はゞ、その功速やか也、くはしくは能しよに記す。

○にほひ入御えりおしろい　百文　五十文　卅二文

御えりにのりて、うるはしきつやなり。半襟よごれず、白粉まだらにはぐることなく、御襟てらてらと光り、香ひ殊に芳ばし。近來功能あらはれ、追々相弘まり候間、製法念入奉差上候。

○三馬みせ製藥　婦人三養湯　百文　五十文

產前はやめ、產後あと腹の惱みによし。血の道一切まくらさげつぎむしに即効あり。婦人懷胎となりて五月キ目より毎月十日日〳〵に怠らず用ひ給へば、十月にみちて安產し、生れし子健やかなりその外血の道より出づるえだは病ひに盡く効あり。

○月水（つきやく）不順を治す名方天女丸（くわいにんを休む妙やく）　百廿四文

月〳〵の經水滞れば様々の病となる故、これを用ひ給ふべし。いかほど年久しき不順も治らぬ事な

し。又糜く子をうむ人此藥毎月一包づゝ用ひ給へば何ヶ年も懐姙せず、よき頃と思はゞ藥を休むべし。その月より懐姙するなり。この藥は產と產との間を遠ざけ婦人を健やかにして、生れし子もすらく＼と成長する婦人の良藥也。

○紅毛奇方妙あらひこ　代五十文　廿四文
すべて男女に限らず御身じまひ御風呂に召させ給ふか、手水を使ひ給ふ折に、糠袋の中へ入れ用ふれば、御顔御肌へ玉の如く淸らかになり、うるはしきつやを出だす。

○御懐中早化粧あづまぬの　代百文　五十文
御ものまうで、御遊山の途中にて、白粉はげるとも、すぐ間に合ふ御調法の藥布なり。

○金勢丸　代百文　五十文
酒の醉をさまし、諸々の毒消し氣付腹一切の妙藥諸病に卽効あり。懐中して甚だ調法の丸子なり。

○しやくの黑藥　大包百文　小包五十文
いかほど强き癪なりとも立所に治す。平生持藥に用ふれば、一生癪の根をきる良藥なり。

○御顔の藥洗粉おしろい薄化粧　百文　五十文
あつき御化粧を嫌ひ給ふ御方、或は四十才以上の御方によし。夏化粧、薄白粉のうへなしなり。

○極製御ふしの粉　五十文　卅二文　十六文
外に類なしの極製法也。
○御藥はみがき　大箱三十文　小箱二十二文
正銘麝香りうなに丁子入り、他家無類の名方、砂を用ひず、御歯藥り一式にて製する故、口中に入りて甚だ輕し。一流嫌味なしの製法、つけ匂ひにあらざれば、口かずたちても匂ひ失せる事なし。
（印）又々此所にて式亭製藥御ひろう
○御にほひ袋　蘭奢袋四季の友　代金貳朱
青葉の類かさばる物を用ひず、外に類なしの製法、仍て諸方御邸樣の御用に相成申候。
○御あらひ藥　目龍樹散　代　卅六文
目の病一切によし、はやり目は一日で治す。
○小兒百ぜきの奇藥　百文
水あめにて用ふ、至つて飲みよき藥なり。
○仙傳人參即功油　五十文　廿四文
第一打身切傷すりこわし、小兒胎毒くちかさの類、腋臭霜燒、草履草鞋食ひ、毒蟲に螫されたる、

その外諸々のでき物一切によし。

○ふり出し厭袋入り　風引一夜なほし　四季かげん代　廿八文

第一四季の引風、暑寒のあたりに卽功あり。食傷、くわく亂、咳嗽、寢冷、水のかはり、のぼせ引下げに妙也。他家に製する振り出し藥の及ぶ所にあらず。

○けはへ藥　百文　五十文

世にたぐひなき名方なり。

○雪月花御眉刷毛

歌川豐國筆新形模樣入彩色摺たたう、懷中御調法の品、代二匁三分。此品は卯の毛にて作りたれば、御顏にあたり軟かにて、けはひし給ふに別而よろし。

以上、馬猿（産まざる）を看板としただけあつて、親以來隨分怪しい藥（天女丸など）もあるが、とにかく全部三馬店製品、販賣であることは、「又々御披露」などの語によつて窺はれる。

—大正十四年九月、「江戸軟派研究」—

梅亭金鵞の作物と晩年

「妙竹林話七偏人」十五卷の作者として知られてゐる、末期の戯作者金鵞に觸れて見ようといふのである。金鵞の如き末輩を云々するのは可笑しいといふ評が出るかも知れないが、然し私一個からいふと懐しいものがあるのである。「七偏人」は、子供の時、帝國文庫の活字本で讀んだ。その折、腹の皮の撚れるのを禁め得なかつた。「八笑人」や「和合人」にも隨分さうした傾向があつたが、「七偏人」に於て殊にさうであつた。私は、あの惡ふざけ、くどい地口、猥雜な彼等の趣向が堪らなく面白かつたのである。それが未だに失せない。時々「八笑人」や「和合人」を見る、すると、もつと此のくどさを突き詰めたい氣になつて、「七偏人」に及ぶ。莫迦らしいと知り乍ら、「七偏人」にかゝる。例の如しだと知り乍らである。それだけ、我々にも、「七偏人」の内容と同じい惡ふざけ、冗い地口、猥雜な趣向を歡迎する、野卑さが多量にあるのかも知れない。此の意味で、鯉丈の「八」や「和」と共に、此の金鵞の「七」は私の愛讀の一である。やゝ後になつて例の「春雨衣」が、その署名吾妻雄兎子が金鵞の變名であることを知つた。それは、十數年以前、大日本人名辭書の與へた知識である。に依つて、益

益私の注意を惹いた。吾妻雄兎子の作が、私を喜ばしてゐるのでもない。然しあの多數な（恐らく二三十種）雄兎子署名の讀和や繪入本を私は一頓耽讀したものだ。丁度またか、例によつて例の如しと知り乍らである。同じ事の連續、同じ趣向、猥褻な尾籠なうるさい描寫と、思ひながら、昔、初期の私には、興味があつた。その點に於て、私は吾妻雄兎子は、春水（狂訓亭、又は嬌訓亭）と共に忘られぬ名であつた。それと、「七偏人」と同一作者であると知つて、私は、成程と思へた。結局、「七偏人」の類は、下級人情本的滑稽本であるからである。吾妻雄兎子の本筋の作物としては、「七偏人」も成程と思へるからである。然し今、我々は、單なる好き心、或は猥雜な滑稽を喜ぶ心から、彼――金鷲に向つてはならない。その當時の時代――此の背景の力を勿論考へなくてはならない。畢竟彼も時代の兒であつた。彼は明治維新後まで生きてゐた。明治十年以後は、團々珍聞の記者として、相當に存在を保つた。あの團々珍聞――私の子供の頃、あの口畫だけにグロテスクやエロツチクな感じを喫られた、――あれに記者をしてゐた。「七偏人」の内容、氣分が、散髮になつただけである。大名や公方の天下が新政府の參與の天下に代つただけである。彼等所謂團珍式の諷刺、悪ふざけは、七偏人をして馬車走り汽車驅る明治の世に引張り出したといふに過ぎぬ。金鷲は、とに角その始終を、一ッの色で終らしめた。そこに彼のみに、他の魯文（假名垣）などと異つた色彩があると思ふ。魯文の如きは、相當に時代の

新しさを追ふだけの教養（受け身、剽窃も様々あつたが）に忘れなかつた。金鵞には大體、夬程の咀嚼、新時代迎合が出來なかつた。そこに金鵞らしい特色があらうと思ふ。金鵞が團珍に據つたことは彼自らを救ふためだつたのである。然し、昔の「七偏人」がとにかく或る特色を保ち乍らも時代の本流からは押のけられて、眞面目に云々されないと同時に、團珍も相當に當時代の人心を刺戟し乍らも、未だ眞面目に人々からいはれてゐない。結局彼は、古壁に生えた黴、菌の如きものであつたのである。これが然し彼の一生を通じてゐるから面白い。然し彼も晩年は、淸風明月を友として、寡居隱栖したといはれてゐる。これ金鵞の如き幕末頽廢の殘骸そのものには、卽ちあの國會前後の日本の新しい政治上の運動や、及び坪內氏によつて唱へられた小說戲作の革新運動などには、てんから無理解無教養な彼には、手がつけられなかつたのかも知れない。（又、拮抗する程の茶氣もなかつた、そんな年でもなかつたのだ。）同じ過渡期の戲作者というても、假名垣魯文の如きは、脚本の默阿彌と相拮抗して、殘燈を輝らしてゐた。にひきかへ、彼の此の躊躇さは。それだけ彼は全く江戶期の遺物たるに過ぎなかつたのであらう。或は、魯文、默阿彌よりは劣つた才能の把持であつたともいへる。要するに、彼の晩年は最不幸であつた。纔かに團珍の記者として餘喘を保つてゐるに過ぎなかつた。迚も正系の文學史上の人物でなかつた。此に彼を愛する私からは、同情の一掬の淚なき能はざる次第である。これが私

を驅つて此の筆を執らしめたともいひ得られる。さて先づ、金鵞の作物を云々する以前 彼の略傳を明らかにする爲、彼の小傳に觸れてみよう。是に就ては、彼としては氣の毒な程、其の資料に欠けてゐる。要するに「七偏人」の作者として最も響いているだけ、「七偏人」は梅亭金鵞なりとは容易に聯想されるが、他は殆んど知られてゐない。それ丈、彼の逸話逸聞としても、その聞く名づくべきものも、殆ど數ふるにも足らない。いろ〳〵詮索しては見たが結局徒勞であつた。唯、日本百科大辭典（三省堂）の長連恒氏執筆の金鵞傳、並に帝國文學第廿五卷第二號（大正八年二月）の金鵞高弟鶯亭金升氏の談に據られたといふ山崎麓氏執筆の「梅亭金鵞」の二個が、まだしも他書の凡てに勝つて、豐富である。今それを左に摘載して見よう。

○

吉田政和といふ、文政六年三月三十日、兩國藥研堀に生る。父は柳剛流の劍客吉田勝之丞、彼は次男なり。幼より劍道を修め、十三の時には父の門下生を凌駕す。父は更に專門の劍客にせむとして、伊勢の一劍客のもとに遣せり。彼はそこに居ること二年、更に近國を武者修行し、江戸に歸れる時は立派なる劍客なりき。弘化二年、二十三にして彼は、新田の四天王と云はれたる名家瓜生家の養子となり、本郷附木店に住居し、いつか劍道をすてゝ文人となれり。嘉永の初年、彼は友人服部應賀（萬亭應賀）に伴はれて、下谷池の端にすめる松亭金水をとへり。而してその門下となり、梅亭金鵞と號せり。金水は、筆耕家谷金水の門下、筆耕を業とし、常に人情本を

淨書し、自得して著作家となれり　金鵞亦に下筆耕を業としつゝ、傍著述を事とせり。常に松亭に出入する文士萬亭應賀、竹葉舍金瓶、杉亭金升、古森金淨、之に畫家、梅の本鶯齋（後の弟）と主人金水を加へ、併せて七人競吟、狂句、地口などの遊戲文學に耽り、口上茶番、立茶番の趣向に一日を暮しとせり。之を寫生せるもの妙竹林話七偏人なり。

金鵞が彰義隊の騷動を見たるは、小石川指ケ谷町白山神社の裏手にすめる時なり。舊友榊原健吉が黒門前にて官軍と奮闘せる噂をきゝて、感慨無量なりしならん。瓜生政和の名を以て西洋新書、西洋讀談などの際物を書き一方、端唄、都々逸などの赤本を書きて生活し、更に橋爪金造の名にて嬉笑新聞といふ滑稽雜誌を發行せり。時に師の金水は逝き、弟、鶯齋は夭し、金淨は放蕩の結果禁錮せられて交際せず、竹葉舍と杉亭とは旅にいでゝ、七偏人仲間は離散せり。されど彼は、新しき友、鈍亭魯文、山々亭有人等と遊びくらせり。明治十年、團々珍聞の創刊とともに主筆を託されたり。その姉妹雜誌の驥尾團子に、梅亭鶯人の名にて、人情小說春色花暦を掲げ、當局者より中止を命ぜられたり。されど彼は妄想未來記などの滑稽文を書きつゞけ居たり。彼は錢あれば、親類知己の困れるものに分ち與へたり。彼は後に、鶴聲社の編輯顧問となり、明治にて最初の古書飜刻をなせり。人のすゝめに任せ、傘一本、高下駄ばきにて、數ケ月上方見物に出かけ、家人を驚かせたることあり。明治二十三年、巫山戲會の茶番の趣向を考案しつゝ、入浴し、その場に卒倒して遂に半身不隨の晩年を送れり。（山崎氏執筆の要）

○

ばいていきんが（梅亭金鵞）徳川時代末より明治の中頃まで生存せし小說家。瓜生氏、名は政和、通稱熊三郎

柳剛流の劍客吉田勝之丞の次子なり、劍術に達し、瓜生氏の養子となる。本郷附木店に住するに及び、文章を好みて武術を廢す。服部應賀を介して松亭金水に交り、戯れに妙竹林話七偏人を著はし、以後吾妻雄兎子、鶯溪隱士松亭鶴仙、竹亭鎌水、半生半史、文福茶釜散人等の戯號を以て、小説戯文をものし、又、狂流、狂句に用ふ）、白山人化三、梅亭化叟（以上雜報に用ふ）等の號あり。團々珍聞を起し、其記者となり、滑稽小説家の泰斗として知られしが晩年に至り、富貴榮利を見ること塵芥の如く、靜に老を團子坂下に養ひ、偏に風月を友として、世外に超然たり。明治二十六年六月三十日を以て歿す、年七十三。淺草區阿部川町稱念寺内西福寺に葬る。著はす所、七偏人のほかに、千社參、王子紀行、處女七種（六七篇。初篇より五篇までは春水作）、春色初若那（四五篇。初篇、二篇は狂文亭春江、三篇は、春水作。）、花鳥風月（三、四篇。初、二篇は狂訓亭主人作）、夜三の月柳の横櫛等あり。（長氏執筆の全文）

他に、大日本人名辭書の古今狂歌人物志に據つたもの、帝國文庫「人情本傑作集」下卷の解題中のもの、及び滑稽文學全集第五卷七偏人解題中のもの等があるが、此等は凡て人名辭書の小傳が基本となつてゐるらしい。帝文の小傳は、金鶩の門人鶯亭金升氏（現存）から聞く所とはあるが、人名辭書のと大同小異である。〔別號の記載も、他は頗る簡單で、雄兎子と、鶯溪隱士と、白山人と、三者を人名辭書。及、全集には、晩年の梅亭化三の名江湖に鳴れりとあるを見るのみである。〕唯、異同點は、帝文の解題が、鶯亭氏から聞いたといふに拘らず、歿年明治二十三年、壽を七十一としてゐる事である。滑稽全集は、人名辭書に據つたのか、二十六年六月、七十三としてゐる。前掲の長氏の略傳も二十六年、六月三十日であり、壽も七十三である。帝文本の相異は何から起つたか、誤植か、

誤聞か、何れであらうか。〔尙、村上靜人氏の「人情本略史」にも金鵞の小傳を見るが、是は帝文に據つたものらしい。殆ど同じである。〕尙、山崎氏分は、文政六年と生年をし、歿年は明記がない、これは如何であらう。歿年明治二十六年は確實で、若し七十三を享年とすると、文政六年生れでは……なくなるのである。

次に知りたきは、その交友人名、特に文學上のである。今、雜書の記載他所見を綜めて、抄記して見よう。

交友人名。○瀧亭鯉丈。〔帝文解題に據る。〕○萬亭（服部）應賀〔帝文。全集。尙、百科大辭典等にも、應賀を介して、金水に交はるとあり。〕○岳亭春信〔全集。及び、七偏人四編の序を現に書きをれり。〕○鶴亭秀賀〔七偏人三編の序の筆者。〕○竹葉舍金瓶〔金水の門人にして早世す。同社の好みを以て、その著「花鳥風月」の續篇を金鵞著すと自らいへるに據る。〕

中、鯉丈は人も知る八笑人、和合人等の著者。應賀は、釋迦八相倭文庫等の合卷作者。春信は、北齋門人にして、畫及び戲作數種ある事、人の知る所也。秀賀また安矢女草十二卷の人情本及び他の作がある。岳亭春信は、彼と竹馬の友であつた事は、其の「七偏人」四編の序に春信自ら記す所である。

〔梅亭が初めゐた、附木店といふのは、史說俗談〔關根正直氏著〕中の、本鄕只樂邊の第九にその說明を見る。要記すると、「四丁目五丁目〔本鄕〕の間を西へ入る小路あり。余が幼き時まで附木店と呼べり。いかなる故かを知らざりしに、塵塚談〔小川顯道著、温知叢書に所收。久註〕には、「四丁目に附木店といふ地名あり。予十

七八歳までは一二間有之しが、是も絶えたり。一町を隔てゝ両所（肴店附木店の両所也）とも跡方もなし」とあり。肴店の名は知る人なけれど、附木店は今なほこゝに住める古老の口にのこれり」と。」

尚、彼の「七偏人」が、金水以下彼はじめ此等の交友たちを題材にしたものであることは、（帝文解題及び山崎氏執筆等にいへり）、さもあるべきことで、今確實な記錄を見ずとも、想像に難くはないであらう。次に彼の戲作の種類と數を、前述と重複するものがあるが、その全部を表にして見よう。（年齢は、明治二十六年七十三歿説に據る。即ち文政四年生とする。）

○金鵞戲作年表

年齢	外題	畫者	册數	部類	刊行年代
二二（?）	一、春色初若那（しゅんしょくはつわかな）		四・五篇 六册	（人情本）	不詳〔天保十三カ〕

○備考－春色初若那初・二篇六册、狂文亭春江作、英一畫。〔天保十一年〕三篇三册、春笑（二代春水）作、年代不詳。

年齢	外題	畫者	册數	部類	刊行年代
二三（?） 二四（?）	二、花鳥風月（くわてうふうげつ）	國窩 芳晴	三・四篇 六册	（同）	（三篇）天保十三年頃 （四篇）弘化元年頃

○右、初・二篇六册、初代春水訂、竹葉舍金瓶作、天保十一、二年頃刊。〔金瓶は、天保十二、三年頃歿。同三篇序に、〔金鵞自らいへり。〕

二四(?)　三、秋色艶麗 處女七種（むすめななくさ）　梅里畫　六・七篇 六冊　（同）　弘化元年頃

○天保七年初篇刊。春水作、英泉、英一畫。五篇は天保十一年刊、作、畫、同上。

?　四、夜三の月 柳の横櫛　鶯齋畫　初―五篇 十五冊　（同）　年代不詳〔七偏人以前、嘉永期の作カ〕

?　五、春色野咲の花（イ梅）　同　前後六冊　（同）　同

?　六、春宵新話 風見草（かざみぐさ）　芳幾畫　初・二・三篇 九冊　（同）　同

○此書、金鵞前掲の「柳の横櫛」の後篇也。〔人情本目錄に據る。〕

三三四四四 七八一二三　七、妙竹林話 七偏人　鶯齋畫（國芳門人）　初・二・三・四・五篇 十五冊　（滑稽本）　初篇 安政四年／二篇 同五年／三篇 文久元年／四篇 同二年／五篇 同三年

○參考。鯉丈作の「八笑人」初篇より四篇追加まで十二冊、文政三年より天保九年迄の刊。同「和合人」初篇三、貳篇二、追加二、參篇三計十冊、天保十二年刊。同四篇三冊（二代春水作）弘化元年刊。

四三後　八、滑稽千社參（まゐり）　鶯齋畫　初より四篇 八冊　（同）　年代不詳〔文久三年以後〕

○七偏人以後の作たる事明らか也。即ち七偏人五篇の文久三年以後の刊ならん。

?　九、雜司ケ谷紀行後篇 王子紀行　三冊　（同）　同〔千社參りと同時頃か。〕

○參考。滑稽俳諧堀の内詣三冊（一九作、二世歌麿畫）文化十三年。後篇堀の内詣雜司ヶ谷紀行三冊、（一九作）文政四年刊也。

以上を要約すると、彼の作として、獨立せるもの、（補遺物を略く）人情本に於て「柳の横櫛」自初篇至五篇十五冊、同後編風見草自初篇至三篇九冊、春色野咲の花の前後六冊の三種と、滑稽本に於て、七偏人の十五冊と、滑稽千社參の八冊とのみである。（雜著の類は、其他に於てもまた相當の量はあるにはあらう。現に一例をいふと、嘶本に嘉永二年版「茶番落語」初篇（貞房畫）、同五年同二編（梅泉畫）。同四年五年の「鬼も笑福茶釜」初二編（梅泉畫）がある。が、これらは除外、文壇の主流物に就いて云へばである。）「七偏人」でとにかく盛名を博した彼としては多作とはいへない。それだけ彼は、摸倣の才ばかりが多少利いて、獨創の才に乏しかつたのか、又は、好きな戯作にも懶惰の本性を曝露して、從つて注文はあつてもおいそれと書かなかつたのか、又は、幕末多事なるに追はれて、彼もそれ所ではなかつたのか。とにかく、彼は、或は、戯作も本業とまでなり切らず、唯、連中と、ワイ／＼ふざけ廻るのに寧日なかつたのかも知れない。それにしても、中年期を過ぎた、定命に近い年配の彼としては、よくあの七偏人や千社參の惡ふざけの趣向が出來たものだ。無論周圍の實寫でなくば、あゝも冗くは色々工夫して書かれなかつたであらう。即ち實事に近いものが多かつたらう。すると、よくもあんな

にして遊び廻れた事の時間と根氣と、資力とに不思議ならざるを得ぬ。或は、彼は、資力に於ては、相當に富裕なるものがあつたのではなからうか。此の富裕さが、彼をして戯作專業にもならしめなかつた、三分戯作、七分はだらだら遊びといつた所以ではなかつたらうか。稿料も幾程も上らなかつたらうと見ての推察である。或は連中に富有者があつて、それを唆かしては食ひ仆してばかりゐたのか。連中を描寫したといふが、それはいゝとしても、その彼自身は、連中の何に當るであらうか。「七偏人」の喜次郎、「干社參」の笑次郎が、或は彼の位置でなかつたらうか。

幕末維新の際はどうして暮したかは不明である。唯明治初年、瓜生政知の名に於て、西洋事情案內書類を盛んに作した事は、今日此種遺著の樣々に、我ら逢會することに於て、確かである。野村文夫氏の團々珍聞に赴いて、〔これを創む、又は起すと、他書にあるが、創めたのは、野村氏で、彼は、編輯一切の主であつたのであらう。〕團珍に筆を執つたといふ。梅亭化叟の名は爲に江湖に響き、その狂歌又頗る歡迎せられたといふが、今これに就ては、的確な資料の持ち合せのないのを憾みとする。家藏の「團々珍聞」はその初期のもの、第二十六號より第五十號まで、第七十六號より第百號までの合本二冊、最近これの全部に眼を徹して見たが、一向化叟の名に見當らなかつた。とにかく、團々珍聞の創立當時、直ちに干與したとすれば、彼の五十七歲時である。〔鶯亭金升氏の入門も、この頃であらう。〕最晩年風月を愛し、俗塵を離れたといふが、そは彼の何歲頃であつた

か。六十歳とすれば、團珍に在籍僅か四年、これでは余り短かい。恐らく、山崎氏記述の謂ふが如く半身不隨となれる七十歳、（明治二十三年）前後の事であらう。同じく明治前半期まで生きた戯作者であるとはいへ、魯文とは傾向の差が著しい。即ち魯文が前半期の數(かず)の戯作から、西洋膝栗毛——假名讀新聞の編輯——魯文珍報といつたものにひきかへ、金鵞は、七偏人——西洋事情雜著——團々珍聞の記者といつたもので、即ちその對照が双方の個性を著しく浮きたゝしてゐると思ふ。さうして、晩年が、一方は雜著戯文の飽くなきありて、默阿彌等の交友もありて花やかであつたにひきかへ、一方は不本意か、本意かとにかく隱棲の寂しさと來たのである。〔魯文の明治二十七年十月物故、六十六歳も、金鵞と、先後、及び、年齢に多少の差はあるが、過去期の二文星先後して二ヶ年の間に消えた事は、奇である。〕

偖、金鵞の戯作の傳統は何處にあつたらうか。無論金水がその重なるものであつたらう。（初代爲永春水も、亦彼の私淑する所であつたらう。一例は彼が、春水の補作を多く爲してゐるに徴しても。）金水は、彼の交友（滑稽全集、及び百科大辭典等。）であつたといふのと師であつた（帝文等）といふのとの二說があるが、師弟の關係があつたと見るべきであらう。即ち、彼が、花鳥風月の補作の自序にも、同社中の金瓶の作を補する意を述べてゐるからである。或は初めは、入門といふよりも、時折遊びに行つた、自分も眞似したくなり、戯作の筆を執つた、同時に、彼を師と仰いで．金水の一字も貰つたと見るべきであらう。さうして、金水も彼には相當な禮を執りはしたら

う。一劍客の次子で、劍道の達人（諸説同一）であつた彼（金鵞）に對して、身分の相違からは、多少の遠慮もあつたらう。しかも何分一方は既に、鼻山人、春水、曲山人と並び稱せられた人情本の大家、且つ四十代の金水、一方は二十歲過ぎた斗りの若輩、そこに、金鵞としては、弟子の禮を踐んだと見るのは、當然の事である。而してその入門當時は恐らく、天保十三四年頃、春水手鎖間もなく歿の十三年七月後、金水獨り健在の頃であつたらう。（卽ち時に彼二十二三歲、その處女作は、「初若那」の補作にあつたらう。時に、金水四十六歲。）とにかく、金水の助教は、當初の人情本の諸補作、創作に於て多かつたに違ひない。その證據は彼自ら左の如く告白してゐるのに由つて分る。

「（前略）園が主人が誂を應とまかせと請け込んで、種のよいのを當て事に、（春水の補作なるが故也。久）一鍬入れては見るものゝ、肥料のきかぬ草なれば、伸び立つべくもあらざるを、松亭大人が添へ竹に、どうやら斯うやら取り付いて花咲くまでには爲したれど、先に翁（春水を斥す。久）がものしたる其草々に並べては、見る色香あらざれど。（下略）」（處女七種六篇上の金鵞自序）

というてゐるのに據つても分る。さうして、自ら金水を大人と稱したことはその筈であるが、春水を讃して翁というてゐる。恰も俳諧者流の芭蕉を翁と敬稱するに髣髴たるものがあるではないか。卽ち彼は、事實、春水を人情本宗の翁だと信じ、春水より得る所も多きものあつたが故であらう。從而

彼は、春水の補作を屢々作してゐるが、一は頗る光榮に感じて行つた事だらう。人情本は如斯くにして、金水を受けてゐると見ても、然れば、滑稽本は何から來たか。是れ無論鯉丈よりの感化、又はその摸倣に來たのである。現に、鯉丈とは、交友關係があつたとも稱するし、とにかく、多少親炙する所もあつたらうし、又作物上の感化も著しかつたらう。或は、鯉丈作の「八笑人」「和合人」の聲名高きにつれた、摸倣心理も動いたであらう。現に、此等の消息を自ら告ぐるものに、彼の「七偏人」の自叙がある。

「瀧亭大人が八笑人には、八人の連をあげ、また和合人は、六人の笑客を集へ、滑稽洒落の妙をはき、人を笑はし腹の皮をよぢらしゝ、其筆先の浦山しさに、八人と六人の中をとり、七人の懶墮ものを引出して、七偏人といふ名を付、出放題なる戯言をものし、寶集堂の主人をおだて、お先眞暗厚面皮一部の本となしてもて書屋の肩を重らすものから、八笑人や和合人の玉や金の其中へ、互に齊しき七偏人、嗚呼我ながら押强しと、案じたより産が安く、少しは貸せると梓元の、辭を力におつかな悔り、段々後を書次で、何様やらかうやら第五編(云々)。」

とあるに據つて、彼が當初摸倣に出で、自信のなかつた事が知れよう。然し此の滑稽本の處女作の爲には、彼の師金水、及び交友は、相應に力を盡してゐる。卽ち、初編は松亭迂叟(金水)、二編は淸江舍秋水(この傳不詳)。三編は。鶴亭秀賀(この秀賀の序文、七偏人につきて賞揚を極む。)、四編は、岳亭春信の序である。尙

彼の門下には晩年の鶯亭金升氏の他に、初期時代の後進に、玉屋文魚なるものがあつたらしい。この文魚は、京傳を引立てゝ、彼の遊里の實地練習をして自在ならしめたといふ大通の文魚とは、無論同名異人であらう。年代の相違からも、境遇からもさうとしか思へない。とにかくこの玉屋文魚なるは、金鵞の准弟子であつたらしい。その證左は、「柳の横櫛」(金鵞作)の初編の序に、左の如くあるからである。

「(前略)友人金鵞子を訪らふに例も替らぬ書肆の催促、予も好める道なれば、子が稿半をさし覗くに、(中略)感ずる己を了得に棄てず、序文してよと託せられ、辭めど許さぬ主人が頭振、未作徒馴ぬ稗官の突出し、先生大人の名代とは有難うざんすと云々」

尚、自分の附加へたい事は、從來一般に傳へられてゐる、現に百科大辭典の長氏說にも見ゆる、「七偏人」に際して、應賀を介して金水に交つた、若しくは入門したとあるのは、全く誤謬であらうといふ一事である。應賀が金水入門のための口を利いたといふのは、或は事實かも知れない、が、「七偏人」の折ではなからうといふのである。卽ち「七偏人」以前に、既に、「金鵞」の署名の下に、二三の春水の補作ある事、既記の如くである。春水の補作は、年代不詳故、「七偏人」以後だといふ說が成り立つかも知れない。然し、幸はひ「花鳥風月」四篇の藏六庵甲羅の序なるものがある。此の序を讀めば

此の作が弘化元年の頃即ち「七偏人」以前の作たる事は、殆んど確實性を持つた話であることが分る。即ち、

「(前略)庵の檐端へ駈け込む者は、是れ梅亭の主人にて、一昨年以來の騷しきに、人情本でもあるめえと、夙くに四篇も出來てはゐたれど、其儘机の引出の主ともなれと打込置しに、今朝白銀町から出かけて來て、世界は既に太平皷腹、花鳥風月の折からなるに、例の滿尾を如何なせしやと、小言いはれて取敢ず、此の草稿は看せたれど序文はお前に話してあれば夫(それ)を貰ひに來やしたと、聞いて(云々)」

とある。この一昨年以來の騷ぎとは天保十三年の水越が下した軟本に對する嚴令、春水の手鎖、同死歿等を指したので、この今年の太平皷腹とは、天保十四年の水越の第一回の失脚、その後の小康を指したもので、即ち此作天保十五年の五月以前の同年の板と見るべしといふに據つてである。〔同年六月、水野再び老中、その年十二月弘化と改元。但し水越、翌弘化二年二月、再び罷免。〕この騷がしさを、ペルリ渡來等にも取りたくもあるが、然し、ペルリ渡來の嘉永六年〔弘化元年より十年目〕、翌七年(安政元年)の如きも、出版界は相變らずの駄作頻出である。然るが故に、この騷ぎとは出版界の受けたる恐慌、却ち天保十三年の嚴令と見たい、殊に「人情本でもあるめえ」と人情本に結び付け、且つ自分らの宗たる春水の被害を特に騷ぎというたとも思へるからである。〔尚、此の類推に似たものは、既に、村上靜人氏も下してゐる。〕即ち是にして誤らない限り、彼は、「七偏人」の安政四年以前に、

既に、人情本に於て作あり、且つ金鵞と稱し、金水社中たる事を標示してゐるのである。即ち、自分は、彼が人情本の作は、多く「七偏人」以前に係り、其の「七偏人」に至つて、純滑稽本作家になつたとも見たいのである。柳の横櫛の如きも、多分この「七偏人」以前であらうといふのである。「千社参」等が、彼の維新前の終筆だと思はれるのである。然れば、その他に於て、彼は何を遺してゐるかまだ埋れてゐる作がありはしないか、その疑問は、彼の戯作者過程の長きより當然起る疑問である。これには吾妻雄兎子の匿名作があるのである。或は、この方が彼の金穴であつたのかも知れない。さうして、この無數の雄兎子作は、「七偏人」「千社参」の前にも無論あつたらうし、こればかりは、(正系の人情本に筆を絕つてもこれだけは)維新前後にも盛んに書き毆つたものであつたらうと思ふ。即ちとに角、金水に目見得した折は、「七偏人」ではないのである。殊に、七偏人の滑稽本と、金水の御得意(とくい)の人情本とは柄(がら)が違ふでのある。即ち金水に就いた折は、人情本作家の眞似のため、後年の七偏人(この金水への入門を二十二歳の天保十三年と見て、七偏人の安政四年の三十七歳迄には、十五年の距離がある。)當時には、既に獨立した形を備へてゐたが、猶ほ師事の禮を執つてゐた金水の序をその初編に載せた、と見るべきであらうと思ふ。さうして使ひ慣れた金鵞(人情本作家としての名たる)を其の儘用ゐたものと見るべきであらうと思ふ。

○

前稿以後、誌友から得た金鵞晩年の資料、殊に、金鵞の別傳等を、自分の材料と共に掲げることにする。以て、前稿の補遺と見做されたい。

一、金鵞の墓碑銘によつて、明治二十六年六月三十日歿したることの確證。（磯ケ谷紫江氏報告）。

二、金鵞が明治十年以後の團珍に於ける活動、主に執筆題目、（一は酒井潔氏より、一は自分の家藏合本より、拾得）。尚、此の回は、此の材料の羅列のみに止めて、此等の新資料より得た、自分の議論、問題は、第三回執筆の折に附加する。

一、金鵞の墓碑銘

梅亭金鵞の菩提所、淺草區阿部川町稱念寺中最尊寺墓地に服部の姓ある檀家は一軒しかありませぬ。墓碑一基、震災で臺石はくづれ、棹石は東西に少しづれてゐます。左側面三行目に法名が刻んであります。清受院釋果得淨生信士　明治二十六年六月三十日　としてありますから、歿年を「明治二十三年」とするは誤りでありませう。西尊寺は最尊寺が正しいのです。

歿年を「明治二十三年」とする帝文の誤りを申上げたいばかりに、お知らせしておきます。

（二月十一日、磯ケ谷紫江氏より）

〔久彌曰く。右の磯ヶ谷氏の報告には、服部とあるが、金鵞の本姓は吉田、養家は、瓜生。姓服部は應賀の類の誤ではなからうか。或は磯ヶ谷氏の當書信の際の錯誤で、或は瓜生を調べられたものかも知れない。とにかく、寺院生歿年の合一から、これはやはり金鵞を謂へるものと信じたい。〕

二、團珍誌上の金鵞

金鵞がとに角署名して團珍に載せたのは、第十四號（明治十年六月二十三日）が最初だと思ひます。勿論初號より第十四號迄の間に雜報の所などには金鵞らしい文章がありますが、何分署名がないので分りません。（同誌最初の間は、雜報、社説には署名してありません。）

△第十四號には、迂流としての川柳が八句出て居ります。

書籍館眼鏡橋まで添てあり、大慾くつてから髭そりおとし、女學校開化したのも見えるなり　など

△第十五號にも迂流で川柳があります。

第二十一號から六十號迄缺本。

△第六十二號に　梅亭蕩人として、

○探訪膝栗毛　（滑稽本）

化三、糟造、現狀、癖二、文六、明七、開八、等の七偏人振り。化三は勿論金鷲ならん。

○春色花暦　梅亭蕩人

之は人情本です。此時分にやはり人情本を書いたと見えます。(勿論世界は當時のザンギリ物です。)文體や、當時の同誌上、人情物や滑稽物の連續を書いて居る作者はありませんから、蕩人は必ず金鷲だと思ひます。如何?

△第四百五十三號(明治十七年八月十六日)緣奇仕喜内　七婦區人の内　梅亭化三

○藝妓須　○是でも惠比須と聞えやらか
此神地口は下手と見みたり

事代主ともいふ(主とはお前はんと言ふこと、お前はんあの事を　澤山頂戴なの譯なるよし)此神足萎えたるが故に轉ぶを以て常とす。云々

梅亭化三の金鷲なる事は、確證あり。同誌第四百五十八號竹葉舍昇安君(鶯亭金升)の傳に………偶、團社の隊長梅亭化三先生に謁し。云々

△第四百八十九號(明治十八年四月十八日)裏面廣告中に、

○風狂筆の雫第二號　題　隨意

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・」
狂歌　梅亭金鵞大人
・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・」

明治十八年頃もまだ盛名を持して居た證據になるでせう。

△第五百〇五號（明治十八年八月十五日）

珍報欄に

無心配な噺　梅亭蕩人

小生所有の最後五百十一號迄に最早無し。

――以上酒井潔氏報告――

〔自分が、前稿で、團々珍聞の第二六號――第五〇號、第七六號――第一〇〇號までの二册合本に、金鵞が見當らぬといふたが、よく見ると到る處に金鵞の假名のものを發見した。その材料を號を逐うて、述べる。丁度前掲の酒井氏の稿の缺號分を補ふことにならうと思ふ。〕

▽第二七號　雜錄　都々一五首　署名　迂流

○「私しやおぼこ氣西鄕星よ人に見られりや赤くなる」といつた時世物である。

▽第二八號　同　川柳三首　同

○「本地は古猫、垂迹は權の神」といつたもの、當時流行の猫（藝妓）と、成上つて權妻。その相手はいはずと知れた繪（官員）である。

▽第二九號　同　都々逸文句入三首　同

○「私學校徒じやわしやないけれど、『小さい時からなま中に手習ひ迄も一ッとこ』まくら並べて寐るかくご」といつたもの。

▽第三〇號　同　同二首　同

○軍濟して歸つて來ればまたも浮氣で苦をさせる、といつたもの。

▽第三四號　雜報　文珠痴愚三人同行　迂流散人

○頗る七偏人の舊工同曲を襲つたもの。少し抄くと、弊社の餘探訪に文六明七開八と言ふ遊蕩(なまけ)ものが有りまして、染井の菊から瀧の川の紅葉見に行かんとの意氣がりで三分なくなす智惠の相談が極ると、明七は狐に化された振をして二人の鼻毛を拔いて遣らん、夫(それ)にしては化されの規則通り馬の糞

で無ければ彼奴等に早解りがせぬから、馬の糞の様に拵へた牡丹餅を竹のはに包み云々。三河町の餅屋へ往き、馬の糞の様に牡丹餅を拵へさせ、竹の皮へ包み持つて歸り、徐と戸棚の隅へ隠し、文七と開七を誘ひ、先づめけ込まうと錢湯へ出かけし後で、此頃田舎から來た化三と云ふ配達が茶碗を尋ねるとて、戸棚の隅の竹の皮を見付け出し、開けて見ると馬の糞に似て居るので、「ハテ是は何だんべェと匂ひを嗅ぎ」馬の糞かと思つたら牡丹餅だア、棚から落ちたと言ふは此事だんべェ。朝の牡丹餅は見逃すもんでねへト、一ツ摘み二ツ摘みみんな食つて仕舞云々。儘よ先刻社長の乘つて來た馬がたれた糞を代りに包んで置けば大い違ひねえだト極りを付け。云々、それから明七の失敗となるのである。

▽第三五號　同　同（續き）　同

▽第三七號　雑錄　川柳二　都々逸二　迂流

○長いひげ短かい智惠の蓋にする。猫は餌に兎かくしたがるなまず髭。招きや魂さへ歸つて來るをなぜに返さぬ貸したかねの類。

▽第三八號　雑報　化三に關したる記事あり、化三自身の筆ならん。

▽同　雑報　古今新聞紙序　同

▽同　　同　　川柳一　　同

▽第三九號　同　　新聞紙序（續き）　　同

▽第四一號　雜報　　？　　？

○雜報の中に、「弊社配達の化三が……金を借りに……友達の家へ往き……石筆にて鼻紙へ『かして暮（くれ）貸して暮との音を出せど耳へは入（いれ）て暮のかねかな』云々、先の男が少し考へ……其紙の端へ『此暮をかねや有（ある）かと人問（とは）ば盆（ぼん）と許（ばか）りに突出しておく』云々。化三は鼻紙一枚の損云々。といつたものがある。この化三（ばけざう）とは、無論金鷲のことであるが、此文、金鷲の自作、結局、金鷲自ら第三者めかして書いたと見るべきだらう。この勢でいふと、從來雜報の執筆は、他の署名のない限り彼の筆であらう。又、配達の化三（以下諸號にあり）と貶稱してゐるのも、故あらう。卽ち、主筆といふのは誤り、客員格であつたらう。

▽同　號　同　　文珠智惠三人同行（前號の續）　　迂　流

　○是作、中絕ノマヽ。

▽第四二號　同　　「配達化三」に關する話あり。

▽第四三號　雜錄　　狂歌三首　　迂　流

○大ぎやうに言へば二年へわたる雨、天の憎みをうけしほし見世。降りつゞく雨にわしらが米びつのかはくはなにぞ究理生せい、といつたもの。

▽第四四號　雜報　化三に關した記事あり。

▽第四八號　雜錄　都々逸文句入　迂流

▽第四九號　同　狂歌一首　同

〔以下第七六號より第一〇〇號まで〕

▽第七九號　雜報　團珍探訪裔門於東京御史化三の署名ある、指令なる戯文あり。

▽第八〇號　同

○「オホン〳〵と化三が突袖をなし小鼻をビク〳〵然と勃かし」云々で見せるものはといふに、明治十年内告漢蘭會呆笑薦告なる戯褒狀あり。

▽同　雜報

○近世盛衰競として、番附面の中央、行司格として

（盛）	當路の傳信	團々社化三の名	（衰）慷慨悲歌の徒
	薩長肥の官員	土佐の演舌會	西國の大達摩
	權妻の拜命	假名讀社猫翁の名	本居平田宗門

とある。猫翁（魯文）と相並んで、共に盛の部に入れてゐる、自賛（恐らく然りであらう）がをか

しい。

▽第八三號　雜報　化三に關したるものあり。

▽第八八號　同　御註進〳〵と駈け込んだ化三の記事あり。

▽第九七號　同

彼の執筆らしい、番附、都々逸競（團々珍聞自第一號至第九十號）といふものがある。行司が團々社化三、選者前橋烟峰、同三松とあり。しかもをかしきは西の關脇に、廿一として迂流蕩人とある。無論、金鶩自身である。廿一とは、回數か首數か。

○

さて以上で、團珍の材料は盡きる。こゝに述べておきたいことは、金鶩の雜報ぶりが、初めの中は自分の趣向で、いろ〳〵と面白をかしく書きのめしてゐるが、途中（第三十八號あたり）からは、何何さんからと末尾に記した滑稽投書の類で、雜報を埋めてゐることである。多少趣向が、涸れてきたといふせゐであらうか。

尙、金鶩は、飯島花月氏の靑年時代に、信州上田まで出向いて、氏を訪ねたこともあるさうである。團珍の五十三號に載つた團珍一週年御禮のポンチの中、迂流蕩人は金鶩の本人によく似た書きぶ

りであると、同氏の記述である。尙、金鵞肖像の寫眞が、小傳と共に、文倶樂第四號(?)にも出てゐるさうであるが、自分はまだ確めない。

―大正十四年二月、三月、「江戸軟派研究。」

補記。金鵞はまた、曉齋畫談の編者である。曉齋畫談の解題は、必要のない程であらうが、此の四冊、奥附、編輯人の署名は、明かに瓜生政知(金鵞の本名)であり、且つ外篇卷上卷下には、東京門人梅亭鵞叟編集とあることである。特に、此の門人がをかしいではないか。誰の？無論曉齋の〻意であらうが。友人といふが實であらうが、曉齋に花を持たせるためでもあつたらうか。或は事實畫事を彼から受けたか。が昔「七偏人」以來虛名を博した彼としては、此の門人とあるのが、今更あはれなやうな氣がする。此本明治二十年七月の梓、即ち彼の最晩年である。當時、彼は小石川指ケ谷町七拾三番地士族とその奥附にある、こゝに住んで、恐らくこれが終焉の地ではなかつたらうか。以上思ひついたまゝ。(大正十五年五月補)

戲作者の逼塞と活動

「新小說」で明治大正文學運動號を出すにつき、明治十年頃迄の戲作者系統の者に就て書けとの事である。明治になつてからは、少々自分とは畠違ひの物である。興味は無いではないが、現に此頃頻出する明治研究は、敬服して讀みはするもの丶、さて自分が筆を取らうとする程の用意もまた臆面なさもなかつた。勿論資料も浮世繪を除いては、明治初期の物は、絕無に近いからである。が、此の依賴を受けて、滿更自分も興味がないでもないから家藏の雜本類を一わたり探してみた。明治以前の草雙紙類の末尾物として、明治初期が幾分ないでもない。それに他の目的で拾ひ集めておいた物、都々逸本の一種として購つておいたもの、又は例の江戶文學の殿將として魯文の物を多少集めておいた、中に二三魯文の明治初期の物がある。依賴塞げの材料はどうやら揃ひさうだから、此に臆面もなく筆を執るに至つた次第である。先づ(一)は、自分の材料の列擧と、及び其の解題の如きものである。(二)は雜見聞。

(一)明治初期戲作物の一斑

一斑である。代表作ではない。其の目錄。(年代順による。)

◇目録

(草雙紙)時代かゞみ　第四十篇上下　二代爲永春水作　二代歌川國貞畫　若林堂梓

○右明治三年春出版(改印は、巳八改。即ち前年明治二年八月の改也。)

(都々一本)未味字解 漢語都々逸三編一冊　山々亭有人作　畫家不詳　松林堂梓

○右、明治三年三月の改印あり。

(同　)唐詩作加那二編一冊　同　同　錦龜堂梓

○右、明治三年四月の改印あり。

(同　)新編甚九婦詩初編　同　同　同

○右、同。

(草雙紙)釋迦八相倭文庫　五十八篇上下二冊　萬亭應賀作　三世(實は四世也)豐國畫　上重板

○右、明治四年春出版。

(同　)松かさり德若譚　初編上下　貳編上下　三編上下　四編上下　八冊　假名垣魯文作　芳虎畫　加賀吉板

○右、同。

（中本　河童相傳胡瓜（きうり）遣　初編上下二册　同作　曉齋畫　萬笈閣梓

○右、序に明治第五壬申孟春とあり。

（同）大洋新話魚說教　初篇一册　同　同　存誠閣發兌

○右、序に壬申（明治五年）夏とあり。（本文初めの外題は、「蛸入道魚說教」とあり。）

（魯文個人雜誌）魯文珍報　第一號より第三十四號まで　假名垣魯文編　和同開珍社

○右、第一號は、明治十年十一月廿八日。第三十四號は、明治十二年二月十日發行。（「列傳體小說史」魯文の目錄には、三十五號とあり。此號缺か）

（草雙紙）鳥追お松海上新話　前編上中下 二編上中下 三編上中下　九册　假名垣魯文閲 久保田彥作著 楊洲齋周延畫　錦榮堂梓

○右、前編明治十一年一月。二編三編同三月。

（草雙紙）澤村源之助曙草紙　初編上中下 二編上中下 三編上中下 四編上中下 五編上中下　十五册　芳川春濤閲 岡本起泉著 楊洲周延畫　島鮮堂梓

○右、初編上、序に明治十三年あたる文月とあり。

五編下、最尾に御屆明治十三年十月十一日とあり。

(中本）粹學新論一杯戯言　初篇下（上缺）一册　花柳醉史戯著　畫家不詳　法木德兵衛版

○右、明治十三年八月　日御届同年同月　日出版と、今日に見る如き體裁の奥附あり。

(草雙紙）荒磯割烹鯉魚腸　初篇より五編に至る十五册　猫々道人（魯文）原稿　久保田彦作綴　守川周重畫　加賀吉版

○右、初編上の序、明治十四年一月。五編下の奥附も同じ。即ち是れ十五册一時の出版ならん。

(同）戀娘昔八丈　上下二册　柳水亭種清省録　國松畫　丸屋版

○右、年代不詳。明治十三年頃。

(同）浦里時次郎明烏夢の合雪　上下二册　作者不詳　國麿畫　本屋幸助出版

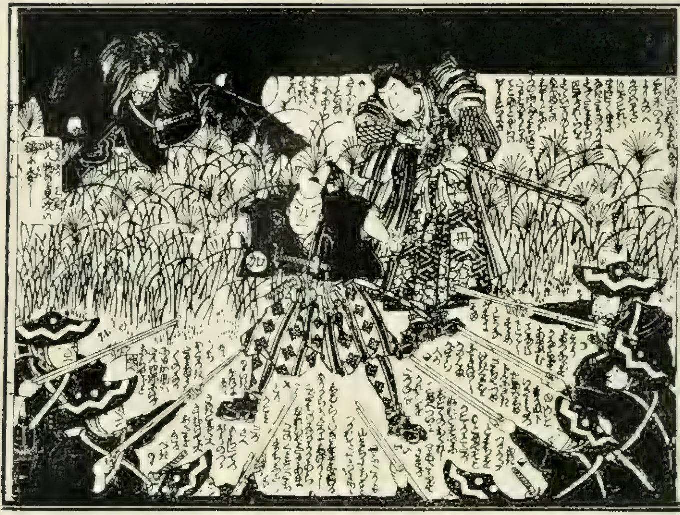
○右、奥附明治十四年月日。粗惡なる製本用紙、全くの赤本也。

○

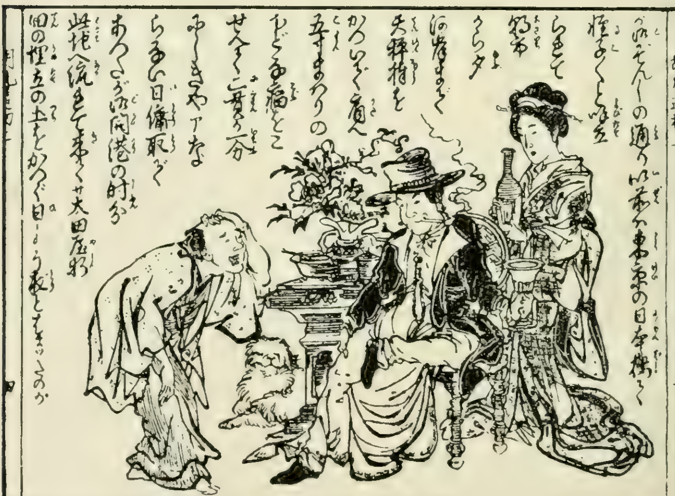
かうして並べたてゝ見ると、何れも一束三文、中、魯文珍報の揃と、胡瓜遣と魚説教、結局魯文物だけが光つてゐるが、他はほんの此場合お附合に引出されたのが光榮といつたものである。が、明治初年、草昧期の出版物であり、且つ此等が强弩の末勢で、江戸時代本の臭が何處かにしてゐるかと思ふと、懷しさがないでもない。以下、列擧材料の中の、主なるものにつき、そこはかとなく書いつけておく。解題と改まる程のものでもないのである。

一、時代鏡第四十編　上下二冊。　二代目春水作

二代目春水は、染崎延房である。元來此の「時代鏡」なる草雙紙は、加賀騒動に材を藉り、初編は嘉永八年のもの。當初から二世春水で、(即ち最後まで二世春水で一貫)家藏本は、此の四十編で止りになつてゐるが、誠は、明治八年頃第四十四編まで發兌されてゐる物である。今此の第四十編を見ると、よく人の謂ふ通り、すつかり畫樣だけは幕末氣分である。四十編上下で二枚續の錦繪やうになる此の二冊の表紙が、さうであることは勿論、左の人物は、(四十編下)右手に短銃を持つ。そのくせ、頭は、田舍源氏の光氏髷。右の人物(四十編上)は、右手にがんどうを提げ、左手に官軍笠(こんな名はないが畫樣の上から、假に名づけた。)を脱いでとり、足は足袋だか靴だか分らない。着てゐるものは官軍の將士が着たかと思はるゝやうな毛のやうに見える黑羽織。頭は髻を下げて、紫の紐で結ぶ。大小は昔の通り佩してゐるが、袴は、筒になつたもの。(此邊の記述勝手が分らないから、小心翼々といつたものであるが、それも「新舊時代」の井上氏のやうな專門家を控へてゐるからである。)それよりも面白いのは、四十編下の十九丁と二十丁に亘る挿繪である。すでに此頃の草雙紙にかゝるものがあることは謂はれてもゐるが、「こゝしばらくいきをやすむるおりから、かたへにしげりしこだちのなかより、あらわれいでたるあまたのくみこ、たちまちふたりをとりかこみ、たづさへもちしてつぽうの、つゝさきこなたへ



三



四

さしむけて、火ぶたをきるべきいきほひに、うちおどろきたるしゆう〳〵の、なかにも加助はたん四郎に、けがあらせじと」の體を描いたものである。其の組子（くみこ）の風體が、可笑しいのである。全く幕末官兵の服裝である。殊に、『此人物の事次の編に委し』とある右手のがんどうで照してゐる人物の風采。宛然戊辰の役あたりの、洛外の光景。賊類追捕といつた場面に近いものである。畫家國貞は二代、後に三世豐國（實は四代）を名のる。勿論此の時代錯誤の描態は、此の男の創意でも無論なからう。當時一般、しぜんの機運に釀生されたものであらう。然しこれを見させられた讀者、殊に童幼者流は、どんな氣がしたか。加賀騷動の時代と、明治維新の時代と、混同せさせられて、迷惑したばかりか不合點な所が多かりはしなかつたか。或は、此の强ひての錯誤の皮肉を滑稽さを十分味ひえた聰明者流ばかりであつたらうか。

二、倭文庫五十八編上下二冊　應賀作、三世豐國畫。

此の五十八編は、尠い本らしい。帝國文庫本の解題にもそんなやうな事があり、且つ右の飜刻では第五十八編以下は、缺けて、第五十七編から直ちに猪波氏の補遺に續けてゐる。家藏は、此の五十八編まであつて、後は缺けてゐる。處が、此の五十八編の序が、面白い。當時の、明治二三年頃の、所謂戯作者（高尙にいはゞ作家）たちの如何に逼塞してゐたかゞ分る所の物である。其全文を擧げてお

く。

釋迦八相倭文庫五拾八編序

大砲のおとし玉げた辰の春（明治元年也――久彌註）から巳（明治二年を斥す――同）は轉倒沈淪して、草本抔は午（明治三年を斥す）も喰じと三歳以來つく〴〵と筆の首さへ傾て思ひ机の趣向もなく本來喰の裟婆なれど無隨者の珍寶貯ねば古雜器の拂喰に只空々で喰に足らぬ現在無雀の戲作郎頓て藏書の紙を喰ふ未年（明治四年也）と案ぜし處へ此本の催促に徒足が百萬編と使はブツ〳〵佛頂面に南無三寶コリヤ空では居れぬと短口を燈下に接で鼠のチウを聞ながら烏がカアとうたふ迄に彼法名が母子の續を漸藥を成にこそ

明治四未年
初春發布　　萬亭應賀誌

「徒足が百萬べん」とは、啌ばりいつてゐる。前述のやうな事情から、おつと承知ですぐ仕上げたものであらう。かうした折でもえらさうな事を云つてみたいのは、そこが所謂戲作者氣質の傳統とでもいふものか。

餘分の事であるが、此頃、二世國貞は、豐國と改名したのであらうか。即ち此本三世豐國畫と見返しにある、但し卷尾は昔のまゝ國貞である。他に別に謂ふべきなし。唯、前年の「時代かゞみ」四十

編と同じく、本文は假名本位で、漢字は、折々その下に讀みがなをこれに示してゐる。即ち「三明(さんみやう)の覺路(かくろ)ありてくわこみらいの八萬劫(がう)をしり給ふ」といつた類である。

三、松飾徳若物がたり　魯文作、芳虎畫

魯文の恐らく最後の草雙紙物でもあらうか。徳川先代物語で、新田右京助源有近といふ新田の遺族の昔から、寺田次郎廣忠、其廣忠に一子徳若丸（後の家康）天文十一年壬寅十二月廿六日寅の一點に誕生といふに終つてゐる物である。時代は、南北朝から戰國時代まで、最尾は、例の鳳來寺峯の藥師の寅童子が失せたに驚く住僧と弟子とである。幕府倒れて新政の御代となつたはなに、此の家康前代記のあるは、偶然といふのか、作者の故意といふのか。或は、作者の江戸氣質、それから起つた徳川思慕の幾分を露骨にしたといつたものではなからうか。但し序には、「徳若に御萬歳とは、御代も榮て在ンますと松竹建る門邊に諷へば、ホウとかけたる鶯の初音に通ふ皷の音も、實に聖代と改新る。春の旦の二日の試筆。好文木の窓前に。彼八橋の蜘手にからむ。脚色を設けてかきつばた。先當編を三河記や。僅は種も在原が。東下向の名勝古跡居ながら知るべき學問のなければ風土にぎつ地理行極り。草稿遲々に書肆が催促（下略）明治四稔辛未初春、舊冬からの老實家。毎日在宿他行なし、氷湖堂、假名垣魯文書惡」とある。舊冬からの老實家、毎日在宿他行なしは面白い。本來しまみせではないもの

の已むを得ずのしまりみせであらう。足はあつてもおあしがねえから毎日一切他行なしだらう。のんきに洒落てゐるだけ、今日此頃程の經濟的逼迫觀念を植ゑつけてゐなかつたのであらう。魯文の此の序に比較的のんきだつた當時の生活狀態が思はれる、舊冬からが面白い。但し此の稿成つて、書肆から御禮が屆けば、こゝ四五日は毎日不在他行ありであらう。それも前借りもので、既に費消つてしまつた後の事かも知れない。(因みに魯文、此の前年より明五年に至る間に、西洋道中膝栗毛十五編出來。但し家藏本なければ、言及しない。)

四、河童相傳　胡瓜遣　初編上下二册　魯文著、曉齋畫

此本、普通胡瓜圖解として知られてゐるが、貼外題、本文とも胡瓜遣である。中本二册、表紙は、西洋道中膝栗毛と同樣、諸外國の國旗を打出したもの。色は靑。序に見ゆる通り福澤翁の窮理圖解を假り「實學有益の確論を無用の戲編に飜案し」たものである。序の末『明治第五壬申孟春　花街契應奴塾に流連の間、靑陽軒假名垣魯文記』とある。慶應義塾をもぢつた所が手柄である。凡例第二にいふ「目次は溫氣の章を運氣の事とし、空氣の章を食氣の事とし、水の章・風の章は、其儘に原目を使用する類あり云々」とある如く、內容も頗る「窮理圖解」を附會けてある。目錄は、

(第一章運氣の事　附り開運の身上話

運は天にあり牡丹餅は棚にあれども寢て待つ果報は得るに難し萬民天德の德を仰ぐべし

○第二章食氣の事　附り下界の食亂

命は食にあり花より團子の一地球萬事食氣を放れざるは人倫の性にして一日も闕べからず

○第三章水の事　附り醉狂の放心

狂氣水は酒嚢の器に隨ふ一様赤面上天の美祿養老の湧泉も强飮ば忽地此理

○第四章風の事　附り柳橋の春風

男子色に迷へば熱して逆上煩惱凹より湯氣を發して浮氣の風の原となる

○第五章雲雨の事　附り遊女の通路

流れの水に染糸の赤縄にひかれ廓遊び虛から出たる實より雲となり又雨となる

（略）

以上

第五大區小五ノ區

淺草區諏訪町二戸の內三番の借家

善惡坊　假名垣魯文再記

といつたもので、同じ中本でも、寧ろ洒落本形式に近いもの。現に、內容、文字の並べ方もその感じに近い。此本、例の「天の磐戸」の見世物の繪があるので、よく引かれる。但し無論小屋の入口の體。女性は、背がちらつと見えてゐる。(第二章挿畫の內)。第三章以下は、初編下となつてゐる。その第五章の內、遊女の通路のはじめを少し書いつけて見よう。

人力車の二人りのりいづれも血氣さかんのわか男よし原がよひのくらまへどふりかけあひのおのぼれ咄し ◐「こんやはまだ五ツ前だぜ、ゆうべよりは余程はやいよ、おめへどうして內を出かけてきたの ☒「おいらァ湯からおめへりにゆくと、言つて出ようとすると、おふくろがぐずぐずいゝかゝつたけれど、いさいかまはずずいとくじョ ◐「おめへのとこじやア家大人が富士へ登山た留守だから母堂はどうでもごまかしいゝが、おいらの處じやア旦夕親父が見張つて(下略)

圖柄をいへば、一人は丁髷、一人は頬冠。人力車の相乘。梶棒さきの車夫の提灯に、人力車とあるは御丁寧である。曉齋の畫である。此本、初編上下二冊。貳編は出なかつたものゝやうである。

五、大洋新話　魚說教　初編一冊　魯文作　曉齋畫

目錄は、初編、○第一回　龍宮城の大變革。○第二回　魚官員の水浴論。二編○第三回　鯛博鱗の諫語盡。○第四回海坊主の蛇宗門。三編○第五回　蛸入道の教訓話。第六回　浮漂洲の海化城といつ

たもので、凡例には、「又開化の一端を踏むに至らん」というてゐる通り、君民一致の新政を魚世界にして、書きこなしたものである。二三を抜いて見る。

「（前略）朕昨日人間界より立歸りし龜鰻等が言上せし江湖上の新聞にて、茲に悔悟の眼を開き、一身の弊害を御裳濯川の流に淨め、君民共治の政體に倣ひ、龍魚交遊の政事に歸せんを只管に急務とせんとす。此上は汝等も（下略）」

是れ浮漂洲の王、龍王の言である。『人界を隙て隔く海底に自立し、』とか『南に太平洋、西に大西洋の二大海あり。其海底の各龍王疾くも人界の開化を聞知り、各龍洲に固陋を改め、海化に進む時に至り、我浮漂洲のみ安閑と海中に孤立せば、版圖忽地隣境に併合られなんこと必せり』云々。凡て分る者にはよく分つた話だつたらう。第二回の冒頭、風來、三馬等の傳統的の匂はしながらも、織り込んであることがとにかく新政當時の物であるから、また魯文獨得の味が醸されて、名文である。殊に團々珍聞となつてからのあの官員罵殺の風は、既に此の魯文の明治五年に發してゐたかと思ふ程でなくとも、團珍式時評文の先驅、一典型ともいふべき、皮肉で巧妙である。曰く、

「却說龍宮城にては鱗の諸大臣、今般龍王の命を奉じ、俄に海洲大變革の集議院を設けつゝ、各々諱忌なく存意を述、同心協力商議を決し、魚民の知覺を弘むるの布告を出さん結構なるも、兎角に

舊弊染込みたる魚官員の水掛論、因循（マヽ）姑息で埒（マヽ）あかず時計の四字を待合す退出連の途中から近來流行人力を撲す魚力の車鰕波を蹴立てゝ新海原、海門口から下りて入る魚街の引手茶屋尻子玉屋と掛行燈に烏賊の墨もて書たるは水虎の妻の巣穴と見るうち（下略）」

といつた書振り。（此本二篇三篇出でしや不詳）

尙、「鳥追お松」は、嘗て本間久雄氏によつて「早文」に紹介せられてゐるから（昨年三月號）、省いておく。

六、粹學新論一杯戯言　初編下一册

端本ではあるが、中々面白いものである。三馬の『一盃綺言』を眞似た外題ではあるが、前代の戯作本の系統をうけ、後期の坪内氏の「書生氣質」などの間に現れた物として、棄て難い趣がある。（無論此類、當時尚多かつたであらうが）。著者は、奥附によれば、片岡孝次郎といふ男である。（尙、奥附には、定價三十五錢とある。定價づけの現れるのは、此の本くらゐが初め。即ち明治十三年頃でもあらうか。）内容は、すつかり明治洒落本と目してよきもの、前述の魯文の「胡瓜遣」よりも尙、遊里物の純といふ意味に於て。さて此本、第三回。導悟庵の欵待、比翼塚の神社。第四回。今昔遊女の故事、粹老妓論の裁判といふもので、二圖入。初めの繪は、特に面白く、海岸、汽船の遠見で、手前に、洋館建ての妓樓があり、その階上に立つてものいふ遊女、路傍、

仰いで答へる散髮頭の若者、手には、蝙蝠傘を杖ついてゐる、軒には並ぶ瓦斯燈といつたもの。文章は、戲文口調ながらも、簡潔、初世風來山人張りともいふべきものである。

以上で、大體を終つたが、序でに『魯文珍報』第一號から第三十四號までの大體をいふと、此頃になつて、戲作者連も新聞といふ機關を得て、大體に於て衣食足り且つ文筆も多岐多端、世人の歡迎も多く、從つて得意時代のものである。恐らく此頃より明治十七八年の頃までが、此の得意の續きであらう。『魯文珍報』は、魯文の個人雜誌ではあるが、當時の文詩人、作者等の寄稿も中々多い。以て魯文が往日の一個、文京門人の草本書(くさざうし)きといふのではなく、鬱然たる大記者大作家たるかの形を具へてゐたと思はれるのである。魯文珍報の、所謂名士又は魯文と同輩又は當時の新進文人どもの筆の跡を省錄すると、

■第一號、柳北(題言)、染崎延房(二世春水)(應援の詞)■第二號、鼬の說高畠藍泉(三世種彥)■第四號、鐵腸の題言。柳北の詩。煙草の說(若菜貞爾)■第九號、絃々猫の贊(岡丈記)、妖狐を怪猫に換る傳奇話(久保田彥作)■第十號、猫譜三字の辨(岡丈記)■第十四號、柳北の詩。此號、始めて野崎左文氏の名現る。九代目團十郞の「題西鄉隆盛扮且」といふ詩あり。■第二十號、萩原乙彥(歌澤能六齋の事。谷峨(三世カ)とも號す。)の句。■第二十一號、彥作記述の「珍猫百覽會景況」の中に、魯文の當時の知友及び

社中並に當時の新聞名あり。尙此號、櫻痴、柳北、三洲等の詩。鐵腸の譯文。■第三十四號、全世界は山師の巣窟(岡丈記)。

尙、其他に於て、我々の注目すべき記事は、第二號第三號に連載せられた前島和橋といふ人の「淫本春畫の流毒」といふものである。これには、末期の淫本の作者に若干觸れた記述が見えてゐる。尙初代春水の門人と稱する爲永春江補綴、爲永喜蝶女原稿の『春窓娘學校』と名づくる新しい內容を若干盛つた人情本形式のものが、魯文珍報に連載せられてゐることである。且つその第一回には、魯文自ら推奬の序を物してゐる。(其の、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第十まで初編。第十一、第十二、第十三、第十四、第十五まで貳編。第十六、第十七、第十八、第十九、第二十まで三編。第二十二、第二十三、第二十四、第二十五、第二十六まで四編。第二十七、第二十八、第二十九、第三十、第三十一まで五編。以上にて完結の人情本である。)其の評語は、第十號の終りに、「井蛙管見愚評、山猫連衆評」といふ中に現れてゐる。其の評語にもある如く、大たいの道具建は明治のものにしても、まだ昔の風が拔けきらず、要するに、昔の人情本に時々明治の着物を着せ、間々人力車を走らしたり新聞紙を讀ませたりしたまでゝある。其評語の「但昔の事情を今當世の詞に飜譯して聞かせるものか」とある通りである。

○

記錄に從へば、其他、明治元年には、假名讀八犬傳の續き(魯文)、柳蔭月朝妻(有人)、藪黃鸝八幡不知(同)、白縫物語の續き(三世種彥)の類。應賀にも「忠實大議論」の類があるとの事である。魯文には尙、「西洋道中膝栗毛」の明治三年より五年の外、中本「安愚樂鍋」の明治四年等がある。明治十年前後には、松村春輔(操)の、實錄物、明治初年に材を借りた物が數種ある。が、自分は一も見てない。(唯、彼の最晩年の著編、(明治十六年七月發行)四六判紙裝の「曲亭遺稿附馬琴行狀記」(本文八十五頁)といふのがある。松村操編、思誠堂梓とある。本文冒頭に、馬琴小傳を載せ、以下馬琴の逸文、和歌、狂歌、何等の類聚である。奧附、定價三十錢、編者新潟縣平民松村操(神田區佐久間町三丁目十一番地)版者東京府平民望月誠云々とある。)人情本でも、有人(後の條野採菊。鏑木淸方畫伯の父で、後に櫻痴と東京日々を起し、明治十九年には「やまと」を起して、自ら社長となつた。)の明治元年、「春色玉襷」初篇(補作ものと稱す)、明治二年同二篇と三篇。同明治二年有人は更に松亭金水作の「鶯塚千代の初聲」に就て其の三篇四篇を補作した。明治三年には魯文に、「娼妓評判記」九冊本があるといふ。面白さうな物であるが、未見である。有人の此の明治人情本は、「人情本全集」に二作とも飜刻せられてゐる。草雙紙では、尙、前代からの長篇物は、白縫物語が、初編種員の嘉永二年の

後を受けて、その第五十九編が三代種彥（蘭泉）で明治二年春。爾後折々春秋二期に發せせられて、明治十七年十月の第九十編に終つてゐる（第六十三篇より、種員門人種清の作。此の第六十三篇は、明治四年夏月稿、明治十一年十月刻成と其の序にある。）時代加賀見は、笠亭二世春水（染崎延房）の作で、嘉永八年初編、明治三年第四十編、同八年に四十四編にて中絶。倭文庫は、初編天保十六年、第五十七編は慶應四年、第五十八編は、明治四年、爾後の編は存否、編數凡て不詳。作は應賀で一貫されてゐる。

戲作以外の作物を見渡すと、家藏にもある有人編著の「唐詩作加那」や「漢語都々逸」や、「新編甚九姑詩」の類も然りであるが、明治十年頃の魯文の活躍（彼が假名よみ新聞を橫濱より東京に移したのは、明治十年である。）や、團々珍聞が現はれる其の創刊、同じく十年迄の、明治初期は、魯文の中本の作、有人の人情本の補作、共他の合卷物の補作を除けば、現に此の有人はじめが、赤本類の作編によつて、纔に脈を繫いだと見るべきである。此の都々逸一本端唄本など然りで、都々一は有人の外に、梅亭金鵞の編集のものも見受ける。現に家藏にも年次不詳の明治本の金鵞の序を持つた都々一本がある。尙、金鵞と應賀などとには、當時明治四五年から明治七八年に亘つて、文明開化に材料を借りた、幼稚な啓蒙的な雜著が頗る多い。金鵞は、明治十年以後團珍に據つて復活したが、（此の團珍に

於ける金鷲の業蹟は、拙著月刊『江戸軟派研究』の貳編に既載した「梅亭金鵞の晩年』に詳述してある。參照を乞ふ。）以前は、此の種の雜著が多い。金鵞は此の雜著には、大抵瓜生政知といふ賈名で物してゐる。共の書目を、今二三の手控へをまとめて揭げておく。

○金鵞の部（瓜生氏譯。又は瓜生政知著とあるもの。）

啓蒙智慧之環（中本一冊）□西洋見聞圖解（小本二冊、明治四年版）□西洋新書（半紙本六冊、橋本王翁畫。明治五年版）□和洋合才袋（前集二冊、明治五年）□萬國百物語（中本、初集二冊、明治五年）□素讀究理雙紙（中本、冊數不詳。明治六年）□二葉の風（半紙本三冊、明治六年）

○應賀の部、及び有人の部

智惠の秤（半紙本一冊）□味噌壽理男（半紙本一冊、曉齋畫）□異形異物各覽會（半紙本數冊、芳年畫）（此の各覽會は、雜誌體のものである。）尙、弄月亭（朧月亭）有人（條野採菊）にも、新智識輸入書類がある。即ち童解英語圖會初二三輯計三冊明治三年。英語の單語に一々繪圖を挿んで對譯したものといふ。

魯文にもあつて、世界都路六冊、明治五年刊。西洋道中膝栗毛の類を稍地理書風に書いたものである。西洋料理通二冊、曉齋の繪を挿入して、横濱在留のコック英人某の手記を飜譯したものといふ。

尙、魯文には明治十二年の格蘭氏傳授文賞九冊といつた飜譯もある。彼等の恐らく師匠株であつたのは、岡丈紀であらうが、その岡丈紀にも、魯文らに教へたのみではなく、また自著戯編として、明治六年、浮世機關西洋鑑初篇二冊といふのがある。但し是にも魯文校とは名義が出てゐる。尙、魯文には、芳明開化窮理外傳冊數不詳。平賀源内遺著、魯文披閲明治五年序といふものがある。然し是は甚だ眉唾物で、遺著として祭り上げられた源内は、地下に狡い奴と苦笑したらう。此類拾つてゐたら際限がない。無論、萩原乙彥の谷峨（能六齋と同人）にも此種啓蒙書があらう。とにかく、瓜生の金鶩でも、應賀（服部氏）でも、いやおん大の魯文は勿論、戯作種に困つた擧句と、一は時流に迎合し迎合されもした點もあらう。とにかく過渡期を纔かに泳ぎ廻つた果の收穫である。

最後に、名人忌辰錄其他に據つた、明治初期の舊時代戯作者の歿年を年代順に示しておから。

一、二世仙果（篠田氏）明治十七年三月三日歿、四十八歲。
二、松村操（春輔）明治十七年四月六日歿。
三、三世種彥（高畠藍泉）明治十八年十一月十八日歿。四十八歲。
四、萩原乙彥（谷峨 能六齋。）明治十九年二月廿八日歿。六十一歲。
五、二世春水（染崎延房）明治十九年九月二十七日歿。六十四歲。

六、爲永春江（初代春水門人。幕臣智久氏號況堂。）明治二十年十二月廿日歿。
七、萬亭（服部氏）應賀。明治二十三年八月三十日歿。七十二歳。
八、金鷲（瓜生政知）。明治二十六年六月三十日歿。七十三歳。
九、魯文（假名垣氏）明治二十七年十月八日歿。六十六歳。
一〇、有人（傳平。條野採菊）明治三十五年一月二十四日歿。七十二歳。
以上で、自分の纒りない記述は終りを結ぶことにする。
（尚、解題を落した家藏本目錄の中、「澤村田之助曙草紙」は、矢田揷雲氏の「澤村田之助」の、失禮ながら種本となつたかと思はれる。あれと同趣向の、田之助一代記。「荒磯割烹」は、八代目團十郎の生涯記に材を借りたものである。）

○

書き終つた今、懇意な古本屋の爺さんが、ボロ〳〵の軟本類を一括して持つて來た。大した掘り出しもなかつたが、擧句、足代だけにとふと買つてあげた中に、丁度此の記述にお誂へ向きの明治八年版の草雙紙體があつた。講談を種にした實錄小說といつた物で、體裁は草雙紙風、表紙極彩色。揷繪は每丁あつて、其が從來の草雙紙物と異る處は、全部が藍と代赭の淡彩を施してあることである。

外題は、伊賀越敵討、中本上下二卷、笑門舍福來の作で、梅堂國政（二代國貞の弟子）の畫である。序に明治八年亥の春とある、版元淺草觀音地内角、大橋堂である。特筆することは、此時此の本はすでに本文が總假名でなくして、漢字混りの、漢字には振假名つきである。即ち此の明治八年の「伊賀越敵討」の特色は、挿繪全部が淡彩。漢字混り振假名つきであることである。尙、此の笑門舍福來は、翌明治九年、「東京開化膝栗毛」三冊を物してゐる。（二月十五日稿了）

―大正十五年四月「新小說」

豐後節語物集七種段目

宮古路豐後掾一派の語り物は、大抵一段二三枚宛の物が、二十乃至四十迄くらゐの數で合綴せられそれに宮古路、、、と命題せられてゐる。それを今假に豐後節語物集と命名したのである。此の類の「宮古路月下の梅」と「同窗の梅」とは、既に國書刊行會本德川文藝類聚の俗曲九に飜刻せられてゐる。但し此が全部では無論ない。今、自分は類本七種を集めるを得た。「即ち宮古路初音梅」（横中本）、「同花筏」（同）（以上、石田元季氏より借覽）。「同新玉椿」（此本、飯島花月氏藏）。「同祇園囃子」（横小本）、「同紫竹調」（横中本）、「同粧車」（同）、「同桃盃」（同）（以上の四本、家藏）の七種。此等の中には、彼此重複のものもあり、又既飜刻の「同月下の梅」「同窗の梅」と重複するものもある。が、參考として此七種の全所收段目を掲げておく。尙、我等は此等の蒐集をより多く重ね、以て未飜刻の豐後語り物全部を集成せんことを期してゐるのである。○下掲七種本、主に年代順に據る。勿論正確なる判定ではないのであるが、中、「祇園囃子」の最も古いものである事だけは、肯ける。即ち「國太夫ふし目錄」と冒頭にあるからである。（國太夫改め豐後掾となりたるは、享保十五年。即ち此本、大坂にて國太夫ぶしと人氣を得たる享保三年頃より同十五年以前に於ける刊行なん。）

宮古路祇園囃子。目錄。加賀おきくいもせの中酌道行○三國小女郎玉や新兵衛桶ぶせの段中の卷○同ひよくの初旅道行○おはな半七刀の銘月同○お久米之助脩女人堂心中同○與作小まん夢路の駒同○山崎與次兵衛藤やあづま壽の門松同○おさん茂兵衛大經師昔暦同○おなつ清十郎笠もの狂ひ同○しのゝめ道行子の日の松同○ふた子狂女すみだ川同○おそめ久松地藏廻り同○お七吉三七枚起請同○百合若大謐野守鏡宮島八景○もやうつくし小袖賣景事○おしゆん傳兵衛十七年忌道行○祝言魚つくし景事○いなりや願書かんつくし同○三熊野かけろふ反魂香道行○しまお七みちゆきふし又四郎。以上二十段。（此本、大坂瀨戸物屋傳兵衛板）

宮古路粧車〔宮古路豐後直傳正本とすでにあり。〕目錄。揚屋合戰三略卷道行情關守○むかし形吉岡染道行芦邊のたつ○新うすゆき物語道行朧の二女夫○當世姿柳女道行現のむつごと○天の網嶋道行名殘橋盡○男作五雁金道行戀の通路○黑船一世一代男道行ほし月夜○敵討出口柳道行かつら男○女夫星浮名天神道行時雨の柳○三勝二世裲道行涙の朝霜○返魂香夫乞獅子朝霞かげらふ姿○卅三年忌袂白絞道行戀のしがらみ○嶋原小蝶□紋日道行三人女夫○ふたつ紋刀の銘月お花半七道行乗合船○比翼の初旅新兵衛小女郎道行越路の空○同中之卷桶ふせのだん○加賀お菊妹背中酌道行旅の着綿○夕霧阿波の鳴渡伊左衛門紙子姿○傾城無間鐘られいのだん○椀久千代の若緑道行都のけい○八百屋お七夜老鶯道行大和言葉○浮名の時花歌金五郎小さんわすれ草○小町大かゞみ少將みち行○ふた子隅田川狂女の道行。以上、廿四段。（版元不詳）

宮古路紫竹調。目錄。傾城情の湊彥三頭巾丸二段○壽門松在所駕の段○おさん茂兵衛仇名の旅枕道行袖屛風○け

いせい無間鐘うれいのだん○加賀お菊妹背中酌道行旅の菅綿○傾城あらし山くぜつの段○契情吉原筏道行時雨の烏○傾城出口柳道行かつら男○千代の若緑椀久松山道行○夕霧阿波鳴戸伊左衛門紙子姿○大和國茜染うれいのだん○同三勝半七道行○比翼の初旅新兵衛小女郎道行○茜染野中の隠井道行涙の手向草○袂の白しぼり久松おそめ道行○釜淵双紋巴道行街手向草○山崎與次兵衛あづま道行○笠物くるひおなつみち行○雙紋刀銘月道行女夫づゝみ○すみだ川狂女道行○小町大かゞみ少將みち行○紅の染小袖半兵衛おちよ道行○八百屋お七夜るの老鶴○けいせい千歳鐘亂髪現の入相○返魂香夫乞獅子朝霞かげらふ姿○名古屋土産道行連理の樒○業平河内通哥念佛道行。以上二十七段。（京、麩屋町八文字屋八左衛門板）

宮古路新玉椿。（大夫直傳。目錄）今織臺貫嶋道行明日の噂○車街道忰谺道行戀の玉ぼこ○山崎與次兵衛ふぢやあづま在所駕中のまき○けいせい出口柳道行かつら男○大和國茜染三勝半七道行○同うれいの段○返魂香夫乞獅子朝霞かげらふ姿○傾城吉原筏道行時雨鴉○昔口説半九郎節戀路の濡草鞋○傾城あらし山うつゝ女夫口舌ノ段○茜染野中の隠井道行涙の魂呼○契情無間鐘うれいのだん○釜淵ふたつ巴道行街の手向草○陸月連理樒伊八おさん道行○加賀お菊妹背中酌道行旅の菅綿○雙紋刀の銘月お花半七道行○八百屋お七夜ルの老鶴○比翼の初旅新兵衛小女郎道行○紅の染小袖八百屋半兵衛道行○小町大かゞみ少將みち行○千代の若緑椀久松山道行○かうやの心中久米之助お梅道行○山崎與次兵衛道行亂れ姿○業平河内通歌念佛道行○かなや金五郎道行忘れ草○唐崎

の心中半兵衛小いな㐂行○嶋原小蝶□紋日道行三人女夫○すみだ川狂女道行○笠狂ひものゝれいのだん○夕霧阿波鳴戸上巻紙子姿。以上三十段。（京。麩屋町通誓願寺下ル町　正本屋八文字屋八左ヱ門板）

宮古路桃盃　目録。けいせい都富士道行戀の街○風流桶ふせノ段色町づくし○重井筒ゐけんのだん○中納言行平孖櫻道行夢路芥川○譯湊頃日草道行鈞あんどう○三勝二世緣道行泪の朝霜○黒船一世一代男道行ほし月夜○天の網嶋道行名殘の橋盡○敵討出口柳道行かつら男○陸月連理椿（伊八おさん）相圖のつぶて○女夫星浮名天神道行時雨の柳○男作五雁金道行夢の通ひ路○卅三年忌袂白絞道行戀のしがらみ○嶋原小蝶稿紋日道行三人女夫○ふたつ紋刀の銘月（お花半七）道行乘合船○比翼乃初旅（新兵衛小女郎）道行越路の空○同中之卷樋ふせのだん○加賀お菊妹背中酌道行旅の著綿○夕霧阿波の鳴渡伊左衛門紙子姿○傾城無間鐘うれいのだん○椀久千代の若緑道行都のけい○八百屋お七夜老靏道行大和言葉○浮名の時花歌（金五郎小さん）わすれ草○小草大かゞ見少將みち行○ふた子隅田川狂女の道行。以上廿五段。（此本、大坂南久寳寺町心齋橋角、正本屋□兵衛板）

宮古路初音梅。目録。今織臺貫嶋道行明日の噂○車街道悴㐂道行戀の玉ぼこ○敵討出口柳道行かつら男○三勝二世緣道行涙朝霜○返魂香夫乞獅子朝霞かげろふ姿○契情吉原筏道行時雨の烏○傾城無間鐘うれいの段○津國夕霧塚女夫靏現床○陸月連理椿上巻うれいの段○女夫星浮名天神道行時雨柳○比翼の初旅おけぶせの段○千代の若緑椀久松山道行○雙生隅田川狂女道行○夕霧阿波鳴渡中之巻○花鬠勢曾我（とら十郎）くぜつの段

○壽の門松あづま與次兵衛道行○嶋原小蝶紋精日道行三人女夫○本調子三筋後帯おしゅん伴兵衛道行○安宅甚平蔦山通道行三ツの街○浮名時花哥がくの小三金五郎忘草○唐崎心中小いな半兵衛道行○高野萬年草おむめ粂之助道行○紅の染小袖おちよ半兵衛道行○夜の老露八百やお七道行○小町大鑑少將道行○同四段目しのびの段。以上廿六段。（大坂伏見兩替町天神橋筋、糸屋市兵衛板）

宮古路花筏。目錄。繻淵殖紋染道行妹背書留○敵討難波梅道行浪花鐘○譯湊頃日草つりあんど○里玉子涙八文字おこよの段○大門口鎧襲亂髪現入相○形見嶋浮名奥嶋道行くれは鳥○黒船一世一代男道行里月夜○敵討出口柳道行かつら男○三勝二世袷道行涙朝露○傻娘山崎通色里誰が身上○車街道悴畄道行戀の玉ぼこ○今織臺貫嶋道行明日の噂○弱葛城合戰夕霞姿起請○津國夕霧塚女夫露現床○女夫星浮名天神道行時雨柳○睦月連理㯃上卷、愁の段○妹背の中酌かゞのお菊道行○契情吉原筏道行時雨からす○卅三年袂白絞道行夢路のしがらみ○雙紋刀銘月お花半七道行○千代の若緑わん久松山道行○五人女徒髮おなつ清十郎道行○比翼の初旅小女郎新兵衛道行○唐崎心中小いな半兵衛道行○高野萬年草お梅くめの介道行○さかな淨留理祝言魚盡。以上廿六段。（同上板）

—大正十五年三月、「江戸軟派研究」

「滑稽東都一圖繪」と「教諭謎々春の雪」

湯朝竹山人氏編の「風流俗謠集」（大正十年六月聚英閣發行）中にも、その卷頭に收載せられてゐる「東都一圖繪」の初編及び二編。然るに湯朝氏編の此の「東都一圖繪」の初編は、全部紹介と斷書きし乍ら、その實、七丁目全部。十一丁目全部。十九丁裏の一首。及び終り三丁全部。合計三十一首を脫落してゐる。湯朝氏の原本は、或は寫本であるのかも知れない。湯朝氏「風流俗謠集」から漏れた「東都一圖繪」初編の解題と並びに脫漏の中の主要部分を、家藏の原本により、これを補足しておかう。

本の形は普通の中本であつて、序文、扉、本文共全二十三丁。作者及畫者は、本文の扉に銀庵主人撰集　爲永春水補章と右一行。中央に滑稽東都一圖繪　全とありて、左一行に、一筆庵英泉畫　風雅堂藏販とある。その扉のすぐ前に、狂訓亭主人（春水）の序を二丁添へてゐる。銀庵主人とは誰か。恐らく無名氏であつたらう。その證據に、表紙の裏面には、爲永春水補綴　一筆庵英泉戲畫、初編。度度一圖繪、東都書肆壽梓とありて、銀庵主人を逸してゐる。本文扉の次に、ヒラキ二面の、藝者二人男二人その中の一人は立つて踊る。右に膳を持つた茶屋の女房といつた繪があり、（淡彩）「江戸をもて

かゞみとすなり花に樽」といふ句が左りの上の雲形の中にある。その裏は、猪首の娘、懐ろへ手を挿し入れ乍ら、立膝の上の本を見てゐる圖。上に、「君を待つ夜は一夜が千とせあへば千里も一里ほどと云を譯す。俟レ君孤跪坐一夜是千年相見歸二千里一猶如二一里還一」とある。以下本文十九丁、各一首に繪が一圖づつ、人物、動物、或は風景を以て、歌意を説明してゐる。畫様は、同英泉畫の繪本「浮世畫譜」あたりと同じく、極めて達者、線の行き方は案外勁い。歌は、多くは無名であるが、所々署名のものもある。左に、湯朝氏本に洩れた、終り三丁分の十八首を紹介しておかう。括弧の内は、一々の挿繪構圖の大體である。併せてその體裁の一斑が知れよう。(湯朝氏本は全編、歌の登載のみで挿繪はない。)

籠の鳥をばしたゝかだまし外へ巣をかけしらぬかほ(枝に鳥。下に籠の鳥。)。○可愛ざうだよあの子もこり性ゐけんするのもやすだいし(娘、小首を傾げてゐる。)。○人のしやくりできれるはよしなやつこ凧ではあるまいし(奴凧と龍の角凧と絲卷。)。○思ひ出すとはわするゝからよわたしや夜のめもわすられぬ(女、行燈に文をよむ。)。○逢ふてわかれのつらゐをおもやあわぬつらさがましであろ(お客にさゝやく女郎)。○種蒔ぬ岩に松さへはへるじやないか思ふて添れぬ事はないかやば町ろく(岩に松。)。○筆は可愛やはなれて居ても戀しゆかしのたより聞く同(女、書いた文を巻きおさむ。)。○あつひ御心もまたごゐけんも聞入ましたがきれられぬ同(異見する老母と俯向ける娘。)。○きれた〳〵と口ではいへど水に浮草根はたへぬかやば町ろく(船の百姓、水に棹を入れる。)。○女房さら

すにわたしもきれず外に思案はあるまいか（柏屋ちか腕組した男に、女。）。○愚痴もみれんもたくさんあれど向ふ鏡に耻て居る（女、鏡に向ふ。）。○末もとげない當座の花にむすぶ出雲の人ぢらし（女とその父親に說く他の男。）。○いふておくのになぜあさはかな口ゆへ浮名がたつわいな（口を兩手で塞いだ男と立膝で詰めかける女。）。○かたひやくそく石山なれどかげじやわたしを秋の月（崖に月。）。○瀧の水岩にせかれて一チ度はきれる末はながれてまたひとつ（岩を挾んだ瀧の水。）。○日出た〳〵が三ツかさなりて庭に鶴龜舞あそぶ（福壽延命。）。高砂の松も夫婦でもろしらがまで添ふを手本にするがよい。松も綠を幾千代かけてすゑをいわふてゐるわいな（柏屋ちか女。）（全面右半に、鶴龜と松竹。）以上。

卷尾に奥附を逸してゐるから、上梓年月は不明である。

次に、序で乍ら、一筆庵（英泉）書作の「教諭謎々春の雪」を紹介しておかう。天保十六年乙巳春新彫　東都書肆　中橋下槇町布袋屋市兵衛版と卷尾にある。（天保十六年とあるが、實は誤り、弘化二年である。）中本二十丁。一面を四行。一行を三段に割り、上の段は問、眞中は解き。下は心である。さうして夫々に問にも解きにも心にも意味を明らかにした繪を小さく出してゐる。卽ち一面に四個の謎の問と解と心。兩面づつ二十丁、計百五十八個（最尾二行、奥付で缺。）の謎の解である。書は極めて簡潔要を得てゐる。一筆庵書作とある以上、謎も英泉の工夫に據つたものであらう。英泉は由來戲作も數種殘してをり、「無名翁隨筆」の浮世繪考もあ

り、由來文筆には拙なからぬ彼であるから、此の「教諭謎々」も彼の創作とみてもよからう。すつかり、英泉君、いゝ氣持になつて畫作した物と見られる。

その一二を示すと、

夫婦なかトかけて。とむらひトとく。心はやくもありやかぬもあり。○さるわか町トかけて。壹歩二朱トとく。心は三朱倍（さんしばい）ある。○氣のみじかい客トかけて。とやについた玉子（たまご）トとく。心はかへるのがはやい。○桃に鶯トかけて。まけ角力へのほうびトとく。心は花がちがつた。○畫にかいた西行トかけて。本膳で食ふゐなかものトとく。心はかさばかりくにする。○古家（ふるいへ）のやねトかけて。わかれた上方女トとく。心はのきくさつた。○よみうりトかけて。とうぐわんすいくわトとく。心はたつてうつてゐる。○黒繻子の帶トかけて。日あたりの雪トとく。心はそらどけがする。○白木やおこまトかけて。狸のきん玉トとく。心は八丈で名がたかい。○大黒の頭巾トかけて。とり毛のやりトとく。心はぬいたを見たことがない。

此んな類である。海防騒ぎを外に、末期の惰眠を貪つた下民の狀が知れよう。

—大正十二年二月、「江戸軟派研究」

其後、大方からの切望もあれば、「風流俗謡集」所載「東都一圖繪」の脫漏の分、七丁目全部、十一丁目全部、十九丁裏の一首を全部補足しておかう。

否(いや)なはりなりや　何立てられふ蜂や按摩じやあるまいし　○廊下で禿が紙捻(こより)で百度、主をあんじて神たのみ　爲永春曉　○じれつたいほどなぜ此やふにほれたわたしも氣がしれぬ　○人も斯うかと身に引くらべ野暮なりんきの千話(ちわ)けんくわ　蝶作　○逢へはさほどにはなしもないが顔見にや苦勞で寐つかれぬ　爲永春里　○夏やせと人にはいへどぬしゆゑ斯うも苦勞するのを樂しみに　瀧亭美代。

（以上七丁目の表裏）

まはし屏風のおし鳥ヲながめひとりねるなら内へ寐る　四ツ谷泉里　○目高もおよけば蜻蛉も飛(とぶ)に雨だり程でもながれの身　四ツ谷泉里　○ひよんな事からついしたわけに今は他人とおもはれぬ　濱口久女　○程のよさそな氣のよさそふなそれじやたしかに情人(いろ)がある　春水　○花がちるとはお前の譃言(せじ)よ實はふたりでさしむかひ　長れん玉賀　○門の柳のなびくを見ても心〳〵で氣にかゝる　春英（イヨウワジマ）。（以上、第十一丁表裏）

福壽草ひらいてみればみごとなたとへ床の置もの目のながめ。（以上、第十九丁裏、脱漏の分）

○春水作と英泉作の都々一

「東都一圖會」初編に現れた春水を明らかに銘うつたもの、及び、白水（英泉）と明らかに銘打つたものゝ都々一を列擧してみよう。（後半に現れる數首の無名のものは、春水補綴の性質上、或は春水の作

ならずやと惟はるゝが、疑はしければ略きつ。）

春水（或は單に、爲永）と明記のもの。

○つらい悲しいとふげを越してなんでたやすくきれられふ○そなたひとりに苦勞はさせぬどんなはかなひ暮しでも○程のよささな氣のよささふなそれじやたしかにいろがある○草の葉の露はわたしが涙の雫それにおまへは秋の空

白水（英泉）と明記のもの。

○似た事がもしやあるかと人情本をよんでなをますものおもひ○門付のしんないぶしも身につまされてもしやとあんじるひよんな氣を。

―大正十三年六月、補。

都々一を浮世節といへる説

附たり、よしこのを浮れ節又は浮れ唱歌といへる説

都々一を「浮世節」と專ら稱した、さうした時代があつたといふ說である。それは、或る證左を今度發見したからである。勿論その證左はあまり芳しくもない物ではあるが、實は最近手にした末期艷畫本によつて、ふと暗示、いな的確な憑據を得たのである。

その艶畫本は、「春情うきよぶし」といふ表題である。「春情」の二字は、肩に小さくある、無論うきよぶしが主題である。中本、本文圖畫六丁十二面、終りに三丁全部都々一が五十首ほど掲げられてゐる。圖の各面にも、下部は例のエロチツクスであるが、上半には、普通の花柳其他市井の婦女戀愛の描畫があつて、その右に、短冊形になつて一首づつどゞ一が掲げられてゐる。〔その三四を拾ふと、「宵にちらりと三日月さまのおもはせぶりなる人ぢらし」。「はかない勤のわたしぢやとても心に二つがあるものか」。「客は小判の色よき手くだ間夫はさびても地金いろ」。「折れぬ枝だと思へばなぜかなほも折りたくなるものか」など云々。〕たゞこれだけでは、どゞいつを浮世節と專稱した大した材料にはならないが、中の、三丁目裏の、上欄、青樓婦女雜魚寢の中に、一人の女が起きて三味を彈きをる、その詞として、左の如きがある。

「どゝいつをうきよぶしとは
　　よくつけいしたね　よつぽどいゝ」

とある。これである。勿論この稱呼が彼等花柳婦女のみの宣傳であつたか、市井一般のそれであつたかは不明であるが、しかし此の本の表題が爾く「うきよぶし」とある以上、その稱呼の發源は何れにもせよ、やはり市井一般爾く稱した時機があつたやうに思ふ。此の本、體裁、畫樣より類推すると無論嘉永頃だと思はれる。畫は數ある歌川系統。然しまだ多少ましな物である。

一たいこの「浮世節」といふのは、此の一本の他にも我等の知れる記載はある。曰く寛天見聞記である。即ち「今は一町内に二三ケ所づつ、よせと號し、看板に行燈をかけ、咄に音曲を入れ、役者の聲色物眞似、娘上るり、八人藝、うきよぶしなど藝人をあつめて、外に家業もなし、人よせをのみ業とする家あまたあり」云々」とある、その「うきよぶし」である。但し此のうきよ節は、或は都々一以外のものかも知れない。或は都々一を含んだ當時の一般流行節（潮來、よしこの、どゝ一、など）の汎稱かも知れない。然し特に都々一らしくも惟へる。といふのは、此の「寛天見聞記」の「今」とは無論天保であり而して一方都々一は、當時すでに府下一般非常な流行を示してゐたからである。(天保九年に、牛込の藥店に都々一坊扇歌が謡ひ始めたといふ從來の說は、恐らく訛傳で文化文政すでに都下にどゝ一は傳つてゐた筈である。)即ちこの寛天見聞記のうきよ節は、また「どゝ一」の義、その專稱ならずやと惟は

れるのである。但し「國語辭典」には、はやり歌のふしと單にあつて（勿論此の義また正當、浮世繪以來の「浮世」が有つ主なる意義であることは、無論であらう。）同じく此の寛天見聞記を拔萃してはゐる。

然しともあれ、（寛天見聞記のこれが何であるにもせよ、）此の艷畫本「うきよぶし」の外題並に內容によつて、的確に、都々一を指て（恐らく天保嘉永の頃）浮世節と專稱した證據である。

○附たり、よしこのを浮れ節又は浮れ唱歌といへる說。

「よしこの」は、都々一と歌詞の形を共にし、曲節を違へ、文政三四年頃より三都に流行し、天保期江戸に於ける都々一節隆盛の後は、ひとり上方のみに行はれたるものなることは誰しも知る所であらう。今自分のいはんと欲するは、此のよしこのが、うかれぶし又は浮れ唱歌又は浮れ歌と稱した、しか惟はるゝ事實を擧げようとするのである。この事、都々一の浮世節と相似して面白しと、こゝに附記する事にした。

風流世志幸能圖會（北六齋月庭撰。國重繪）（心齋橋通ばくろ町角河內屋茂兵衞外三合梓。）の序に、それが見えてゐるのである。

「（上略）春風や華の吾嬬に咲初て櫻の浪華に香をとゞめ粹となる身の浴衣さへ解て寢た夜のつゆ時

雨雪の翌朝の泥濁にながれの水も今は澄心の垢を洗ひあげ一寸呑ほす盃の巡るかず〳〵うかれぶし情を込たひと口に迷ふこゝろも戀の實時花五七唱も三絃の律も合た婀娜文句高位下輩も根〆よき六百集の其中に善惡別るよし此の玉の聲なる百余吟圖畫を添たる端書と浮世の夢の轉寝に出傍題なる戯言をしるすものは　楊柳園主人」

とある、是である。これだけでは、單に固有名詞的ではない、文辭の或る修飾との反駁が出るかも知れぬが、尚、他にこれと同時代の同一體裁の「容新興能萬題集」初編（これは、嘉永二云々と序にあり。楊柳園条兒選とあれど、圖會のと同一人と思はれる。同じく國重の畫。板元、大阪心齋橋通南本町南へ入柏原屋義兵衛。）の序の中にも、今度は、覿然、「浮れ唱歌と云々」とある。曰く、

自序

風流を好は偏屈を忘絶學文なりよし此を作するは人情をさとる一德有實や戀の信意得がたき事条情翁だに通をうしなふ落し穴と要心堅固におよぶ時はつゐに誠をしらず玉の盃底ぬけも夫婦ないかけにかけられて誰が彼でも思ざしをする時はうわ氣な色と燒付られ眞闇の間酒無利呑も愚知に沈し最中ならん歟、それをしり是をうがち迷を詠してまよひを離れうかれ唱歌とゆへど其情合を考る時は世教の一助にもならん歟と氣まゝ利屈をしるすもの也

嘉永二己酉乃夏

と。卽ち此の「浮れ唱歌」も彼の「浮れ節」も結局同一、とにかくよしこのの一名ではないか。

それに今一つ相呼應して、「浮連哥よしこの集二編」と外題した一冊が家藏の中にある。こは、此の浮れ云々の特殊稱呼の繼續年代を知る爲の、好個の資料とも做すに足りよう。卽ち極の近世よしこの本の一である。彩色表紙の横長本であつて、貞信筆、松榮堂梓と表紙にある。此の本、外題にすでに浮連哥とあるが、中にも、見返しに二面の彩色圖ありて、それに、「浮連唱哥開卷社中打寄前拵之體」とあるのである。〔松榮堂は、大阪心齋橋通八幡筋北へ入と奥附にあり。〕乃ち以上三の證據で、浮れ節、又は浮れ唱哥、又は浮れ哥とよしこのを別名したことが的確に事實づけられたと思ふが奈何。〔若しさうとすれば、吾人の今日の知識で浮れ節といへば、今の浪花節の前名、一名のやう心得てゐる。こゝにも名同じくして物違へる例がある。〕さて、その年代であるが、第一の「よしこの圖會」は表紙に國重畫とあり、且つ第二の「容新興能萬題集」も國重畫で、〔但し此の國重は、歌川二世の國重ではない、年代が相異する。〕これには自序に嘉永二己酉乃夏とあること前に云うた。卽ち第一第二は、同時代と見做すべきであらう。作者も無論、楊柳園主人、同条兒、同一人であらう。卽ち嘉永年頭、すでに浮れ節又は浮れ唱哥といつた證である。

尙、「よしこの集二編」は、序〔松榮堂のあるじ爲助述るとあり〕の終りに、卯のはつ春とある。但しこのよしこの集は、挿繪に散髮の男も見え、且つシヤツプ、代書人などと新語見えたれば、明治十二年の卯ではなかろうか。とすれば、此の浮れ云々の稱呼の年代は、嘉永頃より明治初期に亘り、持續されたものといふこ

とになる。

尙、從來「よしこの」は、通說明治維新以前に廢れたりといふなるが、此の「よしこの集二編」の如きありて、中々以て明治初期なほよしこのとして主に阪地に榮えたりとすべきであらう。丁度これと同年と見らるゝ橫小本名古屋本（名古屋、其中堂板）には、すでに「情歌（どゝいつ）」と銘記されてある。すれば此時代獨り「よしこの」の稱呼は、阪地のみこれを維持してゐたものであらう。

―大正十三年五月「江戸軟派硏究」。

前稿發表以前に、都々逸硏究の專門湯朝竹山人氏へむけ、「都々一を特に浮世節といへる」文獻ありやと尋ねに及んだ所、左の返書に接した。

（前略）都々一を浮世節といへる文獻的記錄は未だ知らず。さりながら東京の寄席に於ては今日も都々一を浮世節と申しをり、音曲の藝人が高座に出る時に、樂屋から「これより浮世節をお聽きに入れまする」といふ口上があり而して先づお座つき、三下り、都々一などをうたひ申候。これは古くからいひ傳へてゐるものかと思はれ候。されば浮連歌、浮れ節と外題の冊子もあることなるべし。貴下御入手のものは他日拜見を願はしく（下略。）四月二十二日

といふのであつた。

自分も、此の「うきよぶし」が、當世ぶし、流行唄の義の汎稱として、主に東京方面に今日でもいはれてゐようとは知つてもゐた。卽ち嘗て某女が浮世節の開祖だと稱して、東京より興行しに來たこともあり、（この某女の浮世節は、ごもく節の一流の粂出のやうに記憶してゐる。）現につひ此頃（四月頃）も、當地のある寄席小屋、物眞似の猫八一座の曲目を新聞で見ると、浮世節（壽々女）といふのがあつて、多分これも往年の某女の系統であらうと、思つてみたりした。卽ち此輩は尙他にも多からうが、自分としては此の物の如何たるに拘らず、天保嘉永頃、都々一を專ら浮世節といひはしなかつたかの疑ひを提出したのである。浮世節の語義そのものは、當世流行ぶしたることは無論であるが、此の稱呼を奪つて都々一のみに專用した時期が、少くとも或時期ありはしなかつたかの臆斷である。

前稿發表後、次掲の二寄書に接した。そのまゝ此に揭げて、（飯島氏のお說は、都々一の發源について新說もあり、結構なものである。唯飯島氏は、ドドイツといふを浮世節といふ汎稱中の部分稱だといはれてゐるが、自分は、或る時期、此の汎稱を奪つて、部分たるドドイツの稱そのもののやうに用ゐられはしなかつたかといふ迄である。）尙、自分の疑ひを殘して置く。尙、湯朝氏からは、其後まだ自分の說に對する是正の便に接してゐない。尙、よしこのうかれ歌の原義は、浮き〳〵するもさうである

が、「よしこの名婦の里五編」(名古屋本、とらのとしとあるが、恐らく慶應二年板か）の皓井園主人といふ男の序のうちに、「嬌聲謳」とあるに、うかれうたと假名を振つてゐる。成程、これが最も適切な宛字でもあらうか。

―大正十三年六月補

都々一家言

飯島花月

都々一を浮世節浮れ節といふかの貴説に就いて、聊か私の考へを述べさして戴きた。

私は、「浮世ぶし」は當世流行ぶしといふ樣の意味で用ゐられた言葉と思ふ。遊女狂ひを浮世狂ひと稱した昔から浮世といふ語は廣く行はれて浮世袋、浮世繪、浮世床、浮世風呂などの熟語が續出した。畢竟は憂き世の語から轉訛し文字も浮き世と書換へられて頗る樂天的の語と成り更に當世樣といふ意味を成すに至つたものと思ふ。されば流行小唄を總稱して浮世ぶしと稱し、書籍の表題にも寄席の看板にもどゝいつとか、トッチリトンとか或は八木節、安來節、浪花節など樣々の稱呼を掲出するの煩を避けて、當世ぶしの名稱に包括して掲げる事が簡便で要を得てゐるから、或る場合にはドドイツの別名を浮世ぶしとも稱へた樣に聞ゆる事も有つたらうが、畢竟はドドイツといへば、浮世ぶしといふ汎稱中の部分稱に屬するものと私は考へてゐるので有る。(見世物雜誌天保二年の條名古屋大須で都々一坊扇歌が興行した時の張出しに「浮世連ぶし」として、其下に一段低く「即席三題よしこの」と書いたとある)。

浮かれぶしは其の名稱で、既に明らかな如く、浮き立つ浮き〳〵する浮かれるの義から出て、人心を浮きたゝしむる節奏の意であらう。されば、器樂の囃しは勿論、コリヤ〳〵とか浮いた〳〵とかの囃し詞さへ添へたりして、人心を浮動挑撥せしむる當世樣の小唄のふしを汎稱して斯く云うたので、多くの寄席では一流浮かれぶしの看板の下に、トツチリトンやドドイツや、其他の小唄を、即ち淨瑠璃長唄以外の端唄を雜唱する藝人の名を示して居る。要するに浮かれ節は、浮世節の稱呼と嚴格に區別は付け兼ねるものゝ、浮世節中の一層浮き〳〵した小唄といふ意味に解して差支無く思ふのである。即ち、私は浮れ節といふ特殊の節があつたり又はそれがよし此の別稱であつたらうとは思はぬ。從つて浮れ唱歌といふも、浮れ節と同じく當世樣の小唄の義と解して居る。(明治になつての浮れ節は之と異ることといふ迄もない)。

潮來節がよしこのと成り、再變して都々一となつたといひ、或はどゞいつは投節の餘流だといふ説も有るが、其邊の事は姑らく玆に省略するとして、よしこのと都々逸は兩者其時代を前後にして江戸に錯綜的に流行し、一隆一替を見て最後よしこのは江戸に滅び上方に存する事と成つた樣に思ふが、現今上方のよしこのは東京の都々一と其曲節に幾ばくの差異も無い。殆んど同一物の觀が有る。これは東西交通の自在に成た爲融和混合したので維新前迄はよしこのと都々逸にもう少し明らかな區別が有つたと思ふ。京阪人は江戸の都々逸節を喜ばないのか或は都々逸の稱を快しとせぬのか昔から都々逸といふ語を口にせずよしこので今日迄通して來たが、明治に成つては純然たる都々逸が流行していつて遂に東西の混融を見るに至つたものと思ふ。但し上方のよしこのと江戸の都々一とは其歌詞に於ても嘉永安政頃から既に若干の逕庭が有り、それが明治二十年頃には矢張混融して分け難

いものに成つた。私は曾て「江戸の都々逸」といふ一文を草して此間の變遷を或る雜誌に述べた事が有つた。

忠臣藏となせ小浪道行常盤津（縁花旅路嫁入）の文句に、「ういていたこも名古屋とかはりそしてどゝいつ鈍な洒落」といふ一章がある。いたこから名古屋どゝ一節と流行が變遷したといふ意味か或は前者が後者を産み出したといふ義か兩樣に解せられるが、私は後説の方に解して居る。又式亭三馬の「潮來婦誌」に潮來の川崎節を取りて章句を江戸流に直したるものなりとして「わしが思ひは仙臺川岸よ」の唄にヤレ〳〵ソレ〳〵の囃詞を添へて示し、「小歌志彙集」には小田原節の唱歌にソレ〳〵コリヤ又よしかへの囃詞を示し、「浮れ草」には同じ節にソリヤ又よしかへの囃詞を添へてある。此よしかへの詞がやがてよしこのと成り遂によしこの節の稱呼を産み出したものと思はれるは「チョウチョ靜にさしこめコリヤ又よしこの」といふよしこの節の古い囃し詞に依りて想像し得られるのであるが、都々一は果して潮來から來たかよしこのから變遷したか或はよしこの都々一別個のもので其孰れが古いか、斯ういふ變遷轉化については諸説紛々擾々として聲樂音曲に精通せぬ我等は殊に判斷に苦しむ上に、此上大に努力して之を闡明して見ようといふ程の勇氣も無いから之は諸先生にお願ひするとして茲に一言都々一が天保から江戸に行はれたといふ説に就て述べて見たい。都々一の稱は前紀常盤津道行の文句（この淨瑠璃は文政十年七月市村座に上場されたものだ）に見える通り天保以前から有り又初代都々一坊扇歌が唱ひ始めたものでも無い。扇歌は嘉永五年に五十七歳で死んだから彼の出生は寛政八年に在る。然るに寛政末年茉尼筆記どゝいつ小うた集の册子に既に、

わたしやどゝいつで紛れもせうがぬしはお帳合お氣づまり。といふ一首が見えて居る。此事は索々道人記に見

えて可なり正確の記述と信ぜられるし、尙道人の記述中には、「ドドイツといへる小唄、江戸にて唱初しは、纔四五十年の往昔（享保元か文化元頃にあたる）にして云々」とある。どゝいつの起原が少くも天保より三四十年に在る事は之を以て明かにし得ると思ふから、私は更に索々道人なるものゝ本體を知りたく思うて冗長ながら之に言及し、又都々一の起因は、名古屋市に在るらしいから、同市の尾崎さんの如き御研究の深い篤學者のお手で、其歴史を調べて戴くことが便宜でもあり、必要でも有ると信じ、併せて其お願ひを申して置きたい。

私は曾てより、題名不詳の都々一集一册を藏して居る。跋文に依れば弘化三年の作である。都々一の作者には式亭三馬、市川小團次、中村翫雀、淸元延津賀、常盤津靜太夫、八代目市川團十郎などの名が見える。勿論藝人などのは代作が多からう。此序文に所謂索々道人記がある。相應の學力文才ある人の匿名の作であらう。（索々道人のサク〳〵は都々逸の古い囃詞から取つたことはいふ迄もあるまい。）都々一の變遷を說きて頗る要領を得たもので參考に資す可き點が多い。其の後又私は不思議にも同一の書一册を獲たが、矢張表題が取れて居て書名を知るに由が無い。其出版が古いと云つても弘化であり且同一で二册も私の手に入る處から見ても、又其版木が可なり磨損あるを見ても此書の廣く行はれた事を知られ、又現存して居るのも少からず有らうと思ふが、其一册を割愛して歌謠學の研究家たる湯朝竹山人氏に贈り此書に關する意見を叩いたが、氏も初見の珍本たる由で書名は知らぬとの答書に接した。〔久補—但し此本、其後に嘉永二年版「繪本どゝいつ總まくり」と判明した。〕

又、索々道人の一節に、

此歌（どゝいつ）根元は知らざれども、古く尾張の厚田の傀儡ドドイツとて皆謠へる俗（しよう）の囃しドドイツ〳〵浮

世はサク〱と折返しはやしゝことを我れ稚き小耳に挾みて云々。とある事や、前記道行文句中のどゝいつらいていたこも名古屋とかはりそしてどゝいつ鈍(どん)なしやれとある名古屋節がどゝいつに變じたといふらしい意味から考へて、ドドイツの起原果して名古屋に在りとしたら、宜しく名古屋市人の誇として研究して頂きたいと思ふ。

拙著都々逸考（明治四十三年内外出版協會發行）は今から考へれば頗る杜撰極まるもので汗の出る樣だが多少の參考には成らうと思ふ。それに出てゐる事は、こゝには概ね省略して置いたから、其思召で御覽を願ふ。

又云ふ、同書中にも述べて置いたが、二上り都々一は一名を名古屋節と稱し、或る時代江戸に流行し之に謠はれた唱歌は今日も尙往々都々一よしこの又は甚句として各地に行はれて居るものが有る。厚田の傀儡が歌つたといふもの若しくは潮來が名古屋に變つたといふもの卽ち二上り都々一で、今日の本調子都々一の祖を成すものであらうか。今に各地で傳誦せらるゝ其唱歌を二三ここに掲げる（「浮れ草」の中には、尙數首を掲げてゐる。近世文藝叢書十一所收。）此名古屋節といふもの、定めて名古屋地方には猶現存して居ることゝ思ふ。

宮を立出で笠寺こえて鳴海繩手で（イ雨もふらぬに）袖しぼる

こゝは長島七里往きや桑名いのち預けたぬしもある

宮の熱田の明神さんへ遠ざかれとはいのりやせぬ

―大正十三年五月

都々逸と浮れ歌に就て

下川浩造

飯島さんの「都々一一家言」は、都々逸研究上、有益な記事として嬉しく拜見致しました。それにつけ二三思ひ浮んだ事がありますので左に記しまして御一粲に供します。「私は浮れ節といふ特殊の節があつたり又はそれがよし此の別稱であつたらうとは思はない」といふ一節があの中にありましたが、あれは今少し飯島さんの御説明が足りないやうな氣がします。私は只今「情歌花言集」（よしこのはなどとしらうと讀ませてゐます）といふ本を藏してゐますが、これは慶應二年の刋本でありまして、當時流行の「よし此」の高點を一荷堂半水といふ「よしこの」の宗匠が撰集したものです。卷頭に撰者の自序がありまして、「（前略）されば此浮れ歌は雅俗に通じておぼれやすき色にまよはず得がたき戀のなさけを語る云々」とあります。それから其の次の頁には、席亭か料亭からしい家の入口を、藝者と大盡風の男とそれに供人が伴つて、今しも家に這入らうとする所を示し、入口にはビラが懸つてゐる繪があります。そのビラには「戀情」と割書きしまして、其の下に大きく「有嘉麗……（以下文字不明なるも第一字は歌であらう）」と書き、其の右の傍に一段高く「當日於當席開卷……（文字不明）催」とあります。其の繪裏の頁が「浮連歌開卷之圖」と説明書きをした、今の歌澤の例會でも見るやうに、高座で一人は唄ひ一人は三味を彈いてゐる繪が描いてあります。この本のこれ等の「浮れ歌」の意は、どうしても「よしこの」を指して云つてゐると思ふより外に意の取りやうが無いやうですが、どんなものでせう。飯島さんの御一考を煩します。但し此の本は大阪心齋橋河内屋佐助板でありまして、大阪では「よしこの」が一名「浮れ歌」で慣用され

てゐても、江戸で都々逸が「浮れ歌」で通つて居たかどうかは知りませぬ。

それから都々逸の名稱の話ですが、私は矢張り「よしこの」同様に、その囃子詞から出たのでは無いかと思ひます。佐々醒雪博士も其の著「俗曲評釋」に於ても同じ事を云つて居られますし、現に假名垣魯文の「都々逸古今馬鹿集」の序に、「どうでもよしこの、どゝいつ〳〵丼鉢やういた〳〵。と唱へしにより、一によしこの節、のち都々逸節といひ習はしける」とあり、天保板「娘節用」後篇中卷にも都々逸をうたふ條がありまして「どゝいつどい〳〵、なだべて、ちやら〳〵、どんぶり鉢ァういた〳〵」といふ囃子詞が用ひられて居ます。爲永物などを調べたら、まだ此の外にいろ〳〵例證が見付かると思ひます。

—大正十三年六月

都々一本解題抄

今日までに自分の蒐めた好此、都々一本の中、第一回、都々一本略解題を試みよう。今後も尙、蒐集を續ける積りであるから、第二次第三次、及び友人知己の蒐集をも加へ、愈々完全を期したいと思ふ。今は、一家藏のもののみに據つておく。物の零砕、貧寒を嗤ふ勿れ。

○度々一圖會初編　銀庵主人　天保十三年頃

中本一冊、英泉の畫、爲永春水補綴とある東都風雅堂板。

○新板百人一首吉原どゝいつ　弘化五年

禿筆庵可一（英泉門人）題、同畫と思はれる中本一冊、東都藤英堂板。

○しんよし原新宅どゝゐつぶし　同年頃

中本一冊、表紙に扇歌とあり、初代扇歌の謂也。（初代扇歌は、嘉永五年歿）藤英堂板、體裁等前に同じ。

○葉うた新吉原しんもん句どゞいついよぶし　同年頃

中本一冊、東都ふじや音次郎板。

○よし原どゝいつ　安政頃カ

中本一冊、國盛畫、東都いぐらかた町吉田屋三次郎板。

○新板はうたてうし付全盛名いり都々一　同年頃カ

中本一冊、吉原、品川等各遊里の遊女名を讀み込みたり。畫者、板元不詳。

○どゞ一圖會　初―五　光盛舍さく丸　万延元年

五編合本、中本一冊。畫は、一光齋芳盛。國芳門人ならん、畫、野卑也。

○端唄部顏二編　どゞ逸の部　能六齋　同

横細長本一冊。いろは尻取、つじうら、文句入、雜學、通計二百七十七章所收。

○清元都々一文句入初編　慶應年間

中本一冊、畫者、板元並に不詳。

○逸題　同

中本、さわり入都々一の殘缺本。畫、板元不詳。

○横はまお髭都々逸　同

曉齋の畫カ。中本一冊、頗るエキゾチツクなもの也。

○度々一はうた二冊合本　明治初年

初編貳編合本、小本。應久、金賀各々編初に題せり。金賀は、梅亭金鵞ならずや。

○漢洋取交都々逸圖會貳編　光齋　明治二年

漢は詩、洋は全ローマ字のもの也。畫者は一光齋芳盛カ。

○赤味字解漢語都々逸　山々亭有人　明治三年

中本、所藏本共の三編。畫は歌重、板元は松林堂。

○五色染詩入紋句初編　飄蝶閑人　松延堂　同

畫者不詳、中本一冊。

○新作別品都々一　明治初期

赤本物也、中本。共の三編と四編と二冊。既に洋紙となりをれり、松延堂板。

○開化浮世どゝ一　同

其の第一、二、三、四、五、六編の　冊、赤本中本、表紙極彩色也。板元松延堂。

○開化浮世都々一　同

同種のもの。中本二冊、大橋堂板。

○文のはやし　　　明治十三年頃

上欄に繪と都々一あり、中本一冊。冒頭官員谷某と品川樓盛糸との情死顚末を記し、盛糸より谷に贈りし文などあり。

○逸　題　　　同

議院などの歌あり。明治十四五年頃カ。中本一冊、島鮮堂板。

○都々一大津繪　風流千話文　　　明治十四年

淺草岡田作治の輯及板。中本一冊。

（以上、全部、東都板也）

○風流都々一　　　同年頃

半紙四ツ折本一冊、春近畫。板元不詳なれども、歌者、トヨハシ、ミカハ等のみなれば、三河豐橋の出版か。

○情歌戀の糸すじ　千賀德太郎　　　明治十七年

横、細長本一冊。表紙の繪、頗るキハドキもの也。名古屋、三輪淺治郎板。

○四季情歌林　志賀廼家　明治十八年

中本一冊、頗る凝つたもの也、この本情歌をドドイツと訓ぜり。（浪華板には、慶應二年の情歌花言集あれども、此本、一荷堂半水の輯、同時によしこのと稱しをれば、この情歌花言集の情歌亦たよしこのゝ意ならんと、此の都々一本としては取扱はざりき。爲忩）此の情歌林は板元不詳なれども、大阪なるは明らか、但し裏表紙意匠によりて大川屋といふならんか。

○

前回の續き、其の後の蒐集（といふ程でもないが、しぜんに拾はれに來たもの）である。主に年代順。

○端唄度々一圖會　好色外史序　貞房畫　弘化二年

序に乙巳の仲夏とある。繪と唄と毎丁こまかい、宛然上方よしこの本の體裁である。中本一冊、表紙大首美人彩色。

○淨瑠理サハリ都々一圖會　三編　鶴主撰　貞信畫　安政元年

大阪版である。序に瑠璃都々一坊と識し、甲寅後文月下澣とある。處々勘亭流大文字の淨瑠璃本文を挿む。毎丁挿繪淡彩。中本一冊。

○まはし屛風張交ど〻一　うかれ坊序　安政三年

ちよつと氣のきいた本文挿繪と表紙、見返し等である。序は、御ぞんじのうかれ坊、やかな坊主とある。丙辰初夏と記入もある。口繪に「新吉原假宅繁昌の圖」がある。本文、挿繪は、遊女の百態を描き分けたるものなるが、此の種挿繪としては最も出色、妙を極む。中本一冊。

○えらみ都々一　貳へん　年代不詳

清元、常盤津、新内等を詠み込んでゐる。挿繪の樣子、大がらにして、毎丁表裏一唄一圖を收む。中本一冊。

○新文句都々いつ　同

表紙彩色摺、遊興の影畫。本文は挿繪一切なし、墨摺。半丁、四首くらゐづゝ、やゝ體裁を異にす。

○東海道五十三次　一筆庵英壽畫篇　萬延頃カ

一冊にて京まであり。表紙外題は、國政畫。中本一冊。

○柳ばしさいけんど〻一　不詳

內容挿繪體裁、略々同前。中本一冊。

○いきなど〻いつく　石川堂板等　文久元年カ

序は、石川堂板等。五題三題等と序にあれば、三題噺流行の氣を受けたるものか、なほ次ぎ墨川人述の中に西のはつ春とあり。これ文久元とする所以也。新作輯、作者名、個々に記入を見る。中本一冊。

○どゝいつどけゐきなかりたく　第三しふ　不詳

同前頃か。或は、內容の體裁、なほやゝ古きか。卷尾に、石川堂梅茶閑人撰、登奈美梅壽畫とある。同前、新作輯、作者名をも附す。中本一冊。

○百人小倉どゝ一　不詳

中本二冊、百人一首の讀み込み也。本所本伊板。

○しんぱんげいしやどゝいつぶし　同

同時代頃カ。本文、唄の文字、大きく、挿繪もやゝ英泉流にして、巧み。中本一冊。

○どゝ一惣まくり　同

二世蓬萊山人くらゐの編か、さうした氣分を偲ばしめる表紙と見返し也。中本一冊。

○東海道五十三次氣さんじ都々いつ　不詳

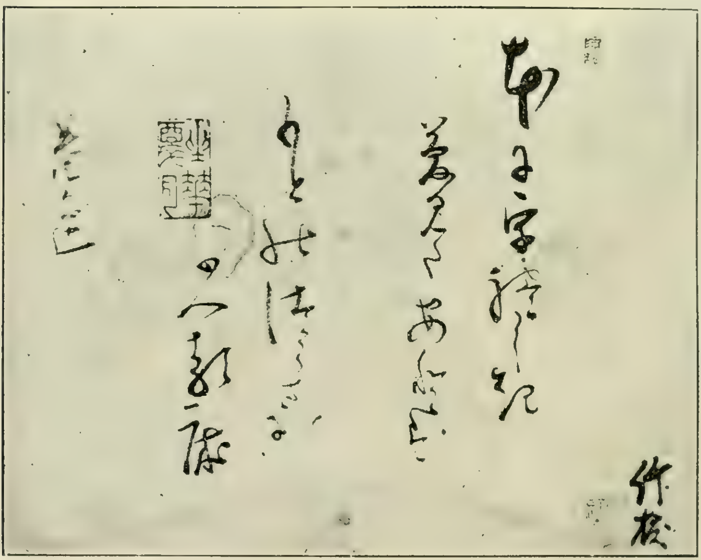
序に白山人とあり。とは、當時白山に住みたる梅亭金鵞の匿名、その白山人と同人ではなからうか。と思へば、體裁、感じ、すべて金鵞かと思はる。本文挿繪、ところどころ猥なるものあり。中本二冊



五



六



七

にて完。

○辻宇羅詩入都々逸　吾妻雄兎子撰 鶯亭ゑがく　不詳、明治初カ）

雄兎子は金鵝である。鶯亭とは、今の金升ではなからうか。序によれば、この本、同種の第五編なるが如し。序の次ぎ、たゝみざんつぢうらの見やうなどあり、のんきなもの。中本一冊。

○いなせぶしどゝ逸　不詳

漢語、詩入の類也。中本一冊。

―大正十四年四月、「江戸軟派研究」。同十五年四月稿。

よしこの本解題抄

（一）中本之部

○風流世志幸（よしこ）の圖會　三史主人序　弘化三年

序に、弘化二巳冬とあり、且つ「……今此哥も亦萬歲を謡ふよしこのぶしどゝ一どんなお座敷……」とあり、即ちよしこの都々一殆ど同名に扱はれたものと見るべし。尙、口繪にも「ものの名もところによりてかわるなり浪花のよしこの江戶の度々一　西坡」と賛あり。本文挿繪すべて淡彩。貞信の畫カ。浪華大鹿屋、柏原屋、鹽屋合梓。

○同　二編　同　同

序に弘化三丙午夏とあり。口繪、本文挿繪等同前。中本一冊、貞信畫。板元同前。

○容新興能（よしこの）萬題集　初編　揚柳園糸兒選　嘉永二年

序に嘉永二己酉乃夏とある。浪華柏原屋板。

○無　題　嘉永七年

表紙彩色繪、外題刷込なし。序に、嘉永六林鐘、朝辛迺宮鍋酒誌とあり、內容よりして「歌占よしこの」ともいふべきか。畫よし。浪華河內屋板。

○錢占意氣奈好此　遊子軒金鱗序　元治元年カ

名古屋版。序、子の新ぱんとある。本文、上欄に各々、錢占を示す。明治再版本あり。

○情歌花言集　一荷堂半水輯　慶應二年

序に、丙寅早春、蕉下居老人識といふあり。體裁印刷、凝つたもの、本文は模樣の二度刷、處々、彩色摺の挿繪を入る、すべて大坂に材をとれるもの。芳梅畫の「江南朝迎の圖」、及び貫山圖の「從崎吉橋上望新堀圖」の雪景など、圖、刷、色、上乘也。板元不詳。

○風流世志幸の圖會　北六齋月庭撰　年代不詳

楊柳園主人の序、口繪色摺、本文淡彩。前揭の異本也。浪華、河內屋等合梓。

○風流粹の一筋　同

口繪を芳玉女（國芳の女）畫く、贊あり、「世の中はたゞよし〳〵とよしこのをどゝいつ〳〵もうたふたのしさ」と、卽ちこも亦よしこの卽ちどゝ一とひとしなみに見做せる時期を證據だつる一也。本文淡彩。

○東都新撰よしこの　　年代不詳
表紙畫芳梅。或は此の本、表紙變へのものか、卽ち本文冐頭は、人情十二ケ月春霞湊之入船とあり。一瓢庵序。本文正月より十二月、月に一二丁、唄は半丁に四首くらゐつゝ。畫はよし、卷尾に、靜齋英一戯畫とあり、英泉門人か。浪華河内屋等合梓。
○よしこの戀の湊貳編　　同
外題にくらべて内容面白し。十二支の都々一、七福神、士農工商、月雪花、賴朝、巴等の人物、(恰も擬百人一首物の如く、人物大きく、上に都々一)其他、小倉都々一、樣々ありて、殊に小倉に至りては、その漫畫を樣々に試み、猥的に富む。尾に、江戸名所あり。成程、湊といふだけあり。京の丸屋、大坂の二河内屋合梓。
○新作繪入よしこの　初編　　同
唄の文字と、圖また大きく、上方本としては異彩也。畫またよし。
○いろはしりとりよし此　　同
同前の體裁、はの如きは、娘の半裸體を畫く。凡て此の二三種、江戸の同期ど丶一本の如く、大膽なる猥臭あり、例の貞信畫などの好此本の知らざる所也。卽ち内容體裁に於て、また江戸に接近した

りといふを得べきか。

○新文句よし此ぶし　同

表紙天保山あたりの汐干狩なれど、美人を大蛤の内に描けるは皮肉也。本文、稍異様、作者肖像と思しきもの毎丁ありて、上に唄を載す。板元、大坂本屋爲助。

（二）中横本の部

○浮禮唱歌 花くらへ　初・二編　楊柳園大人撰　嘉永六年

口繪極彩也、本文二版。當時盛んなる新作に於て、その秀を輯めたるもの、各吟、作者名を書く。初編口繪貞信畫、橋下舟過ぐる夜景。貳編口繪、西行江口の君の軒に佇む圖。體裁凡て凝つたもの也。版元、花洛、丸屋等三、浪花敦賀屋等三の合梓。（此本、浮禮唱歌をよしこのと訓ず）。

○よしこの纏のしをり　初・二編　元治二年 慶應元年

初二編共にわか本是人撰、年代は、序の記入による。口繪、初は熱田濱、神戸町青楼より海の遠望。（松園畫）二編は、女と客。（樵谿畫）口繪極彩色、本文模様入の二色摺なること、同前。此本、名古屋本。（奥附は、尾張永楽屋の他に、三都書林を記せど、無論形式に過ぎず。）

○粋滑稽　初・二・三編　（初篇）慶應元年序

體裁内容、凡て同前。名古屋版。

（三）　小横長本

○浪花の梅　不詳（巳春序）

家藏同型本の中最古のものか。表紙口繪錦繪摺、本文二色。畢竟前掲第二種ものと同樣にして型を遂へたるのみ。文迺家序。畫家不詳。大坂河内屋版。

○よしこの四季の詠（ながめ）　二・三・四篇　（二篇）文久元年序

體裁内容同前。一荷堂半水編。貞信畫。大坂綿屋版。

○よし此はなそろへ　初・二編　不詳

同、半水編、同畫。大坂、本屋爲助・安兵衛版。

○四季のしらべ　冬の卷　同

同、半水編、小信畫。大坂、富士屋政七版。

○うかれよしこの三津のさかへ　初編　同

同、半水編、貞信畫。大坂、綿屋版。

○漢語よし此　第初篇　同

同、半水編、表紙貞信、口繪小信畫。版元不詳。

○無　題　　同

同、半水編、畫家不詳、同。

○浮連哥（うかれうた）よしこの集　二編　　同(卯のはつ春序)

同、爲助序(編カ)。貞信畫。序の卯とは、明治十二年か。口繪、樓上、吟者の集合せる體を描き、それに「浮連唱哥開巻社中打寄前拵之體」とあり。大阪、本屋爲助版。

○よしこの　貳編　　不詳

杉園のあるじ撰と序にあり。內容、口繪及び序よりして京本なること疑なし。體裁、吟者名ある事二色摺等、同前。版元、皇都柏屋他二、浪花各書林と合梓の體。

○好此名婦の里　初・二・三・五・六篇　　慶應二年刊

名古屋本である。然し體裁等上方本に同じ。各篇、皓井園主人編、(吟者名なし)。貞信畫。初口繪批把島橋、二篇廣小路夕凉、三篇大吉樓夕景、五篇玉子茶屋、六編宮の濱。すべて極彩色、所謂名府絕景の內と稱す。名古屋いつゝや版。

○情歌立都句惠（たてつくゑ）　　不詳(卯春序)

明治十二年刊ならん。すでに情歌に、どゝいつと訓じをれり。吟者名を誌し、一樹園楠若の編輯。
名古屋其中堂版。

○情哥戀の糸すし　　明治十七年刊

名古屋本、奥附に明治十七年四月十四日御届、同年九月出版、三錢八厘とあり。吟者名なし、千賀徳太郎編輯、三輪淺治郎出版。

（四）小本の部

○よしこの美都能詠（みつのながめ）下之巻　　不詳

わか本是人撰、表紙口繪錦繪摺、吟者名を誌す。京、堺屋、近江屋合梓。

—大正十五年四月稿

續都々一附よしこの本解題抄

川柳寺雀羅

（上）

□よしこのぶし　初篇　　東都一坊扇歌作

豆本、未會志留坊一禪の口繪あり、板元不明。

□よしこのぶし　二篇　　東都一坊扇歌作

同上豆本、曉鐘成撰、初、二編共三度刷、いづれも、十八丁。

□うかれよしこの三津のさかへ　初篇

浪花一荷堂主人序、横長本、十五丁、百五十章、大阪心齋橋綿谷喜兵衛板。

□うき世よしこのぶし、しきのしらべ、秋三篇。

一荷堂半水序、十六丁百六十章、大阪心齋橋通富士屋政七板。

□よしこの、色の一ふし

十四丁、百四十章、大阪平野町石川和助板、以上三册共横長本。小信畫口繪表紙なり、恐らく半水の編ならん。

□逸　題

横長本、二度刷の美本、編者板元共不明、體裁より察するに大阪板の如く、前項三册に似たり。備前や三津松、富吉、杉本や百合、小糸等の作者の名より見れば藝者のやうに思はる。十五丁百四十七章。（尾崎曰く、此本古市本か。）

□逸　題

吾妻雄兎子編、十二丁六十七章、板元不明。

□新ゑらみ都々いつ

福助改中村芝翫撰、八丁四十八章、石川堂板（東都？）。

□えらみどゝいつ　　風流山人撰

八丁四十八章、丁數上に四の字あるところより察すれば、四編にて他に三册出版されしこと明なり。前掲「新ゑ

らみ都々いつ」と同書店の出版ならん。

□新板はうたどゝいつ　　　八代目三升作

十二丁十五章、他に端歌數章あり。

□げいしやどゝいつ　二篇

落丁本、自四十一丁至四十八丁三十二章、作者板元共不明。

□新はんげいしやとゞいつ　明治十八年版

二十七丁百八章、東京小菅松五郎出版。

□辻占都々逸

馬喰町吉田屋板、二十丁二十章。

□辻うら都々逸

礫川主人編、馬喰丁三丁目吉田屋小吉板、二十丁十八章。

□三十六歌仙辻うら都々逸

板元不明、礫川山人編、十九丁三十六章。

□おくさん、辻うら詩入どゝいつ　二編

吾妻雄兎子編、落丁本十八丁三十四章なれど、恐らく十九丁三十六章ならん。

（下）

□はうたどゝいつ三人娘月の卷　嘉永七年　梅暮里谷峨選　歌川國鄉畫

中本、繪入、八丁二十四章。幸多樓梓。

□新板どどいつ惣まくり　索々老人序

二丁、自十三丁至二十丁の他落丁。編者、畫者不明なれども、編輯法も共に面白し。

□新板どど一ぶし　二へん　石川亭反等選

十一丁（中第十丁落丁）二十七章、繪入中本。

□當世どゝ一　一畫齋畫

十四丁（？）七十三章、繪入中本。

□新撰はうた都々いつ　初編

中本繪入、十二丁（中三丁落丁）三十三章、美音堂梓。

□新撰どゝ逸大成　後編　万延二年

湯朝竹山人氏著「風流俗謠集」紹介、橫本繪無。

□逸題　よしこの

よしこの集なり。六七八九十編合本。橫本繪無。六編、十九丁（中五丁落丁）百二十三章。七編、十八丁（中五丁落丁）百七十章。八編、十八丁（中一丁落丁）百七十章。九編、十九丁（中二丁落丁）百七十章。十編、十七丁（中二丁落丁）百五十章。

□浮濃唱哥集（よしこの）　五編

大阪八百屋善兵衛版。口繪付橫長本（本文繪無）小信畫。十五丁百五十章。

□よしこの集　九編

とあれば、前項、よしこの集五編の續册と思はるれど、本文と、表紙口繪に不審の點多ければ、しらべしに、八百善板のよしこの集の表紙口繪裏表紙に、前項「逸題よしこの集」の第六編本文を入れたる直し本なり。

○

右の他、裏表紙裏廣告文中によるよしこの本をあげて見よう。

□詩入よし此　大阪心齊橋通　綿谷喜兵衛

□紫の　同　富士屋政七

□袖の詠　同　上

□よしこの三すじの一聲　初編より十編まで　大阪平野町　石川　和助

□新文句入よしこの　大阪新町　八　百　善

□よしこの京のはな　初編より十編まで　懷中橫本

―大正十五年三月

宮驛遊里沿革畧

附たり、どゝ一節の起原

校本「どゝいつ節根元集」の參考として、此の宮驛（熱田）遊里沿革略を、急調べのまゝものしておかう。先づ我々が唯一の參考にしたものは、名古屋市史風俗篇の熱田の遊女の項であつたが、いざ手に取つて見ると、頗るたよりないものである。卽ち、神戸（がうど）遊里の沿革がさつぱり分らないからである。神戸（がうど）・傳馬（てんま）と唄にも唄はれた以上、神戸が甞て遊里たらねばならぬのである。然るに、市史では、二人づつの飯盛女を公許したといふ處に、神戸の名をいへるのみである。これではさつぱりだめである。

自分が、この二三日、故老に尋ね、現地を踏み、且つ「どゝいつ節根元集」などから類推した結果は、熱田の遊所は、凡そ三ヶ處あつた。卽ち、神戸（がうど）、傳馬（てんま）、築出（つきだし）（後に古町（ふるちやう）と云）の三である。が先づ、第一參考として、名古屋市史の項を抜かう。

熱田の遊女

熱田にて遊女を置きし事は、寛政十二年の頃なり。即ち熱田前新田を開くに方りて、築地(一)にオカメと云へる賣女を置きたるが、遊女の始めとなれり。又一説に、同十一年、中島(二)に縫針女を置くを許され、やがて享和に燒失して廢すと云へり。オカ(三)メとは當初醜婦多かりしより、所謂阿龜の面の如しとて、呼び習はせりしなるべし。其頃の俗謠に、

　宮の傳馬町に新長屋(四)が出來て生きた阿龜が袖を引く

とあり。此に新長屋と云へるは傳馬町裁斷橋以東、築出町にてある可し。其後宿驛の隆盛なるに隨ひ、青樓の設備次第に華美となり、安永元年(五)の妓樓に柳屋、三浦屋小竹屋、若松屋、三河屋、駒屋、江戸屋、近江屋、海老屋、若竹屋、美濃屋、煙草屋、大黑屋、中村屋、小松屋、小杉屋、米屋、伊勢屋、角屋、車屋、錢屋、萬屋、三星屋、島田屋、扇屋、仙臺屋、田島屋、讃岐屋、ゑびす屋、鶴屋、常磐屋、櫻屋蠟燭屋、中島屋あり。之を文化二年には駿河屋(六)、宮口屋、鯛屋、永樂屋、柏屋、長

(一)この築地、「どどいつ節根元集」に據れば、築出の誤なる事明かなり築地といへるは、神戸町の南端。旅籠屋、揚屋などありしが、こは後の發展也。おカメといへる云云も、大ざつぱな書き樣也。(久)

(二)中島に云々は「どゝいつ節根元集」になし。これ根元集にいへる、文化八年の三國をいふか。燒失といふも相似たり。(久)

(三)この説、一説として面白けれど信憑し難し。(久)

(四)この新長屋は築出の一部分、所謂これ鷄飯屋の賣女をいへる也(久)

(五)是れ、傳馬町の妓樓也。「どゝ一

門屋、新柏屋など有名の妓樓たり。同三年、傳馬町神戸町、築出町等の旅籠屋に各々二人宛(七)の飯盛女(八)を置くことを許さる、此飯盛女を總ておかめと云ふ、招かれて他に宿するもあり。此頃衣服は上著更紗縮緬、下著紫縮緬、帶は厚板、根上りに髷を結ひたるを彼等の風とせり。文政の頃に至り、藝子、酌女(おんな)、又は百花(もか)多く流行し、熱田の飯盛女大に衰微す。是に於て七年、藩令を發して、之を彈糾し、犯者の罪せられしもの多し。從來取立(とりたて)たりし飯盛女の税金(九)は詳ならずと雖、嘉永二年より五ケ年平均の熱田及び鳴海兩驛の飯盛女の集銀百拾八兩なれば、略々其高は推定し得らる可し。明治維新後に至り、遊女の解放を令し、更に本人の意志を以て遊女を營まんとするものには之を許可し、鑑札を下渡す。然るに賣淫は風俗を紊り、身體を毒し終には廢人となつて、苦況に沈淪するもの多きが故に、明治六年一月、縣告諭を發して、早く產業の道を立て丶改業するを促す。然るに其翌年に至り、再設置を許され、明治四十二年に至り、貸座敷の數三十八ケ所、娼妓の數百六十餘人と成りしが、其最盛なりし時には三百餘人有りき。往來頻繁なる國道に賤業を營ましむるは然る可らずとて、明治四十二年三月、時の縣知事深野一三、移轉令を發し、大正元年三月、終に之を稻永(一〇)新

節根元集」にもありたり。(久)

(六)是れすでに神戸の發展を語るものにして、此等の殆どが神戸の大樓たること、既にいへり。卽ち市史の杜撰なる事是を以て知るべし。(久)

(七)是れ公許の最初なれど、內實は非公許として、一家數十人を擁せしことは、お哥女根元記以來明かなる事實也。(久)

(八)この名稍可笑しけれど、當時は宿場女郎をかく稱し、且つ彼らは、源氏名を稱せず、本名を以てせしと云。(久)

(九)この稅金、どどいつ節根元集の末尾に資料あり。(久)

田に移せり。此時從來の貸座敷業者にして廢業せしもの多く、こゝより移り往きたるは、玉長壽(たま)、大海樓、榮勝樓、新蝶の四軒 娼妓二十八人 のみなりき。〔編餘錄、圓陵隨筆、二五里水、四編之綴足、蓬萊美圖鑑、青窓紀聞、御布告記、新愛知、名古屋史要、娼妓組合調査、熱田警察署調。〔以上市史風俗篇四一九―四二二。〕

(一〇)今の、西築港の西。(久)

これでは、唯傳馬町ばかりのやうに見えて、さつぱり駄目である。今左に、自分の調べた所を概括して見る。

一、宮驛には、古くから傳馬町、(東海道べりの南北の側)神戸(がうど)町(海に迫り東西の側)には、旅籠が數軒もあつた。無論慶長元和の頃より。さうして客接待の女がゐたことも無論である。

二、それが明和九(安永元)頃には、傳馬町だけが遊里としての色が濃くなつてゐた。即ち二五里水寫本三冊(當時の妓女評判記)に載せた屋號の如きが、醜業を營んだ。然し無論表面は、旅籠であつた。

三、寛政十二年秋に、築出(つきだし)に、鶏飯屋が現れた。その頃お龜(信濃生れ)や、お仲(熱田須賀生れ)といつた連中が客を引くにつとめた。この頃、お仲が、所謂後の神戸節、更に名變りて都々一を唄ひ始めた。がまだこれといふ名はなかつた。おかめや外の女たちも之を唱つた。

四、この鶏飯屋の景氣は、間もなく、一廓の遊所の如きを現出せしめた。更に、この景氣は、傳馬町の發展を促し、更らに、神戸をして、從來、海岸の以北に少許の旅籠のみであつたのが、豹變、巨


青柳や
月ハ
風雅の
尾陽
杜堂

然たる遊里の觀を爲すに至つた。神戸には、大樓が現れた。これが享和二三年頃の事で、すでに此の頃、おかめは、一般宮の、神戸、傳馬、築出の三方面の賣女の惣名となり、お仲が唱ひ出し、他が唱ひ流行らした節が、この頃、一般宮のおかめ（汎稱）が唄ふ節として、お龜の唄、又は、お龜の節といはれるやうになつた。又、遊里の中心、第一等地の神戸の名を冠らして、神戸節ともいつたらしい。同時に、「お龜買ふ奴、云々、そいつはどいつじや〳〵」といふ唄が流行つて、（この流行は府内（名古屋）にも行はれた。」間もなくどゝいつの名を生んだ。

五、文化三年に、藩から、神戸、傳馬、築出の三ヶ處の飯盛女二人づゝを公許した。然し、實數はその十數倍であつた。（鷄飯屋一轉して小遊里の築出は、まだこの頃まで存在してゐた證據である。「どどいつ節根元集」には、その終りが分明でない。）この頃、尙、遊女の惣名に、お龜が行はれた。現に、文化二年刊の東海道膝栗毛（一九）の四編下のはじめに、桑名で、旅人の流行唄として、時雨蛤土産にさんせ、宮のお龜が情所といふを記してゐる。なほ、此のお龜の惣名は、爾後明治前後まで續いたであらう。現に其の證據に、幕末刊本淫水亭の中本「東海道五十三次」の附錄記事中に宮ありて、「此の驛にては飯盛の惣名をおかめといふ云々」とある。（此の本、全驛の飯盛女値段付のあるものである。）

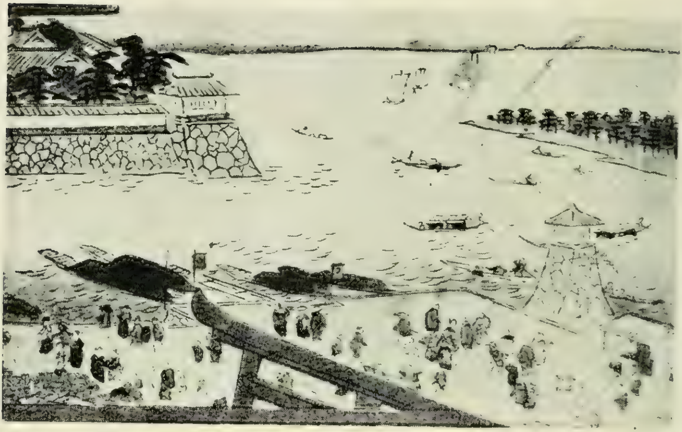
六、以後、神戸、傳馬のみを中心として榮えた。築出は、まもなく廢絕した。文化八年、中島に、越前三國の遊女を呼びたる三國が現れ、別に一區劃を爲したが、同十年停止、十二年師走、燒失した。

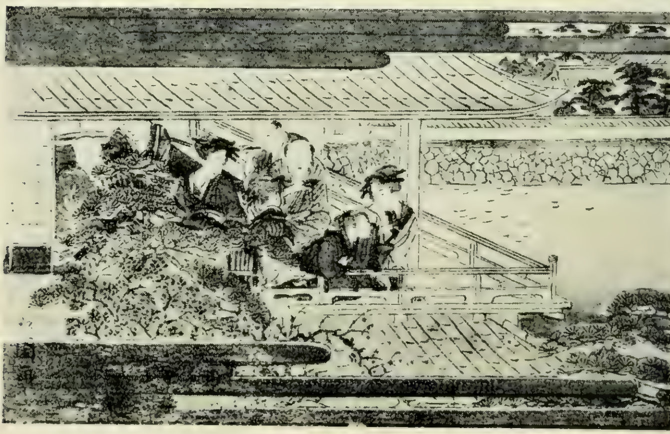
七、神戸、傳馬は相變らず榮え、また一旦廢絕した築出（その頃、古町の名を生んだ）も榮え、神戸が第一流、傳馬は第二流、古町は第三流として、維新後五六年まで續いた。

八、明治六年の縣令で、一旦三ケ處とも廢業した。この時限り、神戸は、正業に復した。翌年の、再設置公許により、傳馬、古町のみ復興した。爾後、明治四十二年まで續いた。

九、明治四十二年、知事の移轉命令の爲、傳馬・古町は、廢止。その中の小部分が、稻永新田へ移つた。【この古町が、明治四十二年迄存在してゐたことは、市史に明瞭でない。】

尙、明治前後の事は熱田現存の一二の故老（八十一の老男、七十九の老女）に聞いた所をまとめたものである。斷片ながら、部分に亘つた他の、雜話を左に附しておかう。此等の故老連も文獻的な手控は無論持つてゐなかつた。したがつて、明確な年代や、明細な處は欠けてゐる。殊に、古い所の事がもつと、殊に、お仲の事が明細に知りたかつたが、分らなかつた。お仲死後の、評判だけである。お仲の、鷄飯屋下女の頃は、お仲一個の確たる文獻が現れる迄は、杳として、まだ疑問の所が多い。唯、死後の評判は聞かされた。





一、神戸（がうど）の事

○神戸へは、名古屋から、隨分、大家の旦那衆や番頭など通つたものだ。笹惣（現、多額納税者、銅鐵商、岡谷氏）などは、半期々々通帳になつてゐた。○名古屋から神戸へ行くには、みんな駕籠で行つたものだ。その駕籠舁の唄が「一の鳥居越し二の鳥居越して、宮の神戸へ近くなり」の唄だつた。○神戸は、決して客をひかなかつた。一流としての權威を持つてゐた。神戸は主に、名古屋の身分客であつた。傳馬町は、土地客、名古屋客半々。古町は、漁師や魚屋であつた。【參考――當時、名古屋には、遊廓がなかつた。元文三年六月九日の停止後、私娼は論外であるが、遊廓はなかつた。爾後明治七年縣令の旭廓（しんち）公許まではなかつた。久】○神戸は數が少ないが、大樓ばかりだつた。揚屋が中にまじつてゐて、揚屋へ、呼ぶ例だつた。神戸では、信濃屋といふのが揚屋だつた。この揚屋では、傳馬町及びそれ以下の女郎は決してよばなかつた。それ位、神戸は一流を以て他を壓してゐた。げいしや專門の、即ち藝者置屋は、神戸・傳馬・古町を通じて一軒もなかつた。これが明治の後には現れたが、以前は、女郎本位で、少數のげいしやが共に置いてあるのだつた。その頃は、女郎（おやま）で藝者も兼ねてゐた。現におやま藝者とよんだ事もある。○鯛屋のお仲さんといふのは、えらい人だつたさうだ。現に、毎日傘を百本は用意して、惜し氣もなく、人に貸したさうだ。鯛屋のあとは、今でもある。子

がなくて、養ひ夫婦であつたが、そのあとが、續いてゐる。私の子供の頃（明治以前）すでに廢業してゐて、麻や疊表を商つてゐた。今でもさうである。今の家の隱居といふのが、七十幾つのお婆さんで、これは、鯛屋に、貰はれた嫁で、以前は、神戸でおやまをしてゐた。しかしこの人たちも代が變つてゐるから、御仲さんの事は知らぬでせう。鯛屋には、何でも陛下がお泊りになつた事があるさうです。廢業では、鯛屋が一ばん早いでせう。○神戸で、大きい家は（長門、するが、永樂屋）一軒に五十人はゐた。で三軒で百五十人、藝者は七八人づつゐた。他の神戸の家は、小樓で、數もずつと減つて、女郎で五六人でした。この小樓が四五軒、全部で女郎が二十人はゐたらう。これに前の大樓三軒の分を加へて、百七十人は、神戸女郎の總數でせう。○海岸の方からいふと、東側に、山田屋、びぜん屋、紀の國屋、（この紀の國屋は宿屋です。）永樂屋。富江町の角に長門屋。尙北へ新桔梗屋、鯛屋といふ順に北へ並び。西側は、永樂屋の向へ所に、須賀町の方へ曲る角の北側に、駿河屋がありました。○神戸は、大抵一軒に仲居が五六人はゐた。○神戸の中で、多い家族の家は、八十人はゐました。

二、傳馬町が事

○傳馬町で大きいのは、桝屋、太田などであつた。（尙、都々一節根元集の二枚目、傳馬町の町並の處で、この故老の覺えのあつた屋號だけを、指摘附記しておいた該項參照。久）大抵十五軒位ゐの覺え。○女郎は、大きい處で、二三十人。これが、桝屋、太田屋などの三軒

位。他は、五人位ゐづつだつた。總數は、百人位ゐでせう。○本陣といふのは、傳馬町にあつた。小出といふのが、その頃は、脇本陣だつた。（すれば、本陣でも遊女は置いてゐたのか。又は、「二五里水」記載のその頃は、專門的妓樓であつても、此の頃は、旅籠と變つてゐたのか。）本陣も傳馬町にあつた。本陣に赤本陣、白本陣と二ケ處あり、脇本陣が他に一ケ處、計三個あつた。

三、古町の事

○「古町おやまは三百で買へる。みのの布團で足が出る」といふ唄が流行つた。それくらゐお粗末だつた。○六七軒はあつたらう。新たね屋、吉野屋、米屋、宮口屋、小桝や、元角や、林やなど○一軒に十人位、總數六十人位。○古町は、女郎專門で、藝者は一人もなかつた。○林家といふのが一ばん大きかつた。古町の位置は、姥堂の橋（裁斷橋とも云ゝ久）の東、北側の中央所に、お天道といふ祠があつた。そのお天道の筋向への南側に、一里塚があつた。このお天道を中心として、西は橋、東は松原までが、古町の區劃であつた。その中、新長屋といふのは、お天道の東、松原迄をいうた。○古町女郎は、帶をしなかつた、扱帶ばかり。但し十月十四日の、お天道の祭の日一日は、帶をした。でこの祭を帶仕祭ともいつた。○古町の始まりは、神戸よりも、更に新しいでせう。以前の鶏飯屋云々の事は知りませんが、私の（老媼曰く）若い時分に、古町のおやまだけを、おかめ〳〵といつたやうです。

四、三區劃の遊興費

○神戸が二朱。傳馬町は五匁。古町は前にもいうた三百。
○神戸で昔し、餘分に、げいしやを揚げると、藝者一人、丁度十二時頃までが四匁、料理代四匁、二ツ市〔雛妓の事也。〕二人で、四匁。こんなものでした。勿論、明治少し以前の相場です。以上。

○附たり、とゞ一節の起原

自分としての考である。これは、何れ綜合的に、拙著「江戸軟派研究」の貳編第一冊（大正十四年一月號）に書く積りであるから、悉しい事はそれに讓つて、唯、この「どゞいつぶし根元集」の校訂編者として概括的な事だけを述べさして貰ふ。根が、斷片的の資料の羅列ばかりだつたから、一寸纏めておく事が責任上必要だと思うて。

前の宮驛遊里沿革略でも間々自分の意見を入れたが、要するに、どゞいつは、寛政十二年の秋、熱田突出（つきだし）の鷄飯屋の女中お仲によつて唱ひ出された。（その以前の系統が何であるか。それは、お仲を極めぬ限り分らない。姑らく疑問のまゝとする。）當時朋輩に、お龜といふのもゐた。この手合も、この節を流行らした。然るに、このお龜が、茶屋女として（寧ろ賣女として）時人の好評を得た爲、茶屋女

——賣女——熱田全部の遊女といふ順に、全熱田の賣女の總稱としてお龜が用ゐられ、且つ、此のお仲が創唱し、お龜ら和した一流の節も、當時汎稱たるおかめの節又は唄として、歡迎せられ、神戸町の遊女全盛に及んで、神戸節の名さへ生んだ。（この神戸節に就ては後日刊行の「音曲神戸節」解題及本文を參照の事。）結局　おかめの一人の本名お龜は、すつかり他にお株を取られた。この神戸で、おかめの節（神戸節）の全盛は、例のお仲が、神戸で鯛屋を始めた、そのお仲の宣傳にも、與つて力あつたらう。その頃、お龜買ふ奴云々、其奴(そいつ)はどいつじや／＼の終(しまひ)の囃しから、どゞ一の名を生んだ。都々一は無論後(のち)の宛字である。（古くは度々逸、江戸では百々一、東都一、都々一、都々逸とも宛てた。）どゝいつの名を生んだのは、おかめが總稱となつた、享和三年前後の事であらう。それが文化の頃に江戸へ移り、文政を經て、天保の扇歌の名手を得て、大流行となつたのである。卽ち、どゞ一は、創唱、名稱の起原、共に熱田（及び名古屋）がその榮冠（大して榮冠でもないが）を負ふべしといふのである。

—大正十四年二月「校訂どゝいつぶし根元集」附錄。

追記。右は、自分が校訂出版した「校本どゝいつぶし根元集」の附錄である。此の根元集は稿本一冊、名府幕末の雜學者、例の「小唄志彙集」や「見世物雜誌」などで專門家にも知られてゐる小寺玉晁（珍文館老人。明治十年九月二十六日、七十九歲歿）の雜著の一で、嘉永六年五月の序あ

るものである。小寺家離散の後、彼の稿本藏書類は、轉々し、此の稿本「根元集」は、嘗て狩野亨吉博士の手に入り、現在東北大學圖書館の藏に歸してゐるものである。自分が機會ありて、該圖書館から校本出版の便宜を得、大正十四年二月、自分の手許で增補校註の下に刊行（非賣品）したものである。此の本が、比較的都々一節根元集の名にそぐはぬ、寧ろ宮驛遊里風俗資料の如き觀あるものであるが、一に、都々一の起原、發達、その宮驛に於て凡てがあることを確說する唯一文獻であらうと思ふ。その要點は、高野氏の「日本歌謠史」にも、またそれと殆ど同一材料を尾張の故老によるとせられて廣田星橋翁が、嘗て「風俗畫報」二六二號にも揭げられてゐる。（此の記事、湯朝氏の新著「小唄研究」に全文登載。）これらに要點は盡きてゐるが、然し玉晁の稱する鯛屋女房のお仲なるものゝ正體、又は「お龜買ふ奴どいつじや〳〵」のお龜、又は、都々一が宮で生れて江戶で育つた徑路、其後の變遷などに關して、從來の書、（高野氏の歌謠史も）殆どこれを闕いてゐる。自分は、此の校本刊行と同時に、更により悉しい「都々一節考」と、「お龜考」、「鯛屋お仲遺聞」等をものした。これらは共に長篇、何れ未刊の「江戶軟派叢說」中に收載の積りでゐる。その折、此の小編と對比して讀まれたい。尙、「どゝいつぶし根元集」の全鱗は、此に登載の不可能を憾みとす。（菊判にて約四十頁の量。）そは、東北大と出版時の協約により、絕對學術的に之を

使用し、流布せしめないといふ同館襲藏本の權威を圖つての事ゆゑである。從つて自分が刊行を幾重の紛糾交渉の上、纔かに斷行した「校訂どゝいつぶし根元集」は、現在有する同書の唯一刊本、完本であるのである。がどゝいつに關する事項は、拙稿「都々一節考」及び、前掲校本附錄記事とが、高野氏摘記の分及び其他々氏の記述よりは、より立證的に、綜合分類して其の要を摘んではゐる。故に此の兩者を讀んで頂けば、先づ不滿は除かれよう。唯自分が此に先づ、此の校本附錄のみを敢て登載した理由は、三都以外の遊里沿革史資料の好例の一にとも思ひ、且つは、幸はひ「都々一」起原にも觸れをるが故、その兩樣の意味からである。次掲の「飯盛女値段附」の二樣とも對比せられれば、興味尠少ならざることと思ふ。

尙、「音曲神戸節」といふ事が、前稿にあつたが、これは家藏の稿本一冊、當時宮驛神戸に行はれたお龜の唄集である。卽ち原始的都々一歌詞集ともいふべきものである。此の本いろは別、各項數十首づつ。何れ校本刊行の機があらう。

―以上、大正十五年五月十日稿―

飯盛女値段付（其一）

□水亭（柳水亭種清の作名といふ）畫は國盛と思はれる末期艶畫本中本（ちうぼん）完一冊、「東街道」（内外題は「東街道五十三次」）の末尾に、道中記ふうのものがあつて、東海道各驛全部につき、まじめなる記述の他に、各驛飯盛の値段を一々御丁寧に書き入れてゐる。當時地方賣春研究の好資料であらう。今それを摘錄しておく。

○品川 拾匁、二朱、六百文、四百文、○川崎 四百文、茶屋出六百文、○神奈川 七百文、五百文、まはしなし、○程ケ谷 五百文、まはしなし、○戸塚 五百文、まはしなし、○藤澤 五百文、○平塚 晝三百文、夜四百文、其外まはしあり、○大磯 晝三百文、夜四百文、そとまはしあり、○小田原 七百文、まはしなし、○箱根 めしもりなし、○三島 五百文、○沼津 五百文、○原 めしもりなし、○吉原 五百文、○蒲原 五百文、○由井 五百文、○興津 五百文、三百文、○江尻 ○府中 遊女揚代一分又二朱、○鞠子 めしもりなし、○岡部 五百文、○藤枝 五百文、○島田 五百文、○金谷 五百文、○日坂 五百文、○掛川 めしもりなし、○袋井 五百文、○見附 五百文、○濱松 五百文、三百文、○舞坂 ○荒井 めしもりなし、○白須賀 三百文、○二川 三百文、○吉田 遊女二朱又五百文 ○御油 五百文、三百文、○赤坂 五百文、三百文、○藤川 五百文、○岡崎 遊女二朱又五百文 ○池鯉鮒 五百文、○鳴海 五百文三百文 ○宮 遊女

二朱、六百文も有、○桑名遊女二朱、四百文も有、○四日市遊女七百文、五百文も有、○石藥師五百文、○庄野三百文、○龜山五百文、○關五百文、三百文、○坂の下めしもりなし、○土山めしもりなし、○水口めしもりなし、○石部めしもりなし、○草津五百文、四百文、○大津五百文、三百文、外にお茶づけとて百文、

以上。

□水亭の時代であるから、無論幕末、此本また恐らく慶應前後の板行であらう。拙編追記。餘白に、エロに現れた東海道物又は諸國物の類を一括して、其の書目を擧げておかう。

稿本「艶本目録」からの拔萃である。

●色競花の都路一冊、近代もの。●晝夜萬開兩面鑑兩面摺一枚、寶暦の頃か。各所色里の値段付を記す。西川風。●旅枕 横本五冊、貞享年間。但し此本未見●旅衣 一冊、國盛畫●旅枕五十三次、半紙本上中下三册、水澤山人□の門主人序。國貞畫カ●木曾□道旅寢の手枕 小本一冊、妻戀隱士作（魯文也）、一妙□好人畫。●東海道五十三次色修行袖の玉鉾 小本三册、□水亭●國盡戀路芝（こひつみちしば） 小本一册、蒸々山人（魯文也）著、安政丙辰の序。●□中膝磨毛、合本八册、吾妻男一丁但し初代二代三代の繼作也。●好色修行諸國□□語、小本一册、京傳作と稱す、疑はし。●五十三次戀の初旅、中本一册、國貞風。

其他、尙、夥しき實數であらう。初期よりも槪して末期に多いやうである。殊に、一九の東海道、初代廣重の東海道版畫などの盛行を受けた以後に於て、無論其の類似作である。—大正十五年六月稿

飯盛女値段付（其二）

同じく艶本ではあるが、「書寐のあめ」（小本もの。年代末期、歌川派、彩色摺）の本文に鼇頭、各宿場の飯盛女の値段付並に評語をものしたのがある。前者は全驛の概値段、此は、値段付は同様なれど、評語の存するに於てまた別様の風格がある。重複を厭はず、左にその要文を摘錄しておく。藏本、その中卷の一冊、江尻より赤坂に至る記錄である。

江じり　二リ廿七丁

五百文　三百文　廻(まはし)なし

府中　一リ半

廓二丁目同所手越の里は遊女千壽のまへ出(いで)し所也

同二丁町には店付(みせつき)あり、一分と二朱なり凡は江戸のごとし

まりこ　二リ

此宿にめしもりなし　然共近年ふちふのはんぜうにつれわかき女もできたり

おかへ　一リ廿九丁
宿女　五百文　廻しなし
多くは地女にて皆　を　るゆへかへつておもしろきことあり
ふぢ枝　二リ八丁
宿女　四百文
此へん客によりて二朱などいふ也　前にたづねてよし
島田　一リ
○大井川
宿女　五百文
此所には女多し常は廻しなし　川止のときには廻し有　又とまり合たるひらい（拾ひカ）□□する
ことあり
かなや　一リ廿四丁
宿女　五百文　前におなじ
川止のときは同宿の女のたびも有ば心安くするべし

日さか　一リ卄九丁

宿女　五百文

此所はひなめきじゆうに□□る也　はたごやの中にもわかまつ　いけだやとうにとまるべし　小宿は大に凶

かけ川　二リ十六丁

∠此所めしもりなし　御城下ゆへはたごやとう　又女もよろし　いかやうにもそうだんはできる也

ふくろ井　一リ半

宿女　五百文　廻なし

多くは地女也　近頃宿の風義かはり次第によく成たり　女も人がらいやしからず

見つけ　四リ八丁

宿女　五百文　廻しなし

はたごや又女どもよろし

はま松　一リ十二丁

宿女　三百文　五百文　廻しなし


掛川宿 廿七

此所はいづれも地女にて、ほまち同様也　尤御城下なれば人がらもよく客あしらひ等もよろし
肴も多し通客はとまるべし

まいざか　舟わたし一リ

○此宿と向ふのあら井宿にめしもりなし　然共はたごやのきうじ女か又は娘などもそうだんできる
よし也　前年迄めしもり有しが　是も止たるはわけの有事なるべし

あらい　一リ廿四丁

○此宿と跡のまい坂宿にはめしもりなし　むかしはよきはたごやには　女も有たるよしなり　然共
此宿にはあだものおゝく見ゆるゆへ　いかにもそうだんはできるべし

しらすか　一リ半十六丁

宿女　三百文

皆地女にして、ひなめきたれど　じゆうに□□るゆへおもしろし

ふた川　一リ半

宿女　三百文　廻なし

此宿は女もよくあしらひ等に心を付る所也

よし田　二リ半四丁
宿女　二朱　五百文　いづれも廻なし
はたごや又女もきれい也　かならずとまるべし
ごゆ　十六丁
○松山城あと也　竹の庄と云　昔は此宿(しゆく)の前後に遊女多し　今は遊女のていもなけれど　めしもり
等は多し
宿女(やど)　五百文　三百文　廻しなし
吉田の宿へ近きゆへ　はたごやとうもよろしく酒肴もよろし
○此宿にとまりめしもりをかふに二朱といふなり五百文にて廻しなし　客多き時は三百の方は廻し
あり　心得べし
赤さか　二リ九丁
○此宿もむかしは遊女あまた有たる所也
宿女　五百文　三百文
此宿も廻し　然共それは月にはかたひ有（たがひ有カ）廻しあり　又よき客と見れば二朱と云ゆへ

前にたづねてかふべし　このぜんごりしゆくには女良多し　はやる所也　【以上】

――大正十四年十二月、「新小説」。

餘白に、「晝寢のあめ」中の、本文若干を抜いてみよう。

○

○戀つのる夜ごと／＼の寢覺かな

府中二丁町は、古より廓にて戀の湊の重荷舟金銀財寶家藏も限たく納りし神變ふしぎの其主は岩田の小芝と云ふ當時二丁の家毎に赫き進退自由の通力を得、達磨大師を飯俗させ、羅漢の膽玉を串團子の如うばふ、爰に大江戸本丁邊の大家の息子、俳號を里朝といへり。けふも……小芝と深く成しが……無音に居しが、折から隣座敷に唄哥、　△つらひつとめもおまへがたよりそれに邪見な事斗、小「藤さんとなにか言つた事も有たけれどそこは勤の事なら仕方がないわナ・夫でも微塵も實を盡した事はないから、モ疑ぐらないで勘忍しておくれネへ。り「そんなら二人彫り合つた俺が名をばなぜ消した。己は此處を風にもくはせねへ

といつた調子。これが小本で四丁斗の小篇、以下此類の小話外題を擧げると、「河留で云々」。「赤坂に奴もけふは花見かな」といつたもの二三。大して地方色も現れぬ。やはり鶯頭の、値段付の方が振つてゐる。

――大正十五年六月

「江戸軟派雜考」補遺

拙者「江戸軟派雜考」（大正十四年六月初版）の補遺である。今日までに補遺として自分の思ひ付いたもの、及び諸家の示教の凡てゞある。即ち第一回の補遺である。就中飯島花月翁（信州上田住。明治初期より都々逸俗謠並に川柳風俗等の考證家創作家として、殆ど元老の位置にあること周知のごとし。）の精細なる示教には、感謝なほ餘りあるものがある。同氏の許諾を得て以下先づその書簡の要點を錄する。【以下、花月翁書簡要略。久曰くは、予の追記也】

（雜考）九九ページ　似字盡の項中

第九、　兩、久、圍、云々

花云　此註に解說ある繪は、長唄「隈取安宅松」の踊りの場面ならん。此長唄は、子供遊びの詞いろ〳〵ありて、解說に苦しむ點もあり、又解說を施さば面白からむと思はるゝふし〴〵少なからずと存候。（久曰く、翁の曰はるゝ隈取安宅松は、俗外題安宅、明和六年十一月市村座初演のもの。長唄富士田吉治、三絃藤間勘右衛門。辨慶實は鞍馬僧正坊化現市村羽左衛門、里の子小松吾妻富五郎、同若松龜谷姬八といつたものである。成程、此繪の贊の狂歌の中にも、あたかの門松

とかけてある。或は是れ翁の曰はるゝ如くではあるまいか。」

（雜考）一三九ページ

付髮帽子の註に付髮帽子を一種の帽子の名と解かれたれど、之は付髮と帽子の二ツを云へるならん。賣色の比丘尼は、帽子をかぶりて髮のもみ上げの毛を帽子の下より出して居るを例としたるが如し。此のもみあげの毛は比丘尼の坊主あたまに有るべき筈なし。卽ち付髮をせしものなるべし。（久曰く、御明解。疑問氷解。）

（雜考）一七二ページ

さゝら踊。踊唄百番に在るさゝら踊は、竹簓（又は拍板卽ちびんさゝら）を鳴らして謳ひ且つ踊つたので、獅子舞や又其他の俗謠と成つて、近年迄も田舍には存して居る。女太夫とは別なもので、百姓などの農隙にみづから簓踊りを演じた例もいくらもある。さゝら踊が女太夫に進化したものとは斷じかねる樣ですが、如何なものでせうか。但し昔から乞丐がさゝらすりをしてあるいた事も勿論あつたのである「久曰く、私の記述も「變りも變つたり」としておきました。私の考へでは、營業的な（賤氏の）ものが、簓から三味に、さうして美女の女太夫に變つたといふ積でした。勿論地方には、此の原始的な簓が、そのまゝ殘つてゐるだらうとは、思はないでもありま

せんでした。」

(雜考)二九八頁

(死繪考の中。)四世歌右衛門のだんまり風の死繪、あれは元來三枚續きの右端のものである。中の一枚は、釋尊に扮した八代目團十郎で、左の手に地藏尊の錫杖をおさへ、右の手で閻魔王をとり挫ぐ體である。左の一枚は觀世音に扮した二代目しうかで、左の膝下に赤鬼をひッ敷き、右の手で冥官の一人をあしらつて居る。此の三枚中、歌右衛門獨り俗體であるのは、畫工が思案に窮したものと見える。又畫中の奪衣婆や地藏や閻魔外一體の冥官や鬼やは、孰れも當時の俳優の似顔と思はるゝが、恐らくは此時皆故人と成つた人々であらう。卽ち其死繪をも兼ねた三枚九優の死繪と見る可きだが、大立物三人以外の名前はまだ考へ及ばぬ。而して歌右衛門の死は、嘉永五ノ二月、團十郎は同七ノ八月、しうかは安政二ノ三月で、三名優が此の四年間に續いて死んだから、非常に惜まれて、死繪が澤山出た。中にも團十郎が悲慘の最期と、之と女夫役者と歌はれたしうかが年も隔てず死んだのとは、一層強い衝動を世間に與へ、二優の爲に出た死繪は古今無類多かつたと謂はれて居る。此の三枚に三人丈けは俗名俳名屋號年齡死亡の年月日戒名が傍記してあるが、附隨の眷屬には何等の表示も無く、又出版元、年月、畫者の名は一向見えぬ。而し三

代豐國の筆である事と、安政二年若しくは其以後（安政二年と斷定してよからうとは思ふが）の出版たる事は、疑が無い。而して多くの死繪中最も精巧華麗を極めたものである。此外にも此類の續き繪の死繪が數種出たらしい。又しうかとか團十郎とかには、大首もので豐國畫精緻たものが數種出た。兎に角死繪全盛期といふ可しであつた。（久曰く――御教示難有く〳〵。成程、あの儘では、どうも意味が取れなかつた。三枚續と聞いて成程と思はれた。」

（雜考）四〇五ページ　踊形容に就いて

私は、此語を芝居の代名詞とは思はない。勿論踊は演劇の一部面即其活動情態のヲドル（踊）を名詞したのだが、形容は踊の姿態を文字や繪畫に採し出すの義と解して居た。そは下記の踊始形容三番叟と始の字を挿入した例から、さう思ふのである。即ち一日中の劇の最初に踊る三番叟を繪に寫して、形容したといふ意であらう歟。されば此語は踊の形容であつて、踊形容といふ三字一語では有るまいと思ふのである。家藏の錦繪中、此語を用ゐて表題としたものに、左の數種がある。

○一枚繪　三世相福島屋の段、安政四ノ七月湊小版。三代豐國筆で、肩に おどり形容外題盡 三世相福島屋の段・貴著に出て居る外題盡の二種と、組繪であつたらうと思ふ）

○三枚續繪　寅九（安政元ならむ）加々屋版。三代豐國畫。五俳優五節句の見立姿で、畫題に、
踊形容見立五節句。

○三枚續繪　寅十二（同上）湊小版。畫者同上。三俳優三番叟の畫面、肩書に踊始形容三番叟。

以上三種いづれも形容の文字には、けいようと振假名がしてある。序でにいふ、同じ貴論の中に、踊形容新開入之圖と踊形容樂屋の圖とを孰れも三枚つゞきの組繪としてある。左樣に見られぬ事もないが、元來は此二者を合せて六枚續きの一組ものである。卽ち樂屋の三枚が、上段で、其下に新開入の三枚を接續させて、舞臺裏の大部分を示した奇巧的な大作である。外にも六枚つゞきなどいふ大きなものが有つたかどうかは詳にせぬ。（久曰く――成程さう聞いて、上下に計六枚を並べてみると、しつくり合ふ。唯、階段の上り工合がちよつと變かと思はれるが、文化住宅圖案の權威能勢氏に見せたら、やはりこれでいゝといはれた。卽ち別掲挿圖の如し。尙三代豐國の此の踊形容風の役者繪其他では、今一寸見當りかねるが、古く歌麿に、橋上橋下の上下六枚續はあつた。これは知る人多からう。）

（以上、飯島翁來簡の中。）

○「江戸名物詩」第十四丁につき





拙著「雑考」の『江戸名物詩』（二二二頁―二五二頁）の中の、「江戸名物詩」原本に、第十四丁の有無の指示である。益々以て此の本の異本多きに驚かされる。

○

貴著「軟派雑考」に御收錄の、方外道人「江戸名物詩」の中にて、第十四丁を欠く旨御記載の處小生藏書によれば、第十四丁は、花月氏の云はれる通り、

釜六釜、翁蕎麥、金麩羅仕出、（十四丁表）

水亭と署名せる富士遠望の繪、銀鷄の題辭、（十四丁裏）

有之候、それに先所有者の朱書、如左。

「コノ一丁原刻ハ又ノ廿五丁目ニアリ。又云、原刻本十四丁欠丁也。」

「第二丁がやはり重出しての上の事であるか否」の御疑問に付て、

第二丁の次に、又ノ二といふもの有之、

近江屋大牢撰より瓢簞茶漬まで六句あり（下略）（以上、神戶、忍頂寺務氏）

○

（前略）偶々「江戸名物詩」の項を拜讀致候處、貴所御所藏の同書は、初版再版とも、十四丁が落

丁の由に付試みに家藏の同書を取調べ候處、小生のも（初版）同じく十四丁が缺け居候。然るに飯島花月氏の「江戸名物詩管見」に據れば、同氏所藏のは、十四丁が存在して其表には釜六釜、翁蕎麥、金麩羅仕出の三首が載つて居り、其裏には水亭の大川端の圖がある由

に付、爲念家藏のを調べ候處、右の一丁は廿五丁と廿六丁との間に有之、胴りも明らかに又ノ廿五と小口に記しあり候。惟ふに、右は再版の際、丁數の文字を刪りて、（多分刪りたるものと判定仕候、小口の文字に氣が付かぬやうな花月氏では無之候故）十四丁の處へ挿入したるものかと被考候（下略）（以上、横濱、今井卯木氏）

〇

此の二氏の指示にもある通り、愈々分らなくなるのは、「江戸名物詩」の版次である。試みに忍頂寺氏本の原本書入を信ずると、予の藏本（第二丁重複、第十四丁缺）が原刻本（初版）、今井氏本（第二十五丁重複。第二丁重複の如何は、明示なきも、恐らくは、予藏本と同じく、重複ならん）は原刻本の異本。忍頂寺氏本花月氏本（第二丁重複、第十四丁現在。第二十五丁重複せず。）は、再版本。然るに予が一本（口繪を欠く。第二丁重複。第十四丁無し。第二十五丁重複せず。）は、初版本の後摺と

でも謂ふべきか。とにかく他本には稀な、異同の激しい本である。

以下は、自身が、其後思ひ付いた、見當つた事のかず／＼である。項分けにして、列記してゆく。

○「雜考」に自ら補遺したきこと

一 「むらく坊」の作者に就て （拙著四〇―四一頁、五一二頁―五一三頁）

これは、私は俳人桃隣だらうと桃隣堂を目しておいたが、それには種彥の「好色本目錄」の註に曰くの「江戸の俳諧師にて伊勢の產には非ずや」も多少のヒントとなつた。が、一方種彥は、好色本の桃隣は、當時の俳人太白堂桃隣ではないといふてゐることである。左の如き記事であるが、是によると種彥は當時同年代の江戸に、同じく俳人で二人の桃隣があつたことを是認してゐたことになる。（一方の作者桃隣に關する彼の臆測を混入して）可笑しい。たとひ種彥の明らかな否定があるにしても、私の桃隣堂紫石（作者）は太白堂桃隣（芭蕉門下の俳人）と同一人であらうことは、まだ消え去らぬ私の頭の翳であることを云ひ添へておく。

「連理松」 繪入

全本未見、作者桃隣堂とあり。

『むつちどり』を著したる桃隣とは別人なり。書振り前の册子（好色艶虚無僧。桃の林作）に似たり。隣は、林の假字、同人なるべし。云々」

（好色本目錄）〔新群書類從――書目。一六八頁ノ上〕

二　馬琴初期の黄表紙の再版物に就て（拙著一〇一頁參照）

「無筆節用似字盡(にたじづくし)」が國芳畫で天保十年再版されてゐることは、述べておいたが、他の九種計十種の馬琴初期の黄表紙が同八年頃より十年頃にかけて、再刻（改畫の上）されてゐる。馬琴黄表紙年表（拙著八七頁――九一頁）にも漏らしたものがあるから、左に書いつけておく。全部が再版されたか否かは斷定の限りではないが、似字盡や視藥霞報條（再版本は引札）が現存する所から考へると、全部改畫再刻されたものらしい。出處は、草雙紙「田舍源氏」の廿二編下、（天保八年刊）の卷尾版元の廣告に發見したものである。その要文を左に登載しておく。

笠翁新奇十種曲　寛政年間曲亭子の舊作畫册子十種拔萃再板　作者馬琴子校閲新序　歌川國芳新に畫く　（中略。コヽ、板元仙鶴堂の口上也）

第一種　視藥(みるくすり)霞(かすみの)引(ひき)札(ふだ)　馬琴作　國芳畫

第二種　無筆節用似字盡　馬琴作　國芳畫

第三種　鹿想染文當字揃　似字盡の後編なり作者並に畫工同前

天保丁

酉仙鶴堂再刊十種目録

第四種　花見嘶虱盛衰記　馬琴作　國芳畫
第五種　敵討蚤拿眼　虱盛衰記の後編作者畫工同前
第六種　備前擂盆一代記　馬琴作　國芳畫
第七種　野夫鶯歌曲訛言　（同上）
第八種　春之駒象棋行路　（同上）
第九種　譬之節義理與犢鼻褌　（同上）
第十種　六冊懸徳用草紙　（同上）

右一種十丸張を二冊の袋入合卷に仕り是より毎春一二種づゝ再版賣出し奉入御覧候

江戸町筋通油町書林並に地本暦問屋
板元　仙鶴堂　鶴屋喜右衛門

以上、天保十年頃までに再板了のものであらう。さうして此等は、恐らく馬琴の自薦に成つたものであらう。然し板元口上には、この廣告の中に、「當時のあたり作をえらみ出し、翁に校閲新序を乞て……」とはある。

三　津田義宗の別著　（拙著一三五頁）

津田義宗（正生）の別著に、眼前致近道等があることは、「尾張地名考」の小傳に據り補遺しておいたが、此頃「眼前敎近道」の一本を獲たから、其の輪廓を紹介しておく。

眼前敎近道　文政十一年戊子立春　名古屋　永樂屋東四郎版

序、協園の徭德。

目錄。のし、田地、工匠、酒はやし、化粧、着もの、元服、婚禮、喪祭、双子、皇語、陰陽、よみ本、以上十三篇。

挿繪、ヒラキ大小十二個。畫風は北齋ヵ該門人。

內容は、例の「婚姻男子訓」やうの編纂にて、故老、先儒等の語を列擧し、自己の意見も混へてゐる。一種の敎訓書。（挿繪の中に、六合亭の圖がある。その口上によりて窺ふに、作者津田氏は當時酒造をなし、店頭、人々に利酒をさせたものらしい。『……各樣しるもしらぬも御通行の砌御求可被下候以上』とある。酒を酧めるは、津田氏自身であらうか。）（尙、篇中の廣告によつて、六合庵隨筆全二冊（近刻とあり）。畫本小治方言、六合庵著　全一冊。小治本國神名帳、六合庵參訂　全一冊、の著述もあつたことが知れる。）

四　俄の語原　（拙著一九〇頁―一九一頁參照）

俄の語原が、堺の二羽屋嘉平次、綽名を今曾呂利といつた男が、頓作が巧かつたので、それを「ヤーレ二羽嘉〳〵」と囃したのが始まりといふのは、自分は餘り信じられないから、拙著には略いておいた。然し大坂では專らこれを信じたといふ話。此說の物に書かれたものゝ一としては、旣に明治三十五年七月十五日の『大阪と神戶』（文藝俱樂部增刊、第八の十）にも、香魚市人氏が「俄」といへる說話の中に、その語原として書かれてある。此の文章、以前の俄、異種の俄等に就て說く所委しいが、語原に關しては、此の二羽嘉說及び他の一說。庭神樂の約「ニハカ」說。（馬琴もその「曲亭雜記」にこの說を信じてゐる。）京都で行はれた一說、卽ち大阪の東橫堀で染物屋をしてゐた豐島屋利八が、折々京へ遊んで、島原の祇園祭の夜などに、自分の宿場であつた輪違屋から思ひ付いて、提灯の印に「二〇加」と書いたのを點して、一口物の頓作を流して步いた。これが元だといふのである。然し是等は、旣に此の香魚市人氏によりて否定され、やはり俄に思ひついて俄かにするからだと此の意味の語原に局限されてゐる。それと同じ說を最近の「難波津」（第十八號）にも載せてゐたが、矢張り一種の市井傳說であらうと思ふ。新刊の淸元硏究（第四號）にも、忍頂寺氏が此の俄に就て諸說を擧げてもゐられる。

尙、俄の語原沿革等に就ては、「大福帳」（明治三十七年一月創刊。大每の別働隊であつた雜誌）の第五十四號

（明治四十一年七月一日）にも、善太郎といへる人の「俄物語」といふ記述がある。但しこれは、文俱樂の「俄」と殆ど同樣の事實を述べて、同じく「古今俄選」などの急遽說に左袒してゐる。同一筆者でなければ、文俱樂の燒き直しでもあらうか。「難波津」は、更に此の繼承とも見るべきものである。

五　三馬の「江戶水」について　（拙著二四三頁參照）

小三馬（三馬の悴）の弘化三年版、三代豐國畫の「戲作花赤本世界」四冊の處々余白に、自家正業の賣藥披露をかねてゐる。その中に、此の「江戶水」に關して較委しい說明がある。それを左に。

○江戶の水　▲大箱代百五十文　つめかへ百文
▲中箱代百文　同六十文
▲小箱代五十文　同三十二文

にきびの大妙藥、御顏のできもの一切によし。夏冬ともに白粉はげず、きめこまかにしてつやをいだし白粉のうつり惡しき御顏によくのりて、はげざる事請合なり。

尙、一種の避姙藥（時には墮胎藥）ともいふべき天女丸（月水不順を治す名方、くわいにんを休む妙やく、と割頭書がある。）といつたものもある。此の價百廿四文。此種の賣藥は親の三馬以來拔目がない。（三馬の藥出した馬猿の印が、產まざる——避姙又は墮胎を意味した暗語であるとの一說もある

位ゐである。）其他化粧品、鬚毛とも十九種の品目及び該効能を擧げてゐる。

六　死繪の一例　（拙著二九二頁―三〇一頁參照）

吉川觀方氏編の「繪畫に見えたる妖怪」の中に、死繪の二枚がある。八代目團十郎の珠數のカコミの中に、喉を突ける圖も悲慘であるが、面白いのは、顔見世番附に擬した死繪一枚の摺出である。冥途大芝居追善役者附の横一枚で、文政年間より天保三年迄の死歿の俳優藝人を、顔見世番附にまねて畫いたもの、國芳の筆である。墨一色摺の大判、凝つたものである。三津五郎や相手の菊之丞、市川門之助、大谷馬十、松本染五郎、中山龜三郎などの名が見えてゐる。

七　艶畫考の補　（拙著三五三頁　三八一頁）

艶畫の刊行年月明示又は暗示、板元分明などの別例を其後多く知つた。又、畫家又は編者の假名の如きも。其他これに關する項に限り、別の機會に說くこととして、今は姑くこゝに省く。

八　踊形容花競の四編と五編　（拙著四一一頁―四一三頁參照）

「踊形容花競」の零本を購ひえた。四編と五編の二冊。これで第二だけが欠本といふ譯である。此の新たに得た四・五編の内容を、一と三を書いた責任上、書いつけておく、體裁、摺、一切初・三編と同樣である。編畫とも同じ。

第四編は、五十三次東路評判。第五編は、初楓色紙評判。四編は、續歌舞伎年代記を見ると、安政元年八月四日より河原崎座。五編は、八月廿五日より中村座の興行である。「初楓」は、梅川忠兵衛もこれに絡んで、活動してゐる。前者は、默阿彌の作であり、その後日だけを、この花競の草双紙體に物したものらしい。刷、口繪の精巧なること、共に驚嘆。

九　石楠　（拙著四四六頁）

楠が化石するについては、近松の「吉野都女楠」にも、類想の語を發見した。卽ちその第一に、正成が正行に訣るゝ最後の語に、「……二葉の苗を殘すこそ、巖とならん楠が、長き世迄の形見ぞ」とある。

十　三ツ蒲團　（拙著五〇八頁參照）

三ツ蒲團の古い用語を發見した。同じく近松の「國姓爺合戰」（正徳五年十一月一日初日）である。その第五の、獅子が城内の、和唐内の母が縛められて城内、錦祥女に款待を受くる件の、「錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し、二重の褥、三重の蒲團、山海の珍菓名酒を以て……」卽ち此の三重の蒲團である。强ち二重の褥と對した三重でもなからう。修辭の關係ではなく、誠に三重の蒲團が款待の例として當時行はれたものであらう。尙此の三ツ蒲團に就ては、忍頂寺氏の著作「延壽情話」の第

八冊に委しく出でゝゐた。「清元研究」の七月創刊號にも、同氏の清元の「梅の春」の註解の中に摘記されてゐる。寛政七年の「新吉原町定書」では「夜具の儀も御法度の品は申すに及ばず、金銀の糸交り候織物、錦、天鵞絨の類決して相用ゐず、數の儀は三つ以上相用ゐず、總じて格別花美成らざる樣致すべき事」。と極められたが、五ツぶとんの贅澤なものすらあつたと。さうして此の三ツ蒲團は、敷ぶとん三枚の意で、卽ち近松の「二重の褥三重の蒲團」も、上に二枚の夜着、下に三枚の蒲團と解すべきであらう。卽ち褥を蒲團同樣に見ると、これも上下で五ツ蒲團になることになる。(十月廿六日)

—大正十四年十二月、「新小説」。

○「江戸名物詩」と「茶菓詩」

(前略)「江戸名物詩」について、少し心づいたまゝを。當館にも忍頂寺氏本、飯島氏本(第二丁重複、第十四丁現在、第二十五丁重複せず)と同じものがありますが、御說の如く、右は再版本と思はれます。當館のは靑表紙で、題簽に江戸名物狂詩選 全とあります。(忍頂寺氏、飯島氏のも靑表紙と思ひます。)これだけでは再版本である確言は出來ませんが、曾つて貴臺が御紹介になりました同一著者の「茶菓詩初編」の原刻本と、再版本？とが幸ひに當館に所藏されてありましたので、それの再版本を何心なく見ますと、「江戸名物詩」の所謂

再版本と同一紙質の、同一の青表紙でありました。

そしてその茶菓詩も原刻本と再版本？とは左の様に相違して居ります。

（原）	（再）
序（方外道人）（丁付ナシ）	同
	表　△鐵雞題書 }第一丁
	裏　△銅脈先生肖像（鐵鷄畫） }第一丁
本文（十三丁）	同
	△太神樂　（第一丁）
	△駒込茶市　（第一、第二丁）
	△鳥飛山（アスカ）　（第二丁）
	△吉原櫻花　（第二、三丁）
	△賣卜先生　（第三至五丁）
	△書畫會　（第五至八丁）
跋（靜軒居士）（丁付ナシ）	同

以上の△印の分だけが、再版本に余計です。飯島花月氏の御説の如く、名物詩も、茶菓詩と共に、鐵鷄、錢鷄等の道樂半分の再版ではありませんでせうか。

それから「名物詩」當館本の第二十四丁が、その二十の文字、他はみな「廿」になつてゐるのに、この頁だけがことさら「二十」となつてゐるのも、可笑しいと思へば思はれます。貴臺御所藏本は如何でせうか。右心づいたまゝを一寸御知らせいたします。匆々（十一月二十六日、日比谷圖書館内、波多野賢一氏）

（久彌曰く、家藏本は、「名物詩」、矢張御館本と同樣、家藏二本とも「二十」と第二十四丁があります。家藏の中純初版初摺本と思はれるものは、靑表紙、また別本初版後摺本は、うすい代赭の色です、「茶菓詩」は、家藏本靑表紙、貼外題は、「新編流行茶菓詩」とあり、内容は御示しの再版本と稱すると、丁數、順序一切違ひありません。但し御示しの最初の鐵鷄題書・銅脈先生肖像といふのがなく、その第一丁分には、茶菓詩歌一篇が表裏に亘ります。

―大正十五年一月、〔江戸軟派研究〕。

「茶菓詩」について

「茶菓詩」は、方外道人の著である。嘗て紹介した「江戸名物詩」と同一作者である。最近その別著「茶菓詩」を手にしたから、その片鱗を左に載せておかう。體裁と序と、一二の例とである。體裁は中本型（美濃四つ折）外題は、新編流行茶菓詩　全とあり。見返しには、方外道人著　茶菓詩　小倉菴藏と三行にある。この小倉菴とは、例の幕末强賊の小倉菴長治ではなからうか。序は、

茶菓詩序

有茶必有菓子。有菓子必有詩矣。是則下戸世界之樂。而非上戸菩薩之樂也。雖買一樽之酒不買一箇之菓子。菩薩非惜買菓子之錢。以不好其甘故也。予生來下戸。不解酒中之趣。唯茶菓詩之三昧耳。今春一夢中。得兩三卷之茶菓詩經。覺而記之。以爲下戸世界之說法云。

天保癸巳春三月　方外道人題

栞山人書

とあつて、古詩　茶菓詩歌、食傷行、湯屋行、開帳行、の數編。（皆一丁位ゐづつの長編）絶句　茶

銘、無馳走、夜深、大丸店、煉塀小路、道成寺、風邪、論語雜詠、感應寺富、扇面亭、琉球風、一朱銀、山勢檢校彈琴、六歌仙、春水藥品會、山手松魚、八百善、谷中、年明、大晦日、夜發、婚禮の數編。五言律には、淺草觀音、醫者、早起、風邪、成田山開帳、迯拙堂先生歸伊勢の數篇。附錄として座方銘、浴衣賣初の二篇。尙、別に八丁分、太神樂以下の數篇があり、最後に、靜軒の跋がある。與附は、東都書肆として、須原屋、山城屋、小林以下の數肆の連名を見る。茶菓詩といふものゝ、主に命題にそぐはぬもの、寧ろ江戸風物詩といつたものである。絕句で例を擧げると、

〔茶銘〕　喜撰非和尙、嬉野似傾城、山吹兼ニ信樂一、終成ニ茶漬名一。

〔六歌仙〕　吹故文屋早歸風、黑主民眠退屈久、喜撰僧正小便ニ
行、業平竊握小町手、

〔夜發〕　吉田町內迯春秋、輕粉防成向月羞、白道姿身如織女、往來夜々伴干牛。

といつたものである。江戸の地方色は、寧ろ「江戸名物詩」に多く、この「茶菓詩」は、名を借りただけの彼の狂詩集である。此の本、天保癸巳は、同四年。江戸名物詩は同丙申、即ち同七年、乃ち名物詩に先だつ四年の著である。最後に、靜軒の跋を載せる。

茶菓詩、跋

不下會ニ人情一解中世態上、則弗レ能レ治ニ國家一也、而會レ之解レ之、莫ニ詩若一焉者一、不下會ニ人情一解中 世態一、則

弗レ能レ作レ詩也、而畫レ之寫レ之文莫ニ徘詩若一焉、然則爲ニ人上一者可レ不レ讀乎、爲ニ人下一者可レ不レ作乎、是古樂官所ニ以列ニ國風一、今道人所ニ以寫下之居士所ニ以跋下之也、都俗諺謂ニ調謔一曰ニ知野嘉須一、茶菓音近レ之、庶莫下人謂ニ斯集一爲中茶菓上

静軒居士跋

江山逸人書

附記、譚海の卷四に、小倉菴長治の詳傳がある。を今見ると、「初以ニ糖菓一著、無レ幾造ニ亭謝一、起ニ樓閣一、遂改ニ今業一」云々とある。今業とは、江東小梅の小倉菴、卽ち割烹店の義である。すれば、この茶菓詩の頃は、まだ菓子屋業の頃で、その長治と方外道人と心易かつたかどうかで、小倉菴藏とあり、卽ち小倉の出費で此の本が成つたのだらう。卽ち小倉菴の宣傳用であらう。方外道人若し慶應元年閏五月廿七日まで生きてゐたならば、小倉菴が强賊であつたことに、啞然たるの一人であつたらう。が若し此の長治の小倉菴と、此の「茶菓詩」のそれとは別物といふ事に決れば、それ迄。方外道人以て落付いて可なりである。

（大正十三年十二月「江戸軟派研究」）

畫本柳樽の編者と畫家

畫本柳樽本も數種見受けた。我等は柳樽本蒐集が主眼ではないが、その挿繪が面白く、且は末期浮世繪師の風格を語る別資料として、手に入れば避けぬでもなかつた。從つて零本ばかり、且つ專門家には平凡な物ばかりであらう。唯、多少浮世繪本位の立場から、零本、些末ながら、今自分の書庫にあるだけを左に部類別として、簡單な解題を爲しておかうと思ふのである。

(第一) 畫本柳樽

1. 畫本柳樽二編　中本一册　天保十二年刊

大阪、河内屋茂兵衛、鹽屋喜兵衛、同鹽屋彌七の三家合梓である。見返しに、八島五岳翁戯墨とある。五岳は大坂天保山の景などを描いた(「天保山勝景一覽」)北斎門人北溪門下の一風景畫家、岳亭春信、岳亭定岡などと同一人である。その畫で、此本、北斎風の小人物畫である。薄墨と代赭の二版をかけてゐる。句ありて、その句意によりて描ける事、如例。卷頭「家内喜多留二編序」として、五岳の序一丁。本文二十にて終。(編者は不明なれど、五岳の編たること疑ない。即ち彼亦一方に於て「西遊記」の譯其他讀本抄からずあるからである。)

2.　同　四編　中本一册　天保十三年刊

板元同上、卷頭、五岳の序一丁あること、亦同上。(黄園五岳と題す) 本文二十一丁。畫家、編者とも五岳。

3.　同　七編　中本一册　天保十五年刊

板元同上。畫家、葛飾戴斗老人戯畫、卽ち例の犬北斎。(これは、例の新吉原引手茶屋龜屋の主人喜三郎で、北斎門人、文化十四年頃戴斗の號を師から貰つたが、後、大阪に赴き師の贋作を行つたと云ふ男。二に大坂北斎ともいはる。) 序、東海僕木偶房書成といへる男の一丁。中に「尻閑觀音堂卍翁は所謂狂句の大天狗、下拙は門人の小天ぐう云々。師句も愚吟も人の句も闇句もお負と浚込山盛にして云々」とある。此の卍翁は、卽ち師の北斎の意であらう。卽ち北斎又自作川柳の大家であつたのか、彼の風格としては、當然のことゝ思はれる。さすれば此の木偶房は、龜屋喜三郎の戴斗共の男で、編者卽ち又彼と見てよからう。さて此本、畫様頗る師の北斎ふうである。板元同上。二色刷また同上。

4.　同　八編　中本一册　天保十五年刊

序文、畫家同上。卽ち編畫犬北斎。板元同上、色版二種また同上。

(第二)　柳　樽

1.　柳樽四編　中本一册　天保十四年刊



十二



十三



十四



十五

表紙に、柳樽四編、應賀作とある。本文初めに、萬亭應賀教句畫抄とある。此の教句は狂句を通はせ、しかも教としたのは、水越の繪本草双紙類に下した、嚴令の結果、教訓をもて看板としたものと見て可い。本文の挿繪は不明なるも、表紙ウラ（見返し）に柳に月の繪あり、それに「まりそれて見れば月なる柳かな　一筆」とある。この一筆から、更に挿繪の畫風から、一筆庵英泉と見て可なり。本文の體裁、前種と同様。唯、所藏本墨一色摺である。丁數二十三。板元、東都三河屋甚助、吉田屋文三郎。

2.　同　八編　中本一冊　嘉永七年刊

編者不詳。畫者、北爲（北齋派、江戸の人）。別に、卷頭の口繪二圖、貞房（初代國貞門人）門人房高畫く。本文挿繪體裁、墨摺、凡て同上。丁數二十丁。板元蔦屋吉藏（八犬傳犬の草紙などの板元。）。

（第三）　たねふくべ

1.　誹風たねふくべ七編　中本一冊　天保十五年刊

表紙に、柳句隱句畫賛圖式とある。序一丁、（此の序に、種瓢子と漢字を宛つ。）此の序文、三友堂主人、本文體裁略同様なれども、少しく異る所は、各句に、題を附し、句作者の名を擧げをることである。板元、東都正文堂政吉、三河屋甚輔。畫者不詳。

（第四）柳の翠

1. 古ゝ笑句 柳の翠　中本一册　年代不詳

序、文屋麵安麻呂。畫は、國直（初代豐國門人。例の人情本に多く描いた、美人畫、風景畫家。）扉に、繪本川柳點とある。本文挿繪體裁同樣なれども、稍〻圖樣大である。墨摺。板元不詳。

2. 繪本柳のみどり貳編　中本一册　嘉永三年刊

甘泉堂（和泉屋市兵衞）板。前者とは異本ならん、但し二編以下何編までのものなりやは不詳。序文、一筆庵卽興として一丁半。畫、同じく一筆庵英泉、卽ち編畫共英泉である。本文丁數全二十、墨一色摺である。

（第五）柳の栞

1. 柳の栞 初編　中本一册　年代未詳

表紙に、種員撰廣重とある。（この廣重、無論初代也。）廣重の美人半身、背は菊の大紋。見返しに、狂句柳の栞とある。板元松林堂。序半丁、柳下亭種員（初代種彥門人）誌。本文挿繪同前、廣重の漫畫的傾向の好標本彼にしてかゝる畫ありしやと思はるゝ程。彼の「草筆畫譜」などとは又別樣の、滑稽洒落、但し野鄙さの乏しきは、彼の氣品によると褒めたきか。墨一色摺。



2. 同　二編　中本一冊　同

表紙其他の體裁同前。序また同じ。板元同上、墨摺。

3. 同　三編　中本一冊　同

4. 同　四編　中本一冊　同

5. 同　五編　中本一冊　同

凡て同上。但し此の第五編に限り、見返しに、藤慶板とある。此の廣重挿繪本、何冊なりや、恐らくは此の第五を以て終編となすべきか、如何。

（第六）新撰狂句圖會

1. 新撰狂句圖會　初編　中本一冊　嘉永二年刊

山庄版。表紙見返しに、風柳庵升丸、鷄告亭夜妾筆記とあり、西春新彫とある。初め、萬亭應賀の序半丁、これに嘉永二年己酉孟陽發市の明記がある。口繪挿繪とも全部初代廣重畫（錦繪摺表紙に、一立齋廣重畫と明記してもゐる。）、畫及び句の體裁、普通の繪本柳樽本に同じい。唯此の本の特色は編中各狂句が大半其の作者名を附記する事である。中、升丸、夜妾は編者だけあつて、比較的に多い。他で目星しいものは、扇歌、（例の都々一坊であらう）、竹雅、種彦（二代目ならん）等の名であ

る。奥附には、二編三編近刻とはあれど、三編は如何にか。（二編は刊本あり。）

×

以上、自分所藏本の全部である。概說的に纏めておくと、畫本柳樽本天保嘉永頃に流行、（その如何に流行したかには、誇張ではあらうが、畫本柳樽二編序の中、「畫本柳樽大いに賣れて一萬餘册に及ぶ書肆その二編の催促」云々とある。）板元は東都大坂種々あり。畫者は、北斎門人、英泉、廣重、國直など。判は中本、四編五編と續き、長きは十編（？）に及んだか。（「種ふくべ」は例外、十七八編に及んだ。）畫は、滑稽的草畫、浮世繪師の別風格として面白きものも多く、殊に英泉と廣重に於て。編は五岳、種員など。中には、當時の作句を其の儘集め（畫本柳樽八編の如き）、或はその作者名を一々記入せるもある。體裁、表紙は多く凝つたものであり、錦繪摺。美人、又は男女、又は滑稽人物、又は其他の圖案。本文は墨と代赭、薄墨の三版。若しくは墨摺の一版。以上の如きものである。

―大正十四年八月十二日。（同十月、「やなぎ樽研究」）。○大正十五年四月補。

驅蟲のひま

驅蟲のひま〳〵に、名の通らぬ零本ではあるが、ついでに記録しておくことも何かの足しにならうかと、以下書いつけておく。雜種、(凡て未飜刻)主に年代順。一部分である。

○

○豆右衞門後日　女男色遊　一の卷　刊行年代未詳

横中本。豆男物の一種である。後日とあれば、前編五卷(?)は此の以前にあること必定。この後日の一之卷の目次、如左。

あがり膳すはつた胞衣の紋違ひ

奥勤の上臈は大社の帳はづれ　京の姿は誰が蒔し戀の種　大事の役めを一のみにする大盃

相撲取並の御奉公○百貫○○

給金はかつからより高い鼻自慢　どこへ出ても恥はかゝぬ冬○○○し　○○ありく御伽男の○○つけ寶

役めは鵜つかひ同前の身喰ぬ殺生

秋の夜の長○夢にさへみぬ殿子のおもかげ　世界の後家大將いたづらの旗頭　氣儘に○○○ぬ床の關守

聾の女夫いさかひ○軍の○○

男を尻に敷銀弓矢八貫目　○あまつてりんきせぬお内義樣　城郭をかためる謀斗の作病。

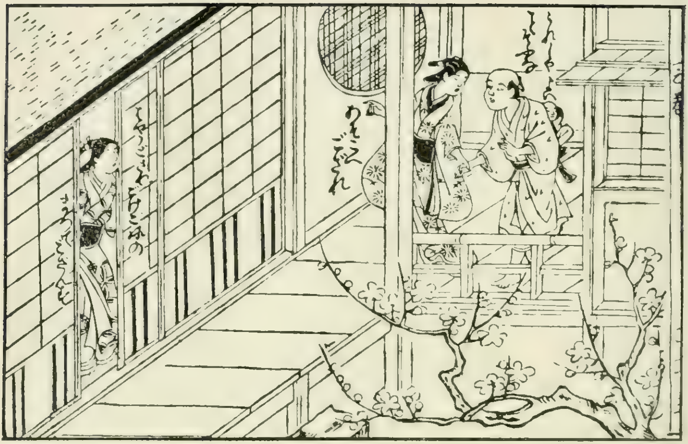
横本、半丁が十五行づつ。繪ヒラキ三圖入。表紙青。恐らくは例の自笑作、寶永板「魂膽色遊懐男」五冊の後編か。全丁數目次とも二十二丁。

○源平稚太平記一　稚平家花杈　上一冊　享保二年板

小本。外題が皆一様ではない。序の所には、源平稚（この本、稚を凡て雅とせり）太平記とあり、本文の始めには、源平繪本花かいらきとあり、柱は平家とある。表紙外題は、前記の如し。内容は、稚説（おさなとき）の平家物語といつたもの。畫が古雅である。ヒラキ九圖入。全丁數序一、本文一八計一九。内容は、きをん女御清もり出生記、忠もり天上のやみ討、清盛くまの山参詣鱸の事、清もり榮花、しゝが谷むほんのくわだて、藏人守行つな訴人、流にんの事、しゆんくはん有王にたいめん、山門御こしふり、以上である。序文の筆者は、遊童人といふ署名であるが、その序によつて、此の本「六の卷と分ち源平おさな太平記」としたことが分る。遊童人の自畫作であらう。それにしても遊童人とは誰人か。畫は、鳥居派か。本文、半丁が十行づつ、文字は例の虱本流。

○毬歌國字解　全一冊　刊行年代未詳

半紙本、刊行年代不詳。見返しには、潘吉凱先生學、毬歌國字解（てまりうたこくじかい）、天窓閣藏と三行にある。曾て外骨氏が、この著を近松門左衛門作だと傳へてゐるがとその著（「猥褻と科學」の中）に説かれてゐたが、外骨氏も不



十七



十八

信であつたやうに、自分も門左とは信じない。初めに、畢容郷といへる男の題が一丁ある。漢文である。次に、序「古文手毬謌」とあつて、同じく序一丁、半陽　潘吉凱選ス とある。この序によると、椀久の塚を毀つて、中に得たる一書といふのである。さうして「余久が斎盌顚と友とし善し、其書を悉すことを得たり、此に附記す」（原漢文）とあるが、これも餘り宛(あて)にならぬことは、その椀久の塚を掘つたのが、魯の驕王といふのである。つまり古文孝經の眞似、シヤレであらう。結局この潘吉凱（半氣違の意。）氏の戯著であらう。椀久に假作云々が眞僞何れにもせよ、とにかく椀久以後のものたることは無論。（椀久は、實事譚には年次不明。「浪華名家墓所記」には、延寶五年九月七日歿とある。）元祿享保が活躍期の門左に之を結び付けるも一理あるが、こればかりは可笑しからう。次に二丁、引證書目がある。本文は第四丁より始まる。内容は、正月の火水(ひめ)始めより、節分に至る。國字解といふと、本文はいかにも漢文のやうに聞えるが、實は和國毬歌の萬葉假名風の音譯。（但し萬葉假名風である。餘程無理である。従つて振假名がなければ、どんな學者にも訓めぬもの。）それを更に片假名混りの國文に、故事故實をしかつめらしく引證して解してゐる。本歌、注とも、暗示に富んだ、エロチシズムである。全丁數、題一丁、序以下二十丁計二十一丁。（内、本文は第四丁より二十丁迄）末に、龜鶴千萬年、春王正月、手まりつく日、一二三四五六藏版と、四行にある。表紙、黒みがゝつた青、布目あり。

○新刻圖彙　一　明和六年版

半紙本一冊、はじめに、不知足軒書とある序が一丁ある。この序に、己丑初春とある、即ち明和六年の己丑であらう。なほ此の不知足軒は、不知足散人と同人、例の小松百龜であることは無論。（江戸軟派研究、初編第二十五、二十六、二十七參照。）さて此の序には、「（前略）有レ客投二圖書一請二參考一、余不レ得レ止校合一過而以投レ之、此爲レ序」とある。客とあり、投レ之とあれど、これも自ら投じ自ら授けてゐるのではなからうか。次に古圖彙の序として、一丁半（三面）あり、その終りに、時や貞享三年彌生中の五日、洛下の野人無色軒三白居士、みづから序とある。これが全文は、原本好色訓蒙圖彙の序であらう。（但し書體は、「開上手」、「覺道俗説辯」等共通の百龜の筆と思はれる。）次に凡例一丁半（三面）がある。この凡例、初版「好色訓蒙圖彙」に闕くるもの、即ちこの明和版の來歴を記するものなれば、左にその全文を載せておかう。

凡例

一貞享の比洛陽の無色軒好色圖彙を撰む畫工は吉田半兵衞圖レ之其功勉めたりといへ共今を以て見れば繪は板天神のごとく文も亦むかしの諺話にて解しがたく二三の小兒すら其圖を見るに忍びず捧腹してこれを捨つ當世枕繪の多き諸名畫筆を盡して艶色を寫し人をして畫女に命をむしらしむ詞花言葉又盡さざるなし盛哉好色の書世に行るゝや棟に積牛に汗すしかりといへどもかの貞享訓彙の如き書を見ず近世大全といふ書出るといへども美盡して未レ盡レ善余於レ爰嘆息して先生不知足翁に乞てあらたに參考せしめ急に催して梓に壽す

一器財肉具の圖は好色の末書どもに往々載るといへども此書に欠べきにあらざれば略圖してその紀原を尋ぬ

一和歌文章は好色の先務なりしかりといへども長きをいとひて此書にのせず余が艷書軌範に悉し追て印行すべし
一遊女野郎等の賣色(うりいろ)の諸分はその名目を擧て詳にせず後編を待て委く述べし
一閨房の圖大概之を揭ぐ名目の末に淫詞をのべ圖每に淫語を加へて閨莚の具に備ふ
一書肆剞劂の功をいそいで草稿早卒に成ル故にことば簡に考證疎にして見聞いまだ廣からずおそらくは遺缺する
も猶多く誤り亦少からじ後の君子の訂正希ふのみ

東陽　悅　麿　識

以上、序の全四丁である。以下本文、はじめに、訓蒙好色圖彙卷之一、不知足軒删補・無色軒編輯、悅麻呂校訂、木公齋圖畫とある。この中、不知足は、百龜の別號。悅麻呂も恐らく同人。（現に、悅麿の凡例中の、余が艷書軌範といへるは、同じく不知足の作たる艷書式と同一の物ではなからうか。〔研究初二十五、俗説辯序を見よ。」殊に、艷道俗説辯も、悅丸梓とある、即ち悅麿、悅丸、不知足、凡て百龜の分身であらう。）木公齋の圖畫とは、木公は松、卽ち小松の自分の姓を匿せること無論である。卽ち不知足は愈々百龜たること明確となつた譯である。以下、天象、地儀、艸木、禽獸、の四篇。天象は七夕二星、夜這星。地儀は、領巾振山(ひれふるやま)、望夫石、妹脊山、旦也岡、陰陽石。艸木は、連理枝、女郎花、定家(ていか)かづら、相思木、想思艸(たばこ)。禽獸は、戀おしへ鳥、比翼鳥、鴛鴦、鹿(かせぎ)、山獺(さんだつ)、などとある。ところ〲圖案的な、正確な手法を守つた圖を挿んでゐる。中々閨房の情、淫語などに至らぬ先に終つてゐる。此本、何冊ありや無論未詳。尙、貞享の好色圖彙本と如何の異同ありやも未考。

○春　遊　興　全一冊　明和四年版

中本型一冊。見返しに、孤立道人譯、春遊興、金華堂壽梓と三行にある。はじめに京都圖南子といへる男の序二丁、それに丁亥春三月とある。卽ち明和四年の板行である。（尙、本文末自書の中にも明和四年春二月五日とある。）次に自序の如きもの一序にいふが如く、「今古の童謠を譯して以て詩と爲し」（原漢文）たものである。次に自序の如きもの一丁、（署名なし）以下本文、末に自書、及び附尾數章、最後に東都源輝と署名せる跋一丁、全丁數序跋本文脊尾とも二十四。作者は、增上寺の僧、釋大我といへる者である。短かい例をいふと、

童謠にこなたおもへはてる日もくもるさへた月夜もやみとなるといふを記す

寤寐思二君子一優然瞳日晩、踟蹰搔レ首時明月懸レ天闇

本文、罫を引き、假名の童謠は一罫に二行にて入れ、譯詩は、凡て一罫半。表紙一切唐本好みである。

○千　羽　鶴　下一冊　刊行年代未詳

外題亦不詳である。柱に「せんはのつる」とある。富川房信畫と中にある。卽ち黃表紙の先驅、靑本の一種であらう。似よりたる外題、「小說年表」等になし。此本「せんはのつる」の下卷たることは、丁數が六より十なるによりて明らけし。曾我兄弟に材を藉りたるもの也。毎葉挿繪、用紙、例の極めて粗惡也。

○風流友世車　下一冊　安永五年版

柱には「はしか」とあり。但し、此卷はじめに、「大阪下り女ちからわざ　ともよ」と幟を建て、喜瀬川改めともよとなりて、女力業(ちからわざ)を見する件(くだり)あり。これによつて、風流友世車の上下十葉ならんと思はる。〔卷尾に作者東西南北逃、鳥居淸經畫とあり。謂ふ所、朝倉氏小說年表の風流友世車二卷といへると吻合す。著者畫者また同樣。〕梗概は、喜瀬川改め友世の看板をかゝげた見世物小屋の木戸。次にその舞臺、桟敷に麻疹(はしか)道人が來てゐる、友世の美貌と力に見惚れてゐるのだ。この麻疹道人は當時流行つた「はしか」を偶人化したもの、蠻國より來たとある。次は、白木屋お駒斷罪の場で、當時惡病の甚たる麻疹道人を退治るものならば、一命助けとらさうと代官が情。次は喜瀬川のともよが、白木屋庄兵衛方へ訪れる。才三郎に馴染んだ喜瀬川は、庄兵衛異腹の子お駒の姉と分る。兩女麻疹道人退治を約す。麻疹道人の住家の場。家來二人、いかにも蠻人風。お駒、色仕掛にて、道人が世界の人壽を縮め封じたる茶壺を覆がへす。(此の趣向は、劇の團十郎〔三升屋兵庫〕作以來の「鳴神」の踏襲であることは、勿論である。)麻疹大荒れ、そこへ尾花や才三郎が救ひに來る。最後才三郎お駒の祝言、喜瀬川はお部屋となつて、目出度計禮で終る。文詞細字にして多量、頗る前記の千羽鶴と趣を異にしてゐる。殊に、前者に比べて筋を複雜にせる點、千羽鶴（靑本？）とは違うて、所謂黃表紙物の先驅をなしたことは明らか。無論一種の際物である。此の點、黃表紙の或る特色

を既に具備してゐるものと謂はれよう。

春朗（北齋の前名）畫作の黄表紙。彼二十五歳時の作、黄表紙自畫作の四部目である。彼のまだ春章門下當時の作　當時の名妓花扇に藉りた物である。（春章門から自から去つたのは、その翌々年。）梗概をいふと、

○運開扇花香　上下二册合　天明四年板

都のさる公卿の姫君、家沒落して、惡家老中村某の爲に吉原へ百兩に賣渡される。中村は行方知れずになる。この中村の朋輩に、松元幸次郎（松本幸四郎を地口つたのである。彼だつて、若い時は、役者讃美の流俗を追つたのだ。中村もその意味に違ひない。）といふがあつて、いかにもして金子才覺して、姫君を救ひ出さんと、女房もろ共色々苦心する。とど幸次郎は、吉原へ太こ持に、女房お作は後家の體になり浮れ男の袖を引いて金銀工面なさんとはかる。先是、このお作の菩提寺の僧に、大ゆう（大友、これも役者の姓を借りてゐる。）といふがあつて、この僧或日、蜻蛉の睦み飛ぶを見て邪念を起してゐたが、折ふしその寺へ參詣に來たお作を見て、ぼつとりとしたる〇〇つき云々で色々と戯れる。お作はこの大友をまんまと欺す。俄有情の悲しさ、すつかり欺された大友は、有頂天、そこで寺の什器を持ち出して、古物買の中村此兵衞（此者、姫君を賣つた惡人也）へ賣渡す。此兵衞は盗み物とは承知の上で買ひとる。大友は、これで作つた六十兩餘りをお作に屆ける。お作、晩の首尾を假約束して返す。間もなく、大友が惡事、寺に分り、盗物を買つた此兵衞もろとも村人どもに捕へられた所を、住僧の情で命助かり、追放となる。爰に幸次郎が兄、上方で酒問屋の番頭を勤めてゐたが、弟幸次郎が金子入用と聞き、五十兩だけ賄つて江戸へ來り、新川へ立ちより樣子を聞けば、鴻の巣に住居すると聞き、黄昏を熊谷へとさしかゝると、俄か强盗になつた此兵衞、大友の兩人に殺害

される。アト、此兵衞、大友はこの金の分配で爭鬪、とど大友此兵衞を殺す。(以上上の卷)。よし原あふひや花おぎ(花荻)といへるが例の姫君で、みな口勇次郎といへる色男と深く馴染んだとある。勇次に見られながら、花荻その部屋で手習をしてゐる。「わつちがとうこふさんのまねをしんすからみなんしよ」とあると、「ありがてゑありがてゑ」と勇次郎の詞である。とうこふさんとは、澤田東江であらう。次は、大友が還俗して、名を千右衞門と改め煙管商賣の町人となり、いろ／＼儲けることあり、さらば燈籠見物に行かんとて仲の町に來り、花荻の道中を見て、ふら／＼となる。千右衞門は、大盡風に粧ほひ、名もかうのすや千右衞門と紛はしく名乘り、取卷四五人連れてあふいやへ登樓、花荻をあげる。松元幸次郎も蓬萊屋錦藏と名乘り、太こ持をつとめる。千右衞門は、花荻が唐様を書くに俺も負けはしねへと、扇子に文字を書く。それを錦藏に頂かす。次、勇次郎と花荻、花荻が今宵來た千右衞門といふ客に身請けされるので、大愁嘆。その場へ錦藏立出でゝ、夫婦が貯めたる百兩と、千右衞門より盜みとつたる二百兩と合せて三百兩を差出し、これで身請なされませといふ。兩人、恩は一生着ますぞえと來る。こゝで、花荻と幸次郎と主從の名乘りが替される。花荻は、「すりや幼ない時から介抱してくれた幸次郎であつたかいのう」といふのである。次は、吉原土手で、錦藏と千右衞門の出合。錦藏は、兄の敵といふのである。熊谷で、兄の死骸の傍らに、自害と見せかけた中村の死骸と、遺書の中村の手蹟があつたが、中村は昔の朋輩なれば、文字は見覺えあるが、似ても似つかず、然るに今宵、太鼓持の我に與へたうぬが扇子の手蹟こそ、中村の遺書と寸分たがはぬ。さてこそ兄をうぬらが二人で殺し、慾心起して相棒中村奴を殺し、中村自害と見せかけたはうぬの業。すなはち、兄の仇、人殺の罪人はうぬだといふのである。千右衞門は盜まれた金の詮議もそこ

そこ逃げて歸る途中山下の方へ來りしに、ある茶屋に花荻の姿を見かけしより、やけになり、それを連れ出し立ち退かんとする。と、主の女房が來て邪魔立をする。つくゞゝ見れば以前自分を欺したお作故、躍氣となつて、刀を拔き、ずたゝゝに斬る。所へ亭主の錦藏立返り、千右衛門を斬つて恨を晴す。アト、勇次郎花荻の祝言、勤許ありて勇次郎、家名をつぎ、又花おぎは、女ながらも能書の譽れあれば、尙ほ叡慮に叶つたといふのである。

北齋自畫作の初期の作風を傳へる爲に、比較的悉しく紹介した。畫は、春朗の落欵がなければ、無論春章かと思はるゝもの、畫に於て春章を摸したことの著しいのが、先づ肯ける。

○兒童文珠稚教訓　三冊合　寛政十三(享和元)年板

時太郎可候作畫の署名になる、同じく北齋黄表紙の一。序に、猿のつなぎのあるので有名である。下卷の第一に、「へたさくしや可候」として、自分を畫いてゐる。次には、「そろべくたび立」として、同じく自畫像である。これが此の作の特色といへば特色であらう。畫は既に北齋風になりきつてゐる。(梗概略す)

○無厨庖卽席料理　三冊　享和三年板

同じく時太郎可候の北齋黄表紙もの。第一丁表に、自畫像ありて、蔦重におくつた、口上の手紙が揭げられてゐる。この作、此の扉でまた有名である。作は以前の「扇花香」とは代つて、物語風より純

滑稽味に進んできてゐる。料理に現れる、飯類、野菜、酒類、味噌、一切の擬人である。飯の部、汁の部、酒の部、茶菓子の部、香の物の部。（以上上卷）。ちよとの部。ひらの部、すの物の部、とりさかなの部、吸物の部。（以上中卷）。同吸物の部、鍋焼の部、こくせうの部、やきものの部等（下卷）といふ風である。

○五人切西瓜斬賣　二冊合　享和四（文化元年）年板

京傳作長喜の畫である。此の本所藏本、後の再板かとも思はれるが、時々かゝる體裁の物を見うける所より、初版本にして、且つ黄表紙末期には、かゝる體裁かとも思はれる。とにかく三冊の合本であつて、卷首には別に五丁の自序が附してある。表紙は、黄ではなく、寧ろ赤みがゝつた茶表紙で、貼外題は、左上に、細長く青色紙で、墨刷である。讀本（よみほん）かと間違へられさうなもの。寧ろ滑稽本かとも思はれるもの。然し內容は黄表紙風である。（梗概略）。全丁數、序とも二十丁。大きさ、普通の黄表紙物より竪に於て稍長し。（この本、最近の朝倉屋の書目に出てゐて同じく中一となり、三冊合本の體であることを示してゐる。さすれば、この黄表紙凡て所謂合卷風に既になりつゝあつたのではなからうか。序でに、朝倉屋の右書目に、此の本七圓とあるが、これは可驚高價である。內容、畫樣、無論黄表紙の爛熟を示す物ではなく、體裁に於て、自分の判斷にして誤らない限りは、合卷と純黄表紙との楔子であつて、然程の値打があるとは思へない。）

○大通多名於路志　全一冊　刊行年代未詳

閑言樂山人の自序三丁不明の跋二丁とも全丁數廿三丁。小本洒落本。內容、話がゝり物で、ワキ、長ばをり鶸茶のひも銀きせる持。シテ、惣髮なでつけ唐しやうぞく扇子持。さういつた二人の問答で通の不通の粹の不粹の、當事の通人、唐人の寢言のありつたけを盡して、とゞ「喉がかわいてきたお茶でも給べヤせふ」に終る。諷刺に富んだ、物語を離れて寧ろ議論、從つて情緒纏綿の描寫は缺けてゐる、風變りなものである。粹學綱要といつたものである。

○野　夫　鑑　　全一冊　　天明七年刊

外題の感じから外れること夥しい作。野夫は、野暮ではない、庸醫のヤブである。四方山人（蜀山人）の序、（これに天明丁未のとし五月雨の比とあり。）二丁。駿陽竹室梧泉の序一丁。自序、駿陽東湖山人書の一丁。この四丁とも全丁數二十。本文の初めは、不仁野夫鑑とあり。梧泉の序中に、「艸根木皮をあげつろひておのづから金玉の聲す也」とある、さうした內容。中、歌麿畫（この落款極硬し。彼の初期の表徵。）の圓頂の野夫姿を描く。作者、東湖山人は不詳。

○松の操第二輯　貞烈竹の節談　　卷之上一册　　文政十二年刊

松の操物語（一筆庵可候〔英泉〕の自畫作。）の前後六册の後編である。著者、南仙笑楚滿人（二代。初代春水）驛亭駒人（春水の變名らし。）の合作と稱す。挿繪、卷頭ヒラキ三、本文中同二。丁數、琴通舍英賀（春水を吾友といへり。）の

序及口繪罨摺とも口五、本文廿二。それはいゝが、この本、製本一切半紙本たる事である。でなければ此んな零本を云々する價値は無論ないのである。半紙本の人情本、現に此の本、表紙、その外題等凡てそれにつろくして大きく、用紙一切半紙である。唯、文と繪の輪廓は、普通人情本の物に殆ど近い。どうした本であらうか。人情本は、半紙は絶對にないことは無論であるが、現に此の證據がある。唯揃本でないから何ともいへないが、刷の上乘からいふと再板では無論ない。見本の仕立か、何であらう。それにしても外題紙は立派に半紙本表紙の大きさである。これがまた可笑しい。つまらぬ事かは知らぬが、年來の疑問の一。(これと殆ど同じ體裁のものを最近また寓目した。楚滿人(春水)英泉畫の「鯨舍氣質鶴の衣」の零本一冊である。全くこれと同樣、天のひろい半紙本型上摺のものであつた。)或は、かうした特殊製本が、異常でなく一時行はれもしたか。

○春雨日記　初・貳・參九册　天保五、六、七年刊

著者、初代春水(狂訓亭主人と署す)一筆庵英泉畫。「年表」には、十二册とあれど、家藏本はこの三編九册。特筆すべきは、これが尾張東壁堂の版たることである。東壁堂は、所謂永東。(名古屋本町、永樂屋東四郎。)北齋漫畫、神事行燈、浮世畫譜等の板元を以て知らる。そこよりこの初代春水の人情本も出たのである。此の本、「年表」に出板年代未詳の部に挿入せり。今、次編を見ると、序の終りに、于時天保六未

春、金龍山人狂訓亭、爲永春水誌とあれば、天保六の板行たることは論ない。三編には、同じく序に「于時天保七申の孟陽云々」とある。初編は不明なれど、遡つて天保五であらう。年代明瞭故に一寸。

○興歌六々集　全一冊　天保十一年刊

狂歌本、廣重畫である。此の六々集は、一名新選興歌三十六歌仙とも云ふ。見返しに、芍藥亭宗匠、千柳亭大人、鳳鳴閣大人並撰。新選興歌三十六歌仙。天保庚子春發兌、催主東嶺庵藥水云々の文字が見られる。次、狂歌六々集序（七十三齡、芍藥亭）一丁。六々集引（鳳鳴閣主人）一丁。次、畫像（彩色）、北溪畫にて初丁表は公任卿、以下所謂此集の三十六歌仙。（以上、公任卿の半丁全面とも六丁半）六丁の裏より畫、（彩色）此畫廣重の執筆。ヒラキ二面の圖にて十圖。以上この畫、畫像の最終丁の裏を除き、十丁。但し畫十丁の裏より本文。本文は、花、郭公、月、逢戀、天象、以上畫の最終丁を除き十九丁。總計序以下三十八丁、半紙本也。廣重の畫、彼の爛熟期に中しをれば、始めて見る玄妙醇化の筆域、彼が花を愛し雪を愛した證左は、計十圖の中、花三圖、雪三圖あるによりて知られる。雪の二圖、最も妙、普通板畫とはまた特殊な無韻の詩情である。

○松亭漫筆　上下二卷　嘉永三年版

著者、松亭金水。大本二冊、无名翁（英泉）の插繪、上下六圖のヒラキあり。上卷、序、口繪、目錄

計三丁、本文二十九。下卷二十六丁。板元、大阪河内屋茂兵衛（群玉堂）。上之卷目次、芭蕉翁三日月の句、本地垂跡兩部習合、觀物（みせ）、鼠火災を避（さくる）、觀音姦婦を輔（たすく）る、酒と茶、附り得失。下之卷、圍棋、昔噺の說、放生會、警枕、人中長きは壽也（いのちながし）、酒呑童子、鎌倉權五郎景政、蜀山人記憶、文字を可レ敬。

以上、餘り面白くもない。誰、人情本の中堅作者金水（この本、金水道人中村定保輯とある。）にも、此種隨筆の著があつて、京傳、馬琴、種彥、京山の徒を擬した、流石に春水（初代）には無之かつた、うい奴と褒めて貰ひたさのうぶな心情以めくものとして、予は買ひたいのである。

―大正十四年七月「江戸軟派研究」。

【補】訓蒙好色圖彙について

前稿「驅蠶のひま」の中にとり入れた小松百龜畫作「新刻圖彙」に就て、なほ詳細を知り得たからお傳へする。先づ此本、家藏本が貼外題遺失のため、序冒頭の名を用ゐて「新刻圖彙」としたが、今善本を某氏より借覽するを得て、貼外題は「訓蒙好色圖彙」であり、その春夏秋冬の全四冊本であることが分つた。自分の說明した、家藏本は、春の卷卽ち第一卷であつたのである。中味は一切自分の紹介通りである。夏以後の三卷の中、借覽の某氏本は秋の卷缺、仍て夏と冬の二卷の內容一斑をお傳へしておく。

夏の卷。(本文冒頭は、卷の二とある)無色軒纂輯悅應訂正とある事、春の卷と略同様。内容は、分つて人倫、支體、器財の三項。人倫は、男女髮の圖、毎丁の上欄に亘りて數個あり。本文は男、若衆、野郎、女、孃、嫁、妾といつた說明である、支體も半丁、眉、眼、鼻などの圖を入れ、說明、けだかく猥である。器財は、全二面、硯玉章、匂袋伏籠、まくら等の圖があつて、說明はワイ具にも及んでゐる。此の圖の一に、不知足自畫と落款がある。卽ち百龜の自畫たる事を明瞭に傳へてゐる。冬は、卷之四、木公齋畫と最初にあり、品目五種を示した初めの半丁があり、次に畫ヒラキ九面(墨摺)を載せ、附するに、品目通りの小話五をものしてゐる。その一は、幼娘に智惠付て初花見する云々といつた題である。初めの九圖は、成程雪鼎よりは稍軟かく、祐信風であるが、寧ろ豐信にも通ひ、またその中に何處かに春信風の艶美な韻を漂はしてゐる。彼は祐信に出途し、春信に親炙したかと、此よりも謂はるゝ好標本である。秋(卷之三)が如何の體裁であるか、知りたいものである。

―大正十五年五月

おぼえがき數則

■赤本智恵鑑　半五册　明和七年　臍齋主人飯袋子

巻一、涎（よだれ）先生傳、鼠の藝づくし。巻二、犬と猿の相撲、鵜の眞似する烏。巻三、佐々良三八、十王の勸進。巻四、烏勘左衛門、獣の伉俠。巻五、大酒金平（きんぴら）。題の書體など、頗る洒落本の傾城智恵鑑と同樣である。とにかく内容は、硬軟の境をゆく。初期洒落本の中に教訓物を往々見受けるが、これもさうかといひたい物。巻五の大酒金平は、誠は酔喋先生。きんぴらは挿話として出る。巻四の烏勘左衛門の中に、有益な物を發見した。それは例の墮胎醫の中條をなかでうと讀む一例である。これはナカデウだと井上和雄氏から嘗て敎へられたが、出處は不明のまゝであつた。それが此にある。曰く「墮胎（こおろし）の中條早流（さうりう）が後家」が、親不孝な息子を連れて、道場へ來る件（くだん）である。この早流は、無論、その意を借りて、人名としたのであらうが、中條の振假名は、明かに、なかでうである。

■怪談雨夜鐘　半、五册　浪華東夘子著　東武十遍舎校

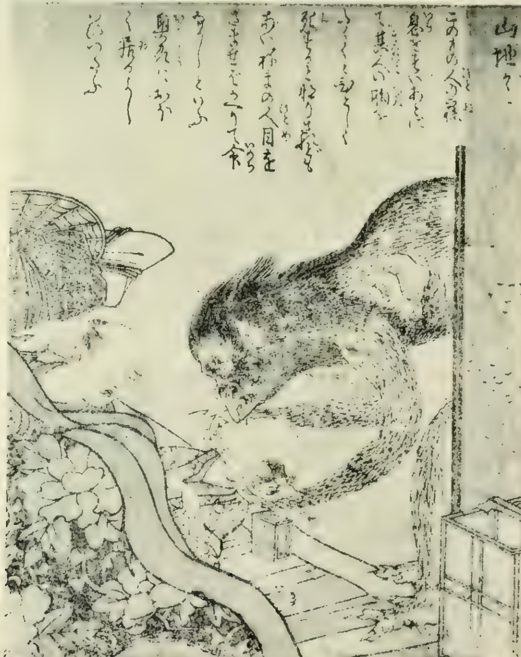
年代不詳。序。（初代）一九。古今の奇談怪談であるが、挿繪が面白い。畫家も不詳であるが、歯墨べつたり、あかゑいの魚、船幽靈、豆狸、山地々。かさね、お菊むし、野ぎつね、鬼くま、凡て小いやらしい物ばかり。（彩色摺）此の本の東男子は一體誰か。最近、例の吾妻男一丁が、梅亭金鵞の以前に、古く初代又は二代と二人はあつたらしい發見があるが、此の東男子は、或はこれと何等の交渉がありはしないか。（尙、これは、「吾妻男一丁の數代に就て」に讓る。）尙、此本、柱は、奇談二葉草とある。

■通略三極志　中　三卷　安永九年　四國子作　清長畫

黄表紙の一である。十五丁物。三國志の今様。玄とくと相方の的ろ、閨中愁嘆の圖など面白いが、然し清長とはどうも受けとれない、うつかり見てゐると勝川派の風。

■源平惣勘定　中、二卷　天明三年　四方山人（蜀山人）作　哥麿畫

清盛と佛。宗盛。資盛。ひよ鳥越。與市の扇の的、知盛の亡靈、平家蟹、賴朝。凡て此等を今様人物を以てしたのである。□□□□けいせい檜扇、二位尼やりてとなり、義經遊興といつた圖など、その女性の描分け（かきわ）など、歌麿としては初期のせゐもあるが、これも前の清長と殆ど同一感じ。前が清長



九十



十二

なればこれもさうかと思はれさうな物。然し何處となく、前の淸長が、役者の似顏風で堅いに拘らずこれは軟かく甘味が流れてゐる。(此の前後同じく黃表紙である。)

■怪談摸摸夢字彙　中三卷　享和三年　京傳作、重政畫

豐房(石燕)の「百鬼夜行」にヒントを得たやうな作。見越入湯から節鬼まで、二十五種お化けの附會。最初にヒラキ一圖に、京傳書齋の圖がある。醒世の額を懸け、右に本屋の小僧催促の體。左、京傳机に向ひ、夢見の體。その夢が次へと續く。例の京傳鼻に描いてゐる。最後に、出來た原稿を渡す同じく京傳と、小僧。

■十六利勘略緣起　中三卷合　文化十二年　京傳作　豐國(初代)畫

これも黃表紙。然し末期だから、中本に近い感じである。十六羅漢の擬物で、一、欲連損者から十六、迷損者まで、凡て尊者が損者となつてゐるのも面白い。通損者などは、遊所通ひの駕籠內の體、虎が奴になつて、「さんまいのかごにはさすがのおれもかなはぬ」と息せき、随いて走る圖などがある。凡て羅漢も女を相手にした今様に墮落させられてゐる。

■伊呂波短歌　中二卷　寛政酉(十三年)初春　一九畫作

此も黄表紙。上の初めに、はんもと様へとして、十偏舎の手紙がある。黒本にも此の種いろは短歌があるが、これは夫等の踏襲である。現に、「古めかしき趣向新敷存付書ちらし」云々と初めの手紙にもある。上に、いろはを並べて、それに一々詞を引かけてゐ、それが下の挿繪に關聯があるやうで無い。上の文句は、頗る惡女房の誹り詞や、其女房のふてた云草。下の繪は續きで、夫婦喧嘩から離縁、また元に納るで芽出度し〳〵になつてゐる。

■滑稽妙伍天連都　中一冊　文化八年　一九作
美丸畫

「書目」のみにあつて他には漏れてゐる物である。一種の小咄本、座頭法會から、長脚脚押に至る、十七件、本文は全く小咄の戯著であるが、口繪が面白い。中に、母と父と息子の裸體があつて、女房亭主のあとをつける體、息子下女の所へはひかけたるに、あとより人おとするゆへわきへそれたる圖、親父下女の寢所へはひかけてゆく體と三の説明がある。これは、本文の三夜道といふのに相當する。猥なものである。終の長脚長臂の遊戯も、異國趣味と滑稽との融和である。

○

○蛇の入りたる療治法

正德二壬辰之春、無名氏の跋ある　女中道しるべ（枕本繪入）の第五に、

「小蛇、、に入たるには、へびの尾の外にいでたるところをなはにてゆはへ、尾に灸をすゆるに、たちまち出るとなり〇叉蛇の尾をゆはへ、小刀にて尾さきを少しやぶりて、こせう七りういるればたちまちいづ。出たるのち雄黄朱砂をこにして人參一味をせんじ、共煎湯にてのましむべし云々」とある。

〇好色吉凶擲錢傳

春信か湖龍かまだ判斷のつかぬ會本「好女談合柱」の下に、好色吉凶擲錢傳といふのが附錄されてゐる。五錢を以てする錢占である。一番より三十二番まである。內十二番の、裹、表、裹、表、裹の卦が面白いから拔いておく。

筒拂卦　來　此卦は女ぐるひをやめて男色にかゝるべし。わが女房又は遊女と極りたる女より外にうまきことあり。かならず是に取のるべからず。後大きなるわざわひを引出すべし。尤もおそるべし。

〇甚句の起原

「源氏節の終に、名古屋甚九といへる俗謠を唄ふを例とす。甚九は江戶の人島田甚九郎と云ふもの之を謠ひ始め、一般力士の謠と爲る。其後三絃に合せて花柳界に流行す。名古屋に於て甚鍵と云ふもの

此唄に妙なりき。名古屋甚九は起原詳ならず。一説に明治八九年頃、（岡本）美狹松の門人美代治と云ふもの、藝妓となり之を唄ふ、甚巧なり。其後また舊業に復す。聽衆彼が技を知り、源氏節を語りたる後に所望して唄はしめきと云ふ。」（日本粹曲根元調等）（名古屋市史風俗篇、二一二頁所載）

〇狗張子の再板

此の頃、狗張子（淺井了意作。元祿五年正月、京、林九兵衛、同、伏見屋藤右衛門合梓、七冊）の再板を見たから、初版（徳川文藝類聚第四、怪談）との相違を記しておく。表紙の裏の見返しに、眞中に大きく、僊術狗張子とあつて、その右に、はしがき様のものが細かくあり、外題の左に、皇都尾陽書肆、文昌堂玉照堂合版とある。その右の細かき四行ばかりのものが、丁度初版の義瑞の序に匹敵さるべきものである。（卽ち再版本には、此の義瑞の序なし。）此の、見返しのキツカケの細字を左に書留めておく。これと、初版の義瑞序と對照されたい。

「此書は照儀坊了意の作なり。沙門は極て博識强記にして、特には文案の豪傑たり。生平の著述ははだ多し。晩年に逮んで筆力ますます壯健なり。其頃編る御伽婢子の脫漏を拾ひ、全部七卷となしぬ。文體は今時の草双紙断し本の類にあらで、本朝の奇談を評して東方朔が神異經とも賞じ、僊術狗張子と題する事をこゝに述るもの也」

最初の丁は、了意自身の序で、これは、初版本と異りなし。總目錄の個々、見出しの付け方が多少異つてゐる。各卷に收められたものゝ數、それによつた本文の一切は異同ないが、見出しだけがちがふのである。卽ち初版の第一卷の三、常陸坊海尊之事といふのが、鳥岡彌次郎富士垢離付常陸坊海尊が事といつた例である。卷尾は無論初版とはすつかり異つて、寛政七載乙卯十一月求板、京都書肆西六條花屋町永田調兵衛、尾州書房名護屋本町木村利兵衛と三行にある。

○雙六の外題袋

此頃、雙六の外題袋を五枚手に入れた。何かの參考にもと、各名と畫者を記しておく。娘庭訓出世雙六（應需表題、豐國畫。無論三代也。但し、行燈の繪の竹の落款に英泉畫とある。その右に、娘一人立。）泉市板○千社詣出世双六（千社札の會場らしい二階の樓。車といふ赤提灯が軒に幾つも釣られてゐる。會員どもの群集。玄魚筆とある。）同板○新はん娘みさを双六（芳晴畫。奥女中らしき娘と中年增の二人を描く）板元不詳○ちんわんぶし稚雙六（芳幾畫。政岡御殿、飯焚の圖。鶴千代も千松も居る。千松が雀踊で、兩袖を張つてゐる。）辻岡屋文助板○笑門福々壽古六（岳亭梁左撰、芳幾畫。娘と福壽草の鉢を捧げた植木屋の男。）木屋宗治郎板。

○ゆかりといふ飲料

ゆかりは黄ろいあられのやうな、湯に入れて飲むと香りがあつて氣の利いた飲物であることは先刻御承知であらう。荆妻は越後出であるが、新潟の名産ださうな。所が仙臺にもあると後に他から聞いた。そのゆかりは名古屋のいとうあたりの賣店ではこゝのへと標記してゐる。そのゆかりが瀧亭鯉丈の大山道中膝栗毛初編の上にある。中橋の茶屋で、……また湯をくんで來る。福七「ハアゆかりか妙だ〳〵。是でやつと目が覺めた。德さん見ねえ、近年は、茶ばかり飲ませちやア置かねえ。三度が三度品を替へて呑せる云々。」とある。此本種彥の序に文化十四とあるから、其頃既に此の飲料が江戸にあつたのである。何處の名物かは分らない。

○孝行糖の流行

外骨氏の新著「奇態流行史」に載せられなかつたものだが、一筆庵主人（英泉）作の「稽古三味線」下の中に、孝行衞といふ菓子賣が流行したとある。即ち「……此節世間で專ら流行いたす孝行糖といふ菓子賣は、孟宗ばかりと見えて、竹の子の付いた袢天など着て步き居るが、二十四孝の中で一人見立てられたは仕合なことぢや」云々。

○天の岩戸の記事

例の淫猥な見せ物、天の岩戸の事が、同「稽古三味線」の上に、出てゐる。得手吉、福助、出太郎の三人の會話で、……得手「見たか天の磐戸がいゝ（と手を敲きながら）そりや出る〳〵それ出ちやたまらぬ。福「御戸帳開いてやれ出たそれ出た、へゑる時はうかれてへゑるが、出る時人の顏が見られるやうだぜ。出太「如才なく見たな。へヱ好きなやつだ……とある。

○鶺鴒臺

嘗て「江戸名物詩」の補遺（江戸軟派雜考に出づ）の折にも、二三から引いて云々したが、「艶說秘事枕」上の中本型赤本（末期もの）を見ると、「閑月庵山曉が戯に工夫を以て製する所也。はらむこと頗る妙也」とあつた。

○魯文の二代廣重推奬

二代廣重は、相當な技倆を有し乍ら薄倖な一生を送つた男である。然し師名襲名當時間もなくは、まだ彼の得意時代であつた。文久三年亥春、魯文の序ある彼の畫本「諸職畫通」初編（松林堂梓）を見ると、彼と寺門友であつた（魯文の自稱）魯文の序は、彼を褒むる事最も努めたものがある。が此が強ち過褒ではなく、或はこれが當時の彼としては當然な事であつたかも知れない。自分は此の魯文の序に興味を感ずる。一は二代廣重と魯文との交情蜜なるものあつた一證、一は當時二代廣重の地位

評價を知る一證ともならう。其要文、如左。

(前略)茲に立齋廣重先生。亡父の意を繼木の梅。未靑軸の莊年ながら。其業前の翁に耻ず家の風をも吹傳え。芳き名を四方にかをらし。出藍の譽いと高かり。(中略)嗚呼此父にして此子あり。(云々)

其證人は寺朋友の

文久三亥春　　假名垣魯文書之

○再び甚句について

甚句は、人名よりともいひ、(前掲、名古屋市史よりの孫引參照。)其人名にも異說あり、越後の大盡で大阪女郎を買つた甚九(人名)だともいひ、或は神供の歌の訛、又は地句(地ン句となる)の意だとも、諸說紛々たるものがあるが、地方的甚句の起原は先づ措き、江戸に於けるじんく(當初は、如何なる文字を當てたか不明)は尠くとも享和二年には、相當な流行を花街其他に持つてゐたらしい。その確證の一を發見したから述べる。即ち一九(初代)作の洒落本「素見數子」である。これは享和二年版であるが、中に「じんくにしよう」といふ所がある。降つて同じく一九の文化戊辰(同五年)版の「質流人行末」(享和元年版「質流思外幸」の改版)にも、やはり道樂亭主の主人公が、酒に醉つて、「じんく」を唄ふと書かれてゐる。即ち此の甚句が、享和二年頃或は以前數年(不詳)すでに江戸

の市井に流行してゐたことは、疑ない。すれば、江戸に於ける流行唄としては、都々一よりも（都々一は、文化以後）古しと思はれる。以上、不十分ながら、「素見數子」等の發見をその儘。

―大正十五、二。大正十四、一。大正十五、五。「江戸軟派研究」。

○三度び甚句について

目下拙編洒落本集成第一卷の校正中、それに收載した寛政末年版（推定）の「意妓口」を檢しながら、ふと氣づいた事である。これにも「じんく」がある。但しこれは、淨るりじんくとある。「意妓口」は、振鷺亭の作、深川本。名作の一であるが、其の第二回の中に、如左ある。

「……跡はしんみりとなり、下の見通しは、四ツ明の客と見えて、太夫の聲にて、ジヤウルリジンク「舟は帆でもつ帆は舟でもつ、土橋なか町は色でもつチヤチヤチヤン〳〵。［作者曰］此本右うたふ頃の流行也（下略）。」

是である。當時、深川に流行つたもので、現に仲町讀込である。一種の鄙びた、地方色を帶ぶるに於て特色かと思ふ。然しこれと所謂甚句とは、一か二か。無論同一と判じられるが、如何であらう。唯氣になるのは、淨るりじんくの冠詞であるが、これ唄の意ではなからうか。然し同一とすれば、此の寛政後期、現に深川遊里に現れ、深川情調を唄ひはやしたものと推論がつく。右思ひよるまゝ。

―七月二日、校正時。

江戸軟派に就て

江戸軟派と今私は題した。今更ら軟派などと銘うつては、諸君を凡て自分の僅かな享樂・趣味に引ずりこまうとするさうした卑しい心が動いてゐるやうではあるが、然し汎く考へると、この江戸軟派ほど現代文藝を除いては、過去の我々祖先が生んだものの中、最人間的な、民衆的な、人間性の精髓に滲（にじ）んだものはないと信ずる。この意味から、平凡にいへば溫故知新の意もあるが、過去の我々の祖先である「人間」を探求する唯一方法として、以下此の概說に及ばうとするのである。

江戸軟派というても極めて汎い名稱である。軟派といふのは硬派に對する言葉であるが、それが今の新聞社內編輯では普通に用ゐられてゐる。社會部などがそれである。私の、此の軟派に江戸を冠らしめたのは、江戸時代文藝又は美術風俗其他諸相の軟的傾向、それに大まかな名稱を以てしようとしたので、從來古本屋で軟派本といつたり、又は少數硏究者の間で軟派とは平氣で用ゐられてゐたが、それを江戸軟派と獨立的に考へ、一個の學術語として提示してゐるのは、自分の新造語であり、恐らく自分がその陳勝であらうと思ふ。

江戸軟派の分析（その諸相）

江戸軟派を我流に分析して見よう。一、江戸時代小説。二、江戸時代戯曲（淨瑠璃と脚本）。三、江戸時代俗曲。四、狂歌と川柳。五、浮世繪。六、江戸時代諸風俗。

以上の如きものであらう。一の江戸時代小説がまたこの小説の中で、幾通りかに分けられることは謂ふ迄もない。江戸小説は誰しも知る通り、大凡そ、假名草子——浮世草子——洒落本——黄表紙——滑稽本——人情本——草雙紙、別に讀本（よみほん）などに分れるが、然し洒落本以下は或は同時に幾つも生れてゐるから、強ち假名草子が浮世草子となつたやうな、きつかり分つた傳統的にはいかない。唯、洒落本が滑稽本ともなり、（黄表紙も滑稽本に影響はある。また初期の滑稽本は、洒落本を孕んだものありともいへる。）また人情本に對しては直接の父の關係となつてゐるのである。又、黄表紙は直接草雙紙の父と云うてもよい交渉にある。かうした小説の傳統的な事は、いづれも其項で委しく說くから、今は、概說だけにする。二の戯曲でも、淨瑠璃と脚本との間に、親しい密邇な關係を持つてゐる。俗曲には色々ある。近世の大津繪ぶしとか都々逸といつたものも入れば、又操物の淨瑠璃（分析第二の淨瑠璃の事）でないもの、即ち歌淨瑠璃（歌ふこと本位で、操人形が旨意でなかつたもの）の類、例へば、古くは江戸の河東とか、京阪種の一中、一中から出た豐後節とか、豐後から出た常盤津や富本、

富士松、富士松から出た新内節、富本から出た清元とかいつた此等も全部含んでの事である。

第四の狂歌や川柳も亦然りで、就中川柳の諷刺味と猥的（エロチック）味とあることは、人の知る如しである。

第五の浮世繪には、これも各流派ある。菱川師宣の菱川派、鳥居清信の鳥居派、西川祐信の西川派などから以下各大家の一門門派が簇々として現はれ、最後の歌川各派に終つてゐる。かうした諸傳統の跡を探り、それに概略の解説を施して行きたいと思ふ。

是等が自分の今考へてゐる、江戸軟派の自ら下す解説である。（「江戸軟派入門」の總論）

―大正十五年一月「文章往來」。

お伽草子の分類と代表作

お伽草子は、江戸期以前の物に屬するが、江戸期小説の母胎として、我等の遺るべからざるものである。江戸期小説の第一聲は假名草子であるが、誠に假名草子は、此のお伽草子から孕まれたのである。お伽草子は、主に室町（足利氏將軍）期の産物である。平安、鎌倉期の、物語や戀愛小話の風を受けて、更に當時の人情世相と一段接觸し、且つ著しい特色は、前期に比べて更なる短篇となつて、容易に或る物語、假想的事實の結末を知り得らるゝことで、殊に主人公らしいものが（平安の源氏物語の光源氏、鎌倉の石淸水物語、松浦宮物語、苔の衣などの男女よりも）、一層鮮やかに人格づけられて描かれ、それを中心にした破綻、悲喜、戀愛事件、一生の浮沈、僥倖などが、端的に描かるゝやうになつた。が一方に於ては從來口碑や傳説で、民間に傳へられてゐた史上有名の樣々な英雄、武將、神仙、戀愛に又は一身の榮華に成功したやうな人物を捉へ來つて、童話めいたものながら、とにかく其の筋を運ぶ興味中心なものも生れた。

又、神社佛閣の各々自讃的記事ともいふべきそれ〴〵の神佛の緣起を說いて、佛教が持つ全盛力を

占めた時代であるから、凡てこれを印度の佛・菩薩に結びつけ、所謂本地物と稱して、其の本地（その反對は垂迹である）の有り難さを說いたものや又は、當時の人間に材料を借りながらも其の人物の出世榮達を誇張的に描いて、それが或る社寺の神佛何らかのお蔭であつた。本人又は本人の兩親たちが神佛に對する信仰の念深かつたが爲に、かうした僥倖的幸運、神佛の機微なる働きを解しない者には）を博したのであるというて、暗に、或は露骨に、何社・何寺の神佛の效能書を十二分に振り廻したといつた物や、さうした宗敎物が現れた。

尙、此のお伽草子の面白い特色は、擬人物的物語を樣々生んだ事である。蟲鳥魚貝の類の、樣々な世界を人間のやうに說いたもので、これは古い童話的傳說の桃太郞やかちかち山の擬人物のやうな鳥獸思想からも源を發してゐるが、とにかくそれが今度は、全部が、人間以外の事で始終してゐる、又それが相當に波瀾を生んでゐるのである。が、一方に戰爭物の流行した鎌倉文學の流れを受けて、此の蟲鳥魚貝の世界も、多くは戰爭に事件を中心づけてゐる。それがその世界同士の戰爭、事件もあれば、他の世界との爭鬪紛爭もある。但し人間は關係がないのである。

尙、前にも謂うた當時の人情世相と接觸し、平安朝時代の物語物よりは一層寫實的になつた物の中の、戀愛の葛藤を描いた物の中では、僧侶の戀に關係するものが又多い。所謂稚兒物である。叡山の

僧の桂海が、三井寺の兒の梅若と契を結ぶ。後梅若が天狗にさらはれて、三井寺叡山の戰爭となり、梅若は天狗の石室から遁れ來り、此の樣を見て、入水する。桂海は、歎の余り諸國行脚に出かけ高野にもゐたが、後に京の東山に名を改めて行ひすましてゐたといふ話(「秋の夜長物語」)や、大原の僧の幻夢といふのが、花松といふ兒を慕つて日光へ下つた所が、その花松は親の仇を討つて自分も仇の子に討たれて身罷つたと聞いて愈々佛道に志し、後に一日、初瀨に詣でた所が、或る僧と端なく物語して其の僧が、昔の自分の戀人花松を殺した仇の子であると知つて、互ひに善知識となつて佛心を進めたといつた(「幻夢物語」)稚兒道に佛教獨得の因果思想を含ましめた物や、其他、文章詞句は後世の物とは比ぶべくもないが、僧侶階級に於ける切ない愛戀の境地を描いて、それに佛敎的ではあるが一種の人生觀を滲み出してゐるやうなのが多い。然し異性間の戀愛や家庭內の出來事を取扱つたものもないではない。が、此等は大凡そ前期鎌倉時代前々期平安時代戀愛物の傳統を襲いでゐるといふ丈である。元來此のお伽草子の中心作家は、公卿の徒か、僧徒の中にこれが多いと思はるゝが、所謂小說らしいものでも、主觀味の勝つた、實感的なものは、寧ろ僧徒の世界を描いた僧徒の筆に成つたと思はれる、此の稚兒物であると思ふ。

卽ちお伽草子を大別すると、一、社寺物。二、傳說物。三、鳥魚物。四、戀愛物(イ、稚兒物。ロ、

純戀愛物。ハ、纖兒いぢめ等。)である。さうして後世の假名草子を經て、元祿の浮世草子を生んだ、小說の主流と目すべきは勿論第四の戀愛物であり、傍流としては、傳說物であるが、これは假名草子を經て、浮世草子以外、讀本又は、音曲界の淨瑠璃などに影響を與ふることが頗る多い。(卽ち淨瑠璃の半面たる時代物には、此の傳說物が分子として相當に多い。)猶、以上、お伽草子の項を終るに臨んで、其の各種の代表作を示しておく。尙、讀者の便を圖つて、なるべく活字本あるものに之を選び、且つ其の活字本の所在を示しておかう。

●お伽草子の代表作

(一) 社寺物。

イ、或る人間を描いて、それを神佛に本體づけしもの。

物草太郎 一卷 (有朋堂文庫「御伽草紙」。)

ロ、神佛の緣起を說きたるもの。

熊野の本地 三卷。嚴島御本地 三卷。(以上、平出氏「近古小說解題」)

ハ、佛神の功德を說きたるもの。

青葉笛物語 一卷。寶滿長者 一卷。(以上、平出氏「室町小說集」。)

文正草子 二巻。（有朋堂文庫「御伽草紙」。）

ニ、遁世者の物語。

三人法師 一巻。（有朋堂文庫「御伽草紙」。）

（二）傳說物。

イ、（神仙）浦島太郎 二巻。（有朋堂文庫「御伽草紙」。）

ロ、（英雄情話。）淨瑠璃十二段草子 （同）

ハ、（大國主命以來の英雄求婚傳說に宗教思想を加味したるもの。） 御曹子島渡 二巻。（同）

ニ、（武將武勇傳）田村の草紙 二巻。（平出氏「室町小說集」。）

土蜘蛛草子 一巻。（平出氏「近古小說解題」。）（土蜘蛛草紙は、鎌倉末期のものともいふ。）

（三）魚鳥物。

精進魚類物語 二巻。（一名、魚鳥平家物語）（續帝國文庫「萬物滑稽合戰記」。）

鴉鷺合戰物語 三巻。（同。日本文學全書第十九篇。）

（四）戀愛物。

イ、稚兒物。

秋夜長物語一卷。（日本文學全書第十九篇）

鳥邊山物語一卷。（平出氏「近古小說解題」。）

幻夢物語二卷。（同上）

ロ、異性物。

忍音物語三卷。（平出氏「近古小說解題」。）

ハ、繼兒いぢめ、嫁いぢめ。

鉢かづき草子二卷。岩屋の草紙二卷。小落窪一本。（以上、有朋堂文庫「御伽草紙」。）

秋月物語（平出氏「室町小說集」。）

ニ、嫉妬。

藍染川二卷。橋姫物語一卷。（以上、平出氏「近古小說解題」。）

備考

活字本の、續帝國文庫及び日本文學全書は、博文館の舊刊。有朋堂文庫は、有朋堂刊行。平出氏の「室町小說集」は、悉しくは「室町時代小說集」で、今は絕版、精華書院の發行。「近古小說解題」は、これも絕版、大日本圖書株式會社の發行である。

「近古小說解題」の他は、全部原文が飜刻されてある。

「近古小說解題」と雖も、可なり悉しい梗概が、書かれてあるから、無論好參考である。

倘、此のお伽草紙類のより悉しい說明は、「鎌倉室町時代文學史」（故、藤岡作太郞博士。絕版）を讀むがいゝ。

これには、もつと丁寧な分類に據つてゐる。

—大正十五年二月「文芸往來」

假名草子一斑

お伽草子の室町時代を受けて、江戸期當初に生れ、而して江戸時代小說雜著類の凡ての搖籃とも謂ふべきものであつた。殊に其の直接後繼ともいふべきは、元祿期前後の浮世草子であるが、同時に他の後代雜種の軟派物及び比較的反軟派の實錄物、名所記類、教訓物などのまた祖ともいふべきを、此の假名草子に持つてゐるからである。さて此の假名草子は、主に年代は、寬文前後（四代將軍家綱治世）に出版せられた小說其他雜著の類を一括して爾稱するので、室町のお伽草子よりは一層通俗、平易な假名文體に綴られたもので、お伽草子が平安朝期の物語文などの古典の匂（文脈其他趣向に於て）の影響を蟬脫しきらなかつたに反して、これは、漸く民衆下層に接近しようとした時代の產物、其の傾向色彩が著しいのである。然し其の如何なる內容の物に於ても、未だ小說と目すべき程の複雜な結構は案出せられてゐず、凡てが簡易素樸で、且つ技巧は原始的、描寫の態度は淡白なものであつた。作者の緻密な冷徹な觀照もなく、唯語らんと欲して語るといつた迄のものであつた。一概に假名草子といふも、種目は、强いて附ければ左の如く、雜多な內容に於て物せられてゐるのである。

一、戀愛物。恨之介（近世文藝第三、小説）●薄雪物語（同）の如き、

二、笑話物。昨日は今日の物語（江戸文藝資料第四、滑稽文學全集第九）●醒睡笑（續帝國文庫「落語全集」、滑稽文學全集第九。有朋堂文庫の中。百萬塔。）●私可多話（近世文藝叢書第六。滑稽文學全集第十。）の如き。

三、教訓的談義的のもの。

1 佛教のもの。七人比丘尼「一名さんげ物語」（近世文藝叢書第三。）●因果物語。●二人比丘尼（以上の二、近世文藝叢書第三）など。

2 神儒佛三教混和のもの。可笑記（徳川文藝類聚第二。）●浮世物語（同）など。

四、怪談物（お伽草子の傾向、特に著しい。）百物語。●伽婢子（近世文藝叢書第三。）など。

五、名所記類。東海道名所記（温知叢書第一。滑稽文學全集第一。）●京童、同跡追（近世文藝叢書第一）。など。

六、軍談物。（軍陣の始末。ある戰役の見聞記。江戸初期の政治見聞錄の類。）太閤記。●北條九代記。●慶長見聞集（江戸叢書第二。袖珍名著文庫。）など。

七、細見物の初め。

吾妻物語（吉原細見本の祖といふ。徳永種久著）◉吉原鑑（かゞみ）（吉原細見本の一。）◉吉原讃嘲記。など。

「備考」各外題の括弧内は、飜刻本の所在を示したのである。

其他、傳說英雄神仙譚系統の昔乍らのものには、辨慶物語といつた物などがあり、外國文學の飜譯出版物としては「伊曾保物語」（萬治版。但し古く文祿及び慶長元和版あり。）（文祿版は羅馬字譯、九州天草の出版。）又、王朝文學などの飜案物としては、仁勢物語。犬つれ〴〵。稚源氏（以上三篇、近世文藝叢書第七。江戸時代文藝資料第四を見よ。）などがあつた。文運隆興、且つ出版術の普及につれて、漸く元祿の第一期隆盛を導いただけのものはある。さて、右の一より七迄の重なる物の中、更に謂ふと、戀愛物の「恨之介」あたりは、まだ假名草子の調子が結構にも文章にも拔けきらぬもので、笑話物の「昨日は今日の物語」などは、此期以後の、上方本及び江戸本の殆ど無數の噺本更に落語師の落語小咄の源流となつたものである。中には、原始的な素朴な所は愛するとしても、間々野卑、果は猥雜に流れたものがないではない。然し今日我等の風俗研究資料又は言語變移の文獻等としては價値高い。恐らく當代のあらゆる種類の中、性質上然る筈とも謂へるが、此の笑話類の假名草子本が、最も平民的な匂烈しく、且つ對話等に於ても、後の浮世草子更に洒落本等に教ふる所多かつたかと思はる

るのである。三の教訓物の中、可笑記は、類似作を頗る生んだ高名作で、即ち可笑記評判、多我身の上、小巵等これで、延いては次期浮世草子期の西鶴作の新可笑記まである程である。尚、浮世物語は浮世坊なる一個の主人公によつて說話せしめ、即ち漸く一個の主人公をして一篇の中心たらしめる所謂作法上の型を產んだともいふべきもの、殊に此の命題せられた浮世が、評判せられた結果、間もなく、浮世と名づくる多くの物を次代に生んだ。即ち浮世草子は勿論、浮世繪、浮世袋、浮世團子の類で、時には、惡所に耽溺する意味で浮世狂ひともいつた。四の怪談物の中、伽婢子は、更に浮世草子の期に入つて、其の後編狗張子が生れてゐる。とにかく此の怪談の傾向、また後代の讀本物に影響する所頗る多い。五の、名所記の類は、謂ふ迄もなく、後代種々な名所圖繪類や、更に多くの浮世繪師が描いた名所繪本、更には初代廣重等の風景畫等を產んだとも謂へる所のものである。尚、此類は當時都鄙の風俗流行物等の研究資料をして豐富に含蓄させてゐる事、人の知る如くである。尚、六の軍談物は、後世の實錄物、更には讀本形式の物のまた一部の元とも謂へる所のものである。

―大正十五年七月、「文藝往來」―

歌舞伎小感

◇幼ない時

幼ない時、私は、芝居が好きでもあり、恐くもあつた。あの血みどろになつて、腹を切る所など、本當に死ぬと思はれて、一たいどうした人間が、かうして役者に使はれて、さうして死んで行くのか。屹度懲役人だらうと考へたこともあつた。それは、五六歳の頃であつた。兩親が平氣で見てゐるのが、不思議であつた。

◇始めて根本を知る

始めて、歌舞伎の根本（實演の版行本、挿畫があつて、主に半紙本。版元は上方）を見たのは、私の尋常の末である。家に、大阪出來の並木正三の「和布刈神事」の全七冊があつた。それをあの原本の見慣れぬ木彫の字をたどつて讀んだ。始めて變なものを讀んだ氣がした。然し大部分は、卷中、鐘成の挿畫に興味があつた。題材は、源平壇の浦の戰後の始末に始まつてゐた。忠信の碁盤などもこれに搦んでゐた覺えだ。

◇始めて新劇を觀た事

始めて新劇を見たのは、日淸戰爭の時分であつた。丁度私の五六歳の時、日淸戰爭を材料にした戰爭物であつた。私の父と、私の母の從兄に當る義叔父と三人で見に行つた。小屋は、名古屋の末廣座。役者は、佐藤歳三の一座であつた。舞臺でやる小銃から飛び出る火の光が、恐ろしいと同時に、戰爭の恐怖を教へた最初のものであつた。後年わたしが歩兵少尉になるなどとは、夢にも知らなかつた。

◇自分獨りで見て歩いた物

母が、幼ないわたしを連れて、先代の菊五郎など見せて吳れたさうだが、薩張り覺えがない。物心覺えてから、判然頭に殘つてゐるのは、十一二になつてから、名古屋御園座でやつた、吃又の雁次郎だ。その返し大津繪の行列の中、藤娘の美しさは、未だに忘れぬ。その頃、私の小學の學友に、顏役を旦那に持つた或る妾の子がゐた。それに連れられてよく御園座へ、無代で行つた。この友と先代左團次の「丸橋」も見た。小屋の者が、鄭重にしてくれて、見よい所へ、幼ない私達を据ゑてくれた。(この親友は、私の十四の時分、餘り遊び—それも芝居の—が過ぎて母から締出しを食つた擧句、近くの材木小屋の中で縊死してしまつた。)私獨りになつてからは、大抵場末の小屋であつた。然しその頃見

て歩いたこの場末の色んな外題が、後日になつても、私の好劇氣分を非常に誘つてゐる。九歲頃に家へ來た或る小僧が、私より五六歲年上で、また芝居好であつた。これともよく見て歩いた。

◇今の歌舞伎に持つ不平

今の歌舞伎は、殆ど舊脚本の現出ではない。名優がやるにしても、大抵私に親しみの乏しい新作物である。それが價値が低いといふのではない。私は唯だ江戶の芝居、舊脚本、舊時代の雰圍氣その儘のが見たい。たとひそれが、淫靡であらうとも、時代錯誤であらうとも、價値からいうて低價であらうとも。かるが故に私は、どんな名優が來ても、見に行きたいとは思はなかつた。中途からいゝ事を發見した。場末の小屋へ行く事である。そこには、昔の脚本が、その殘骸が重寶がられてゐた。私はそこに演出者の技の高下を顧る餘裕のない程、その脚本の普通に見られぬ事に興味を湧かした。つひ此頃まで、私は大須の寶生座といふ汚ない小屋の木戶の十錢以下が、私の定席であつた。默阿彌物を眞に私が知つたのもその劇場であつた。大阪の勝諺藏物（實錄、仇討物）を盛んに見たのも其の小屋であつた。要するに、眞の意味の昔の芝居の筋書――淫靡と頹廢との――を本當に知らしてくれた恩人は、その劇場であつた。然しもう名古屋も殆ど全部が活動となつた。その小屋も革つた。

―大正十年三月、「第一步」。

『肥後の駒下駄』雜感

「肥後の駒下駄」が、歌舞伎座で興行されるといふ。結構な事である。かうした物が、東都第一等の劇場で、所演俳優諸君はまだ聞知しないが、何れ相當な俳優諸君によつて演ぜられるであらうし、とにかく是が歌舞伎座の舞臺にかゝるといふだけで、すでに驚異である。が、大衆演劇といつた立場から、誠に結構な事と思ふ。

本誌の吉田氏から、來月の興行物これ〳〵と云ひ越され、何かに就いて書けとの御手紙であつたが自分は、子供の時から、此の「肥後の駒下駄」だけには、特殊な興味を感じてゐたから、先づ是だけに就て謂はして貰はう。

偖、此の「駒下駄」、芝居としては何時が初まりであらうか。今、一二三を調べて見たが薩張り分らぬ。唯、從來、團菊の如き所謂大俳優によつては嘗て一度も演ぜられた事がないといふ事だけは分つた。訥子氏の如き短優（乍失禮）諸氏には慥かにあらう。元來が講談種（と私は思ふ）である所から、所謂名優（從來の）は莫迦にして、テンで振り返りもしなかつたのではなからうか。然し「肥後の駒下

駄」は、講談以外芝居としても相當に、我等の眼には親しい。名優の手には演ぜられなかつたが、場末の小屋ではよく見かけたものだ。私なども、當名古屋に於て、子供の時から何度も見かけた芝居だ。

向井善九郎は親しい名前である。さうして、そのキビ〱した、稍性急な、然し竹を割つたやうな氣性が、自分には面白く、共鳴もされた。中川縫之助の、思ひ遣りの深い、向井の氣づかぬ間の様々の苦衷、相婿と分つてからも、自分の妻を故意に離縁して、婚禮の席にあばれ込み、求めて向井に額を割られに行く、その意氣合に、肥後武士ともいつた、寛永前後の、義もあり、勇もあり、智もある根性が、仄見えて、作爲の迹歴然たるものであり乍ら、子供の時から大に嬉しかつたものだ。衷情を聞いてから、向井が平あやまりにあやまるのも面白かつた。月岡刑部が、自分の婿が、二人とも額に傷をつけたものであり乍ら、芽出度い〱と喜ぶ幕切れも面白かつた。作爲の迹がありながら、義侠、同情、勇武、濶達、凡て我々の好きさうなもので盛られてゐるから面白い。それに敵役の八坂典膳や門人らが、稍、とんまなものに扱はれてゐて、事毎に駒平事善九郎に小ツぴどくやられるのも痛快だ。あの人物の中では、駒平は大向うの受けのいゝのは無論だが、（腕は十分、松山の娘には惚れられるし後には家老月岡の娘に、額は割られるが、これが大身の婿となる前提にもなるから寧ろ結構だ。）中川もいゝ役廻りだ。見物は、中川の武士らしい熱い涙をよく事前に知つてゐるから、駒平程に憎んでゐ

ない。最後の祝言の場で、中川の額を割つた向井が、それと知つて、散々悔いるのを、それ見たことかと、寧ろ此時ばかりは、中川に同情したいやうな氣も起る。だから此の二人は無論上乘の役廻りだが、つまらぬのは、作爲に操られた八坂及びその門人である。

倩、こんな事を書く筈ではなかつた。「駒下駄」の芝居そのものに就いて筆を執り始めたのであるが、實は、此の「駒下駄」、何時(いつ)から芝居にやり始めたか薩張り分らぬのである。私は子供の自分から見慣れてはゐるから、何れかに其の興行權もあり、臺本もあらうと思ふが。或は名古屋にゐた有名な中西某(度々版權で、地方の興行者を泣かした男)といふのが持つてたのでもあらうか。今度の歌舞伎座の臺本は、新らしい脚色か、又は私の子供の時分見慣れたと同じ筋書かは知らぬが、とにかく普通の筋を追つた、やはり向井と中川、敵は八坂師弟、後、向井が月岡の婿、この間、八坂の隣邸の松山秀之進(後の駒平——向井の主人)と八坂との不和、それに駒平がからみ、八坂の秀之進を欺し討、忰の秀太郎の助太刀を向井がして芽出度し〳〵、かうしたものであらう。一向古い所では芝居にはなささうである。或は大阪で脚色されたものかとも思ふ。勝諺藏といつた人の手にでも成りはせぬか。默阿彌門人の手にも無いらしい、櫻痴居士には無論なかつた。とにかく調べたが分らない。唯、東京では、つい大正二年八月に、宮戸座で演(や)つてゐたのが、演藝畫報で知られた。(同九月號を見よ。)其外では、

ぞ大劇場には現はれぬ。然し場末の小屋、地方の小劇場には無論よく繰返されたらう。同時に、講談としてもよく普及されてゐたものである。(大阪の劇場は委しく知らぬ)古い芝居か、出所は果して講談か。自分の今の考へでは、講談から芝居にしたもの、又は實錄小說類からとも思うてゐるが、芝居になつたのは近世のやうに思ふ。何れ此の問題は、誰方かによつて、敎へられるには違ひなからうと思ふが。

唯、自分が、此の問題を與へられて、ふと浮んだ事は、此の駒下駄で額を割る、共の形である。これは、慥かに例の鏡山の草履打からヒントが來てはゐないか。然し駒平(向井)が、割られた下駄を錦の袋に入れて持ち步き、その口惜しさを忘れず、江戸で掏摸に掏られて、大騷動で取戾すをかし味は鏡山の唯悲劇の種に過ぎないとは甚しい違ひだ。元來この鏡山の草履打(芝居のやうな事は)、實際にはないらしい。鏡山には、從來、松平周防守家中の出來事(「實事譚」。「芝居と史實」。)にしてゐるが、最近自分は、稿本「江戸寛政實錄」(大阪の太平散木といふ男の聞書)に、井伊の分家の出來事といふ異說を發見した。これは、全文を自分の月刊「江戸軟派硏究」第二の九(本年十二月刊)に發表しておいたが、これも異說といふだけで、筋に變りはない。唯草履打の事實は、三田村氏の「芝居と史實」と、平出氏の「敵討」とには、誠のやうに書かれてある。(「敵討」でも、草履の一件より出たのが、

眞らしく思はれるとある。）稿本「江戸寛政實錄」には、全く何もない。「實事譚」では、此の草履打は史實にないと斷言し、芝居の草履打は、不破名古屋から假りたものだというてゐる。とにかく此の穿鑿は、今日的ではないが、草履打を肯定する史實側でも、單に澤野（岩藤の實名）が瀧野（尾上の實名）に蹴つけたとするばかりで、芝居のやうな、打据ゑる場面ではなからう。矢張り、不破名古屋の型（但し、これでは、名古屋の方が、不破を草履で打つのである。さうして、これは役者の花井才三郎が、赤穗義士の不破數右衞門に草履で打たれた其の遺恨を芝居に作つて、從來の不破名古屋物の中に、此の草履の仕返しを入れたので、其の草履打を不破名古屋に入れた最初は、元祿十四年中村座の「葛城呉越戰」と題したのが、それであるといふ。）に、眞似て、手酷い草履打の場面が「鏡山」に取り入れられたのかと思ふ。（當今の「不破名古屋」は、京傳の「稻妻草紙」を繼承したものである。即ち草履打は、初期の不破名古屋と、後の「稻妻草紙」風になるとの中間の不破名古屋であるといふ。）其の鏡山あたりの場面から、講談師（又は實錄作家）が案じ出したものが、あの「駒下駄」の場面ではなからうか。

　それに尙一つ下駄で打たれ、それを遺恨に思ひ、發奮して、却つて豪くなつたといふ傳説には、伊達政宗とその昔の臣眞壁平四郎後の松島瑞岩寺の和尙法身（？）とに關係した下駄の因緣話もある。

即ち政宗の梵天丸の當時、怒つて打つた眞壁が、發憤して大和尙となりて瑞岩寺を開く。政宗となつて昔の梵天丸が參詣する。そこで、和尙、政宗を引接して、昔の下駄を見せる。政宗驚いて仔細を知り恐悚すると、和尙は、イヤ今日ある却つて恩人であるといふたといふ美談と、何處か通ずる所がある。かうした傳說は他にも多からう。

偖、此の「駒下駄」は、江戶末期の讀本に種本があるかと思うて探したが知れなかつた。講談では此の向井は、脇坂初代安治の兄の家柄で、善九郎はその三代目、脇坂家の客分であつたが、脇坂の三代が堀田から入養子した爲、合はず浪人した。後、武藝を學んで、仕官せんとし、流れて熊本に來り例の駒下駄となるのである。それに搦んだ松山對八坂の事件などもどうも拵へ物のやうに思ふ。時代は、寛永年代のやうに作られてゐる。唯、鏡山の草履打や、政宗と瑞岩寺和尙との話などが聯想せられて、そこらに種があるやうに思へてならぬ。が、此の「駒下駄」は、所謂大衆物風に拵へてあつて面白いものだ。腕の出來る駒平が、腕の劣つた八坂へ、初め下郎に住み込むのも、一寸曲垣平九郎と向井藏人の話とも似かよつて、共通の德川初期の士風を傳へてゐる。後生大事と持つて步く下駄の錦の袋も面白い。舊劇に現はれる寶物の短刀などとは又違つて、意表に出てゐて面白い。

下駄打、草履打、これと共通したものに、軟かいものだが、似かようた場面が、人情本の、『梅曆』

の中の仇吉と米八の悋氣あらそひにもあつた覺えである。酷い例を今一つぎり明さうか。例の坂東三津五郎と妻の小傳（例の土器おでん）と瀨川菊之丞の三角關係に材を藉りた讀和本（半紙本三冊・極彩色口繪挿繪）の落書庵景年著・不器川又平（國貞の假名）畫の『風俗遡妓傳』の、その又後編の秋菊奇詠粹蝶記（半紙本三冊、彩色摺口繪挿繪）開林堂主人述と稱する國貞風の讀和繪入本、（戊子秋月吉辰發梓とあれば、三津と菊の生存中の、文政十一年の出版）その上之卷の卷頭に、尾上岩藤そつくりの場面がヒラキ極彩色で描かれてゐる。それが、草履ではなくして、岩藤の手にせるは、眞黑々な草履位ゐの大きさの、うつかりすると文箱かと紛ふ、ハリカタである事である。これには、如何な私も失笑させられる。同時に妙な同感味を感ずる。それが聯想されて來たのである。肥後の駒下駄、草履打、粹蝶記のハリカタ打、こんな幻想の下に、今、私は、此の雜感の筆を擱く事を恕して頂きたい。

（大正十四年十一月二十四日夜）――大正十四年十二月「歌舞伎」。

「四谷怪談」の根本

最近、大南北の復興で、「四谷怪談」もやかましくいはれるやうになつた。飜刻本も旣に數種出てゐる。自分の知つてゐるものでは、左の五種。

一、博文館 續帝國文庫　脚本傑作集　上卷所收　（いろは假名四谷怪談）
二、有朋堂 有朋堂文庫　脚本集　下　卷　（同）
三、春陽堂 世話狂言傑作集　第一卷　（東海道四谷怪談）
四、同　大南北全集　第十二卷　（同）
五、聚芳閣 歌舞伎叢書　第一　（同）

で、飜刻年次の最も舊いのは、續帝文の脚本傑作集上が、明治三十二年九月二十八日、最も新しいのは、大南北全集第十二の、大正十四年九月廿三日である。從來此の五種の飜刻本の異同を訊かれたり、どれが善本であるかを問はれたりする諸君が多かつた。昨年の「演藝畫報」誌上に、松居松翁氏が、丁度四谷怪談上演當時、自分が參考にせられた爲、此等の異同に就て言及せられてもゐるが、然

し直接此の飜刻本に就ては、明かに善否を指してはゐられないやうであつた。（勿論「大南北全集」第十二の出ない以前でもあつた。）で此に、今自分の氣付いてゐる儘を正直に述べておく。即ち前五種の中、第一種第二種は、同系のもの（寧ろ同種）即ち根本（上方出版の讀本形式刊行臺帳。）の活字本であり、第三種と第四種とは、同様、唯第三種に脱かした地獄宿（宅悦内）（お袖が、直助に挑まるゝ處。）を挿入し、完全を期してゐるとの差である。さうして此の第三、第四は、共に初演（江戸）當時の寫本臺帳に據つたといはれるものである。第五は、これは地獄宿も入つてゐるが、さうして同じく江戸上演の寫本を活字にしたものであるが、初演ではない。校訂者三島霜川氏が卷末にも謂へる如く「三代目菊五郎の初演本を底本として、やはり三代目の四度目か五度目の、二代目の關三十郎の伊右衛門、片岡市藏の直助權兵衛の時の臺本を參考として、多少取捨するところがあつた」といふものである。即ち、校訂者の作爲に據る處が多く、初演本ともつかず後演本ともつかぬものである。

根本を活字にした續帝文と有朋堂とは、底本は刊本の根本であつて結局同一であるが、然し活字に現はれた所を見ると、多少の相違（寧ろ有朋堂の削除）がある。帝文本は、根本の本文は、その儘増減なく活字にしてゐるが、有朋堂では、帝文本が禁止に遭つたせゐもあつたか、ところどころ猥雜なせりふを略いて、簡にしてゐる。然し兩本とも地獄宿は附いてゐる。（帝文本の禁も此の地獄宿の猥せり

ふが幾分集つてはゐないか。この邊、初演臺帳系統の、大南北全集等では、入れてはゐるが、余程斟酌されてゐるらしい。）つまり、有朋堂本は、帝文本の中から猥せりふを省略したといふだけである。卽ち此だけの遺憾はあるが、續帝文本が、禁をうけて、同じ帝文本「西鶴全集」よりも更に手に入り難い今日、（「西鶴全集」は、發行より半年位ゐ後の禁。「脚本傑作集」は、發行後間もなくの禁。よりて、西鶴より本が少いのである。）根本の活字本を見ようとすれば、有朋堂文庫の脚本集下に據るの外はない。

上記を要約して、何れが善本であるかを更に謂ふと、卽ち根本活字本としては、續帝文本が唯一。初演臺帳の活字本としては、今日「大南北全集」所收のものが、ある限りの最善本であらう。といふ歸結になるのである。

○

さて以下本題に入る。

最近、自分は「四谷怪談」の根本原本、前後十冊を手に入れた。これに據つて帝文本の活字と比較すると、本文は全部其儘である。卽ち內容の紹介としては、間然する所ない。が、挿繪等は一切載せてない。尙、口繪の體裁等一切。見較べて既に氣が付いてゐる自分からは、氣が氣ではない。仍て夫等を遲蒔ながら玆に紹介に及ばうとする所以である。卽ち、によりて帝文本又は有朋堂本の缺陷を補

足しようとの婆心に外ならぬ。今更珍らしくもないと嗤ひ給ふ勿れ。

いろは假名四谷怪談　前編　五冊

根本の形は御存じでもあらう。凡て半紙本である。此も然りである。前編五冊、共通の表紙である。模様は、上に菊五郎格子、下、中央に大きく鼠一匹、その尾は左へ刎ねて、題簽の下に隠れ、頭は仰いで菊五郎格子を見上げる様、格子は薄い墨、鼠は、紅がら色と墨との二色。題簽は、いろは假(か)名四谷怪談(なよつやくわいだん)一と、ルビーも此儘振つてゐる。（裏表紙表は、上、格子。下に長い蛇。その尾が、同じく格子に入つてゐる。此の兩面の意匠、「四谷怪談」の全曲の中核を握つて、面白い。）一の卷だけ、見返し（表紙裏の半面）には、薄墨と代赭との二色摺で、庇室、白張提灯や卒塔婆が見える。上は暗(やみ)をきかしてボカシの墨。その間に、梅幸の句がある。曰く、「梅幸　霧たつやみつかくれつ峯の岩」と。次、卷頭は、例の役人替名、（この替名は、帝文本略く。有朋堂文庫本は、此の根本どほり、替名を載せたり。）その右ふちに、左の口上書がある。

今もあづまの左門町縁をむすぶの願ひをばお岩稲荷の御利生とうはさに聞し民谷なにがしいろとよくとのふた道かけてつまと小者にぬれ衣を着せて流して堀の名もかくすとすれどおのづから附まとふたるしつとのいちねん身の毛も彌立つ雨夜のぞうだんおしうのためにやつす身の與茂七がふうふがなみだにてしめるおそでがみさほさへたちまちわかる造花の仕かけ善にすゝめて　あしきを直助　忠臣義士の世界を　そのまゝ　つゞりあはして

いろは假名四谷怪談　實錄八冊

とある。（此口上、帝文本有朋堂本共に、欠く。）此の八冊、後に十冊となつたものであらう。次、ヒラキ、口繪極彩色（錦繪摺）、直助權兵衛 中村芝翫、民谷伊右衛門 市川海老藏、佐藤與茂七 尾上菊五郎、三人隱亡堀出會ひの場。下に、魚籠（ひく）がお岩の顏になりかゝり、それから陰火が立ち上つてゐる。次、同じくヒラキ錦繪摺、小佛小兵へ靈魂 尾上菊五郎、小鹽田又之丞 嵐璃寛、與茂七女房お袖 中村富十郎、小佛小兵衛の幽靈が氣味の惡い程、巧みに描かれてゐる。（此の圖、孫兵衛内の段、「四幕目の二」小兵衛の靈が、又之丞に妙藥を屆ける處。）

次、裏半面、錦繪摺、尾上梅幸部家姿の圖、とある。樂屋の體である。藍摺菊五郎格子の浴衣を着手拭肩に、菊五郎、手に面を持つてゐる。（お岩の面か）後ろに大きく、骸骨を描いた戸板が立てかけられてゐる。煙草盆、鏡臺見え、上に、肥後米五十俵、梅幸丈江ヒイキ。大幟三本、梅幸丈えとなどある。以下本文第一丁の表。凡て帝文本等に同じ。（冒頭の見出しは、繪本いろは假名四谷怪談卷之壹とある。）

以下**挿繪解說**。（三丁目裏と四丁目表。）お袖店先、直助權兵衛と、喜兵衛、醫者扇獺との出會。例の楊枝店。□（十一丁目裏十二丁目表）伊右衛門、四ツ谷左門を追ふ處。上に、圓形の中に、お梅と、うばおまきとが見えてゐる。□（十四丁目裏十五丁目表）佐藤與茂七、おくま、橋づめの出逢ひ。背景も中々念入に描いてゐる。）（以上**第一卷**）（以上、序幕、淺草寺内の場である。）（八丁目裏九丁目表）宅悅店先。直助權兵衛。豆絞（まめしぼり）を鷲摑み、胡座（あぐら）をかいて力む。宅悅立つて頭

を掻いてゐる。戸外、與茂七とお袖。□（十三丁目表）〔この圖ヒラキナラズ、半面〕左門を伊右衛門暗殺。□（同裏）〔同上〕與田庄三郎を直助權兵衛虐殺の圖。□（十七丁目裏十八丁目表）お岩、お袖、各々死人にとりつき愁嘆。伊右衛門、權兵衛、非人を片づけてゐる圖。上に三日月、鴉、黑雲の間に群れ飛ぶ。大坂繪とは一概にいへない、陰森な氣分を滲み出してゐる。（以上、第二卷、（以上、序幕の第二、宅悅内の場、及び第三、大川端。））（三丁目裏四丁目表）秋山長藏、關口官藏二人して、小兵衛を責めてゐる。伊右衛門指圖の體。□（七丁目裏八丁目表）産後のお岩、子を抱いて、右手、藥を持ち、伊右衛門を見送りをる。伊右衛門の後に例の官藏と長藏がゐる。お岩「お早ふおかゑり被成ませの體。□（十一丁目裏十二丁目表）娘おむめ、喜兵衛、共に自害と見せて、伊右衛門に迫つてゐる處。お梅にはうばおまき。喜兵衛には女房お弓とりつき、伊右衛門の色男は、兩方を制してゐる體。（以上、第三卷）（以上、二幕目の中、一、伊右衛門内の場。二、喜兵衛内の場である。）（四丁目裏五丁目表）お岩、形相變る。手に拔き持つた髮の血が長く、ひつくりかへつた格子の上に滴れる。左、宅悅、脚を逆さにして仆れてゐる處。□（十丁目裏十一丁目表）伊右衛門、小兵衛を殺す圖。□（十三丁目裏十四丁目表）伊右衛門、誤つてお梅と喜兵衛を殺した處。小兵衛の亡靈現れ、手に赤兒を吊り下げてゐる。伊右衛門、刀を脱いて、驚いてゐる。右、お梅の首、左、衝立の際に、喜兵への首が轉がつてゐる。衝立の蔭に、蛇が首をもたげてゐる。小兵衛の下陰火。此圖、また上乘の出來。（以上、第四卷）（以上、二幕目の中、三、元の伊右衛門の内。四、元の喜兵へ内。）（二丁目裏三丁目表）隱亡堀、喜兵へ女房お弓非人。うばおま

き、守を取らうとして、水に陷つた體。左、堤の上に小兵への親の佛孫兵へ。□（五丁目裏 六丁目表）直助と伊右衛門の出會ひ。直助は腰うたげて煙管を口。伊右衛門は立つて。竿を肩。□（八丁目裏 九丁目表）戸板返しの處。初代國貞の錦繪には及ばないが、矢張りこれだつて凄い出來。（以上、第五卷）（以上、三幕目、隱亡堀の場。）

いろは假名四谷怪談　後編　五冊

表紙の意匠は、梅の模樣、紅ガラ色の一版摺。花は白ヌキ。表裏とも同じ。（全五册、此の同じ意匠。題簽は前編に同じ。）

後編第一卷、表紙裏の見返し、寺の屋根見え、手前は堤、二株の櫻、上は花びらの白ヌキ。その中を、後編四ツ谷怪談と、筆太な大字、二重の線であり、その文字のあと代赭。他は藍、草、濃綠等、製版に凝つたもの。下に春梅齋北英の落款がある。次ヒラキ、立派になつた伊右衛門の大小姿。後に折助控へ、傍らに犬。遠見は藁葺、上に、時鳥。背景は桔梗や女郎花、萩。線はギコチで拙いが、錦繪摺。次、ヒラキ、右　赤坂傳藏、左　小兵衛女房お花の大首似顏畫。其裏、前編冒頭と全く同樣な口上と外題、及び役人替名。次、本文第一丁。

（五丁目裏 六丁目表）お袖門さき。戸外、佛孫兵衛と孫の治郎吉。□（十一丁目裏 十二丁目表）右手、庭にお袖。上り端に、直助、櫛を持つてゐる。その櫛を、盥から出た手が引張つてゐる圖。（以上、後編第一卷）（四幕目　法



乘院門前の場、〔未完にて、第二に續く。〕）

（三丁目裏四丁目表）お袖、洗濯。戸內、宅悅に揉ませてゐる直助。□（七丁目裏八丁目表）お袖を口說く直助。（少々あぶない畫樣。）□（十三丁目裏十四丁目表）庭先、お袖と直助。、門前、與茂七、訪ひよる圖。（以上、後編第二卷）（以上、第四幕目の一、法乘院門前の場、全終り。）

（三丁目裏四丁目表）婆おくまと、佛孫兵へとの間に挾まり、止めをるお花。泣いてゐる治郎吉。□（九丁目裏十丁目表）孫兵衛方に厄介になつてゐる小鹽田又之丞、赤坂傳藏と對面。□（十四丁目裏十五丁目表）又之丞に、小兵衛の亡靈、妙藥ソウキセイを屆けに來た處。（以上、後編第三卷）（以上、四幕目の二、孫兵衛內、終。）

（二丁目裏三丁目表）慘殺されたお袖を挾んで、右、遺書を持つた與茂七と、左、太刀を振上げてゐる直助。□（九丁目裏十丁目表）一軒家の體、お岩の大きな顏の亡靈。伊右衛門、太刀を拔いてゐる。□（十三丁目裏十四丁目表）伊右衛門狂亂。止めてゐる近藤源四郎其他。（以上、後編第四卷）（以上、第四幕の三、直助內。第五幕〔大詰〕の第一、一軒家。第二、蛇山庵室〔未完〕。）

（二丁目裏三丁目表）お岩の死靈と伊右衛門。□（七丁目裏八丁目表）右、雪模樣の輪廓內に、百萬遍の講中と眞中に苦しんでゐる母おくま。左、戸口の暗に、蹲ばつてゐるお岩の死靈。此圖も上乘。お岩の死靈よし。□（十一丁目裏十二丁目表）伊右衛門をとり卷いた面々。右から又之丞、佛孫兵衛、お花、治郎吉。左、與茂七、傳藏。（以上、後編第五卷終）（以上、大詰の第二、蛇山庵室の場〔續き〕、第三、深川回向院寺內の場。）

尙、畫樣に就て尙いふと、口繪を除き插繪の分は、凡て墨摺。口繪插繪とも春梅齋北英（北齋派）の畫である。尙此本の板行、前編五冊は、奥附に據れば、天保五歲午仲秋。後編五冊は天保六乙未孟春。共に大坂河內屋太助版である。（が、「和布苅神事」などと同樣、尾の松屋、京の鈴屋と合梓の意も奥附にある。）

以上の內、插繪は、上乘の作と思はるゝものは餘り深刻で載せられないし、他は餘りに平凡である。迷うた擧句、こゝには略くことゝした。尙、前後とも第五卷には、當時河內屋から既出版に拘る根本數十種の目錄、及び他劇書の廣告及び說明があるが、此の中、根本刊行目錄は、これ以後の分も加へて、畫家別年代順に分類せられたものが、嘗て坪內博士の既著にある。（「少年時に觀た歌舞伎の追憶」）唯、幸ひの機會であるから、劇書の部分のみ左に拔書きしておかう。全部「四谷怪談」後編第五卷に據つたものである。（解說めいたものは、其の本の廣告文であつて、要略である。）

三都俳優ますかゞみ　三ケ津歌舞妓古今役者のあたり狂言の像を似貌正寫しにす、尤役者似顔を書初し松好齋を始め、流光齋芸國の其外當時名人春好齋北洲先生或は曉鐘成柳齋重春春梅齋北英東都歌川國貞大人など似貌に妙を得し諸名家の寄合書にして云々。○八文舎自笑編　諸方好人衆細評　三都役者大評判記　出精晰　全三冊　顔見世奥品定位付一年中狂言並に尾張伊勢堺其外諸所歌舞伎狂言の分不洩細評仕り毎年正月二日新版發兌申候。○歌舞伎叢書　考古の書なり　全部十二冊○俳優奇跡考　古今役者名人の一代記狂言の次第　全部八冊○戯場訓蒙圖彙　三馬著豐國春英畫　全部六冊（解脫略）○俳優訓蒙圖會全部六冊　三ケ津の當時名高き役者の當り狂言の像を似貌正寫となし、悉く江湖風流の和歌狂文狂歌發句狂詩等の賛詞を加へたる○俳優大系圖　全一冊○戯場一覽增補　一冊○俳優用文章　古今名高き役者自筆を多く集む　全一冊○

芝居節用集全一冊〇松好齋半戯場楽内兩面鏡 古今芝居にかゝはることを年代記に見立年々二のかはり狂言の外題等又は役者の興廢俳名かへ紋所付手打連中名前芝居の場の名目其外外切一 折本一帖〔以下書名と冊數〕〇俳優四書全十九冊〇梅幸集全一冊〇眠子選全二冊〇玉乃光全二冊〇桐島臺全二冊〇一蝶郡鄲枕全一冊〇よしを一代記全一冊〇市川の流全一冊〇璃寛帖全二冊〇耳塵集同續集全一冊〇芝翫百人一首玉文庫大本全一冊〇歌右衛門錦繪姿全二冊〇加賀屋道中記芝翫栗毛全二冊〇ますかがみ東俤全二冊〇賞賛雅詞芝翫帖全二冊〇芝翫國一覽全一冊〇芝翫道中雲助はなし全三冊〇俳優三國志浪華柳齋重春畫全部三冊〇俳優百人一首化粧鏡全一冊〇同艸の種けしよう鏡後篇全一冊〇梅都戯臺俤松好齋春好齋畫全三冊〇俳優物祝流光齋似貌畫全三冊〇七代目三升旅中吟八文舎自笑閲狂句莚猿集全一冊〇芝翫節用集　大本全一冊。

―大正十五年三月、「江戸軟派研究」―

大南北の似顔

四世鶴屋南北（大南北）が、文政十二年十一月廿七日に、七十五歳で歿した、近世歌舞伎中興、寧ろ世話狂言物の大作者であることは贅言を俟たないが、其の南北の肖像似顔は如何なるものであつたかを知る人は、尠からう。かくいふ自分も、普通版畫の一枚繪類に帋てこれ迄見當らなかつた。芝居繪本等にも又臺本類の刊行物にも、偶々に見當り得るかは知らないが、自分としては、その眇影だに未知未見である。（此言失言。追記參照。）最近刊行せられつゝある「大南北全集」にも、此の肝心な南北の肖像は忘れられて、まだ載せられてゐない、果して全く彼の似顔を何處にも見ることが出來ないだらうか。彼の近世演劇史、軟文學上の大立者であることを知れば知る程、遺憾此上ない事に思ふ。

と前書をして來て、自分の言ふことは、何か。自分に、此の未見の大南北の似顔、肖像が一つ、心當りがあるからである。無ければ、これでもせめてと思はるゝものである。然し出處は、稍明るみへ出し難いものであるが、中に描かれた南北その物の顏は、彼の似顔を描いて恐らく眞に近いものと思ふ、爾信せらるゝものである。と氣を持たせての材料、出處といふのは何か。天保三年春正月、耕錦

堂版の『三津世川極樂遊』（全三冊）（原本の見返しに、天保壬辰春正月と、年月の記入あり、版元の名、同じく此の屋號の捺印あり。）と稱する艶本なのである。

此の艶本、女好庵の著、當時有名な三世坂東三津五郎と五代瀬川菊之丞とが相次いで世を去つた。（三津五郎は、天保二年十二月廿七日。菊之丞は天保三年正月七日）それの追善冊子（大して追善にもならない。寧ろ一種の舊悪剔抉物）とも見らるゝが、中に皮肉を混へた、即ち當時此の二優の變態性欲關係に絡んで、同じく有名だつた土器お傳（三津五郎の婦。後、菊之丞と密通し、駈落までした。）との三つ巴關係に興味づけてゐる。此のお傳は、當時婬婦の名高く、彼女の相手となつたもの、前には三津五郎の弟子三津右衛門、七代目團十郎、三十郎（關三十郎か）、後には路考（菊之丞）、路考の送り權八、其他、後の二代目焉馬（一に和印本多作者、和印の上では猿猴坊紅月成。二世蓬萊山人ともいふ。安政頃に、京傳の洒落本「息子部屋」を其儘「靑樓心得草」として出版したといふ男。和印の作百數十種、其他の普通作亦夥しい。）や淸元延壽の初代や、娘の頃には三代目菊五郎にまで關係してゐたらしい。とにかく誇張もあらうが、數十人があつたといふ話。そのお傳と三津五郎と菊之丞との三角相索く關係を題材にして辛辣を極めたものが、此の「極樂遊」である。これに據ると、お傳が丁度三津五郎の死ぬ三年前に死んでゐて、（即ち文政十二年頃。此の年代は恐らく本當であらう。他の人物も此の種のものとしては比較的正しいからである。すると、お傳は享年四十二歳。大の姥櫻だつたの

である。)丁度死んだ三津五郎と冥土の、三途川の邊の女郎屋で逢ふ。當時、お傳は、この三途の青樓での、流行つ妓である。こゝで三津五郎は、生前の、菊之丞とから起つたいざこざを忘れて、覆水盆に歸るの件があり、トド二人手に手を取つて道行。途中で、牛頭馬頭にお傳がさいなまれたりしたが、命たすかり曠野を迷うたあげく、清元延壽（初代。これは文政八年五月廿六日に横死。)に出逢ふ。極樂町の入口で、旅籠屋に逗留するうち、延壽とお傳との情交がある。延壽お傳、三津を置きざりにして逐電、極樂町へ逃げこんで、延壽（この本では姪壽）とお傳、夫婦ぐらしの淨るり稽古所を開く。其の後いろ／＼あつて、お傳と菊之丞（これは天保三年正月七日歿。三津五郎と距る十一日。恰も後追ひの形。)と邂逅、いんぎんを盛んに重ねてゐる處へ、三津五郎、やつと尋ね求めて、此の家に踏んごみ、大亂痴氣。仕返しだというて、菊之丞を變態性欲的に虐みつゝある處へ、(この邊の描寫、皮肉を極む。かゝる描寫を、二優の死後、たとひ和印作者たりとも試みてゐるだけ、二優間の同性愛は、當時有名なものであつたらう。これがあるが故に、二人の歿前と雖も、お傳を中心にして、普通人では辛抱出來ない程の二人の破倫まで、三津五郎は、寧ろ寛大にこれを見てゐたのである。)作者の鶴屋南北が現れて、三人の三ツ巴の關係をうまくおさめる件から、最後祝言となり、芽出度し／＼で終るのである。さうしてその仲人役にはむろん南北がなるのである。その祝言の





場面を描いたヒラキの圖中に、菊、傳、三津の似顏と伍して、此の大南北の似顏がありくとあるのである。これが南北の恐らく眞に近いものであらうと思はれるのは、外の二人――三津五郞と菊之丞とが、此本に活躍する度、各圖とも同一の顏で描かれてをり、しかもそれらが眞面目な役者錦繪の類の似顏と殆ど同様の表態であり、お傳にいたつては、これは眞面目な物に似顏繪を見ないから何ともいへないが、毎圖同一の似顏で描かれてをり、卽ちこのお傳も恐らく實物の似顏というてよい。この南北は、最後の此の場面に描かれてゐるだけであるから、何ともいへないが、外の眞實らしい描寫から推して、これも本物だらうと思へるのである。卽ち別揭の如きもので、(原畫の一部分、擴大)羽織に丸に大の字の南北の紋の付いてゐる處から見ても、恐らく此の畫家は、南北の似顏として自信の深かつたものゝやうに思はるゝのである。尙、此の肖像畫者卽ち此の艶本畫家に就ては、署名落款匿名號も一切ないから不詳ではあるが、自分は、當時似顏畫一方の雄初代國貞(後の三代豐國)卽ち不器用叉平に違ひなからうと思ふ。

序でに述べておくが、此の「極樂遊」に現れる人物は、全部在世時の本名をもぢつてゐる。大和屋の勝見(三津五郞の事。三津の紋、花がつみから來てゐる。)お大(お傳の事)。千代本娃壽(清元延壽)。多門(菊之丞が幼名)。鶴屋閑木(鶴屋南北)といつた風に、である。偶然でもあらうが、延壽

の文政八年五月、お傳の文政十二年頃、南北の同十二年十一月、三津五郎の天保二年十二月、菊之丞の天保三年正月と、七八年の間に皆引續き物故してゐる。その數人を全部生捕つて、當時巷說やかましかつたお傳、三津、菊の三角關係を中心に描いたものが、此の「極樂遊」一篇の山である。恐らく當時の消息に厚かつた人々は、此の戯作から、甚深な興味と皮肉味とを感じたであらう。

南北の似顏に事よせて、「極樂遊」を說いたが、尙、此の「極樂遊」及び其の類似作、並びにお傳、三津、瀨川の三角關係等については、拙著『江戸軟派研究』に嘗て詳述した。（二篇四九頁—六三頁）參照を望む。

最後に、此の「極樂遊」中の南北が現れてからの、結果までを、これは差障りないから、其の全文を載せておかう。時々、南北の大作者であつた事や、此の仲裁役が、その柄にしつくりはまつてゐることやを仄めかしてゐる處も、際物ながら、巧いものである。最後に、三津と菊の紋を綴り込んでゐるのも、冗いが左程耳ざはりにならぬ。結びの、チョン〳〵、モ一つ、チョンも面白い。南北が出てから、頗る生彩を負つてきたかのやうに思ひなしか思はれる。以下その全文である。（圏點は、自分の勝手である。）

（前畧）

折から來る鶴屋閑木、「イヨこれはお揃ひでトいはれて、勝見も遠慮の體。お大多門は吾しらず貌赤

くして跪みゐる。関木は勝見にむかひ、かん「トキニ親方、只今かげで承たまはれば、何か込入の御やうす。娑婆以來の魂膽なれど、迚もそれほど多門さんに惚ぬいてゐるお大さん、彼これいふは愚痴のいたりサ。及はずながら、私も作者サ。狂言の筋を書きませう。お大さんをば奇麗さつぱり多門さんにくれてやり、其かはりには多門さんをいつ何時でもおめへさんの自由になさるがよふござへす。多門さんも相惚の女房をお持なさるからは、其處の不肖はなさるがいゝ。お大さんも是からは勝見さんと兄弟ぶん。外に水性をさつぱりやめて、多門さんと二世の夫婦、サアどふでござります。ト聞て勝見もにこ〳〵もの。いかさまこれは名高い作者鶴や関木さんほどある、わたしは夫で言ぶんなしサ、其處の二人はどうだやらトいふに、関木多門お大にお心いかゞと問ければ、二人はいそ〳〵、夫こそは願つたり協つたり、どふぞ首尾よく、取きめてトいふによりて、それならばこの関木がすなはち媒人、物はきまりが肝要なれば、今よひ直さま改めて三三九度の盞をと既に用意のとゝのへば、規式はづさぬ上下に、お大は白無垢綿帽子、三人ン四人ン水いらず、謡ふも法の花がつみ、千代もかはらぬ菊蝶や、めでたき春に若々と、あいおい祝ふてしめてくれ。

チヨン〳〵

モ一ツ。チヨン

さうして挿繪の、南北肖像の左には、小さく、「まづこれで御双ほうまるくなつたが何よりちやうちやう。これからまたひときやうげん大當りをかきませう」とある。巫山戲たものであるが、南北の色を出さうとした苦心を、買つてやらずばなるまい。

（大正十五年、一月十二日夜）―同五月、「歌舞伎」。

○

追記。右の稿の初めに、大南北の似顏が從來一つも見當らぬといふたが、それは、小生の早見。自分の發見した此の「極樂遊」の他に、從來一個はあつた。大阪根本（ねほん）文化十年刊「お染久松色讀販（うきなのよみうり）」にかづら師友九郎と共に出てゐる南北の肖像といふもので、嘗て（大正十年二月）「歌舞伎脚本傑作集」第一卷に其根本の繪一頁が縮寫登載せられ、それが自分の右の稿以後刊行の、「大南北全集」第八卷の卷頭にも、今度は南北だけが擴大せられて掲載せられてゐるのである。結局從來に一個だけは發見せられてゐたのである。（昨年十二月「演藝畫報」の渥美氏「繪入日本戲曲略史」中の南北肖像は、歌舞伎脚本――大南北全集と同一のもの、その縮小である。）此の渥美氏發見の分も自分と同じく國貞畫であることは、をかしい因緣だ。（「極樂遊」を、自分は國貞畫と認めての事である。）然るに今兩者を悉しく點檢比較すると、兩者とも立姿（たちすがた）、顏を左に向けて瞰下（みおろ）す顏である。唯、表態に於て若干の相違を見受ける。即ち「極樂遊」の方が遙かに若々しい。髮の形は殆

ど同一であるが、また眉の長く、眼の大きい點も。が、「色讀販」の顏は、頗る皺を描いて、全くの爺くさく拵へてゐる。顎の様子も、「極樂遊」は壯年、「色讀販」は老年の差がある。さてどちらがより多く眞に近いか。どちらも眞とすれば、一は壯年像、一は老年像ともいふべきであらうか。こゝに可笑しい疑問が起るのは、刊行年次の比較的若い「色讀販」を老けて描き、年次の後の「極樂遊」を若く描いてゐる事である。これは強いて解釋すれば、一方は艶氣の多い和印本の事ゆゑ壯年風に描いてのけた、と思へぬでもない。——とにかくこれで南北の似顏、二個は發見された譯である。殊に多少の異同があるだけ、少なからぬ興味を南北趣味者に與へたものと、自分は信ずる。

追記の二。問題になつたお傳(正しくは小傳)は、「名人忌辰錄」では、文政十一子年二月六日歿、三十九とある。歿年は、自分の類推に較近いが、歳は全く信じられない。確證を握るまでは何とも謂へないが、「名人忌辰錄」說は、出典も不詳で、うかとは信じられぬ事を述べておく。

—大正十五年五月十三日補。

捜索願

澤村四郎五郎に就て

最近、東京の七戸吉三氏（十二月の『早文』で二代豊國論を書かれた人。）から、自著『澤村四郎五郎』について資料の供給を依頼して來られた。この本、初代の四郎五郎から五代に至る詳傳であるが、中、四代目の四郎五郎の履歴が不詳だといふのである。この四郎五郎の四代目は、晩年を名古屋で逝つたといふ。道理で私も子供の時分、この俳優名には親しみがあつたやうだ。その時、七戸氏から乏しい資料（東京で略〻分つただけの）を纒めて左の如くいひ越された。

一、四代目は名古屋出身、先代助高屋高助の門弟となり四代目を襲名した。

一、明治三十四年頃、東京本所區壽座等へ出演し、市川才三郎と一座してゐた。

一、其後名古屋に歸つて死去した。

以上であるが、さて七戸氏の知られたいといふ個條は、左の如くである。

1、四代目の本名、出生の個處並に生年月。

2、四代目の前名卽ち四郎五郎襲名以前の藝名。
3、四代目の襲名年月と披露の劇場と其狂言名題と當役。
4、同の初舞臺の劇場名、並に狂言名題と當役。
5、同の東京に出演せし年月日、及び歸鄕せし年月日。
6、歸鄕後に出た名古屋の劇場と誰と一座したか。
7、四代目の死亡年月日、及び埋葬寺院、法名。
8、四代目は最後迄四郎五郎の藝名なりしや。
9、四代目の俳號、屋號は如何。
10、四代目の寫眞又は似顏繪、當時の繪番付の類はなきや。
以上の質問である。自分は面食つた。折角自分が名古屋に生れ名古屋で仕事をしてゐながら、肝心の名古屋俳優を聞かれて、知らぬともいへぬではないか。で自分としても出來得る限り探索してみた。が結局、四郎五郎を知つてゐる人は今の四十以上の年配の好劇家には、ざらにある。然しそれらは舞臺の人として彼を見たゞけである。ちよつとも文獻的な事を敎へてはくれない。一人、あの俳優に聞けばといふので、嵐猪三郎(あらし)なる老優(この役者は、自分も昔寶生座で見た事がある。)を敎へてくれた

が、その猪三郎の宅をさがしさがした擧句、聞けば、昨年末十二月廿九日に七十ばかりで死んだとの話し、一と月おそかつた譯である。――猪三郎優は、入江町二丁目の北側に菓子屋をしてゐた。――結局今日までまとめた材料は、左の如くである。

一、四代目は前名、寶川雁五郎。叨高屋の弟子。橋座（今の東別院の附近）で芝居をやつてゐた時、先代の四郎五郎の役を雁五郎が代つて演り、好評を博した。これが四郎五郎の名乘り初めといふ。

二、四郎五郎となつた後は、モタレか中役をやつては好評だつた。（勿論上京以前）其頃のことか、宗十郎の弟子の中村歌女太郎と一座してゐた、其時、彼はもたれであつた。

三、明治三十年前後（上京以前か）は、慥かに中區門前町大光院裏に住んでゐた。日出町の宿屋の葉村屋といふのが仲人で、或家に入婿した。其家が大光院裏にあつたのである。（葉村屋にも、息子が二人も役者になつてゐた。一人は、嵐橋三郎。然し此の人等も今は、死歿してゐる）。

四、其頃の彼の劇場は、寶生座か新守座、主に寶生座である。舞臺の印象は、髯の剃りあとが靑く背高く、主に敵役をしてゐた。臺詞をいふ時、唾をパツ〳〵と吐く癖があつた。

五、上京以後不明。歸鄕以後も不明。唯晩年は、中區伊勢山町の洞仙寺（梅逸の墓のある寺）より一丁程北の東側に住んでゐた。其處で死亡。墓は、伊勢山町又は橋町邊の寺の筈（寺院不詳）。死亡は

今から二十年くらゐ前。生きてゐると七十歳以上。

六、藝名は、死ぬ迄四郎五郎であつた、晩年は、時々東京から上等役者二三人が來る時、其の相手をした。いつかも末廣座へ市川鬼丸（先代であらう）が來て、石井常右衞門をやつた時、其相手の敵役をやつた。

七、彼に實子はなかつた。一人女の子を貰つてゐたが、後養子を貰つた。四郎五郎の未亡人は、今から十年前丹羽郡岩倉町へ移住していつた。ちやうちんやといへば分る。（といつて敎へてくれたが、それも叉聞きである。其の遺族が提灯屋をしてゐるのか、叉は、未亡人の親戚がそれで、未亡人は其處に寄食してゐるのか。凡て不詳。）

八、晩年は、時々名古屋俳優を集めて芝居をやつたが、其時は、座頭役であつた（？）。然し晩年の劇場等不明。

以上、覺つかないものである。さて右の四代目四郎五郎に關する一切如何なる零細事でもかまはぬ、御存知の方があつたら、御敎示が願ひたい。寫眞繪番づけの類も、當り役年表も、名古屋の明治年間の各劇場の全部番づけがあれば分ることであるが、殘念ながら一切それらの資料存在の恩慶に浴してをらぬ。折角名古屋出身（一說に生地は大阪ともいふ）の役者の事、せめてこの際明瞭にしてや

りたい。大方の御教示資料御解放を切にこひねがふ。七戸氏に代り厚く御願ひする。

昨日、七戸氏より澤村宗十郎氏の返事といふので、四代目四郎五郎が、襲名の披露は、明治十九年頃、新守座でなされたと、他は不明といひ越された、これだけではまことに心細い限りだ。何分名古屋役者變遷の生字引といはれたといふ猪三郎氏が死んだので、困惑の限り。以上本紙上を御借りしての御願ひです。（二月三日）

—大正十五年二月、「名古屋新聞」。

四代目澤村四郎五郎遺聞

最近所用あつて、この澤村四郎五郎四代を調べた。四郎五郎襲名以後は殆んど名古屋にをり、且晩年と終焉も名古屋であるに拘はらず、其の一生は頗る捕捉に困難を感じだ。幸ひ自分が名古屋新聞二月十三日に寄せた捜索願の要領に據つて、諸方から斷片的に集つた、及び友人達の遺族知己踏査の結果とを綜合して左の如きを得た。無論明治末期に死歿した、旅役者ではあるが、經歷面白く、（案外にである）且つ一部の劇界資料にもと、本著餘白に掲げておく。

○四代目澤村四郎五郎傳

四代目四郎五郎は、實姓名西尾多吉（本姓は代田（だいた））、大阪生れである。原籍大阪市南區難波新地十四番町とある。實父は代田岩吉、その五男である。生時文久二年八月十六日。大阪にゐて何歳頃か、先代實川延若の弟子となり實川鴈五郎と名のつた。明治十九年以前、名古屋に來り、四代目助高屋高助（記錄によれば、高助は、十八年十月頃より滯名、十九年二月二日客死。彼の墓は現に名古屋熱田にある。）再弟子入り、明治十九年、少くとも高助死亡以前即ち一月の名古屋新守座興行に於て、澤村四

郎五郎の襲名披露をした。時に二十五歳。時の藝題は、「嶋爲朝八丈嶋」で、助高屋が爲朝、四郎五郎は代官左太夫を演じたと。青年時頗る天才的であつたと謂へる。此の四郎五郎の名は、三代目宗十郎及初代助高屋高助共に名乘り、殆ど宗家の別名の如くであつた。此の名を年少の彼が襲ぐに至つたのはそこに技倆拔群の點もあつたらう。以後主に名古屋の劇場寶生座、新守座等に出演してゐたが、同期俳優の先代中山喜樂の媒介で同じく役者嵐(一に實川)三之助の養子となりその女西尾みつ方に入夫。戸籍面では明治二十七年四月十六日、然し內縁關係はその以前古しといふ。當時俳優としての位置は座頭格とまで行かず、モタレ又は中役であつた。當時、妻の實父母卽ち舅姑は健在であつた。西尾光藏、同はぎの。(光藏卽ち前に謂うた嵐三之助であつて是も役者。先代延若の弟子、後實川延之丞といふ、女形役者、本姓不詳、淡路生れ、四歳にて尾張犬山藩の長谷川家に養子となり、同家にて妻を迎へ一男を生み、後離縁、後妾たりし西尾はぎの方へ入夫、西尾を名乘る。以前既に四郎五郎妻みつ女生れてゐた。畢竟、四郎五郎とは、同門、後、父子の間柄といふ譯也。しかも養父の三之助(光藏)も養子の四郎五郎(多吉)も共に役者にして共に入婿たる奇なり。)但し光藏夫婦は、以前より別居、伊勢山町五九・六〇番地(東別院南)にゐた。若夫婦は、門前町大光院裏に住んでゐた。此頃四郎五郎夫婦は幼女を他より貰ひうけ、養女同樣にしてゐた。(此養女入籍なし。榊原姓。現在養子兵三氏を迎

へ、東川端町に現存。四十二三歳）明治二十九年頃四郎五郎は大光院裏の家を疊み、舅姑の家に同居間もなく貰ひ娘を舅姑に預け、夫婦にて上京、以後明治三十七年八月、養父危篤の招電ある迄、東京にて興行、主に市川才三郎と一座。養父死亡前十日程に歸名。養父は、同年八月二十五日死亡、以後姑と夫婦、養娘と伊勢山町以前の處に住居。同年間もなく名古屋末廣座の座付俳優となり、市內劇場となり、從つて此の巡業には同伴しなかつた。四郎五郎、明治四十三年頃肺を病み病狀漸進、四十四縣下及近縣、又は北海道札幌、仙臺、秋田などを巡業した。其の頃は既に妻みつ女は耳を病ひ聾同様年頃は、偶々出場するも一役くらゐ受持、間々舞臺で血を吐いたといふ。最後愛知病院に入院、十日程にて死亡。即ち同年四月二日死、享年五十歳、東橋町崇覺寺西尾家墓地に骨を埋む。（光藏も同處。）晩年は窮迫甚だしく、最後の入院費用にも窮した程であつたと云。辭世、東風寒うなりて櫻は散つてゆく――。法名、釋良誓信士。此頃、貰娘は既に別居してあらず、未亡人みつ女、按摩職某を同居人におき生活（從前通りの伊勢山町六九・七〇）、大正三年二月六日には實母はぎが死亡した。晩年異母兄の岩倉町住、長谷川房次郎氏（この長谷川氏は、みつの實父西尾光藏（三之助）の先養子先。その出生子）の介抱をうけ、大正十三年九月十一日名古屋にて死。法名釋尼妙滿。（みつ女は、四郎五郎より一歳の年長。即ち文久元年十一月二十四日生。因みに四郎五郎養母はぎ（みつ實母）は、天保三年正月二

十二日生。）長谷川氏方は、提灯屋業である。この長谷川房次郎氏の二男又三郎氏、西尾家を襲ぎ、光藏四郎五郎らの位牌を守る。即ち此の又三郎氏は、四郎五郎妻のみつとは、叔母甥の血緣也。又三郎氏現在、一宮市八幡町にありて傘職。即ち四郎五郎の西尾名のり後の親戚にして現在するもの、愛知縣岩倉町の長谷川家、一宮の後繼西尾氏とのみ。養女關係たりし榊原氏、又四郎五郎を祀る。

以上が名古屋を中心としたる四郎五郎の關係事項であるが、大阪に於ける彼の實家は如何。鶴三郎、飛鶴（藝名、中村姓ならん。共に俳優）の二人は、彼の兄弟（恐らく兄か）であつた、殊に飛鶴は天才兒であつたが、夭折した。即ち四郎五郎の血統には、代々俳優の血が流れてゐたと思はれる。鶴三郎も旣に大阪にて死亡といふ。夕霧のゐた青樓（無論扇屋であらう）の女將は、この四郎五郎の實姉であるといふ。（無論故人）。現中村鴈次郎優の囃子方にも兄弟があつた筈といふ。又、鴈次郎優も遠緣にあたると傳ふ。

雜錄。○此の四郎五郎養父の西尾光藏（嵐三之助）の實家も、俳優であつた。實父は、桐野屋權十郎と稱する役者であつた。○四郎五郎、折々の演技傳聞。明治二十六年冬、瀨戸町（尾張）榮座で中村傳五郎嵐猪三郎（この猪三郎は名古屋俳優）等と演ず。猪三郎の甚兵衞に、傳五郎が宗五郎、箱登羅と四郎五郎は敵役。翌二十七年四月、坂東簑助、市川鬼丸等と源平盛衰記を同座にて上演、四郎五郎は平治の僕を勤むと云。（瀨戸伊藤氏より）○上京後の大好評。明治三十一年四月頃、本所壽座にて出演、

配役は五段目の定九郎。當時都新聞の評に曰く、「四郎五郎丈の定九郎は團洲以上（九代目）」とあり、其の記事中に、若し團洲が演じたなれば何と評すると云ふ評も有之候、然るに同年六月二十六日より歌舞伎座の藝題は、一番目忠臣藏五段目六段目の二幕、中幕五斗兵衛泉館と、二番目長兵衛權八鈴が森、切左小刀であつた。團洲の定九郎を見競べに行きましたら、成程新聞の評の通り四郎五郎丈の方が良く見えました。故團十郎の定九郎は打たれてから變へ玉で見にくかつた感じがありました。○當り役は、出京以前新守座で、加賀の大槻傳藏、一座は市川右田作。日清戰爭後、寶生座で日清事件で袁世凱を出し、一座は尾上卯多三郎、嵐馬五郎。又寶生座にて陣屋の熊谷、一座は中山喜樂（先代）、其折彌陀六を演ず。（凡てこれは上京以前、即ち二十九年以前の記錄。久彌註）當時の辻びら（上京前）は左の如く、長らく一座の樣でした。中、知鶴、橋枝、とも名古屋にゐました。

一番目、、、、、中村知鶴
、、、、、、嵐　橋枝
二番目、、、、尾上卯多三郎
、、、、、、、
、、、、、、、
切、、、、、澤村四郎五郎

繪番附等は、その頃余り見ぬでした。家號は紀の國屋、中山喜樂が淡路屋等にて、多く其の頃は家號を呼ばず。（以上二項、市内荒川氏來信）○四郎五郎東京より歸京後、（三十七八年頃カ）名古屋末廣座の座付となり、末廣座の人氣振作の爲、東京に役者買出に出かけ、九女八、（小團次も同道と思ふと）を迎へ、末廣座に興行、大入を博したといふ。（尙、此の項、次揭淺井氏報告參照）○養父光藏は、伊勢山町で、みの屋と稱し宿屋をしてゐた。名の光藏をとりて、通稱みのみつと稱したといふ。○四郎五郎夫婦の仲人は、先代の中山喜樂たる事前に言うたが、これも、當時大須日の出町（四郎五郎住居の大光院裏に近し）に、宿屋業を副業にしてゐた。葉村屋と宿屋を稱した。その男に嵐橋三郎、他に一人まだ役者になつたのがゐた。四郎五郎は、殆ど死亡前三四月までは舞臺に出てゐた。○現在の四郎五郎は兩人ある。一人は活動俳優、これは宗家が許したのであらう。一人は田舍廻りの尾張犬山出の男で、名古屋に住居、これは四代目の弟子で、未亡人から名を讓られた者。○四郎五郎と一座の俳優名。（斷片記錄）中村宗十郎の弟子中村歌女太郎と一座、四郎五郎はもたれ（恐らくは出京以前か。――久）□大阪の鶴三郎三五郎などと一座。□嵐橋三郎（これは例の彼の仲人を勤めた葉村屋の息子）、萩之丞、男升などと一座。□名古屋で明治三十七年頃、寶生座？で中村知鶴の盛綱に彼の五斗兵衞を見たと云。時に、四郎五郎は座頭だつた。（これ歸名後の事ならん。久）又同時頃、佐賀の怪猫で、家

老役（小森か）に四郎五郎。（とにかく、此の知鶴は、彼の出京以前、歸名後とも一座したらしいことは、諸報告が合する。久）□明治三十年頃（これ尙以前卽ち出京前の二十九年か。久）桑名の中橋座で、嵐璃寛と一座したといふ、時に四郎五郎は書キドメであつた。□晩年、名古屋歌舞伎座で、天一坊の伊賀之亮を見たとも云ふ。□中村知鶴、嵐猪三郎、中村駒太郎（後に梅曉）らと一座。（中、梅曉丈の他は故人。久）□末廣座、寶生座新守座三ケ所位が多くでした。一座は名古屋出身の嵐猪三郎、阪東簑助、中村雀藏、市川右家三、中村知鶴、中山喜樂（市川中車の弟子）（此の中車は、先代の中車ならんか。喜樂も先代ならん。卽ち彼の仲人ならんか、不明。久）山崎定雄の弟子の山崎河藏、澤村荻之丞中村梅曉で。四郎五郎は栗山大膳、大星由良之助、すべて上下（かみしも）の役が良く、云々。（此項、市内、早川松太郎氏來信）□今より十七八年前、末廣座の永らく專屬俳優にて、其頃は四郎五郎及中村知鶴等を頭として座付役者がありき。小生の覺えには、延二郎、市十郎、九女八等の鏡山に四郎五郎の劍澤彈正を見たり。其他は見たる事あるも記憶なし。常に敵役をなせり（東西の上置き役者ある時は）。（市内淺井氏報）十五年程前の演藝畫報に彼の失敗談として、田舍の野天芝居にて梶原の烏帽子を木の枝にかけ置き、其儘かぶりしに、蜂が入りをり舞臺にて驚きし旨載りをりし。（同氏報）（此記事演藝畫報第一卷第六號川尻氏の「旅芝居」に現れてゐる。略此の意味である。）□死亡以前僅かに、末廣座にて八

百藏（現中車）と玄治店を演じ、彼は番頭を勤めたといふ。□土着連とやる時は、座頭格、東京よりの名優が來る時は、中へ割り込み、相當の役にありついた。○彼の人品、風采、印象。1、瘦せて背高く惡面なりき。敵役の柄であつた。品は相當にあつた。2、主に敵役、惡黨、髯の剃り痕靑し、背高し。3、人品は脊の高い、五尺三四寸以上かと存候、今の左團次にもう少しきつい顏。4、髯濃く背高し。臺詞の時唾をパツ〳〵と吐く癖があつた。いつであつたか、市川鬼丸が來て石井常右衛門を演つた時、其の敵役をやつた、巧かつた。（以上、略々歸する所同一也）○適り役。前條にも見えてゐるが、其他に於て一致するは、甲斐（彈正）、六助、八汐、定九郎、其他惡。

○確實なる興行日附。明治十九年十一月、名古屋末廣座。喜樂、知鶴、橋三郎と一座。藝題親鸞聖人一代記。四郎五郎は大納言時忠、兵司茂道、日野左衛門、後入才坊道延。（番附に據る）□明治四十三年二月、名古屋笑福座にて、幸十郎、喜樂等。藝題「雲耶雪耶」、「彌生春波浪長濱」、役名は仲間長太後人入長太、井伊掃部守、親父香右衛門。□明治四十三年四月、同朝日座。忠臣藏、幸十郎、喜樂等。役名、本藏、藥師寺、定九郎、平右衛門。（以上二項は、演藝畫報各翌月の前月狂言一覽に所載。）

○以上。唯殘念であるのは、延若の弟子であつた彼が、いつどういふ動機で、名古屋に來て助高屋に入門したかゞ、不明である。

追記―四郎五郎がみつとの同棲は、彼の二十歳か廿一歳の頃と云、即ち明治十四五年頃である。尙、四郎五郎の名古屋へ來たのは、十代の頃と云。すれば、先代延若が、明治十一年に名古屋へ來てゐるから、卽ち同年頃十七歳で來名、土着したものか。すれば、其から助高屋に入門までの八年程は、鴈五郎であり、實川延之丞（彼の養父）などと打つて廻つたらしい。

尙、四郎五郎妻みつの身元につき一說。彼女は初め藝者を爲してゐたといふ。四郎五郎と内縁後、廢業して、附近の子女を集めて、踊の師匠を爲してゐたと。尙、此の踊師匠は、明治二十二三年頃から、明治二十七八年頃まで。當時みつの住居は、明治二十二三年頃は、確かに實父光藏と同居、伊勢山町に居り、大光院裏に夫婦別居したのはその以後であらうといふ。此の說、現に故人から踊を伊勢山町で習つた人から聞いた話ゆゑ確實である。すれば、四郎五郎夫婦の大光院裏の生活は、正式結婚の二十七年頃に、始めて其處に一家を構へたのであらう。尙、みつは當時、すでに華ではあつたが、背の高い派手な顏の美人だつたと。四郎五郎の顏は殆ど知る人なかつたが、（當時旅興行に忙しかつたのであらう）、みつが役者の妻君だとは、近所でもよく知つてゐたといふ。（以上、伊勢山町當時、明治二十二三年頃の話。）大光院裏でも踊を敎へたことは、證言する人もあつて、確實らしい。

―大正十五年三月「江戸軟派研究。」

「我」のあけぼの

□

信長と畫題！私は、かうしたことを考へてみた。

普通、信長の畫題として、よく見受けるのは本能寺の最期である。それも半弓に矢を番へて、最後の怒號を試みつゝある。彈かれたやうな彼である。然しそこに、いかに彼の顔が手負獅子のやうに描かれてゐるにもせよ、「失望」又は「憤恚」はあるにしても、信長の全人格を撚出した灼然たる彼の「我」は、嘗て共等に表現されなかつた。これ以外で私が偶々見かけたのは、異形な扮裝をした、美濃の城下の入口、齋藤の家老どもの呆然なる眼の垣根を、いかにも人を馬鹿にした面附で横切る彼の婿入りの行列である。さうして其他にもないでもないが、此等は、殆ど信長を中心とした彼の部將の活躍に過ぎないものであつて、信長の全人格が、燃燒的に核心的に刻銘されてゐるのは、稀覯であると言つていゝ。私の頭に、今反射的に閃いた、彼の畫題がある。彼の人格、「我」の燃犀的表現がある。

それは、清洲城内、信長亂舞の圖である。例の「人間僅か五十年、下天の中に比ぶれば、夢幻の如

くなり」のくだりである。虎穴に入らずんば虎兒云々、さうした陳套な心持ではなかつた。必死、それでも足りない。彼には、元來、炎々と燃えさかる「我」があつた。さうして彼のこの「我」は外部にまだその全體の力を發現されなかつたものである。彼は、永いこと、この「我」のうじ〳〵と、自分を壓抑するのに苦しんでゐた。機會を狙つてゐた。自分の「我」の爲の天地が、いか程の狹小であるか、如何程に廣漠たる自由の境地であるかを、彼は嘗て知らなかつた。どうかして彼は、この欝積した「我」の呻きを癒さうと思つた。言葉を換へていふと彼の「我」の誕生である。「我」のあけぼのである。亂拍子に舞ひつゝある、彼のヘロイツクな顏の耀き。生死の疑惑など煙のやうに消え、今や「我」の試煉に突々たる彼の眉、瞳。それにひきかへ、主將は氣でも狂つたかと、梁田や柴田や森などの弱小な打算的な、群羊的な顏。丁度、眞暗に點ぜられた一個白熱した光體のやうに、信長の全人格、殊に壓制的な强暴なその「我」が今し燃えつゝある、その光景である。

桶狹間も、私に多少の構圖がないでもない。普通は、桶狹間といへば、今川の本陣、義元切死の圖であるが、私は、それよりも、崖崩れのしたとある松かげに、一個駒を立てた彼信長を見出したい。バツクは一面のベタのうす墨。手前の崖の靑み、路のどす黑さが、やゝ褐を帶んでゐた。圖の上緣から、電光の幾條が洩れる。それは北齋の「山下白雨」に用ゐた電光の描線をそのまゝ踏襲したい。崖

の彼方に點々と白い今川の陣形が横はる。しかし信長の形相は、前の亂舞と同じ緊張した「我」であらねばならぬ。

□

今、價値の議論はさて措いて、凡そ人間の「我」に二種あることを、私は提示せねばならぬ。むつかしくいふと我の我、無我の我、この二樣である。名を更へると、前者は、征服と脅威とから成り立つた我であり、後者は奉仕と服從とから成り立つた我である。一は所謂英雄の素質であり、一は所謂聖者の素質である。共々に、世界の人文史の上に、或は相對し、或は反撥して存在してゐる所のものである。その特徴からいふと、一は外面的であり、多く政治的に表はれ、一は內面的であり、多く思想的に於て表はれてゐる。我國民族心理の歷史にも、常にこの二樣があつた。(以下簡單に、前者を我といひ、後者を無我といふ。)先づ私の頭に容易に浮ぶ「我」の雄者は、前に淸盛、後に信長である。無我の雄者には、數人を列擧し得ようが、私の最も瞻仰して措かぬは、祖師は紙子の九十年の僧親鸞である。親鸞の行跡に、信長の人格を加へたものは、口蓮だと思ふ。歌人と目されてゐる西行も、その作品から全人格を推すと、明かに親鸞と同じ奉仕と服從の妙諦に入つたものである。武將でいふと、差當り信長とは全く肌合の違ふ正成の類であらう。最近私の頭腦を支配してゐる浮世繪風景畫家から

いふと、信長・淸盛側の我に生きたのは、その作品から見て、北斎であり、西行なり親鸞なりの線の細い一絃琴の音色のやうな幽深な人格は、廣重である。

却說、前者の、强い把握的な排他的な我に始終したといふ點からいふと、私は、淸盛よりも寧ろ信長であらうと思ふ。淸盛は、その晩年甚しく此の我が弱められてゐた。義朝等の亡靈を夢みたといふ話もあり、またあの悲慘な狂ひ死、たとひ賴朝の首を墓前にかけよ云々の遺言はしたにしても、それは最後の息から發した弱い反抗に過ぎなかつたのだと思ふ。信長を見よ、彼の一生、何處にかうした弱い「我」の吐息があるか。桶狹間の夜襲から始まつて、彼の斷れ〴〵浮ぶ一生を通して、總てが、彼の獨特の悔なき我で一貫してゐる。私は、最後の幕、本能寺の自盡も、寧ろ彼の「我」の壯烈な最期として見たい。弓弦の折れた迄明智勢を惱ました彼、たとひ自盡の已むを得なかつたとはいへ、他の之に類したもの共が、ポキリとこれ迄の我を折つたり、逃避したり狂ひ死をしたりするのとは、非常な懸隔である。彼は最後の一息まで、自分の天賦の我に生きたと思ふ。斃れて後已む、これは彼の我の大道を表現した語である。

□

江戶の民衆の勃興は、戰國時代に端を發してゐる。その民衆の眼ざめの最大實現者は、甞ては所謂

秀吉であらう、(たとひそれが皮相的であつたといふ議はあるにしても)しかも之を産んだのは、信長である。永い藤原氏から源平、北條足利と、民族の我は眠つてゐた。壓抑の果の傳統的な惰眠であつた。眼覺むれば、相當に何事をか爲すべき者の眠も、多少は介在してゐたのだ。その眠を眼覺ますべき第一喇叭は、信長によつて吹かれた。以後「我」の行進が幾つらなりに續いた。江戸時代に一時この眼ざめが頓挫したやうではあつたが、それは表面の事實、政治的には默したれ、彼等は、思想に藝術に、享樂に、或は物資に、却つて强大な眼覺めを以て、暴君的な幕府を威嚇しつゝあつた。さうしてそれ等一旦にして集り起つたのは、あの幕府倒潰の悲慘な然し滑稽な大詰の幕ではなかつたか。

排他的にもしろ、奪つて之を彼に强いる我であつたにもしろ、兎に角我が民族の個性が確立したその曙は、永い民族史の上から、戰國時代であり、從つて我等の信長であつたのだ。

あゝ、日本有數の肖像畫家、大寫樂の如き今日存在してゐるならば、信長の單に顏を描いても、百の萬の民族我の歴史に勝ること數等であらう。信長の百の性格論、人物論は、無論無用のものとなら う。而してその肖像畫(信長の)の命題は、無論私の言ふ「我のあけぼの」であらねばならぬ。

—織田信長論—

(戊未二月二日朝、爽かなる陽の中に)

藝術の民衆化

昔の藝術は、貴族の獨占物であつた。詩歌音樂、凡て貴族搢紳(じんしん)の閑餘の手ずさびであつた。物の哀(あはれ)を知る心、風流心は、彼等の得たる藝術的素養の中核、卽ち藝術心その物に外ならなかつた。

倘以前にありては、生きる事卽ち彼等の事業の全部であり、狩獵漁撈は卽ち彼等の生活の形式であると共に內容その物であつた。斯る時に於て、藝術は最も實用的であり、彼等の生活の表現と些の間隙がなかつた。武器や食器の簡單な線を以て表示せる物の形、描ける線、それ等はやがて彼等原始民族の藝術であつたのだ。敵地征服、外蕃と戰つて勝利、その曉全部落が奏する月夜の舞踊や音樂は、彼等の幼稚なる而も最も原始的な、率直なる表現手法を以てした、彼等の藝術に外ならなかつたのである。

貴族と奴隷の時代に入つた。貴族は土地を併せて有し、凡ての所有權の上に立つた。政綱も閑(ひま)がちであつた。斯る時、始めて實生活を離れた藝術が漸く彼等の手に或は生れ、或は宣傳せらるゝに至つた。其の間、宗教の宣傳の巧みさもそれに加はり、神道佛教の經典祭壇、寺社の壯大なる建築は、彼

等の多數をして從來に嘗て見ぬ藝術の移植、纎細なる手法技巧の摸倣を生ましめ、降つては該民族的の獨創それ等を案出せしめるに至つた。然しそれ以外民衆――當時の大多數は、未だ實生活を離れたる此等の藝術を翫賞するの餘裕はなかつた。唯、戀愛其他の人事の本能普遍さを以て生じた舞踊や俚謡やが、彼等の大多數民衆に繰り返さるゝに過ぎなかつた。主に彼等民衆は田園に卽ち地方にゐた。都會は、貴族とその貴族に直屬する商賈との巣に過ぎないものであつて、足一歩都會を離るれば、依然たる原始的藝術――それは、藝術といふ名を冠するに、稍忸怩たらねばならぬ程のものの、存在に過ぎなくあつた。

×

藝術の爲の藝術、卽ち藝術至上主義は、經濟的生活の堅固なるもの、餘裕ある者に比較的發達し、また理解せられ、傳承せらるべきものである。他は生活に惶惑たりで、決して藝術至上の夢に耽ることは出來なかつた。卽ち當時民衆の經濟生活が最下位であり、貴族といふが資本家の唯一である以上は、決して野からは意識したる藝術家、又は藝術翫賞者は出なかつた。たゞ在るは、貴族の需要を滿さんが爲の低級なる藝人一派の野から生るゝに過ぎなかつた。而もそれらの原始的藝術、(野の藝術、卽ち民衆の藝術)も、洗錬せられ藝術の藝術らしくなるが爲めには、矢張り貴族の力を藉らねばなら

なかつた。

即ち民衆の生活が確立せず、安定せず、階級の差、即ち生活の差を甚しく有してゐる限りは、藝術の高踏なるものは、決して生れず、又鑑賞もされなかつた。

藝術の民衆化は、到底あり得べくもなかつたのであつた。

×

武士が資本家たるに至つた。武士も武士たる間は、所謂武士文學の類に止まり、未だ藝術至上の物は生れなかつた。然しその武士が漸く資本家じみ來るに及び、漸く武士文學以外の文學藝術にも彼等の好尙耽美は向つた。然し永年の所謂武士道は、此を徂害して、未だ純貴族の藝術至上主義の迎合程に甚しくはなかつた。民衆は始めて此の時代に實際の勢力を贏ち始めた。町人の勃興が即ち是れである。町人の勃興は、市の繁榮、各宿場の交通發達し始めた室町期に既に始まり、江戸期に於て、鬱然各城下の經濟的實權を握るに至つてその極に達しつゝあつた。階級は逆に喧ましくいはれたけれども、却つて第四階級たる商の手に、時代生活の祕鍵を握らるゝに至つた。即ち町人に對する、彼等の新資本家に對する、その好尙風流に迎合すべく雜多なる藝術を生んだ。詩歌音樂戲曲舞踊其他種々なるものを生んだ。しかもそれ等の性質が往年の高踏的特殊的のものに比較して、通俗的普遍的のものを生

んだ。俗曲の諸派、浮世繪、歌舞妓、此等は之を意味して餘りあり、また文學方面に於ても俳句狂歌川柳、或は世相小說たる浮世草紙、黃表紙、酒落本、人情本等、凡て皆是等の要求に叶ひて生れ、しかもその大半は、民衆の欲望、人間味の表現を基調としてゐた。從來の武士や貴族は、唯此の滔々たる天下の大勢を如何とする能はなかつた。

加之彼等また、從來賤視し來れる町人藝術の鑑賞に漸く傾き、町人たると同じき色彩風丰を有するに至つた。

現代に至つては、既に名義上の階級は撤廢せられ、且つ經濟的生活も次第に懸隔を失ひつゝある。此の間、藝術は鬱然として勃興した。藝術の流派には多あるとしても、凡ての色調が此の人間化、普遍化、民衆化ならざるはなきに至つた。眞の藝術そのものゝ中心には、古代も現代も些したる變體異樣を認めずとするも、その對象の人間として、特殊から普遍へ、即ち事は、藝術その物の如何に非ずして、人間たる我々に、即ち人間の向上、民衆の趣味智識の向上發展の結果であるとも謂ひ得られよう。

×

藝術の純良なるものは、人間性を深め、素質を敎養をより高める事は謂ふ迄もない。即ち純良なる

藝術が益々民衆化することは、卽ち民衆素質の教養の至向上を意味する。藝術は後天的人間の本能である。人間の教養性の發露である。戰爭も絕え、國家の對立も愈々寧日多しとならば、藝術に民衆が向ふことは世界凡て然りである。

唯要は、何の點まで民衆として（我々が）藝術に浸り藝術を愛翫すべきか。生活卽藝術の域より藝術卽生活の域、或は藝術至上の域に迄、如何なる考慮を以て、若しくは全然考慮する所なくして、至るべきか。此の點、來るべき不慮不測なる世界の變動、或は民衆の動搖、經濟生活の動もすれば頻頻たる不安、此等に左右さるべき我々の國家が、民族が、否我々が、何の點まで比較的第二の事業たる藝術に向ひ、如何程の努力を念慮を費すべきかといふ事が問題である。或は藝術の民衆化は、藝術家若しくは藝術それ自體には喜ばるべきも、他には全然欣ばるべき事でないかも知れない。

凡て程度である。尺度の如何である。

要は、我々の國家、民族、我々の存立、經濟生活の安定あつて始めての藝術であるからである。

卽ち藝術は、我々の餘裕を前提しなければならぬからである。(1.22.7.2)

民衆とヘロイズム

『民衆と』と、今私は見出しをしたけれ共、或は、『人間の共通性たる』と變へた方がいゝかも知れない。

ヘロイズムは、英雄主義である。英雄とは、私の意味は、『個の意志を以て、多數意志を制御する』者と定義したい。多數意志を制御し或は壓迫する。生殺の權は彼一個の手裡にある。然しそれが必ずしも人間存立上の惡とも限らない。或時には、斯くして强制された多數の意志が、善と美の彼岸に導かれつゝある。『自我の實現』は嘗て八釜しい問題であつたが、この自我も他の自我を顧慮する事なく實現せむとせば、是れ一種のヘロイズムである。

日本人たる我々、我々の祖先のみに此の考察を止めたい。舊日本、民衆の力が微弱であつた頃も、このヘロイズムの要求は、彼等多數にあつた。彼等は、實在の將軍や大名や士分達のヘロイズムに對し、暗默の間種々な民衆藝術の上に、彼等の欲求するヘロイズムの表象があつた。

第一は劇である。幡隨院長兵衛や、助六はどうであるか。此の二者は、正銘の、民衆が劇に藉つたヘロ

イズムの偶像である。事柄は稍變であるが、鼠小僧などの義賊の脚色、或は河內山などの浮浪漢、凡て大名や武士の特權階級に對する藝術的反感である。第二には、講談の類である。岩見武勇傳、其他何々武勇傳、數百種の此等英雄傳說は、總て泰平二百餘年間の民衆の仰慕讃嘆の的であつた。我々が未だに隨分莫迦げた講談を、しかもその修羅場を愛讀傾聽するのは、讀者たる我々が、直ちに岩見や荒木に依つて、自己のヘロイズムを滿足させてゐる證據ではなからうか。總て荒唐であり無稽であり虛誕誇張であればある程、ヘロイズムは滿足されるのである。

音曲なども、到る處此のヘロイズムはある。新內節の心中讃美、推奬の如きも、またヘロイズムである。世間の義理や親兄弟親方さんの戒(いましめ)もふつりと斷つて、死んで行く身の彼等の一齣は、凡て是れ自己の意志を何處までも立て貫かんずるヘロイズムでなくて、何でこれがあらう。ヘロイズムは、民衆の一般では、中々實現されさうもない。然るが故に、之を劇や音曲等に藉りて、纔かに其の實在化に滿足したのである。

浮世繪師の或者が、遊女を或は役者を畢生の藝術對象としたのも、遊女や役者に藉りたる、自己の變態的ヘロイズムとも謂へよう。總て纖小で無力であつた個性が、其のつまらなさに眼覺めた擧句、捉へたものが、ヘロイズムであつたのだ。

今の世の諸相も即ちこれであらう。煽動政治家の煽動演説も、民衆の勞働運動其他も、高下は附くかも知れないが、同じくヘロイズムの流に棹さす者である。藝術方面は無論である。作家が創作を發表するのも、畫家が自己の作に鏤心の苦を捧げるのも、凡ては自己の感激を他に賣らむとの心意からである。彼等の感激性が、外部に表現する時、已に他を俟つ時、ヘロイズムに動かされてゐるのである。宗教も然りである。釋尊が、三界の業苦を己身に負荷した意氣も、極端に云へばヘロイズムの表看板である。基督の荆冠も矢張り同樣．此等は或變態のヘロイズムであり、衆生濟度の看板を懸け乍ら、實は自分の創造した（或は、と信じた）偉大なる所謂る「普遍我」を民衆に力強く跡付けんとの努力であつたのである。日蓮などは、格別然りである。私の知る範圍で、一番ヘロイズムの匂の乏しかつた「本當の普遍我」の體驗者らしいのは、親鸞である。

宗教其他で謂ふ犧牲的精神も、實は大に自己を賣らんが爲の行爲であるとも、謂はゞ謂ひ得よう。敢然個我を斷絕して衆我の爲に盡す所に、矢張り一種のヘロイズムの火花が散つてゐる。『愛は奪ふ』と說く者あり、奪ふと代れば、是れ愛もヘロイズムとなつたのである。總てヘロイズムにも兩樣がある。露骨な、看板共儘の正銘擬ひ無しのヘロイズムは、所謂英雄であり、婉曲な、人道や愛や共他民衆の犧牲たる看板の下に、（大多數は、無論無意識であるが）結果から見てヘロイズムの一變態たるか

のものは、即ち聖者である。さうして現代、大正の今日ほど、民衆が前者の正銘のヘロイズムに眼ざめた事激しいのは、恐らくはあるまい。

女性解放の聲、卑近に謂へば鬼神お松や横櫛お富の芝居や、泉鏡花の女俠描寫に、一般の女性が共鳴し喝采するのも、從來虐げられた性（即ち女性）のヘロイズムの烽火とも謂へる。噫、凡て厄介なる哉だ。—大正十年八月—

好色藝術の諸作家

○

藝術に神の世界を書いたものも間々ある。メーテルリンクの『青い鳥』のやうに動物の世界を書いたものもある。然し凡て神といひ動物というても、その何れかには人間に對する暗示を準備してゐる。露骨なもの程容易に人間の世界に反射されて來る。如何にそれが純童話的の物であつても。

何ういふ爲に、今私は斯る事を云ひ出したか。畢竟藝術は人間が基調である。人間の世界を除いて他に藝術の世界は到底あり得られないといふ事を、大薩破に言ひたかつたからだ。私は、自分自身此の推理を肯定して、以下の議論を續けよう。

人間が藝術の基調であるといふと、その人間の成素は何であるか。『人間』といふ物の人文上の見方もあらう、また地理的の見方もあらう。然しあらゆる人文の上に地理の上に共通であるものは、性の別である。卽ち男と女と、此の二つの性だ。畢竟男性と女性と、此の二つの性が人間を成し、それから人文もその過程が生れるのだ。人文の一分科たる藝術は、勿論此の兩性の融和或は反撥、或は錯綜

の結集、その表現に外ならぬ。唯その度の濃厚であるのと、外延的に朧ろにそれに觸れてゐるのとの相異で、性（セツクス）が基調であることは無論である。その度の濃厚なるものに、私は好色藝術といふ名を與へる。

此のやうに考へて來ると、好色藝術強ち好色でもなく淫蕩でもないのだ。人間の表現が唯稍その一方に偏したものに過ぎぬ。或る場合に於ては、凡て人間は、好色藝術のモデルたるのである。

○

好色藝術は、人間に『性』を露骨に直截に垂示する。但し其の中にも、その表現の手法の相異によりてまた雜多の色別を形造つて來る。

例へば、私の今記憶にある外國近代作家で言うてみるなれば、好色作家と謂へば、マウパッサン、ダヌンチオ、シユニツツレルの類である。マウパッサンの師であるフロオベエルには、好色作家と謂はれぬでもないが（マダム・ボヴリーを例にひいて）、然し彼はまだ好色小說家たる純粹の域にまで滲入しなかつた。彼は矢張り寧ろ好色を描き乍らも、我々に或る道德を垂れてゐるやうな氣がしてならない。ゾラの如きも近頃は、天佑社などの出版書肆は、之を性的文藝と命名して、いかにも好色小說の作家の如く取扱つてゐるけれども、嘗て『讀賣』に某が抗議したやうに、性的文藝ではない、勿論

好色小說ではない。彼の特色は好色に非ずして、何處までも寫實である。科學的のメスを性の醜化に穿入したといふに過ぎぬのである。此意味でまた彼は偉大であるのだ。

マウパッサンこそは、全く好色に陶醉したやうである。然し若し傳統が彼にも（フロオベエルの衣鉢の意味）あつたことを許すならば、彼にも矢張りフロオベエルに似た、彼自身の苦い皮肉、冷笑味が、また彼の好色小說にもありと謂ひたい。晩年の旅行記の『水の上』に現はれてゐる人間唾棄厭離の心持は、既に初期中期の頻々たる長短篇の好色小說に夙にその暗示を現してゐる。彼は決して好色に陶醉はしてゐなかつたのだ。ダヌンチオでもさうだ。彼の『死の勝利』などでも、或る場合は陶醉歡喜の纎細な描寫もあるけれど、他の場面には、それから來る苦痛、猜疑、性愛の負擔の過重なのに苦悶の波を揚げてゐる。ダヌンチオの豐醇艶美な筆使ひは、この苦痛の方面を讀者をして看過せしめる程であるけれど、然し私は、彼の苦惱の心持を見遁しはせぬ。即ち彼にもまだ純然たる好色の好色は開かれなかつたのだ。シュニッツレルになると、全く一變する。如何なる彼の短篇も長篇も全く戀の陶醉全部である。そこに果敢ない別れがあるにしても、辛い憂目があるにしても、その根に蟠るは、甘い嬉しい溜息である。私は彼の作からは、此の甘い溜息の外何物をも嘗て見出した事がない。

○

日本近代の西鶴を好色本というて好色藝術の典型のやうに考へてゐる向もあるが、それは今日内務省位ゐではあるまいか。西鶴は決して好色作家ではない。彼は半面は寫實であり、半面は冷笑であつた。彼は外國に比較すると、マウパッサンは最も其の輪廓が似てゐる。其他卑猥の作家として出版當時既に上司から斥けられた蒟蒻本の作者も、矢張り餘裕綽々、決して好色の陶醉家ではなかつた。唯遊里を材料としたが爲、比較的蕩兒をそれによつて多く拵へたといふに過ぎぬ。安價な低級な解釋によつて蕩兒は生れたので、決して蒟蒻本その物の罪ではない。爲永春水の人情本こそは、是れ純然たる好色藝術である。稍型の陳き觀照の度の足りないシュニッツレルとも謂ふべきであらう。

トルストイと馬琴の比較は面白い事である。私は彼等兩人の男女の描寫に於て、その態度に於て、似てゐると思ふ。馬琴も隨分春水以上の際どい挑發的な描寫をし乍らも、必ず道義の皮を被せてゐる。トルストイも、『アンナ・カレニナ』などのやうに隨分性愛作家らしく見えて、彼は矢張り一流の禁欲主義、人道觀の皮を必ず被せてゐる。二人とも精力旺盛であつたこともよく似てゐる。

私は妙な事を今心付いた。それは作家の作物と作家の體質（其生活）との正反對である事である。姦通ばかり描いたやうに謂はれるゾラは、案外精力が弱くて、彼はその空想を作物に描いた迄だといふ話と、トルストイの禁欲は作物や議論だけで、彼は晩年迄その精力の人一倍であつた事實との對照

である。西鶴と馬琴にもこれが云ひ得られはしまいか。

本當に、好色と性欲の濫とから來るその酢の腐つたやうな、頽廢と糜爛、それに滲透し、個と我と一體になり了したやうなものが果してあらうか。我が近世文學史上に如何。私は、在りといひたい、末期の作者にである。彼等は、初期の者らの如き、冷靜と觀照味とを既に失つてゐた。殺伐な、内外多事騷擾な世相に、逆行してこれに凡てを遺却しようとした、さうした切ない欲求もあつたらう。一は、近代江戸文藝の突き詰めたその果は、斯うなるが當然でもあつたらう。一は、政局多事に追はれた幕府の監視の眼の寛なるに乘じたせゐもあつたらう。卑しい民衆の要求その物に露骨に迎合したせゐもあつたらう。恐らく不思議な程の猥雜と卑陋とのありたけを盡してゐる。但しそれが堂々たる作品といふよりも、小冊子、泛々たるそれらに多かつた。殊に都々一本、大津繪節本。さては小咄本の如きに。我等は、その多量と程度とに呆然たらざるを得ぬ。我等は、閨房をして白日下に暴露の感なきを得ぬ。暗示の生優しさではない。藝術から挑發物そのものへ。我等の好色藝術は、無論是程の低下を意味してはゐない。

（大正十年十一月。）

所謂軟派を辯ず

私を軟派だと謂ふ者が大分此頃多くなつた。否此頃さういふ評を、私自身耳にすることが多いのである。

私たちは、然程に軟派であらうか。一たい、軟派といふ名稱は、何から起つたらうか。新聞記者に硬派軟派のあることは、知れてゐる。軟派記者は、社會部の記者だ。然し私に冠らしたこの軟派といふ名稱は、さうしたものでもなからう。私は、所謂享樂心の多いもの、または享樂的な色彩の多い作品なりまたはその實行なりの著しいものに與へられた名稱であると、自分だけは解釋してゐる。所謂享樂的が軟派であるならば、硬派はどういふ側のものであらうか。このやうに硬派軟派と截然對立した硬派は所謂理窟家である。理論家、所謂理論に淫するものである。卽ちこれが、硬派でなければならぬ。墮落不墮落の點から謂ふと、享樂的であるだけ軟派は、墮落し易いとも謂へる、理論的であるだけ硬派は安全であるとも謂へよう。

然し墮落不墮落といふ點を除いて、何方が人間的であるだらうか。理論も人間の半面である。享樂

も人間の半面である。然し私が本號の卷頭に述べた通り、人間は到底享樂的から逸れることは出來ないと思ふ。かの支那哲學の性善性惡の兩說も、人間を享樂的にあらずと見れば性善であり、享樂的なりとすれば性惡である。唯享樂の折調、その控制が適當であるならば、人間として益々人間らしいと思ふ。

理論ばかりで、淚一點ないものと、理論よりも淚を先にするものとの相異。前者は硬派であり、後者は軟派であるかも知れない。私達は、要するにこの本然性、人間の已み難い希求によりて、凡て或は愛し、或は泣き、或は觀照し、或は沒頭する。或は冷め、或は熱するのである。私は、硬派性のみが人間の眞であるとも謂へなからうと思ふ。然し軟派性のみが人間の眞とは勿論謂へない。唯、硬派は後天性に要素を含む事多く、軟派は先天性に要素を持つこと多いのである。卽ち人間の本然性を比較的に保つものは、軟派であらうと思ふ。

然し私は、軟派中の純良なるものを希ふ。濫りに溺るゝは、これ軟派の奴隷である。私達は溺れ、愛し、沒頭するに當りても、そこに明晰な自分、冷めた自分、傍觀の自身と、不離不卽であらねばならぬ。觀照、靜觀の冷徹、聰明さである。これを永しなへに把持するものは、卽ち偉大なる人間の人間らしさである。卽ち我等の師長とすべき偉大なる軟派であると思ふ。

詞が、餘りに私の中心の抱懷を離れて、稍修辭の遊戯化したやうではあるが、要するに、私は人間らしさに於て、軟派たる非難を恥ぢてゐない。然しその純良精醇性を把持しようと努力はしてゐるのである。

私の浮世繪癖、江戸癖は、別に謂ふ機會があらう。即ちこの「軟派の辯」は、他日この議論の前提である。—大正十年二月

割り氷

◇

緊張した充實した生活を送る者は、其他の者たちに對して、彼自ら或種の犧牲となりつゝあるのではなからうか。これを作家と讀者とに見よう。卽ち、緊張した、充實した眞に興奮を內藏した作家は、凡庸な感情に慣れてゐる、讀者の爲に一種の犧牲である。緊張それ自體、充實それ自體は、無論意味のある事で、それ自身にも無上の快感を喚び起すかも知れない。然し少しく離れて考へたらば、これ程つまらない、割損な事はなからう。自分の充實や緊張は、他の爲の存在である。他を生長させる爲の資料である。言葉を換へたら、彼等の爲に、自分の折角の命が利用せられ、蝕（むしく）はれて行きつゝあるのだ。勿論相手が、自分の緊張や充實に引擦られて、同感の熱を現し來つたならば、愉快には違ひなからう。有意義でもあらう。然し大抵は、此方の思ふ半分も理解と共鳴とがないのだ。それに自分の緊張や充實で以て、傀儡師が傀儡を操るやうに、群衆を操る譯にはいかぬ。こゝに狡猾な、半熟な生活や人生を糊塗したり回避したりして暮す者たちの、怜悧さが分るのである。

書畫骨董、凡て過去の物であればある程、珍奇である筈だ。その所藏者が、天下一品と謂うても、咎める事は出來ぬ。然しその價値は、その所藏者の巧みなる手段と思案とから生れた、自家廣告と自家吹聽（勿論價値の）とに由るものが多い。そこに骨董癖書畫癖者の狡智と陋劣さとがある。（自分一個の娛樂で濟ます、相手に對し衒ふ心があればある程にである。將來之で儲けるの儲けないのを論ぜぬのだ。）浮世繪の蒐集にも、私は、この種の人々のあるのを幾多眼にした。私は尤もではあると思ひ乍ら、よくも暇に明かしてそんな五月蠅い吹聽や廣告が出來たものだと感心する。私などの忙しい身では、いかに貧乏で、自分の蒐集から儲けたいと思ひはしても、その面倒臭さを耐へる譯にはいかぬ。

◇

藝術家は、凡て凡庸な一般人よりも異常な感覺を持つて生れたと謂ひ得る。或は之は生來でなくして、後天的のものかも知れない。卽ち藝術家たる素養條件として、彼等が齲齪修練して得た物かも知れぬ。畫家の光線に對する色彩の感じなど格別その例である。私は、此の點からは、今の益々個人的になりつゝある未來派立體派の繪畫などは、該個人のみの變態的翫賞の的であらうと思ふ。こゝへ來ると、トルストイはえらい。彼の『藝術論』（原名「藝術とは何ぞや」）は、此の種の感覺や性格を民衆

的に、個から全般に引擦り下したものが、本當の藝術だと、一面民衆藝術の宣傳代りのやうな事を極言してゐる。或は、極端な藝術の藝術階級から見れば、トルストイは、民衆に膝を屈げた馬鹿者であるかも知れない。然し時代の空氣、民心の傾向は、少からずこの『藝術家』なる特殊階級に影響を與へてゐる。如何なる變態な個人的な彼等も、多少は、時代と民心との支配下にある。

◇

浮世繪師の或者は、慥かに變態性欲者であつたであらう。或者は或は、執筆の瞬間のみに、變態性がその逞しい勢を現したのかも知れないが。姦通、私通は謂ふ迄もなく、時には近親相姦のやうな事或は獸姦にまで興味を持つてゐたらしい證據は、彼等の餘業に累々として枚擧に遑あらずだ。一つは斯るものを要求した民心時代の頽廢もあつたらう。一つはそれを感知し、或は稀には自ら此等を創造した、卽ち彼等の敏感なる變態性欲、或はそれに對する興味があつたであらうと思ふ。

◇

爲政者と作家とに、若干考察を廻したい。我が近世文藝の上に之が例を引かう。先づ我々の眼に浮ぶは、例の京傳らの恐悚した寛政二三年に亘る洒落本の禁である。此の洒落本、それ程爾く爲政者をして顰蹙せしめる丈の、効果の上の果して價値があつたらうか。我等をして當時の洒落本に思ひ浮べし

めるに、此の寛政二三年が、格別洒落本の、濃厚なる挑發事態その物の期でもなかつた。京傳手鎖以後、なほ化政天保に及ぶまで洒落本は行はれた。京傳被罰と接近した寛政末享和に於て、また夥しきものがある。谷峨の寛政末の二筋道其の續二篇や、一九の享和初めの「素見數子」や、凡て京傳の「絹篩」、「仕懸文庫」の類に大差はない。殊に振鷺亭の「取組手鑑(とりくみてかゞみ)」などは、寛政五年版であつて、しかも皮肉にも挿繪内容、その部分の描寫、京傳の禁止本以上である。勿論京傳の被罰には、彼及び地本問屋蔦重が、幕令を巧みに潜(くゞ)つたその狡智さに對する、幕吏の憤怒も伴つてはゐたであらうが、物その物に對する意味も無論あつた筈である。それ程に此の京傳のみが惡化力强くして、他は弱かつたのであらうか。自分は、此の寛政初期の苛嚴と以後の放任(?)の態とが、比較上可笑しくてならぬ。殆ど相同じいからである。それにしても、より以上、精細な耽溺情調描寫の俗曲は、(めりやす新内など)昔の豐後節以外、甞て公式に禁の話を聞かぬ。卽ちこゝにも時代の上から、物の上から或る作者のみに與へた不公平さがある。京傳の名聲高く、隨つて讀者の範圍汎く、以て惡化烈しとの理由が重きにあつたかも知れない。すれば、京傳、その卓拔な技倆に己惚れて可なり。でなければ、不公平を怨むべしだ。現在の明治大正の作家と禁令の間にも、此の種の模糊がありはしないか。

―大正十年八月

秋光朗徹

○

秋の草花で、大好きなものは、コスモスだ。光は無論晴天で、明るい晝すぎくらゐがいゝ、場處は廢園といつたものなら一層いゝが、然し汚ない畠地でも構はぬ。たゞ欲しいのは明るい光と透いた蒼空と、この花の小搖れである。板畫の氣分丸だしといつた感じがする。ちやうど廣重の藍と他の二三色との節奏のやうないみじい色と匂ひ。

何だか、かう書いてゐるだけでも、私には或る愉悅の感が伴なふ。甘い、遣瀬ない、焦れつたい、さうした言葉のこんがらがつた氣分、少年期から青年期へかけてふと出會つた或る甘いシーンのやうに、それに浸つてる現在の自分のやうに。

爛れた體も純なものに歸り、疑ひつ疑はるゝ心も、素直になる時だ。

○

旅がしたい。時間はどうにでも作られ得る。但し金がない。それがため累はされて、心はいつも蒼

空の彼方を見つめてゐる。洋行も死ぬ迄には一度はしたいと思ふ。然しせめて北滿洲あたりでも可い。異國情調さへ味はれゝばいゝ。北海道の密林も、九州の島原あたりも、私の仰慕の地である。行きたいな。溫泉に浸つて、しやれた貴族遊びをするもいゝだらう。然し私の一ばんしたい事は、貧しい旅だ。不自由な旅だ。さうして驚異から驚異へに移りたいのだ。然し如何に貧しい旅とはいへ、矢張り金の苦勞は要る。それに驚異といふ事が果して私の期待通りに行くか行かぬかといふ危惧もある。それに私の家庭は、迚も、半年か一年或はそれ以上旅をしつゞけたい、私の要求を容れてくれさうもない。何處かで今、馬が嘶いた。近くの厩の馬であらうか。ピーンと冴えて響いてゆく。あの音のやうに、歸ることなき旅路。

蒼空がまた私を誘惑する。光も今日は久しぶりに晴れて、「けふこそはお前を」といはんばかりに挑發の手を擴げてゐる。―大正十年九月十六日―

碧落搖々（抄録）

○

ジョルヂオとイツポリタの物語り、私はダヌンチオの薔薇叢書では、此の二人の物語り、「死の勝利」を一ばん愛讀した。「快樂兒」や「犠牲」は、「死の勝利」に較べたら、餘程光澤が乏しい。地味である。それだけ絢爛眼を奪ふやうな、變幻文なす戀の奏歌が缺けてゐる。昔讀んだ物の中で、未だに忘られぬ感激は、「死の勝利」だ。道義を基準にしたしないに拘らず、「死の勝利」と同じやうな不倫の題材にも拘らず、トルストイの「アンナ・カニレナ」などとは比較にならぬ感激と好奇とがあつた。それが私はまた此の頃頻りに讀みたくなつた。この二三日經つて暇のあり次第、雨のそぼ降る晩にでもしみじみ讀まうと思ふ。七八年前にまだ然程に兩性の蠱惑や祕密を知らなかつた當時にひき較べて、今は屹度深い同感がそれにあるであらうと思ふ。イツポリタ、イツポリタ、私はイツポリタの出現を待つてゐるのだ。ジョルヂオのやうに惱まされても構はぬ、或はジョルヂオのやうに最後の勝利を得なくともいゝ、その道程だけでも可い。あの媚笑、艶態、嬌姿、さうして生命の溝を一跨ぎにするやう

なジョルヂオの全緊張した惱み、束の間の歡喜。私は少くともジョルヂオに肖りたい。然し諸君よ、案じ給ふな、恐らくイツポリタの如きものは、永久に私の眼前に現れぬであらう。

○

數年來、私の蒐集した軸仕立になつた浮世繪版畫の美人畫の竪二枚續が、數十本ある。初めは的確に數を知つてゐたが、今は判然知らない。それ程多くなつた。全部が美人である。遊女も藝者も水茶屋の女も夜鷹も、町娘も町女房もある。行燈を手に持つたり、懷紙を銜へたり、雨傘をかざしたり色々な扮態、色々な顏と衣裳との陳列。それが大津繪の踊のやうに、私の前に行列する。然しそれは夏期は出來なかつた。私の今の借家は造作は粗雜であるが、風通しは誰も感心する程度。迚も大切にしてゐるそれらの一幅でも掛けて置けさうもない。パタ〳〵、煽られてすぐ破れて了ふ。で仕方なく友人の油繪の額くらゐで胡麻化しておく。愈々秋冷の季に入つた。障子を締めていゝ季節となつた。氣分もしつとりと、さうした甘い物を欲する時分となつた。これからならば掛けても大丈夫だ。一週間おき位に、二三幅位づつ掛けて行つたら、當分は樂しめる。或は、それが私の本當のイツポリタかも知れぬ。さうした中で、物を書いたり友人と牌を切つたり、訪ひよる袖の派手を迎へたりする快感は、まづ謂はずにおかう。

○

夜が更けた。私は書き物を中絶して、寢に就からうとした。と、明るい電燈の灯ざしを受けて、妻と子との寢顏がそこにあつた。兒は女子、來月で滿一歳になるのだ。初め濕疹やら中耳炎やらで衰弱もし可愛げも乏しかつた兒が、此頃はすつかり丈夫になつた。私の兒としては、人の驚く程肥えてきた、男のやうな顏になつた。此頃、私が兩手を出すとすぐ抱かれたい表情をする。每朝私が朝寢をしてゐると、その傍で彼兒も寢てゐて、眼ざめて、私の髭を嬲りに來る。二三十分は、妻がゐなくても、大人しく私と寢てゐる。さうした時、私は是まで胸に抱かなかつた愛着の思ひを不思議に沁々と抱く。その兒の寢顏である。キツと口を結んで、如何にも分別者らしく寢てゐる。

妻は、妻で、癖のやうに今宵も眉を顰めてゐた。貧乏でもあるし、思ふやうに外出もさせないし、平常は私の我に蹴落されてゐるから、何とも言はないが、寢てゐては、夢に不滿の數々を見ることも多いのであらう。それにしても、二人ながら、今蒲團を胸までかけて、顏を曝してゐる。殺されてもいゝといつた形である。それが、私の手によつて生かしも殺しも、喜ばしも悲しませも。何うにでも出來るやうであつた。私は、寢卷に替へようともせず、永い間凝と見惚れてゐた。誇らしいやうな感じもあつた。『濟まない。明日からは此の二人にすつかり奉仕してやらう』といつた涙ぐましいやうな

心もあつた。

斯うした懷を私に持たしめる爲め、その機緣のために、二人が寢てゐるのだ。とハッと思つた。さうしていつもの自分の生きて行く著しい太い線が、急に細く弱々しくなつたやうな氣がした。

○

けさ、東朝に、名古屋高工出身の某氏が、佛國國立美術院に第二番の成績で入學した話が載つてゐた。日本美術建築界の譽れのやうに書かれてあつた。私は、この『譽れ』といふ一號の大きな見出しを見て今更嫌氣がした。それも譽れには違ひなからう。個人としてはである。然し日本を持ち出すやうな事柄ではない。然しさうした些事（私は爾く思ふ）に喜ぶ程日本の建築美術が認められ、外人と相拮抗し得るといふ喜びもないではない。國際的に日本の美術建築は從來外邦に認められなかつたものか。私は、無關心に行はれた記者の筆ではあらうとは思ふものの、妙な反感に似たものがそれからあつた。他に認められて喜ぶのは、譽れと稱するのは、自分が從來小さく、つまらなかつた故である。

然るに日本の美術建築は、爾程つまらないものと、自らも稱し、他も認めてきたのであらうか。私の知つてゐる範圍丈でも、浮世繪はどうだ。我々同胞の淺識が、浮世繪を有難がらないだけ、外人は有難がつてゐる。日本に關する、政治宗教其他一般の研究（外人側の）も幾種も刊行された。然しその

研究書目三百以上を數へるのは、浮世繪のみではないか。

浮世繪の中の廣重(ひろしげ)、歌麿(うたまろ)、北齋(ほくさい)、寫樂等の固有名詞は、世界の固有名詞となつてゐる。丁度我國人の一部分が、泰西の畫家を記憶して有難がると同樣に、外邦の美術愛好者は、一般に我國人が彼に向ふ熱度以上に、我が浮世繪師を崇めその藝術に親炙してゐる。彼等は北齋や廣重、歌麿を、古典の大畫家ラフアエルやアンゼロやダ・ヴヰンチと同樣の高さに置いてゐる。その研究書も、相當以上に權威ある物が頻々と出てゐる。日本はさうした光榮を有してゐる。然しこれをしも私達は、別に譽れとも何とも思つてゐない。あるが儘の事と思うてゐる。

現に近刊の向うの美術雜誌、スタヂオを見ても、カラーを見ても、我々の浮世繪板畫の踏襲であり摸倣であるものに頻りに出會ふ。少くとも感化の著しいものがある。然しこれすら今では尋常茶飯に私は思つてゐる。何が譽れであらう、それ丈の物があつたのだ。若し無いとすれば、彼等に負けない物を創造すればいゝではないか。それ程、我々の歷史は過程は、現在の貧弱のみを産み出してゐるのであらうか。

いつも感ずる事乍ら、私は、けさ新聞を見てゐて、これ丈の事を矢張り思つた。勞働問題や政治や其他は無論人々のいふ通り五十年も百年も彼に遲れてゐるであらう。然し美術はといふと、私はハタと

昏迷せざるを得ぬ。遲れてゐるのか進んでゐるのか、薩張り分らない。殊に繪畫はである。

○

愛欲に疲れ果てた、飽き果てた後は、人間はどうしたらいゝのだらう。そこに遁世、厭離があると安價に言へばそれ迄であるが。私はまだそれ程突き詰めてはゐない。不徹底だとは、自分でも知つてゐるけれども、妻に向ふ時、兒に向ふ時、時々斯うした侘びしい心が魔のやうに覗く。愛が深くなればなる程、それが忌はしいもの、避けたいものになつて來る。愛に沒頭が出來ないのだ。可哀想とはよく知る。可哀想と知るが故に此の心も起るのである。

いつ迄も同じ事に繰り返されてゐる。いつ迄も自分の體に降りまつはつた絆、さうした物が、彼等に對する私の愛欲の心である。露骨に謂へば、此頃はすつかり彼等に性的の興味も無くしてしまつた。果まで突き詰めてしまつた。或は性的にもつと突き詰められる餘地が、彼女に或はそれ以外の女性にあるかも知れない。然しそれは他人の話。私には、私のやうな蒲柳の身には、さうした馬のやうな性的慾はない。何處まで行つても同じ事だ。相手を變へても同じ事だ。肉、肉、肉、何處まで行つても私の爲には灰色だ。詰らない物だとしか思はれない。

その否定の心から來るせゐもあらう。私は、然程突き詰めた興味のない彼等から、餘分にいつ迄も自

分の愛を強いられる。その愛の負擔が正直にいふと莫迦〳〵しいとも、或は暫らくそれ等から離れて凝つと考へてみたいとも思ふ。暫らく彼等から離れてゐたら、何うだらう。昔の負擔であつた愛欲が、その時には美しい夢のやうな、全的に自身が欲する物と、なるだらうか何うか。さういふ空想が時偶起る。

さうした時、聯想するのは、僧房の生活である。或はそれ以上の漂泊の生活である。樹下石上といふ事は、仇や疎かに言ふべきではない。然し私の心に、默つてこの語が思ひ浮べられる。殊に此頃のやうに、すつきり晴れた、藍の桶を傾けたやうな朗々とした秋空に向ふと、斯うした懷が、強い誘惑の力を以て湧く。何がじゝうら悲しい。惆悵無限といふ言葉があるが、その通りの感じである。涯の涯まで、さうしてそこに降り懸るものは、いみじい觸られづめにして居りたいやうな肌心地のいゝ陽の光である。私は振り仰いでそれを眺め、俯して茶碗や箸をガチヤガチヤ洗つたり兒のギヤアギヤア泣いたりしてる聲を聞くと、非人情と彼等は嘆くかも知れないが、いつそ一思ひに飛んで了ひたいやうな氣になる。それがいつの間にか、僧房――漂泊と、私の幻想が描かれて行く。

―大正十年十月、「名古屋新聞」。

久遠の處女性

私達の眼の前、この世間には、色々な女性があります。然しこれを三つの色分けにすることが出來ます。卽ち一に處女、二に母婦、三に娼婦です。勿論年齡の如何に關はりません。處女というても、普通未婚者の年齡たる二十歲前後の女性のみとも限つてゐません。一生獨身でさうして淸操を保つて死ぬ女性もあります。これなどは、生れ乍らにして處女たるべき一生の運命を持つてゐる人です。二十歲前後で旣に母婦でゐる女性もあります。また一生を娼婦として送り、純潔な生活をたゞの一日も知らずに果てるものもあります。勿論この母婦とか娼婦、處女とかいふ三つの色別けは、その外形——世間的のその人々の境遇からのみ名づけられません。その人々の個性、心意の傾向などの相異からも、慥かにこの三つの色別けは出來ます。從つて或は娼婦たる境遇に在るものにも、案外その性格は、普通の處女に均しいやうなものを持つてゐるのがないとも限りません。案外、處女の生活に居り慥かに處女である女性が、その性質、それが外部に現れた言語風采等に於て、處女らしからぬ娼婦にも紛らはしいのがあります。却つて反對にその處女たることを或は打消さしめる程の、他人に危險と

疑惑とを抱かしめる程の、左程の醜さと卑しさとに富んだ女性がないでもありません。

私は、總ての女性に對して、處女性を有すべきことを要求します。寧ろ望みます。全部が處女であれといふのではありません。母婦であることもとより女性の務です。（娼婦は問題にしません）然しその母婦の境遇にある女性であつても、この處女性だけは、保たせたいといふのです。（勿論この處女性は、精神的の意味です）處女は無論この處女性の豊富さがなくてはなりません。決して蝕んだ處女性ではいけない。爛然として輝いた青春美、その光は紅玉のやうな透明さと花やかさとなければなりません。實際に處女であること、或は永久に處女性を我身から取落さないこと、これが私の總ての女性に望ましいことです。

處女の美が、人間の、この落寞たる人生の唯一つ咲き出でた麗はしい花であることは、謂ふ迄もありません。然し總ての女性は、その女性たる本質上から言うて、結婚しなければなりません。然る時處女の舊い衣は脫ぎ棄てられて、母婦たる新しい人生の晴着、然しそれは決して浮薄な華美なものではない。意志の弱い女性には、却つて苦痛であるべき左程の人生の辛い試煉、過勞と苦鬪、然しその耐忍から生れる質實な幸福感、滿足感に滿たされた人生の晴着を着るのです。假令結婚生活に入り、それを續けてゐる女性であつて、子供を產まない、名目上の母婦ではない者であつても、私は、結婚が

處女から母婦への　機と見てゐる自分の主張の上から、此等の既婚女性を總て母婦といつてゐます。實際に母婦であるもの又はその資格を持つてゐるものとしてこれを取扱ひます。私は、左程に處女の結婚を一個浮薄な享樂の欲求から生れる事とは見てゐない。女性の本能、天職たる母性の發揮のためと信じて行きたいからであります。

然しこの母婦にあつても、一面必ず處女性（處女とは謂つてゐない）を失はぬやうに望ましいと思ひます。子に對して母性を十分發揚するは結構です。また十分發揚しなければなりません。然しその婦人が、自己の夫に對ふ場合には、たとひ百年相許した隔てない間柄とはいへ、その間この處女性を以て對つて欲しいのです。決して娼婦の態ある勿れと謂ふのです。

母性は、女性の本能です。然し處女性は、また女性の美を永久に壞たしめない最後の高貴藥です。強ち男性に對して、自己の美を不斷に認められる上に於てと謂ふのではありません。あなた方自身の尊い美を惜しむ點からです。然しこの不斷に處女性であることが、轉じて人生に一點の紅を添へ、砂漠の淸泉のやうに、人生に活力と生氣とを與へないでもありません。特にあなた方の夫たるべき男性に、如何程の幸福を與へるかは、申す迄もありません。

私は、「久遠の處女性」を描いた二人の畫家を知つてゐます。一人は西の國のラファエルです。一人

は我が日本の鈴木春信です。ラファエルは、文藝復興期三大天才の一人。春信は、我が浮世繪史上、錦繪の創造者です。然し何れも處女美を描いた畫家です。ラファエルの聖母は誰方も御存じでせう。春信の女性も、これに劣らぬ程の處女性を表現してゐます。彼は、たとひ遊里美人を描いても、そこに溢れる處女美があります。

私は、此の東西の二大天才が讃美したやうに、あなた方の總てが、久遠に處女性であることを望んで止みません。—大正十年七月、「女學生畫報」

春信の一枚繪

こゝに、或る國の或る美女の群がある。迚も現し世の我々の視界では、窺ひ知ることの出來ぬ、丁度微妙な樂器の音色にでも陶醉されて、ホツとしたやうな、ありとは見えて捉ふべからざる、我々の如き凡庸なものの感覺では、どうしても實在化することの出來ぬ、眞に縹渺たる世界の、その群である。徒らに生活の波に掀飜され、紅塵の巷にそのひよろ長い貧しい影を曳いてゐる我々には、しかしこれらが迚も及びもつかぬことではあらうが、顧みて深い思慕と瞻仰と、さうしてこれがよしや他界の幽玄な消息たりとも、その幾分なりともせめて窺ひ知らうといつた、おづ／＼した、しかし緊張した蠱惑（といふも、餘りにこの現實の世のセンジュアルな共等めくが）と魅力とを感ぜしめずにはおかぬものがある。

若しそれ、我々が卓上電話の急遽しさや電車のカーヴを軋る躁音や、總て平常この文明のいやな呟きを耳にするやうになつても、一念、この他界の消息にあくがれるたび、丁度美女のうちとけたしかし神聖な宴樂の群れを、無作法な醜惡な洗錬せられざる下部男の窶姿が垣間見る、それのやうに、好

奇ともの恐れと、しかし深い羨み、思慕の情とを我々をして湧かしめずにはおかぬ。人々よ、たとへば、此の私の叙述に最も恰適した、その國の一場面を、今私をしてこゝに展開せしめよ。さうして人はいさ、私のみの深い感激と、たぎる淨化されたあくがれの顫動とを、人々よ、姑らく聞け。

×

何處かの木戸の前である。左手は、低いうすい澁色の板塀が幅びろくつらなつてゐた。入口の向つて右には、格子の柱が見え、細かいその大小の木組が、濃い代赭につぶされてゐた。右の格子先を、蟠まつたのと、歩みかけたのとの二匹の狆が、うす墨の柔かい、その小さい爪のあとも知られるやうな土の塁りを、白く劃つてゐた。場面の中央に、若竹の色の淺緑の竹樋が上から垂れ、その右左りにうす墨の土の色、格子先のとすぐ眼近のとを界して、うす鼠色の石甃があつた。さうしてこの石甃できざみが出來て、手前はやゝ低くなり、その此方の平面と、格子先の高みとの堺を、竹樋から、右左りへ、白い布を細長く晒したやうな引張つたやうな、水が圖案的に流れてゐた。雨は、上縁の左の雲形に仕切られた上の囲みから、横なぐりに然し細い十數の線で、しぶかれてゐた。さうしてそれは、濃い緑青の色に光つてゐた。

かうした背景に、手前の濡れた地の上を、ゆきかひしてゆく三人の女性がある。一人はやゝ若く、

恐らくまだ二八になりきつてゐないであらう。日本の江戸といふ時代、その中世紀、寶暦明和の頃を思はせるに足りる、前髪の無い（たゞそれらしい線はあるにしても、明治大正が產んだ丁度鳥が巢をくつてゐるやうな、嫌な廂ふうのものではない）風俗史家の謂ふ燈籠髮なる髮かたちをした、後世の島田髷の濫觴のやうな玉蟲のやうな形の、大きく止つてゞもゐるかのやうな髷がそこに結はれてゐた。それが、畫面の竹樋の左りにあつて、もう數步で、我々の視線から沒しようとしてゐた。その右竹樋のふちに傘を擦るやうにして、相合傘になつた、同じやうな髮かたちの二人がゐた。これは二人とも四五の春に近い、それともそれを越してはゐるが、生來の老けぬ性がさう見せしめるのか、若やいだ然し背のすらりと、（丁度左手の二八にいたらぬ若き女性の額は、相合傘の此方になつた一人が、今し振り向いて、ものいひかけてゐる傾げた顏のそれよりも、落ちかゝつてゐるやうで我々をしてはらくく思はせるふうに、その女の二の腕の附根あたりの袖がみにかけられたその手拭の白い線あたりのそれよりも低くあつた。それほど、一人は低く二人は高かつた。）一人は紫色の袷を着、一人のその並んで石甃に近いのは、濃い草色の着物を着てゐた。云ひ忘れたが、左りの若い女性の着物は、やゝ太きにまじつた細やかな淡い樺色の千筋であつた。

私たちの視線は、この右手の二人にひきよせられる。殊にその並んで此方よりの、橫顏を我々に見

せてゐる、今通りすがりの娘にもの言ひかけてゐる風のその一人に。彼女は右手にだらりと、白い、中に橡の葉の形に點々と濃い藍の絞りになつた模樣の散らばつた腰卷やうのものを抱へてゐた。腰卷といふのは間違つてゐるかも知れない。然しかうと見ても、それが不思議にも醜さを伴はぬ。それ程美醜を絕した感じにそれらがあつた。帶は、この女だけ一人、前結びに、うすい草色の松の葉めいたものを白く拔いた中に、紫色の大きな雲形を眞中に入れた地味でいきなのを締めてゐた。（この時代を寫した『日本風俗史』の條下には、「庶人の婦妻には、前結び間々行はれしも　晴れの場には後結びとす。」とあれば、これは、庶人の婦妻ならぬこと明かである。）その左の乳の上あたりに、紫の色を透いて、白くポツリと四つ目のやうな紋があつた。

私がかうやつて、中心の一人に氣を奪はれてゐるのを、ホヽと心で笑つてゐるやうに、靜かにこの女の左に寄添つて步いてゆく今一人があつた。その女は、この女とは異つて、藍微塵の帶を後結びにして、左手は、雨のしぶきを嫌つてたくしあげた帶下あたりで隱れて見えない。靑いその着物の裾には、細い土筆のやうなでないやうな細かい模樣が、塔の尖のやうに山なりに組まれて白かつた。

三人の女の視線！　そこにも、我々のやうなものの臆測だも許さぬやうな、何物も觸れることの出來ぬ彼女たちのみに理解された世界があつた。少女の仰向いて眞中の振り返つた大柄の年長けたのに

向へるそれ。その向はれた女の、これに相手になつて、足はなほ歩みを止めぬそれ。その左りに這入つた女のこれよりは一二歳は下かと見える程、より多くおとなしう、つゝましく少女と連との挨拶に耳を傾げ乍ら、なほ降りしだく雨脚のつれなさを凝つと見据ゑてゐるやうなそれ。穿き物は、若い娘は、黄の木地の透ける、眞中の前結びの帶の女は黑塗りの華奢な、共に日和下駄であるにもかゝはらず、これは、黑い鼻緒の同じ色の塗下駄を穿いてゐた。

私の想像の翼は、今此の繪がこれら三人のどうした場面であるかに及んだ。おゝ、さうだ、餘り美人に氣を奪られて、これ迄見落してゐたが、右手格子の上に、「明日休」と書かれた木札が懸つてゐる。してみると、これは當時の風呂屋である。丁度守貞漫稿にもこの通りな木札を挿畫にした風呂の記事がある。すればこの三人の婦女のうち、いつてみるなら、眞中のは、無論當時の花柳のもの、その洒脫にしてやゝきほひ（といつて同じからうしたものを描いた國芳畫とは霄壤の差あるしほらしさ）を帶んでゐる點からいふと、藝者の一人であらう。これに振向いた若い娘は、帶の後結び、幾分野暮くさいことから窺ふも、町家の少女。さうして草色の女も同じく町家のものといふべきであらう。してみると、藝者風の一人は、錢湯の歸り、少女も同じくその歸りである。今一人の草色は、下駄の形から云つても何かの用か又は知つた人の家か、又はいゝ人の晴れて逢はれぬやうなそれの家へ行つて

はかない然し初々しい喜びを得ての歸り路、雨に降られてこゝらあたりに雨宿りしてたのを、折から髮結の家で知りあつて、多少好きあつたらしいその知己のこの意氣なのに、相合傘を賴んだとでもいふべきであらう。その時、この意氣なものは、この初々しいものをいたはる優しい姉のやうな氣分にゐたであらう。現に黃ろい紙の緣を藍にとつた奴傘は、やゝ後ろへ傾げて（雨は彼らの背にしぶいてゐるから）、しかもその細い柄は、藝者風が下を、町娘風が、上を強く握つてゐた。相合傘にして貰つてゐる禮心に、せめて自分が持つて行かうといふやさしさからであらう。

　雨のしぶきにこの三人の姿態、その異なつた方向の、いかに自然に描かれてゐることよ。少女は、傘を半すぼめに、左からしぶく雨脚を、せめて上半身だけは濡らさじとしてゐるらしい。相合傘の二人のそれも、裾は恐らくしつとり濡れてゐることであらう。左の少女の手拭は、乾いて肩に、その後結びの帶に垂れ、意氣なるは、だらりと、肩にやつと支へてゐるだけ、その先は空間に眼に見えずゆらめいてゐるやうである。湯屋の前の「さやうなら」、それに折から相合傘の情をうれしんでゐるそれ。恐らく眞中の口からは、今、『餘りお浮氣でないよ』と、かうしたことが、別れの拍子にいはれてゐるのであらう。『お門違ひだわ』とでも、振向いて少女はいらへてゐるのか。相合傘の娘は、この少女を餘りよくは知らぬらしい。かうした時、誰しも感ずる間の惡さを紛らかす、その面伏せな眼は、行手

の水溜りを見つめてゐるのか。草色、うすい樺、代赭、相合傘の二人の共に袷着のそのまくれた裾のおつとりした植物性の赤い裏地の色。その間から、すらりあらはれた二人の共に左り足の脛の白さ。微塵もいやしげなく、この國のこれらの美女の特徴たる纖手細腰、さうしてその眼——よく通つた鼻なく小さくすぼんだ口なく三日月の眉なければ、清らかなせゝらぎを今し飛べる麥魚の如きそれ——の眞に夢みるやうなうすくささやかに細きその眼の形、それらと伴つて、この『湯がへり』があつた。

×

私の解說は、餘りに長すぎた。かゝる萬人向きならぬ、咏嘆的な筆遣ひは、或は、氣短かな諸君の怒りを買つたかも知れない。これはこの頃殊に著しいわが癖である。人々よ、これを赦せ。さて如上の敍述は、これ鈴木春信畫くの或る一圖、即ち風俗四季歌仙の内の一枚五月雨と題する（中判、明和六年頃の製作。彼歿年前の一年）『湯歸り』の印象である。色彩の調和、交響。構圖——人物と背景との合致。その盛り上つてゐるやうな、眞に非實在の國の美女の存在、優婉な艶美な描線と姿態。春信の諸作品中、彼の典型的美人畫の一と信じて措かぬ所のものである。私が、最近しみ〴〵憧憬と哀慕の聲を慄はしつゝある浮世繪の美女の群に於て、最も執著して歇まざる所のものゝ一である。

一九一九。二。一七夜稿

描かれしもの

×

描かれたものは、實有よりもより多く美であり、また專有的である。殊に、それが時代を異にした類型すら現在せざる世相のものであればある程、美は追慕の心によつて煽られ、專有の感は觀者の想像の翼によつてまた强い。生きた愛の對象即ち實有の人間を、此の如く美たらしめ、專有的たらしむることが、果して可能であるか。「ボヴリー夫人」の夫ボヴリーの如き愚かさ、迂濶さは、我等の周圍の凡てではなからうか。此を詮じ詰めたら、描かれた陳列せられた既成のものを眼にする鑑賞家たる我等よりも、描き得る、最上美の創造者、眞に自己一個のものとして專有し能ふ女體の製作者、それ自身の方が、如何に快感多くはた實効の深いことであらうぞ。「鮑取(あはびとり)」を描いた歌麿は、此點に於て、我等の欲する最上を遂げえたものである。

×

をかしのものよ。彼等は、櫻さき、日かげろふを見て、始めて現前する春に、驚く。春すら、この

抽象無形のものすら、體得し得ざる、聰明ならざる鈍感なる彼等不具者に、どうして、奔馳自在なる人間の愛が、就中その對者の、育まれゆく愛を憎みを、さては反逆をさては融和を、體得し得ようぞ。

×

色々な雜誌や、よみさしの本が、片隅に押しやられた。そして私は、そのひろまつた疊の上に、長い幅びろな箱を倒さにした。なつかしい匂ひ。數百枚の浮世繪が、疊まれたまゝ、どさりと落ちる。それを、なるだけ手垢をつけまいと、丹念に繰つてゆく。雜誌や圖書には、もう知らうとか、讀みたいとかいつた熱氣を以て向ふものは、殆どなくなつた。衒學の氣も拔け、より聰明を欲する心も失せ、今はたゞ直前、容易に酌み得らるゝ風情に、艶姿に、凝視する。一册の佛蘭西小說を讀んだよりより確かな、より明るい艶美な快感が、私の眼を拔けて、後頭部に烙きつく。これが今日も昨日ものことである。

×

藍にぼかされた空にも、黃ろく色どられた橋桁や、青い草生の上にも、寂しい愛がちらつく。廣重といふ畫家は、強い太い線ではない、丁度細い樂器の音色のやうな感じ。屈從の氣分は何れにも見られる。空にも水にも皆それが、大きな理法の前におとなしく屈從して、そしてその中に浸り乍ら、靜

かな慰さめを自ら感じてゐるやうな。一人二人の人物にも、凡て忍從の果の平靜さが、羨ましい程ある。それが封建時代の人物と强ち謂へない程、内面的に屈從であり柔順であり、安靜である。

かうした廣重式の、理法の前に屈從した果の、寂しさ、但しうら安さは、此頃の私が追求憧憬しつつある唯一心の的である。

×

浮世繪の美人畫家は、果して「金」のために美人を描いたか。然らずんば又、當然の寫實家、寫眞技師の如く、觸目のものを單に忠實に描寫したといふに過ぎぬのであらうか。即ち「實」のために。或は、彼等の描いた幻影の一片を抽した「幻」の形、夢の現れといふべきであらうか。私は、斷じたい。末輩は、唯、好色心の民衆に迎合した、「金」のため。從つて獨創のない、氣魄のない、構圖の踏襲である。彼等の錚々たる者たちは、無論「金」以外であらう。即ち「實」を描いたその者もあつたらう。（淸長の如きか）。夢もあらう。（春信の如きか）。實と夢との半ばもあらう。（歌麿の如きか）。然し何れにもせよ、有數の彼らには、凡て個性に近い美人鑑賞意識、思慕、注目の的が燃え渴いてゐたと信じたい。

—大正八年三月

大判横繪『忠臣藏』のいろ〳〵

——廣重、英泉、三代豐國其他——

×

この頃、丸淸板東海道五十三次（初代廣重）を見てゐて、ふと氣が付いたことである。それは芝居の舞臺面と浮世繪との交渉である。更にいへば、芝居の舞臺の、その背景たる種々な書割（かきわり）、色々な道具立、登場した俳優の雜多な姿勢なり仕科（しぐさ）なり、凡て舞臺上に點出された此等靜と動との二様から來る、舞臺をふり仰ぐ觀劇者たる我々の眼に映つた舞臺全幅の映畫、丁度これと同じやうな、寧ろこれを其儘平面的に縮圖したと思はれるやうなものが、我々の眼にする浮世繪の或る種類にあることである。江戸末期に盛（さか）を競つた役者繪、芝居繪、此等にも多少この感じはあるが、然し我々の今云つた感じは寧ろ此等の他にある。此等の役者繪などは、舞臺の全幅ではない。廣い舞臺の一部分が局限された再現、或は、更に縮小された個々俳優の姿勢である。私の今いつた舞臺全幅の再現といふのは、例へば冒頭に述べた廣重の風景畫などに、より多く然く感じられる。疑ふものは、試みに、丸淸（まるせい）板五十三次

を見よ。それが盡くといふのではない。然しその大部分は、この感じを與へられるであらう。例へば、その「藤枝」を見よ。遠見の城下の書割、中央左右に太い松二株、その間の街道を行く荷馬や笠と簑の馬子、その手前に置かれた一つの藁づか、すでに是れ舞臺の感じではないか。丁度村井長庵でも飛び出しさうな、その前の仕出し大勢ともいふべき人物や馬ではないか。その横毆りの雨の線、濃い墨の空は、これは、繪畫の寫實であるが、この二者を除けば、それは凡て展開されてゆく變化多き芝居の舞臺を眼にしてゐる如き感じである。丸淸板の五十三次には、どうしたものか、かういふ感じのが多い。それは某氏などが賞讃してゐる、渾然たる背景と人物との照應が、實は或る意味からは缺點で、それが餘りに小ぢんまりとなり過ぎ、隨つて自由を缺き、保永堂板あたりの廣漠な空間を描いたのとは違つて、丁度レンズの映畫のやうに、餘りに縮限されたその空間が、また大にこの感を深からしめるのであらうと思ふ。

私は、これに氣が付いた時、これが五十三次であつて、劇と直接の關係がないだけ、却つて或る不快な感も湧いたことを云はねばならぬ。と同時に、どうして斯る舞臺全幅の模型の如きものを、かの自然畫家たる廣重が描いたのか、この疑を抱いた。それは、彼の決して老熟とか渾然たる藝術境とか然る語を以て贔屓の引仆しにすべきではないと思つた。寧ろ多作の結果、此の五十三次に新意匠を齎

さんとした苦慮の結果であらうと思ふ。私は、かうしたことを考へて、同じ斯うした感じを與へられるにしても、なほ他に、この舞臺全幅の再現ともいふべき意味に於ての傑作が、彼廣重にもあることを思ひ出した。それに氣付いて、この丸清板から與へられた半熟な彼の立場を忘れようとした。それは、卽ち大判横繪の忠臣藏である。殊に泉市板の忠臣藏である。

泉市板の忠臣藏の他に、彼はなほ有田屋板の忠臣藏を描いてゐる。然し、これは私のまだ眼に觸れないもの、且つ小島烏水氏の「泉市板は傑作なり」の言葉を信じて、一個泉市板の忠臣藏によつて、この舞臺全幅の再現の感を味つて行かうと思ふ。泉市板の忠臣藏は、全十六枚である。家藏は中の七枚よりしかない。然し私の知つてゐる他の二枚を加へて、九枚の場面は、大抵以下の如きものである

大序鶴が岡八幡社頭の景。二つ引兩の幕を張り、石段の上に直義、左右に桃井石堂、高と鹽谷の大名が控へ、石段の眞中を顔世が上りつゝある。問ふまでもなく兜改めの場。石段、石垣の青。左隅、太い木の茂りの濃い青の色が、沈靜な氣分を與へる。三段目江戸城外の場。堀割の水青く湛へ、城郭嚴かに聳え、此方に高の提灯を据ゑ、その蔭に駕籠あり。高の印のついた侍二人、袴の股立とつて、刀に手をかけてゐる。左に、本の字を圍んだ紋の紋服に上下を着た本藏が扇を手にして控へ、その眞中に、伴內であらう、目錄を右手に、左手に頻りにいきりたつた二人の侍を制してゐる。その前には

二つの臺の上に積まれた山と堆い贈物がある。本藏の後に控へた本の字を染めた法被を着た下郎の、眞面目に蹲り、その顏の口髭のあとが青いのも可笑しい。さながらに舞臺の感じである。四段目。ちやうど淨瑠璃の『はなやかに奥は媚く女中の遊び。御臺所顏世御前、御傍には大星力彌、殿の御氣を慰めんと鎌倉山の八重九重、色々櫻、花籠に活けらるゝ花よりも生ける人こそ花紅葉。柳の間の廊下を傳ひ、諸士頭原郷右エ門、跡に續いて斧九太夫』といつた場面。花籠の籠の濃い藍、花の桃色のひろがり。顏世と侍女の二三。前に辭儀した力彌の上下の色の青。左の廊下の二人、とりわけ九太夫の皺んだ顏。それ〴〵小さく描かれてゐるが、動の一瞬間を捉へて、凡て性根なりその場の氣分なりを躍動せしめてゐる。庭先の鉢植の花の色々。置石の間に眞赤な躑躅、複雜な場面と人物とをよく錯誤なく縮圖してゐる。五段目。有名なる定九郎與市兵衞殺しの場。(これは後に三代豐國と比較して述べる。)七段目。一力亭の場。部屋の障子を開け放した體。彼方の內庭、遠くに枝折、小座敷の數多。左にはこの部屋つゞき、二階を開け放つて、孑然と背を此方に黑い着物を着た遊女の櫛笄重げなのが一人小さく見える。お輕といふのであらう。部屋は、九太夫由良之助だゝら遊びの體。幇間二人。酌するもの、三味の撥とるもの、九太夫の禿げた頭に惡戲するもの、手をたゝいてゐるものなど、すべて女六人、その何れもが、大星の紋を着けてゐる。內庭の上は、とつぷりと暮れた深い青の空、ひた

ひた垂れたそれがその騷がしい部屋と巧みな對照をなし、枝折、垣根などの粗い太い濃い墨の線は、夕暗の深いことを表はすに於て上乘である。私から見て、五段目とはまた別樣な感じの傑作の一。
十段目。丁度淨瑠璃の『月の曇りに影かくす隣家も寢入る亥の刻すぎ、此家目がけて捕手の人數、十手早縄腰提灯、灯かげを隱して窺ひ〳〵、犬と覺しき家來を招き、耳打すればさし心得、門の戸せわしく打叩く』の場面。すべて天川屋軒先の體。莫蓙荷の長持を舁いだもの、十手を手にしたもの、戸を叩くもの、其他色々いかにも捕手然と構へたもの、九人ほど。左に天川屋の軒が見え、その彼方に白々と一個高い倉がある。その倉の壁に、山印の下に天の屋號が書かれてある。その棟の果には、物干臺が小さく見え、その先は、眞黑な空に融けてある。前面木戸の體、その彼方に橋が見え、一個の燈籠があつて、その眞上には、大きな木の繁りが黑い。そのあたりに、頭巾を冠つた町女房らしいのが小さくこの騷ぎを見てゐる。多分義平の女房おそのであらう。右よりに屋臺店を舁いだ、股引輕げな男が見える。江戸ならば、鍋燒うどんともいふべきもの。その行燈に「大平すつほく」とあるのは大平しつぽくの訛であらう。食ひ物のくどい丈でも上方式である。按摩が、一人、杖つき、首を仰向けて、その後ろにある。最後の捕手扮裝の侍の後ろに、野犬らしい、極めて痩せた犬、赤と白と黑との三匹が、口を開けてゐる。盛んに吠えてゐるらしい。深い夜更の空をきかした、靑の叢雲が三重に

なり、その先は、數十本立並んだ材木の眞上や火の見櫓のかげへかすれてゐる。左隅の天水桶の眞黑な輪に、廣重畫の圍みがくつきり浮いてゐる。七段目とも同樣な、芝居の一個場面の縮圖ともいふべきもの。遠近種々な靑割を適當に配列した舞臺、それに今し登場した數人の活躍を眼にするやうな感を抱かせる。

他の二枚は、何れも夜討である。一枚は「夜討の二、亂入」とあつて、師直邸內。靑竹をとある構への鴨居と敷居とに挿み、撓はせて、ぱらり〳〵雨戸を外してゐる所。その前庭の雪の積つた上に、由良之助、采配をふつて床几に凭り、義士の群がこれを圍んでゐる。前方、刀を拔いて戸を外してゐる二三の義士は、何れも鼻大きく、間の拔けた顏をして、義士らしからぬこと夥しい。そして全體にわたり、動いた氣分は少くて、寧ろ、夜襲の演習でも行つてゐるやうだ。然し稍々彼ならではと思はるゝのは、外された戸の中の、障子の上、鴨居あたりの濃い墨のボカシ。及び屋の棟あたりの一面の墨色、それが庭先の白い雪明りと相對して、光と暗との感じが多少有效に表はされてゐることである。なほ他の一枚は、夜討三、本望とあつて、炭部屋の體である。炭部屋の中から、今し引張り出された師直の、兩手を取つた義士二人。その右よりな、短刀差出し、分別顏の背高きは由良之助であらう。腹に挿した提灯の黃の中に忠とあるのが、故意とらしくはあるが、その表情は、慥かに千兩役者



三十二



四十二

もの。師直に向ひ、提灯を翳してゐる義士が二人、一人は槍、一人は太刀を手に閃かしてゐる。師直の右手を攫んだ義士が、就中端役ではあるが力強く描かれてある。即ち太刀を口に銜へ、右手は師直の右手を支へ、左手は、師直の胸もとを攫んでゐる。その胸もとに、大星の手にする短刀がきら〳〵ちらつく。師直の顔の醜さ而も野獸の如きことよ。死の豫覺に慄へ、なほその死から脱れんとしつゝあるあはれな斷末場の藻掻き、その吠え面は恰も滑稽な面の如く、誇張されてある。彼方、幾構への開け放した座敷では、なほ義士と師直家來との亂鬪が盛んである。緣下に匐つてゐる師直方の輕輩らしい一人もある。その尻をもたげた格好が、この師直の死の場面には却つて相應しい間の拔け方。空は一體に雪明り。左よりの積つた雪を頂いた塀、その塀の押への丸太、これにも堆く積つた雪が光る。凡て塀押への丸太、その黑と、やさしく淡い光を帶んだ雪の白さ。炭部屋の屋根は、一面の白、觸るれば冷たく、突けばさく〳〵音をたてさうな深々した雪。白と黑と、光と陰。仇討本懷の緊張した場面を彩るこの二色。その諧調はなつかしき限りである。家藏のやゝ疲れた紙の手觸りも、この炭部屋ばかりはさ程眼だゝぬ程、寂しい明るさである。

外に私の知る一枚は、十一段目の橋上義士出揃の圖である。（廣重遺作展覽會目錄三十七頁所揭）これは今實物に接しないから何ともいへないが、圖樣によつて察すると、討入本望と同じ黑と白との諧調が

巧であるらしい。なほ、義士本懐後、兩國橋上服部との出會の圖を他で見たが、これは泉市板であつたか否か慥かな記憶がない。兎に角家藏の七枚及び他の二三枚を加へて、この十枚ほどの説明で、泉市板の大體の印象は殆ど盡きて居ようと思ふ。

×

泉市板の印象記が餘りに長すぎた。私は、この稿では單にこの印象以外、家藏のもの、及び其他に就て、横繪忠臣藏各種の比較批評を試みようとしたのであつた。前置が長くなつたから、殘念ながら以下極めて端折ることにする。

横繪忠臣藏の濫觴は、誰であらうか。哥麿あたりにも忠臣藏の作は少くはないが、横繪物、而も初段目から十二段を追つた十二枚ものとしては、初代豐國の浮繪忠臣藏（若狹屋板）が最初ではなからうか。（小島烏水氏著「浮世繪と風景畫」に此繪の五段目出づ）さうして家藏の英泉畫の假名手本忠臣藏（佐野喜板）が、これと同時、或はその以後間もない作であらう。英泉のではなほ一種、忠臣藏がある。（總與板）なほ化政期の終りか天保あたりに、國直（初代豐國門人）の新板浮繪忠臣藏がある。（丸屋文右衛門板）。廣重の泉市板も多分この頃であらう。其後嘉永年間の作と思はるゝ三代豐國の忠雄義臣錄（山久板）がある。同じ嘉永あたりに、なほ國輝（三代豐國門人）の假名手本忠臣藏（泉市板）がある。三代豐國で

は餘程の晩年に、忠雄義臣傳（泉市板）といふのが、なほ一種ある。其他では、國明（三代豐國門人）のがあつた覺えである。

以上の數種、殆ど皆、初代豐國の浮繪忠臣藏を摸したと思はるゝ程、多少づつ類似してゐる。それが年代が經てば經つほど、作家が末流になればなる程、先人摸倣の度が激しく、且つ繪も全く芝居の番附めいて來て、生氣のないこと夥しい。浮繪式の初代豐國あたりはまだ風景畫としても見らるゝが既に廣重になつて、芝居じみて來、浮繪式から舞臺の書割式となり、三代豐國晩年の義臣傳に至つては、風俗畫と芝居畫との混血で、色彩のあくどさ、背景といへば安芝居の書割式などの點、沙汰の限りである。國明の輩は唯これの踏襲である。然し畫面は、何れも劇として我々に最も親み深い場面ばかりであるが故に、他の同人たちの畫とは、一段立勝つて見らるゝことは謂ふ迄もない。以下、以上の數種に就き個々の印象を若干記さう。

□假名手本忠臣藏、（一筆庵英泉畫）、佐野喜板。

家藏の物はその十段目。（義平、葛籠の上に腕を組み力味返り、その周圍に捕手やうの義士數名十手を振上げ、一人は小兒を刺さうといふ危ない場合である。その道具立の左は、狹い堀となり、その上は表通りの見得。それには義平の女房が膝をついて仆れ、同じく義士の一人、その髮を斬るべく刃を翳

してゐる。その右、この義平の店先との間は幾棟の倉。その直上、少しの空間に、空が見え、白く點點たるは星の光であらう。狹い紙幅に、複雜な内と外との事件を描いたのが、ちよつと面白い。）

□忠臣藏（英泉畫）總與板。

十二枚揃。（これは、ちよつと風變りなもの。畫の感じは、人情本の挿繪か、或は色彩、描線が、北齋あたりの感じに近い。廣重の泉市板、及び前掲の英泉物は勿論圍みがあつて、その周圍は、忠臣藏に因んだ紋で繋がれてゐるが、これは何もない。紙一ぱいに描かれ、横繪の丁度中央位ゐから上は、雲形で仕切られ、それに大きく看板のやうに右から左へ、忠臣藏何々とある。例へば初段なれば、忠臣藏鶴ケ岡。七段目は、忠臣藏揚屋の類。色の感じは前述べた如くであり、また人物の顏にも巧味乏しく、背景も極めて拙い。否殆ど背景らしいものがない。八段目に、田子あたりの富士があるが、これも平凡になつてゐる。やゝ佳作ともいふべきは、六段目の身賣であらう。）

□新板浮繪忠臣藏（獨醉舍國直畫）丸屋板。

十二枚揃。（これは普通あるが如く二つ引兩や桐、巴、鷹の羽などを連ねた圍みがある。畫の出來は稍見るべし。殊に浮繪と斷つてゐるだけ、背景に於て見るべきものがある。殊に五段目は佳。太い横しぶきの雨の線、眞に物凄いばかりの大雨。眞中に堰の口があり、その橋の上に與市兵衛と定九郎。

定九郎、傘を傾けて、財布を銜へ、下に與市兵衛、手を放ち藻掻く。凄さは、却つて定九郎の刀を抜いてゐないのにある。雨のどしや降りの音は、初代豐國の同じ浮繪忠臣藏よりも、一層耳に激しいやうに見られる。）

□忠雄義臣錄（國貞舍豐國筆）榮久堂板。

五段目が一枚ある。（これは三代豐國には稀な上々の作。福と村松の二個の役人檢印が上に見える。額縁の如き屈折した圍みがあり、その中に、沖繪式の畫面。右よりに、外題が赤くその下に國貞舍云云が黄ろく、榮久堂新梓がその下にまた赤い。色の眼につくのは殆どこれのみ。畫は、山崎街道の體右下に、萌黄の深い堤が盛り上り、畫面の中央に黑い梢の赤ちやけた並木が二本、路を挿んで彼方に一本、右よりに彼方に小さく一本、此方に一本高々と聳え、彼方は一面の田、張り渡した鳴子板、その繩がうすく蜘蛛の網のやう。遠くは、薄墨に黑々蟠まつた人家、丘。そのまた果は、うね／＼下をボカした山の連り。左の上は、この街道から分れて山路となり、その路の果は、黑い松の群がつた崖につれて左上りに消えてゆく。その途中に勘平が簑を着、鐵砲を肩に蹲まり、立つた侍と辭儀を換してゐる。侍の持つた提灯が、ぽつりと赤い。本街道では、今し形の如き扮裝の與市兵衛が、頻りに早足で、定九郎の聲が聞えぬかに歩いてゆく。その數歩後へを、形の如く破れ傘に朱鞘の定九郎が、手

を上げて追つてゐる。兩人とも顏は隱れてゐる。この顏を描かぬ點が、殊に觀者をして一種の興奮を感ぜしめるのに有効である。太い斜めな雨の脚、幾筋。驟雨到らんとする前の暫しの氣が、よく表はれ、全體にわたる薄靑い色、殊に上半、街道のベタ摺りの色は、雨を含める氣色が生々しい。泉市板廣重の同じ五段目とこれを比較して見る、有名なこの泉市板も、この豐國に較べて稍々生氣を缺くやうな氣がする。廣重のは、誰も知る、峠を越えての聳えた山の連亘した墨色に、非常な妙味がある。雨の線もよく、その線中に點出されたこれ等が、いかにもずぶ〳〵濡れてゐるげに見える。然し、定九郎と與市兵衛との二者は、恰も人形の如く動ける感じの多少乏しい憾がある。然しこれとても惡作では勿論ない。がこれをこの豐國のに比べると、稍劣るが、或は同じ價値としても、人物背景のひろびろした感じ、蕭條とした感じ、及び尋常な與市兵衛殺しの畫面でないだけ、即ち一層自然の摸寫に於て、寧ろより多く豐國のに腕の冴えがあると謂ひたい。廣重は、その風景畫、すべて私一個の感じでは、何處までも日本的の感じで歐風な感じは余りない。日本の風景、風物を、そのまゝ巧みに光と陰とで表はした畫家である。然るに、この豐國のこの畫を見ると、丁度國芳の「宮戸川」、「大川三つ股」やの歐風の風景畫でも見ると同じ感じがする。それが餘りに整然とした遠近法、光と陰とによつて成されたせゐであるかも知れぬ。兎に角この五段目はいゝ作である。他の十一枚が如何なる出來か

知る由もないが、これより推すと、左程の劣作でなからうと思ふ。三世豊國には、國貞時代はこれに似た風景畫があつたことは見もし聞きもしてゐるが、豊國襲名後に斯る背景の傑れたもの丶あるのは、私としては最初の知識である。隨つて特に悉しく説明した。）

×

以上を書いてから既に一月、其後當地鈴木直次郎氏の好意により、同氏藏品を借覽する機會を得たから、なほ前稿不足の點を若干補はして頂かうと思ふ。

先づ泉市板の初代廣重忠臣藏の他七枚を述べよう。二段目は丁度力彌が使者に來ての歸り。廊下を左へ力彌が太刀を腰に佩しながら歸る。見送る袖を口にした小浪の立膝。衝立の蔭からは、母のとなせの粹をきかせた顏。中央が空いて植込が見え、その後方は例の本藏の松切り。畫面の中心は無論力彌と小浪。私の所謂舞臺面の感じといふ意味からは、多少の効果を擧げてゐる。六段目は勘平住居の光景。但し右よりに藁屋、竹藪で圍まれた勘平住家を見せ、門口に笠着た武士二人。それを出迎へた勘平と老母。あの悲劇の豫覺はまだ毛程にもない四人の物腰。藁づかが二つ。茶と墨との間色の大きな樹の叢り。それが背面の山の大半を覆つてゐる。左へなぞへになつた山。右はてには、彼一流の手法たる惜し氣もなく藍を使つたとある山の頂が見え、上は一帶に濃い藍のぼかし。門さきや丶手前に

橋、その下はまた好きな濃い藍。その水は、畫面の左へ伸び、青い水田の中を流れて、山裾に行く。山裾にも立木、黄ろい尾根點々、竹藪。橋のすぐ前を、獵師出立の百姓が二人。一番先なのが今し手鼻をかむ處。その顏の滑稽さは、すぐ後に將來される悲劇と照應して、却つてあの切腹の場面より以上の悲哀感、劇的感動を喚ぶ。全體の感じ、風景畫としてもよし。保永堂板の五十三次の一枚に見られぬでもない。八段目。この追加の七枚中で、一番私の好きなもの。薩埵峠あたりか。遠見、右より草筆風の小松の生えた崖のあなたに、白富士。その空あたりから、畫面の上へ、うすくなりまた濃くなつた藍の色。中央に一本の大松。赤と黄と綠との蔦を一ぱいに搦ませたその太い幹。その根あたりは右と左、草筆風の薄。前にとなせ。後を小浪。小浪の足許、附添ひの女が、蹲んで、小浪の解けた草鞋の紐を結んでゐる。その小浪が杖に心持ち身體の重みを託し乍ら、左手笠を稍々傾げて、道のりを計つてゐるやうな。その幸福の期待に燃えてゐるやうな可憐さ。その後を、雨掛を肩にした供二人及び馬に乘つた宰領らしき男。笠を阿彌陀に、咥へ煙管のその呑氣さ。一體の印象、凡て溢るゝ幸福の豫期である。忠臣藏中、殺伐の大半を巧みに融和すべく世話劇めいた場面が間々挿まれてゐるが、その粹は、恐らくこの段、殊にこの畫面の感じと、私は此點からも殊にこれを愛する。九段目。雪景左程でもなし。庭先を本藏から借着した由良、眼を仰向け愁嘆をきかせてゐるのも大に芝居氣。その

袖を控へたお石。その後に蹲る力彌。屋臺には、斷末場の本藏と母娘の二人。庭先の燈籠、枝折、竹藪などの雪も然程のものではない。夜打四、引取。同夜打四、兩國引取。（纒めて見ると夜打が六枚ある。一は前稿に書いた廣重年忌目錄にもある橋上黑法師の勢揃ひで、それは、十一段目、夜打押寄とある。二は同じく前稿の構の戸を外してゐる處。三は、炭部屋。四は、この引取。五は、同じく夜打四とあるが、これは五の誤で、兩國引取。六は、燒香場である。）單に引取とあるのは、仙臺邸門前の光景。義士の行列とその前に立塞つて六尺棒を手にした三人の武士。別に取立てゝいふ程の事もないが、唯だ門前の靑い竹藪の雪に撓つたのと、そのあたりを飛び翔る五羽の雀、それに雪晴れの朝がよく表れてゐる。さうして、この竹と雀とで、仙臺邸をきかした處が、先生中々味をやると思はれるだけである。兩國引取は、前稿にも一寸書いた服部との出會。ありふれた畫面でもあり、描法もまた別に新味を持つてゐない。夜打六。燒香場。これが掉尾の上作とも謂ふべきものであらう。右手は雪の堆い幾層の崖、松も雪に鎖ぢられ、その一本の小枝の先に、赤い大きな旭日。その下、高輪あたりの朝海。水平の眞上、黃のぼかし、上につれて深い藍、帆を高く張つた船の行きかひ、蓬を垂れたまゝなのもある。崖したの彼方に木戸があり、それを潜つて細い莓の赤い實の鈴なりのやうな義士の行列四人目に采配を背に廻した大星がゐる。前の二人は弓。最前面は大槍。燒香場といふ外題に少しも

相應つてゐない。しかし雪晴れの明るい光は、隅々までよく行きわたつてゐる。

□忠臣藏十二枚（初代廣重。檢印は圓形のなかに村。弘化元年の板行か。有田屋板。）この十二枚は、泉市板よりも一層私の謂ふ意味の舞臺面の感が强い。個性の表れも誠に尠く、因襲的な描法、光景が多い。大序は、社頭。師直と若狹と顔世。二段目。圍ひの中に着坐せる力彌。緣側、羞かみながら茶を捧げた小浪。左、別に松切の場。庭先が比較的ひろ〲と稍々感じを新たにせしめる。三段目。堀端、勘平、伴内を追ふ所。背景は凡て書割式。四段目。鹽谷城外、由良一人、思ひ入れの場。背景ひろけれど同じく道具立の如しである。五段目。稍見らるゝ圖。中央、松の薄墨の太い幹と灰色の枝ぶり、左手松を小さく描いた崖。その間に、代赭を頭にぼかされた歐風に描かれた富士形の墨に滲んだ山右藥づか二個。松かげ、定九郎、涼しげに腹をあらはに、嬉しさうに小判を手に數へてゐる。與市兵衛の笠、切られた二つになつた提灯や、自分の傘などが足もとにころがり、その髷あたりから、北壽あたりが苦心したと同じやうな墨の雲の形幾つも描かれ、眞上は、濃い墨のぼかし。與市兵衛の描れてゐないのも、面白く、全體に雨上りのやうな明るさが、濕つぽい大氣のなかに浮動してゐる氣味がよく寫されてゐる。六段目。泉市板と同じやうな橋、門先。駕籠に乘せられてゆくお輕と獵の歸りの勘平。七段目。やゝよし。一力亭庭先、「由良さん此方」の所。義士三人の一人矢間を捕へた大星の醉

態。屋臺の上から口を袖で覆ひ、笑つてゐる四五の女中。凡てに二つ巴の幾團々が白く拔かれてある。凡て灯の點いたばかりの枝折の內、鈍い光は、とつぷりと藍のぼかしに暮れた空にも著い。八段目以下ありふれた場面、謂ふべき程のことなし。唯最後の一枚、「敵討引取」には、廣重の此種のものとしては稀に、「大星が遠計にて師直の首を矢狹間大鷲寺岡の三人に命じて舟にて高輪へまはしあいづをもつてこぎよせ一同にぼたい寺に至る圖」との說明の框が、右上の外題に添つてゐる。苫を垂れた幾艘もの大船。赤い水平の果に、茜色の日の出。水の深い藍。畫面上緣の代赭のぼかし。やゝ風景畫としてよし。

□忠臣藏十二枚揃（初代廣重。檢印は衣笠と渡邊。丸淸板。小島烏水氏の「浮世繪と風景畫」に、緣に模樣なきやう說明せられてあるが、實は、山川と二つ巴の框で緣どられてゐる。）

この十二枚は、益々新意なく、且つ人物背景も、粗雜の筆使ひが多い。感じが一體にこわ〳〵としてゐ、配色も玩具繪のやうである。嫌味な赤と陰鬱な靑との配合が多い。まだ見らるゝのは矢張り五段目。谷底に蹴込まれた與市兵衛の足だけが逆さに見え、財布を口に刀を拭ふ定九郎の右足の力の入つた跳躍が、やゝ動いた氣分を與へる。しかし背景はまた類のない程、感じの疎い餘りに眞黑な墨のベタ摺り。然程に暗ではないと反感の起る程。左に小さく勘平と千崎の出會。赤は、財布の紐と朱

鞘と千崎の提灯とばかり。却つて陰鬱な黑と黃（傘。笠。勘平の簑など）との節調といつた或一派には好感を以て見られるものかも知れない。七段目。お輕、二階の手鏡、大星、緣下の九太夫。空の鼠色を白く拔いた眞圓な月。これらやゝよし。八段目、女馬子と本の印の雨掛を舁いだ下部、遠くとなせ母子。背景の富士。然しこれも餘りに配色が暗すぎる。十二段目。燒香場。これは事實の燒香。香爐を經机に載せた倚の半身も見える。水平はまた嫌味の多い餘りに眞赤なぼかし。

以上概說した通り初代廣重忠臣藏の三作中、泉市板秀で、有田屋板これに亞ぎ、丸淸は寧ろ彼の名を耻づかしめるものと思ふ。なほ、他に重宜（初代廣重門人、二代廣重）畫の大判橫繪忠臣藏十二枚を見た。（安政二年。藤慶板）。これは、また思ひ切つての惡作。殆ど初代の有田屋、或は丸淸板の摸倣といふよりは寧ろ改惡された摸寫とも謂ふべきもの。殊に甚しいのは、七段目、これは丸淸板の初代と殆ど同一の構圖背景である。但しこの重宜畫十段目などはハツパア氏の廣重目錄にも撮られてゐる。然しこれは重宜の一標本の意味であらう。さうしてこの十段目は、前稿中の英泉の假名手本忠臣藏（佐野喜板）十段目と同一の構圖、その縮小された感があり、而もそれよりも拙ないものである。

なほ他に一組の大判橫繪忠臣藏がある。それは、

・新版かな手本忠臣藏十一段つゞきの内（十一枚揃）一猛齋芳虎畫（南傳馬壹蔦吉板）。檢印なし。安政

末期の作であらうか――である。

嘗て貞房の三枚續で、一枚づゝを細かく仕切り、忠臣藏の十二段の場面を小さく丹念に描いたのを見たが、それと大判横繪一枚一段づゝの相違はあるものゝ同樣な感じのするものである。例へば、初段は石垣の上に兜改め。銀杏で仕切られた右は桃井と高、中に鹽谷の仲裁。左、同じ師直が顏世を止めて、文を差付けてゐる。このやうに各段ごとに戲曲に表された場面の全部を、同人物を一枚の數箇處に描いて漏れなく寫し出してゐる。從つて背景に無理多く、人物も細かいものである。しかし彼としては割合に巧みに、自由に、無論重宜のよりは善く、配色も可なりであり、好劇家には、好かれさうな、惡く云へば、着色された番附繪に過ぎぬものであらう。五段目、六段目、八段目の遠見の富士。(この八段目は、これのみは原作の淨瑠璃が單に道行であるから、さすがにこの芳虎のも番附畫風の無理を脱して、稍々普通の繪の體を爲してゐる。)十一段目の亂鬪。此等は割合にいゝ方である。全體にいふと、劇場面の摸寫もこれ程に激しければ、却つて愛嬌ありと思はれる位ゐである。

以上、單に横繪忠臣藏の印象に就て、貴重な紙面を多數に費した。これも武岡豊太氏などの謂はれる忠臣藏を愛する國民性から出たことと、大方の寛恕を冀ふ次第である。―大正七、七、十稿

追記、以上は大判横繪の忠臣藏を大體述べたものである。然し同じく大判横繪に北齋畫、國芳畫の物ある事も其

後刷つた　小判横繪では、芳貞（國芳門下）畫の、如きもある。他なほ洩れてもゐよう。大判竪繪には、また忠臣藏は種々な畫家によつて描かれてゐる。現に國貞（三代豐國）にも其の香蝶樓時代に、江崎屋板竪繪假名手本忠臣藏十一枚揃がある。大正十年八月

○

國芳の横繪忠臣藏の一つ

國芳畫の一例を擧げておかう。安政元寅十一月改のもので、横繪十二枚物と思はれるその中の五枚である。外題は、假名手本忠臣藏、佐野喜板である。大序、二段目、五段目、十一段目（炭部屋）、十一段目の次（菜前）の五枚。大序、平凡。二段目、例の如く松切と、遠見は、力彌と小浪。庭前の描寫の細かいには、驚かされる。五段目、よし。右、千崎と勘平の出會ひ。左、暇道、與市を追かける定九郎、それが小さく動く。その與市あたりの前面はすでに迫つた暗である。空は、墨に藍を混ぜた夕暗の色、しかも雨氣を十分催した氣分が滲んでゐる。精細に過ぎる嫌はあるが、佳作であらう。炭部屋、例の如し。菜前、遠景の海の日の出の氣配が、いや味な紅である。以上、端物ながら、彼は彼としての、コクメイな描寫の跡の窺へるものである。

—大正十五年七月

浮世繪の虎

浮世繪の虎を概叙する前に、先づ分類を示す。一、美人畫。二、役者畫。三、歴史畫。四、動物畫（虎の正の物としての意）である。此の四種に分けたのは、最も普通のやり方で、また是が便利でもあるからである。（區分された各項の名義の說明は略くことにする。以下の叙述に依つても略ぼ諒解が出來ようし、又自分の架說くらゐは諸君の常識でも既にあらうからである。尙、材料は、例によつて家藏の原版畫ならびに參考品（圖錄複製品の類）の中から搜し出したのである。昨今、筆務多忙、それがためにこればかりに關つてもゐられないから、多少の見落しがあるかも知れない。又自分の藏品及蒐集が、全『浮世繪』の全部では無論ない。九牛の半毛にも足らぬから、無論世間では、是以上のもの、虎に關しても雜多があらう。從つてホンの概念に過ぎないものである。尙、斷つておくが、自分の涉獵は繪本には及んでゐない、全部が一枚繪類の版畫である。

一、美人畫の虎

美人畫の分類では、辛うじて二枚だけ見つけた。歌麿（初代）の『靑樓十二時』の内の寅の刻と、

豐國（初代）の『風流藝者身振姿繪』の内の一枚である。茲に擧げたやうに、美人畫としては本物の虎が在り得よう筈がない。矢張り青樓十二時、又は……十二時斗の類の寅を探すか、又は人名として取扱はれた虎（又はとら）に過ぎないのである。現に此の二圖も然りである。

歌麿の「青樓十二時」は、有名な揃ひ物十二枚大錦判のもので、遊女の生活を主材にして、各十二時の色を浮き出したものである。その中の寅の刻が此にある。青樓遊女部屋の體で、火鉢が右に半分見え、向つて二人の遊女。一人は懐紙で火を煽ぎ、振返つて他の一人に話しかけてゐる。他の一人はそれに相手になりながら、立膝で煙管を手にしてゐる。どちらの顔も歌麿の特色著しい美女で、賣物買物には勿體ない程である事勿論。客が寢た暇を見て、二人落ち合つての客の噂やら、世間話やら、とり／＼といつた體であらう。此の續畫、蔦屋板、寛政中期の作である。

豐國の『藝者身振姿繪』の内は、これも大錦判で、數枚の揃ひ物であらう。その中の偶然一枚、『とらや虎丸』といふのを見付けたのである。畫面、雪洞が一挺右半ばにあり、その左、畫の中央より右一ぱいを占めて、一人の藝者が、立つて、手を擴げてゐる。これが何かの身振といふのであらう。その顔は、りきんで、顔だけを此方に向けてゐる。その傍、畫面の左よりに、稍若い藝者が、一人鼓を打つてゐる。上の左ぶちに輪廓をとつて、風流藝者身振姿繪、とらや虎丸とある。此の身振を行つて

ゐる、立つてる方のきりつとした顔の持主が、虎丸といふのであらう。虎丸といふと如何にも浪花節語りめくが、昔は藝者に、かうしたイカツい、男性的な名を多くつけたものである。今でも其の余風があるが、昔は甚しかつた。元來が、此の彼女等の男名前は、陰間（男童）流行の向うを張つて、男名で盛んに宣傳したのが、初めだからである。（因みに、此の初代豐國畫、同じく蔦屋板、寛政中葉の作。）

其他に、數ある美人繪の中では見落しがあるかも知れないが、要は此種の、十二時、十二刻、見立十二支、又は人名の類であらう。

二、役者繪の虎

役者繪としては、多少の異例もあるが、其の最も多いのは、女形繪の大磯の虎、荒事の和藤内（例の虎搏ち）である。その次に稍々多いのが、例の『菊畑』の虎藏實は牛若丸の類である。就中、大磯のとらは、殆ど無數である。正月狂言の慣例でもあつたせゐか、初春の芝居繪には屹度見つける。

今、見當つた大磯の虎の主なるものを、年代分けにして、列擧、間々解説を加へておく。

大磯の虎の繪。

菱川師宣『草摺引』の内（墨摺横大判である。延寶後半期の作といはれてゐる。）□鳥居清倍、墨摺

番附の中にとらがゐる。これは正德五年正月、中村座『坂東一壽曾我』の辻番附で、評判記『金の揮』にも好評の由書かれてゐるものである。）「同じく畫く大磯のとら。但し此畫、畫面に、解說やうの文字がある。曰く『大磯のとら、白木屋へ身請せられ、內儀おとらと成る、第二ばんめ大でけ瀨川菊之丞』とある。卽ち菊之丞の姿繪であるが、白木屋へ身請云々から推すと、此の芝居は、曾我と白木屋とをなひまぜにしたものであらう。煙管を持つた町女房式のもの。此圖、細繪。寛保元年の作である。（芝居も無論當時のものであらう。）

鳥居清滿畫「虎と見てすがたや花のけはひ坂、大いそのとら中村松江」と文字の入つたもの。當時の名女形松江の似顏畫で、羽子板を持つた立姿である。明和元年板細繪紅繪ずりである。歌川國貞（後の三代豐國）、瀨川菊之丞の似顏繪、三芝居見立對面、大磯の虎瀨川菊之丞とあり、お好みにつき香蝶樓國貞畫と落款がある。この菊之丞は、例の土器お傳を三代目坂東三津五郎と奪ひあひをした變態性慾の供給者でもあつた五代目菊之丞で、文政頃の春芝居の一つであらう。落款の香蝶樓は、國貞の號で、彼が五渡亭を廢して香蝶樓を用ゐ出したのは、文政末天保初期からである。然るに菊之丞は天保三年正月七日に三十一歳で、三津やお傳の跡を追うて身罷つてゐる。それから推すと、この大磯のとらは、三津五郎も一座した文政八年春市村座の『皐月富士曾我初夢』でもあらうか。その他文政

末天保初期——菊の殁前までには、「歌舞伎年代記續篇」において一向見當らぬ。

その他曾我對面の場などの、役者大勢の中の虎御前は、江戸末期の役者繪中には無數であらう。國貞の三代豐國となつてからの對面の場を描いたもの數枚は、家藏にもある。然し凡てを今は略いておく。なほ以上の國貞に至るまでの畫家にも、小人物（即ち點景人物）としての大磯のとらは、古い所で春章、又は春章一派（春英や春好）鳥居清長（鳥居の四代目）の鳥居派にも尙多いこと、無論である。

次は、和藤内である。此の和藤内は、無論竹本操淨るりの、近松門左衛門の手に創られた傳奇的主人公である。然し竹本操が、爾來普通の劇化せられて、芝居にも折々其の上場を見、從つて芝居繪の一として、またこの和藤内は少からぬのである。而して和藤内が尤も和藤内らしいのは、例の猛虎を搏擊する場面にあるから、從つて此の虎と相戰ふ場面は、錦繪に極めて多い。甘輝と睨みあつてゐる所も多いが、虎を踏まへたり、撲つたりしてゐる方が多い。丁度劇及び繪畫における第二の金平の出現の如きものである。（金平云々は、江戸初期、坂田金時の倅に金平なるものを假想して、淨るりに唄つたり繪本に描いたりした。金平本、金平節の類で、淨るりは主に詞章の作者は岡淸兵衛、樂は薩摩淨雲の弟子の丹波太夫で、繪畫は鳥居の初系に多い。元祖團十郎も、この金平の荒事に啓發され

た事多いのである。）

左に擧げるものは、この和藤內虎を擣つの一二であるが、これは准役者繪ともいふべきものである。別に何の芝居、何の役者とも定らないが、さりとて歴史畫（又は武者繪）の類でもない。要するに平凡化された劇畫の類である。

和藤內虎擣つ圖。

豐川安信畫、（安信は鈴木春信の門人ならんといふ）。中判錦繪摺の一枚。和藤內、虎の尻尾を攫んでゐる畫面である。これは例の國姓爺合戰（門左衛門原作、正德五年）の文句にもある『じりじりと四足を縮め、恐れわなゝき岩洞に隱れ入る尾筒を摑んで跳ねかへさうとする所である。和藤內が少年らしからぬ、大剛の勇士に描けてゐるのも、誇張である。此畫、安永年間の作であらう。勝川春亭が虎を捲ぐ圖。春亭は、春章門人の春英の弟子である。勝川派の强い線と、簡素な色彩で、春亭としては作作の中である、春亭は、文政二（イ三）年歿、壽五十歲。此の畫、彼の寬政末頃の作畫であらう。

共他の役者繪の虎。

例の虎藏實は牛若である。これも末期の歌川派などの役者繪——例へば三代豐國や國芳——に多いものである。共の一例として、三代豐國畫三枚續きの中の一枚　家橘の虎藏を擧げておく。此圖右は

下部智恵内實は鬼三太が、芝翫の似顔。中は此の虎藏。左は、嗜山（田之助が事）の鬼一の娘皆鶴姫であり、一枚々々、その役者の作句が右の短冊形の中に記されてゐる。智恵内の芝翫は、『弟が兄とはしらず鉢叩』。田之助のは『置霜もまだしら菊の莟かな』。さて虎藏の家橘は、『手にうけて見たばかりなり初あられ』といふのである。智恵内の背景は松、皆鶴は菊、虎藏は、松に三ケ月である。文字は、凡て當時の大通の一人で且つ有名な耕書家の梅素玄魚（明治初期まで生きてゐた）の筆蹟である。此の三枚續、バックに、布目のカラ摺を用ゐたりして、精巧なものである。

『竹もんの虎』といふのがある。これは、例の默阿彌作の芝居で、三題噺を脚色したといふ文久元年二月、市村座『三題噺高座新作』（和國橋）に現はれる巾着切の竹門の虎である。これは、默阿彌が、中村座の和藤内に對抗して成したゞけあつて、凡て和藤内を巧に世話に砕いたものである。和國橋藤次は、是れ和藤内のもぢりで、虎は例の千里が竹の虎を捩したもの。道理で此の巾着切の虎松も、返り忠して、後は藤次の旦那筋の幸次郎のために忠義立するのである。家藏の圖は、此の芝居一幕目のきりで、右一枚は、幸次郎が拾つた竹もんの虎の守袋を透かしてゐる。中一枚は、藤次の生酔ひの體左一枚は、竹もんの虎公が絆天を被つて逃げにかゝる花道際である。其後に例の、默阿彌の友人共の醉狂連から作者の默阿彌に贈られた、默阿彌紋の河竹の入つた引幕が見えてゐるのも懷しい。（此の三

枚續き、國芳門人の芳幾の筆である。)

三、歴史畫の虎

これは、例の淸正である。凡て淸正といふことは、類推である。當時德川幕府は、豐臣家勳功の世人に印象せらるゝことを忌んで、豐臣家興廢に關する記事や史上人物の類を稗史繪畫に用ゐる事を嚴禁したゝめ、淸正の虎退治とてつきり思はるゝものも、その人名は他時代又は類似の人名に之を借りてゐる。例へばこゝに、國芳畫の『膳臣巴提使が虎を刺す圖』がある。檢印によつて、天保頃の作と思はれるが、この圖なども然りで、虎は別に變りないが、巴提使は無論淸正の積りである。陣羽織に、膳臣巴提使と書かれた字體も、例の淸正の七字の題目流の筆法であり、其他兜や前立、文字を讀まなければ誰しも淸正と思ふ。當時、童幼は、無論淸正と思ひ、また、と敎へられもしたらう。尙、一枚同じ國芳の畫で『英雄大倭十二士　和藤内　猛を爭ふ寅』といふのがある。例の見立十二支の類であるが、これも然りで、和藤内の名前ではあるが、圖を見ると無論淸正の扮裝で、且つ場面は雪景である。和藤内の搏虎に雪なんかは第一可笑しいではないか。そこを分るやうな分らぬやうな風に(淸正だと)描くのが、幕府の禁令にすねた當時浮世畫師の皮肉である。この畫、檢印により安政元年寅歳の刻である。

此種、淸正及び類似の虎退治の圖は、殆ど其他無數であらう。

虎の正のものを描いたものである。これは頗る殺風景なものであるから、多くはある筈がない。ひそかに發見した二三を左に錄する。

四、動物畫としての虎

鈴木春信の柱繪。あの纎麗微妙、『童貞』の顏を描いて古今獨步の美人畫の大宗鈴木春信に、此の殺風景な虎の一匹があるのである。對照が頗る面白いではないか。圖は柱繪。構圖をいふと、眞中に水流が二重に流れ、その激湍、渦まく處に、親虎が一匹半身を現し、水を飮んでゐる。大きな眼玉である。上には流れの向う竹が四本生え、その蔭に蹲へる子虎が一匹。最下は、流れの岸に、仰いで親を見る子虎が一匹、背を此方に向けたのがゐる。全體の調子、强い氣分が滲み出てゐて、殊に構圖は、例により巧なものである。落款は鈴木春信の姓名描きである。春信の如きも、この種の動物畫を、相應に效果多く描いたといふ、その例證の一ともならうものである。

第二は、ズッコ氏本『勝川春章』に登載せられてゐるもので、春章描く、細長繪の虎である。虎の半身を大きく出したもので、描熊應擧ばりであるが、春章のものとしては珍奇を感ぜしめる體のものである。點景のちよつとした笹のあしらひも面白い。

第三は後素亭豐國（初代豐國の養子、二代目相續。國貞攻め三代豐國の前代）、肉筆畫である。（版畫本位の記述に、肉筆は異例であるが、此項擧證頗る稀有、よりて恕して貰ひたい。）虎一匹の正面描き大きな顏である。落款は後素亭豐國。この圖、坪內博士の名著『芝居繪と豐國及其門下』の中に、寫眞版として揭げられてゐるものである。

以上の他に、現物の虎としては、『新板けものづくし』（國芳門人の芳員（よしかつ）畫）といつた子供むきの、獸を多く描いた物の中には、此の虎は無論ゐよう。現に此の圖の中にも、小さく劃られて虎がゐる。其他、此の種玩具繪の虎もはた無數であらう。

五、雜

最後に、雜のうちの虎をいふと、一枚繪の類の、美人衣裳の模樣、又は背景衝立の『竹に虎』といつた類は、まだ數限りなくあらう。美人衣裳の模樣に用ゐた虎だけは幸ひ一例があるからいうておく。それは英泉（池田氏、美人畫家）の一枚美人畫、花魁繪の中に、そのうちかけの模樣に、この虎を入れたのがある。卽ち彼の『扇屋內花扇』の似顏繪の、そのうちかけに描かれた龍虎の虎である。上に龍は首と體の一部分、爪だけが見えてゐるが、虎は全身を見せてゐる。英泉は、人も知る花魁の肖像の寫實に一生憂身をやつした男。此の繪なども、事實上、扇屋內花扇花魁の如實な描寫であらう。此

のうちかけの模樣も、無論本物どほりの摸寫であらう。かうした事が、細かいというて、時人の喝采を博し、彼の聲價を高めたのである。此繪、英泉中期、着彩描線の爛熟に達した天保頃の作である。

以上、略々この二三日の涉獵の結果である。繪本の類は無數ゆゑこれを略いたが、唯「北齋漫畫」の中に、(その第十二ぺん)例の和藤內に出て來る虎で、お護符を被せられて閉口頓首の體の虎が一匹あつた筈である。これなどは、繪本の虎として、私の鮮やかな記憶の一である。

六、結び

以上述べた所を、更に虎本位にして考へると、最も多いのは、人名に用ゐられた虎の繪で、これでは、曾我のとら(役者繪)が首位。菊畑の虎藏などが次位である。動物としての虎ではあるが、一本立をせず人間のお相手を仰付かつてゐるのは、和藤內の虎(准役者畫)淸正の虎(歷史畫)の類である。正の物の虎を描いたものとしては、誠に寥々である。虎に因んだものとしては、例の靑樓十二時の寅の刻の類で(美人畫)、これは誠に多い。又、見立十二支の類も(美人役者、歷史、數種に亘り)又無數、隨處に見らるゝ事と思ふ。唯自分には、此の類の揃物を缺くため、十二支の他の動物や、他の刻を見つけても、生憎寅がゐない。これがため、殊更略いた題目が多いからである。玩具繪の類の虎もまた。其他、英泉の美人畫のうちかけのやうに、配材としての虎もまた多からう。

以上、ほんの概觀である。尙、この種の記述をより多く盡したものには、本紙大正十二年新年號に自分が連載した「浮世繪と亥」や、大正十一年正月に『新愛知』に連載した「浮世繪と犬」がある。これらは、全部拙著新刊の『浮世繪と廢頽派』に收めておいた。機會あらば參照せられんことを望む。

（十二月廿五日夕刻稿了）　――大正十六年一月、「名古屋新聞」

追記。虎の正の物として、其の後尙二三を見た。先づ英山（菊川氏）の二枚繼の竪繪、竹に虎である。二は、蓬洲と落款した、大きな虎を描いた柱懸の長繪である。此の蓬洲は、戲作者で版畫も描いた神谷蓬洲の事であらう。尙、廣重（初代）の短册繪にも、一枚面白い虎がある。雨が上から橫しぶきに來て、その斜めに集つた線の隙に、此の虎が橫顏を見せてゐる。大分、理想化した、愛嬌のある虎である。配色は、薄墨と濃い墨。雨のしぶきの薄墨の千筋（せんすぢ）やらの線が、殊に面白い。この線で、すつかり單調を破つて、圖案的な弊から免れ、生動した味を持たしてゐる。印の瓢簞形の哥川のみが、ぽつりと紅い。上に、「踴躍谷生風」云々の詩を題したものである。

美人拾態

第一圖　炬燵美人若衆圖　小判　春信畫

この圖は、題して風流男女相生吉凶圖といふ。

十二枚續の一枚で、落款はないが、春信畫であらうと判ずる。色彩又は描線の感じから想像して、彼の錦繪創成から間もない明和三年頃の作であらう。蕭疎たる色彩、彼得意の簡淨にしてしかも優婉を極むる描線と相俟つて、好個な戀愛の或シーンを表現してゐる。原圖の色彩をいふと、全體の基調ともいふべきは、女の著衣の紅(べに)と男の著衣の紫の線である。それを疊の黄(きい)がとりまいて、落著いた私語(しご)の二人を一層落著かせてゐる。其他の色彩は、炬燵のかけ蒲團の紫、唐紙(からかみ)の藍、廊下の代赭等である。女の帶の模様も、紫、藍、黄、紅の四色を配合して、しかもより複雜な色彩の連衡が齎すよりも以上の效果を示してゐる。その着衣の袖の雪笹(ゆきざさ)の雪の白さも、斷定は出來ないが、彼の獨創的版畫の技巧ではなからうかと思ふ。

第二圖　雪中若衆美人圖　大錦判　湖龍齋畫

無落欵ではあるが、湖龍齋畫たることは疑を容れない。この圖は、彼が圓熟期たる安永初年頃の筆であらう。全體の感じ、前圖の春信畫の美人若衆と酷似してゐる。しかも細かに觀れば、自ら別様たることを酌み得られぬでもない。即ち春信に於ては、男女の腕首、指が誇張否な誇小的な程纖小であるに比して、此はやゝ均齊がとれてゐる。また男女の眉、眼のふくらみ多きことなど、湖龍齋は春信ほど夢の國ではない。餘程人間的である。さて此の圖の主なる色調は、女の着衣の黑ずんだ紫のやうな色と男の着衣のやゝくすんだ淺葱とである。それに、女の袖、裙の模様の壽の字の白ぬき、菊の花のあるは黃、あるはうすい褪紅、葉の綠などが眼をひく。さうしてこれらの色を中に、傘の雪の重げな、及び背景に點々たる薄墨の世界に白く拔かれた雪、容易に我等の視線を刺戟はするが、然しそれが寒冷の感じよりも、二人の劇的の光景に投ぜられた芝居の紙の雪のやうな暖かさである。

第三圖　遊里美人幼童圖　大錦判　清長畫

常世遊里美人合叉江涼の一圖である。清長の同題の畫は、別に數葉ある。女性の描寫に別個巧緻な

筆致を有してゐた彼の逸品を以て殆ど全部が目されてゐる。此の圖も然りで、天明五年頃の作にかゝはり、圖に現れた三人の女性のうち、二人は所謂遊里美人、左の一人は、茶汲女である。幼童は何であらう。それが、羽織の紋に櫻草を附けてゐる所から察すると、多分富本節の若太夫といふのであらう。男まさりのやうな二人の歌妓に連れられて、漫步の折からであらうか。構圖の巧みさはいふまでもなく、男女著衣の配色も亦た絶好である。最も右に立てる女は、藍地の上衣が透いて見え、下著は赤い縞。その色彩を纒めた帶の織物地。眞中の女の紺絣の、幼童の羽織の黒の透けたる、すべて版畫技巧の愈々向上されたことを物語る所のものである。

第四圖　美人面相娘圖　小判　歌麿畫

これは大正六年末發行された歌麿錦繪繪本目錄にも洩れてゐる所のものである。所藏のものは、面相拾體の內、此圖を入れて八枚。卽ち文書ける遊女、爪切る女、簪で髮を掻く女、右手紙左手に小楊枝を持つた女、盃を手にする女、煙管を口にする女、肌ぬぎ半裸の女、及び此圖である。而して肌ぬぎ女の圖によつて、版元は仙鶴堂であると知れる。此繪、彼の享和二三年頃の作であらう。此の繪が與へる豐麗艷治な感じは、今更いふまでもないが、主なる色調をいふと、上著(うはぎ)は朽葉色、下著(したぎ)の草色

繻絆の紅、櫛の黄である。因みに歌麿には、此種の十相畫はなほ他に數種ある。卽ち初期の婦女人相十品、婦人相學十體、(共に蔦屋版)、後期享和二年頃の「婦人相學拾體」(仙鶴堂版)等であるが、此等は共に大判である。同時に出版されたものか、大判の聲譽を博したにつれて此の小判を出版したものかも知れない。但し此の小判は、無論後期物である。なほこの所掲の寫眞に現れた細字の註のうち、末行の梅養秀里とは、梅が枝の梅がひ、及び秀里なる二人の矢場女の謂である。

第五圖　六歌仙室内三美人圖　大錦判　榮之畫

榮之は、紫及び鼠の配色に好手腕を有してゐたと謂はれてゐる。此圖も然りで(製作は寛政の初期)紅を用ゐず、紫、黄、黑の三色を交錯して、一個の爽かなるトーンを出した點、彼の稟性の上品であり、淡雅な趣味に生きてゐたことを物語つてゐる。榮之の畫の本來は、美人の坐像を描き、その背景を黄の一色でつぶしたる如きものが、彼の個性と趣味とを最も具體的に表現してゐて、多く逸品と謂はれてゐるが、然しこの畫は、これに較べて思ひきつて複雜な背景、淸長の畫の領域の如き感あるにもかゝはらず、案外好結果を收めてゐる。而してその透視畫的描法も存外の妙を示してゐる。しかし色調は一層の巧妙で、右の女の著衣の黑。中央の紫。左の黄。廊下、障子の桟の黄。これらが先づ

交々いふにいへぬ高雅瀟洒な感じを與へる。彼の身分が、浮世繪師中頭角を抽んでゝゐることなどがすぐ聯想されずには居れぬ。氏素性は爭はれぬものだ、全體が貴族的趣味とも謂ひ得るではないか。

第六圖　見立雨乞小町圖　大錦判　豐國畫

この圖は今やう七小町の内の一圖である。豐國の晩年文化六七年頃の作であらう。今やう七小町の他の六圖は、草紙洗小町で婦女の楊枝を使ふ圖や、關寺小町で、婦女の鏡を手にする圖など、凡て小町に假りた時世粧の娘である。豐國には、なほ他に七小町の見立繪がある。寛政八年頃の風流七小町略姿繪である。（泉市版）さうしてこの今やう七小町は、前期のこれなどに較べると、見方によつては描線の連絡にも趣味を缺き、色彩等も荒んだ痕が見えぬではないが、一面からいふと彼の個性（それがよかれあしかれ）の結實を見た、所謂歌川式美人の誕生で、彼の製作年代では、最も記念すべき作品の一個であらう。而して此圖の色彩をいふと、基調は、著衣上著の黑と傘の黑ずんだ代赭と黃との段である。それを、襟と裾模様の水、櫻の葉の色の白茶、帶の地の色と「ことわりや」云々の雨乞歌のカコミとの紫、裾模様の櫻の蕋と帶の唐草との草、繻絆と丈長と腰紐との紅、及び雨の薄墨、此等が溫和しく交響してゐる。

第七圖　契情待郎圖　大錦判　英泉畫

この圖は、契情道中雙娽の内の一圖である。別に見立吉原五十三對の見出しもある。果して五十三對完成されたか否かは不明であるが、自分は、此圖の他に日本橋、吉田（日本橋は、扇屋の花扇。吉田は、姿海老屋の膺の尾を描く）等の數枚よりしか有たない。しかしこの數枚を見るに、全部彼の秀抜な此方面に於ける技倆の現れたもので、一生の逸品と目するに足りよう。增補浮世繪類考に所謂、「靑樓遊女の姿を寫すに委しく、その家の風俗嬬姿を畫くに、役者の狂言振に似せず、時世の形態を新たに畫くことは、此人に起れり」といふのは、則ち此等を指したものであらう。此繪の色調の主なるものは、上著の地の代赭がゝつた紅と、帶と上著のふきの黑、上著の襟と袖と裾の濃い藍、この三者の諧奏である。それにうちかけの梅の地の藍、狆の黑と代赭（代赭は、上のカコミの合羽の色も）との斑。櫛や菊の花瓣の黄、うちかけの裾の菊の地と上著の各處に點在する菊の葉の綠靑とが、伴つてゐる。

第八圖　踊師匠凝扮圖　大錦判　國貞畫

當世美人合の內、踊師匠が、鬘を被り眼じりに紅をさせる繪である。香蝶樓時代、彼の天保後期の作である。彼の美人繪は、五渡亭時代のものにも或はより多くの佳作もあるが、然し該時代の作品は傳統からいふと、師の豐國や英泉などの感化が著るしく、彼の獨自の境を開いたものではない。隨つてこの圖の如き香蝶樓國貞時代は、彼の個性趣味を赤裸裸に（或は當時の民衆の趣味を）發揮した國貞式美人の誕生である。而してこの圖は、その代表物といつても過褒ではあるまいと思ふ。描線硬化の嫌はあるが、時世粧の畫としては、完成の極致である。色彩の配合も、後年のあくどさに比して、却つて別人と思はせる程の沈靜さがある。主色は、下著の紅であつて、その襟の土筆の地の濃い綠（簪の色も）が、これを扶けてゐる。其他、繻絆の襟の線の雀茶ともいふべき色、丈長のうすい代赭、髷の紐の紫、すべて快適なる感じに生きてゐる。（なほ此圖の左の障子の棧は、屛障ともいふべきものであらうか。）

第九圖　美人赴莚圖　大錦判　廣重畫

これは、廣重の最も初期の美人畫である。落款から見ると、初期美人畫の代表作として著名な『外と內姿八景』の文政三年頃といふのと同年か、又はこれよりも以前かとまで思はれる。一日英泉のや

うな感じはするが、しかし彼後年の風景畫の諸傑作に比して、これまた別個の風味ありといひたい。さうして婦女の描線こそ英泉の感化を受けたらしいものゝ、その背景の意匠及び全體の瀟洒たる配色は、疑ふまでもなく、廣重獨特の天分を發見することが出來る。私は、本著述に於ける彼のたつた一枚の挿繪にこれを擇んだことが、强ち彼に對する皮肉ではないと思ふ。この圖の配色は、單純なものである。他を摸した形跡は、線に於てあるにしても、配色は、時流を拔いてゐる。卽ち着物の模樣の草を基點に、帶と重箱の墨、背景の盃の紅、それを浮かした水の鼠がゝつた靑、及び櫛、襟などの黄殆どこれら少數の色から成つてゐる。私は、彼の風景畫を貫條たる叙情詩的氣分であると常に目してゐるが、絢爛なるべき此の風俗美人畫もまた然りと謂はねばならぬ。

（尙、此圖、本來は無題。赴莚云々は、自分の假外題である。）

第十圖　美人煮茗圖　大錦判　國芳畫

縞揃女辨慶の内の一枚である。検印役人名一個であるから天保十五年後弘化に及ぶ期間の作、卽ち彼の全盛期の作である。この揃物は、多分五枚であらうと思ふが、家藏のは、四枚である。卽ち所掲のものと、鏡前剃刀を手にする美人と、遠見の淺草の塔を拜む船中の美人と、橋上鬼灯を手にする美

人と、如上の四圖である。何れも大柄の辨慶縞を著た俠と淚脆さとの江戸前の純粹さを溢らしてゐる。しかもこの煮茗圖は、他の三圖にはない年增で、從つて一層國芳式の氣分である。辨慶縞の冴えた藍がこの圖の焦點であり、繻絆の胴、櫛と笄との隈の眞紅。繻絆の襟と帶の葡萄色、茶壺と火箸の焦茶。繻子の襟と辨慶縞の黑。繻子の襟の織留と火鉢の胴の木目の黃、凡てが國芳の國の音樂である。躍動した深い新內情調である。寫眞にはうまく現れなかつたが、口の齒竝の黑が、眞紅の兩唇の中にあつて、しかし近よらば叱りつけられさうな爛熟した性的愛の挑戰を以て、私を刺戟することを書添へておく。

——大正八年七月「浮世繪の印象」口繪解說。

附記——第一圖の春信畫としたものは、此頃では、少々曖昧となりつゝある。實は、これは小判十二枚物の艶畫の一枚、平凡なそれを流用したのであつた。以後、時々湖龍齋ではなからうかと思へてきた。今でもである。否、最近では、大分濃厚な疑ひである。最近「新小說」八月號豫定の拙稿「浮世繪雜考」の中にも、書いておいたが、此種の小判十二枚物の艶畫は、春信にも湖龍にも、春重(江漢)にも共々あるらしい。お互ひが似てゐる。實は、他の二が春信を摸してゐるので、大に困惑するのである。いづれ其中、何とか斷定したいものである。

——大正十五年七月十二日補

親鸞と歌麿

×

教權を建設するに努めた覺如よりも、政權と武權と教權との三體一致を計つた蓮如よりも、乞食坊主と毀（そし）られたあなたが、私は好ましい、慕はしい。

敝（やぶ）れ衣（ころも）に、朽ちた笠、日燒けた顏の乞食坊主、失敬ながらさうしたあなたのみすぼらしさの方が、私は、黃金の箔ずくめな本願寺を拵へた覺如・蓮如の並々ならぬ活動よりも好ましい、慕はしい。

自分一身救助の教（をしへ）、そこに教權建設の夢は、さらに無い。雨露をやつと凌いだ稻田の草庵、そこに、本願寺は無かつた。今の人爵にのさばり返つた法主も何もかも。

「善人救はる。況んや惡人をや」、そこに罪障ふかき我身の悔と嘆きとの涙の果てに、縋つた彌陀の光明がある。王法併せ說いた、現世を矢鱈振り廻した蓮如に、何處に攝取の法悅があるか。私は、あなたを盲信徒らの偶像的崇拜を脫却した、赤裸々の乞食坊主として見たい。性欲の偉きな力に日夜虐げられ、而も罪障懺悔に胸の燃えた、擧句（あげく）「惡人をや」と五體を唯一の信に投げ出した、その苦悶しぬ

いたあなたを、わが友とも、わが爲の菩薩とも、わが父ともしてゆきたい。

「越路なる有乳の山にゆきつかれ、足も血しほに染めしばかりぞ」

あゝ、乞食坊主であつたあなたよ！

——大正六年七月

×

艶本畫家たる歌麿よ。「性」の不可思議な、あの艶冶な陶醉、蠱惑と牽引とひきもあへぬあのたぎる甘い泉の流れに、十分浸りえたと思はれる君よ！　しかもそれを如實に、さては如實以上、さまざまな幻想境から産み出した千態萬姿の祕密。童女あり成女あり、娼婦あり、母婦あり。人はいふ、「歌麿といへども單に時流の好色心に投じた迄だ。青樓美人、妖艶婦女の姿態に全身的なものといふものでもない」と。然し、凡庸な、賣らんが爲のみの畫家の筆管から、どうして君ほどの、殆んど始終統一した婦女の描寫美、蠱惑の世界のあの先人未到の境地とが、そこに産れえようぞ。矢張り、閨房は君の藝術であつた。喘ぐ四肢を描く時、君は最も全身的、全情熱的であつたのだ。

躍る！　躍る！　君の艶本の上に。君のあの潑剌たる娼婦兼母婦の美が。君は、誠に神技だ。艶態、迚も君の此の畫致の十分一も云ひ了したものではない。あゝ君は、我等蠱惑酣醉を求むる者の爲に、唯一の魔術使である。

——大正十五年七月

腎臓炎

雨がしよぼ〳〵降つてゐる。晝すぎ、寢づかれて、丹前を着たまゝ、障子をあけて、閾に腰をかけた。瓜核の拗ねたをんなのやうた顏をして、白い細い雨脚が、亞鉛板の屋根を洗つてゐる。隣家の庭の、この二階を越す位に伸びた松の樹が、濡れそぼつてゐるのが見える。綠の色は、くつきりと、いかにも健康の誇りを表はしてゐた。

私はふと思つた。あの松には、腎臓炎はなからうと。この雨の糸にもなからうと。なぜ私ばかり人間の自分がかうした病氣にかゝるか。無智なものどもは、走つても死にはしない。私は、走れば、心臓痲痺になつて、おじやんだ。つまらない。なまじ若干の聰明さがあるから、かうした變な病氣になるのだ。結核にでもなれば、大變だと醫者の野風氏が云つた。樗牛も、子規も、獨步も、而して俺もか。悲慘な滑稽！

松の健かな無智な顏、然し病氣の自分は、何か壓せられたやうになつて、さつと座敷の中を見廻した。床の間には、私の祖先だといふ足利義氏の肖像が掛けてある。あの足利義氏にも腎臓炎はなかつ

たのだ。忌々しくなつた。やりかけた仕事の「西行上人歌集新釋」の原稿が机に散らばつてゐる。これにも反感が起る。西行にも、腎臓炎はないのだ。西行といふ男は、思へば不徹底な、生を惜んだ奴だ。世間にも、死ぬ死ぬといつた奴に死んだ奴はない。丁度その仲間だ「惜しむとも惜しまれぬべきこの世かは、身をすてゝこそ身をも助けめ。」何だい生意氣な。すぐ悲觀してすぐ遁世、そしてすぐ未練に苦しむ。何處に、彼の尊い個性があるか、意志の力がある。俺は、こんな男よりや、生きゐる力も強い、意志も強い。世を否定して世を是認してゐる。それは、俺がなくんば、彼等は愛を知らぬ。俺が彼等を愛することによつて、彼等は始めて、人生の愛を知ることが出來るのだ。西行は、世から自分を否定して世から遁れた。俺は、俺を是認するから、最初世を否定し、次いで是認した俺の意志の下に、世を是認してやつた。然し、かうしたことも、こんな變な病氣にかゝつてから、げつそり元氣がなくなつた。ドストエフスキーにも顛癇があつた。俺にもまたこれ以上どんな病氣がとりつくかも知れぬ。癪に障る、雨も、松も、義氏も西行も、自分の以外の全部の生き物が。

――大正五年十二月

隱遁者の心理

我々同胞の中で、隱遁者の例を求めるならば、昔に數多くある。西行でもさうである。「方丈記」を書いた鴨長明もさうである。其他無數であるが、純宗教的の遁世でなくて、何かの理由、理由が判然してゐなくとも、その人物の全體の感じが、兎に角この人間的であるといふ點から云ふと、私はこの二者位ゐより知らない。親鸞も其他誰彼もあるが、彼等のになると、懷かしい點は同じであつても、西行や長明程、私たちの同朋であるといふ感を惹かない。それ丈け親鸞側の純遁世者がえらいのか、それとも單に宗教の色彩が著しいから、私のいふ人間味に乏しいのかも知れない。然し親鸞はまだ〳〵宗教的遁世の中で最も私の懷かしむ一人である。長明と西行は、私と同じやうな俗物であり、また人格も親鸞ほどの崇高さのなかつた點で、心易い。

私のいふ隱遁者は、長明や西行のやうに、純宗教的のものではなく、俗味のより多いものをいふのである。親鸞も黑衣の俗人といはれぬでもないが、一種の宗教三昧が尊い。私のこの場合は、もつと卑しくひき擦り下すのである。といつて西行や長明が格別俗つぽかつたといふのではない。何といは

う、あの彼等が遁世後に於て幾たびもした述懐、さては執著の溜息が、親鸞の徹底した半僧半俗よりも一層私に慕しく、私に近いのである。

宗教的の遁世は、第二義のやうに思へる。宗教者には第一義ではあつても、人間としては。私はもつとこの世が嫌で仕様がないが、然し好きで堪らないといふ事を彼等から聞きたい。現に西行は、山家集の上で、この溜息を漏した。「吉野山やがて出でじと思ふ身を、花散りなばと人や待つらむ」は、既に人を目標にした未練さの消えざるものがある。「あはれたゞ草の庵のさびしきに風より外にとふ人ぞなき」これも人待つ焦だたしさがある。有名な絶唱、「世の中を夢と見る〳〵はかなくも猶驚かぬわが心かな」は、思ひなしか未練からの自暴自棄のやうである。

長明はまた思ひ切つて現世を罵倒した。「甍を連ねる人間の營みほど愚かならぬはなきを」といふ意味の詞を散々吐き散らしてゐる。私は、遁世の動機に於ては、この二者とも他の聖僧達のやうに純ではないと思ふ。然しそれに引き更へ、私をして自分の影のやうに讃歎せしめる或物をこの二者らは有もつてゐる。即ち浮世を離れ乍ら、淡い傍觀又は熱い罵詈と形は異るものゝ、共に强いこの世の執著心を聞き得るからである。これが、他の聖者たちの與り知らぬ所である。

世を離れて愈々世を思ふ。そこに凡人の溜息、凡人の生命がある。

――大正十年一月

苦痛の谷か、享樂の谷か

私は、この四月の月はじめ約五日ほどを大阪に暮した。いろ〳〵心に影を留めた事もあるが、就中今更乍ら驚いたのは、あの大阪といふ都會が、人間と建築物と、その雰圍氣が、總て一個の享樂といふ匂を釀し出してゐる事だ。大阪に初めてではない。然し此頃やつとさうした物の姿に眼の開いた私は、行きずりに眺めた雜踏の群、或は兩側の店頭の飾り、凡てさうした匂で十分であることに始めて驚いたのであつた。歸りに奈良で半日を過した。あの古都の匂が比較的保存されてゐる街、そこで堅い燒煎餅を鹿の餌にやり乍ら、私は同じく驚かされたのである。大阪で感じたものと同樣のものに。

奈良でも、いかにも享樂に陶醉したやうな男女の群があつた。群れまつはる鹿の老若、彼等は凡て角を切られ、その角のあとから、また若い角が芽ぐんでゐた。さうした角の芽生えのやうに、人生の芽生えは、格別この激甚な人間の競爭から、置き去りにせられたやうな古都にも、平氣で芽生えてゐた。而もそれが大抵無意識な、無感覺な、人間の享樂に徹底したもののやうであつた。さうした廢滅に近い故都の巷にもである。

一夜、蘆邊踊を見た。あの綺麗に飾られた場内。人間の粉黛の限りを盡したやうな、それは舞臺のみではなかつた。今日は出番でない妓たちが、彼女らの保護者を挾んで見物してゐた。顏こそ、私の雛ひた現代式であつたものゝ、さうした者らの醸す遊蕩氣分、それらが半意識的に場内に投げる媚は、彼女らが賣笑婦であることを忘れしめる程の美と眩惑との塊であつた。私はすつかりすきな浮世繪式の享樂場面が、そこに幾らも轉がつてゐることに感喜した。うつかり見詰めてゐた私を敲きのめす程、地方の三味は、囃子と相俟つて、人間歡樂の夢をより多く波立たしてゐた。舞臺の美女は、一列に動いて、紅紫繚亂たるものがあつた。

南圓堂の夕暮である。塔の尖にどんよりした花曇りの空が展けてゐた。岡べりに人だかりがあつた。地廻りのもの達であらう。若い娘と若い男の三四人が、若い男は太鼓を敲き、娘は深川踊を踊つてゐた。岡から猿澤の池が見られた。岸べの柳は一樣に青く枝垂れてゐた。いつのまにかポツリ〳〵と雨が降り出した。人だかりはまだ解けさうもない。私は、奈良らしい古都情緒らしいものは、南圓堂から猿澤池を見下したあの邊に最も多いと思うてゐる。その折角の境地も、かうした深川踊で無關心にされてゐた。

前者は、大阪らしい雰圍氣に生れたもの、後者は、奈良といふ背景が現代と交渉したら、斯うもあ

らうかといふものである。然し二者相通じて、私の驚かされた事は、斯うして人間は、いつ迄享樂し陶醉するのかといふ疑問だ。その脚下にどうして氣がつかぬのかといふ事だ。私は芦邊踊の最中、南園堂の踊にも、沁々と迫つた一種の哀感に打たれずには居られなかつた。それは、彼等が（無論私もその一人）、知つて陶醉してゐるのか。又は知り乍らそれを一時胡麻化さうとしてその擧句の惑溺であるのか。私は、何だか情けなくなつた。一たい、人性は苦痛の谷か、それとも享樂の谷か、どちらなのだ。無論苦痛の谷だといふ説が古今東西その多數を占めてはゐるが、斯うして人間の無關心らしい素振を見ると、矢張り享樂の谷で本來あつたのかと疑ひたくなる。苦痛などといううて人生を避けてゐるのは、或はつむじ曲りの心理であるかも知れぬなどと。

然し人間はいつ迄斯うして享樂に浸つてゐるのか。生み、榮えるのは、この享樂の爲ばかりか。さうではない、生るべく人間の本務があると何處かで莊嚴らしい聲がする。然し、その本務とは何か。少し分つたやうな分らぬやうなもので、要するに大抵の男女は死ぬ間際に命を惜んで死ぬであらう。それもたゞ生きたい丈の欲求の爲に。他の物のあるのは極めて少數である。浮世如夢といふが、そのまた先の世も夢であらう、杳茫漠たるものだ、無か有か自分には分らぬ。一體人間は生み死んで、何處まで走り續けねばならぬか。何處まで。分らぬまゝこれで擱筆。

——大正十年五月

否定の疲れ

×

あらゆる繪や物語（情事に關する）がすべて霞一重隔てたものと思はれるやうになつた。自らも稱してゐた變態心理の膜が、惜し氣もなく破れた。それは、ある者の爲にである。好色本の模型のやうに嘗て信じた西鶴もマウパツサンも、ダヌンチオも、この今の私が彼から與へられる感激ほどの感激切實な逼迫感は、もう今は與へてくれない。煩はされた頭が今漸くその雲霧がとれて、始めて透徹したやうな氣がする。私の體そのものも。この今筆を執りつゝある指すらも。今では或る切實な愛の極印をうけて、より高度な欲求に慄へてゐる。描かれたもの、作られたもの、そは總て他人の記錄、又は幻影の結晶である。自分は、嘗て歌麿の美人畫に、『久遠の女性』を發見し、十分な快感を得た。然しこの快感、今は寸分の影だに殘してゐない。久遠よりも現在、今の彼女に、この茫漠たる快感以上の肉薄さがある。快か不快か、或は靈的か肉的か、さうした顧慮の遑ない程、それが今の私に全體である。理窟は野暮だ。口はたゝくな。手自ら直ちに行へ。飲め享けよ、雫を——と、私自らが私に命ず

る。

ある晩、ある劇場に彼女とあつた。繋縛を脱れて、かうした小屋者の自由に趁らうといつた欲求が、お互に燃えた。

×

『俺が拍子木を打つ。お前はちよぼを彈け。さうして一生を暮さう』ともいつた。

『淪落ですね』といつた。淪落、なるほどかうした言葉もあるが、私自身には、寧ろさうした常套な語では意味し能はぬ、放浪、漂泊の自由な快感が、胸苦しい程胸にあつた。芭蕉や、西行や、何の爲に漂泊したか。集團を離れて、孤獨に本當の自分を育まうとしたのだ。私らは二人である。彼等の如き孤影煢然ではない。しかしそれだけ我々はより多く現實的である。人間的である。然しそれを愈々と實行し能はぬ所に、我々の理智が邪魔をする。しかし、親鸞を見よ、彼は、玉日を連れて放浪三十年、終に自分たちだけの道を歩み通したではないか。はしなく島村抱月氏のことを噂にした。須磨子と氏とを二人に考へたりした。彼等が地方巡業を多く續けてゐるのも、大に意味があると思つた。

その後幾日經つて、抱月氏の死を新聞で見た私は、さきの夜のこの會話を想起して、二人の將來に或る忌はしい暗示を與へられたもののやうに、びくりとした。

近代文學にも養はれ、江戸文化にも影響されてゐる。東西古今打つて一丸（その實半丸か、否三分の一丸くらゐであらう。）といふ文字は眞に私ではあるまいか。しかし今、私は、この東西古今に遠慮なく斧鉞を下してゐる。殘るは、唯だ『死より強し』の語や、デカダンに最も徹底した歌澤瑠璃の『新内』か、さうしたもの位ゐである。

（大正七年十二月二十七日、午後二時）

×

右は、自分としては、過去の、大分現實的な痴情の夢に醉つてゐた頃の、誇張ではあるが（今から思へば）、眞劍な叫びであつた。右には、浮世繪、生命なしとして、一ごなしに否定してゐるが、此の人間當事者の實事にも已に平凡化せられてきた今では、やはり、此の否定から更に否定を生んで、再び以前の浮世繪軟本類の肯定にありと云ひたい。實事はやはり倦かれ易い。夢ではないが、酒の强い醉のやうなものだ。今では、より新しくより懷しい撫愛、玩弄の懷(おもひ)が、此の浮世繪類にありと述べたい。——誰しもの到らん境地ではあらうが。

——大正十五年七月

○

幕開く

（或る旅の追懐）

熱い心の私を載せて、電車は走りつゝあつた。年の暮も迫つた二十六日の朝、九時頃であつた。車内は、聞取り難い信州辯で、年の暮れの景氣を語りあつてゐた。私は、たゞこの電車の行き着く所、そこから更に自動車で四時間、その涯の土地を描くに忙しかつた。あの女、あれがすでに二ケ月前その地にあつた。二ケ月前の或日、彼女は、丁度私と同じやうに、獨りでこの電車を走つた筈だ。この時分は、こんなに雪が降つてはゐなかつたらう。「寒くて堪りません。患つて死ぬやうな氣がします」。さういつた、寂しい失望と郷愁の念とを、露はに示した手紙の端を憶ひ出した。私は、茫然として湧き募る懷しさを制する事が出來なかつた。車内を眺めた。鼻汁を垂らした木綿物を着た醜い女の兒が、私の前をあちこちしてゐた。私の筋向ひに、その母親らしいのが、胸をはだけて、何かしきりと叱りつけてゐた。

陽は、ぎら〳〵と、昨日に似ず照つてゐた。線路が、しだいに勾配になつてゐた。線路の土堤のすぐ下は、細い川が帶を成してゐた。枯れ枯れた雜草の黃が、處々疎らに生えてゐた。川の水は、アツと驚かされた程、紺碧、眞にこの形容通りの色をしてゐた。空を見上げた。空は、紺碧とまでゆかなかつた。晴れてはゐたが、どこかに冬の晝寢をしてゐるやうな、遙か數里かなたの甲斐あたりの國境の山々に蟠まつた白い雲が、千切れ〳〵て漂つてゐた。

眼界はひろ〴〵としてゐた。桑畑の摘まれ切つたのが、幾町となく群がり、その果には、平凡な冬田がひろがつてゐた。その處々に、如何にも窮屈さうに、二三の人家が、その白い光を、硝子の破片のやうに、窓あたり屋根あたりから放つてゐた。陽は惜しげもなく、これら一面に降り注いでゐた。國境の山々は、眼覺める程變幻の手を擴げてゐた。陽に向つたあたりは、美しい透明な藍の色に融けてゐた。陽に翳つたあたりは、濃い曇つた紫色となつてゐた。電車の進むにつれて、その山脈が、形を細かに變へつゝあつた。したがつてその藍と紫との交代も忙しかつた。ところ〴〵噴き出る溫泉の湯のやうに、むら〳〵湧き騰る雲のみだれがあつた。私は、呆然と視つめてゐた。

雪が、それらの光景を一層引き立たしてゐた。砂糖を、否な石灰でも降りかけたやうに、その山の襞(ひだ)に一面に白くなだれてゐた。きら／＼と光るその裾の瓦屋根にも白くあつた。線路のすぐ下の川の縁(ふち)、杭にも白く塊つてゐた。枯れ／＼の水田にも、つらゝとなつて斑(まだら)をなしてゐた。電車は幾村を通り越した。ポカリと明るくなつたかと思ふと、倏忽ある山陰の、雜木林――落葉松(からまつ)の黄ろく剝げた――の立ち並んだ樹の間を疾驅してゐた。

私は、ふと雪の盛んにつぶて打つゝある部屋の夜、赤い友禪の炬燵掛(こたつかけ)を、さうして赤い笑、豐滿な體(からだ)の微笑に疲れて相對ふ彼女を、はつきり描き出した。無論その光景の中心には、私があつた。

私は、電車の鈍(のろ)さが焦躁(ぢれ)かしくなつた。

――大正十年二月

自製安全瓣論

公娼の撲滅は、或程度まで撲滅することが可能である。即ち第一には人身賣買風の淺ましさを當業者自らも買客自らも知る事である。而して第二には、公娼は享樂本位と謂ふよりも大體に於て性慾本位であるから、性慾の相手、即ち或時期に於て總ての男性に婦を娶らしめ、有婦者は絕對に他に性慾を求めないやう、他よりも强制するか、內心からも反省するか、どちらか、或は交々之を行ふかすれば、多少の撲滅の原因とならう。(然しこの自律他律共にその効果は怪しいものだが)然し人間の本性その性癖上、公娼では物足りなくなり、私娼に賴らうといふ傾向を生むは當然である。識者が公娼全廢を喚々するよりも以前に、世風が爾く赴きつゝある。玆にまた公娼撲滅の自然的の機運があると思ふ。

藝者の撲滅は果して出來るだらうか。これは頗る疑問である。藝者は、既に第二の公娼である。警察の賣淫檢擧もあるけれど、それも場所と時間とによつて、格段な相異、寬嚴の區別がある。資本家の娛樂の對象ゆゑ、資本家の反省、又は資本家が制度の廢絕によつて、自然とこの藝者は影をひそめ

るであらうといふ樂觀說もあるけれど、現在の資本家が無くなれば、卽ち第二の資本家を生む道理である。或は全部資本家氣どりの世の中にならうかも知れない。それよりも、藝者をして存立せしめ、繁殖せしめて行くその根本卽ち我々男性の內部に橫たはる、大きく根を張つた享樂的氣分の追求慾、不眞面目な不神聖な享樂慾に、反省の斧をぐつと入れなければ、何にもならないのである。

◇

正直に私をして曰はしめよ。私の內部の心に問かう。卑しい、享樂の奴ともいふべきその一つの心に問かう。(その心が全部ではないが)私は、性慾の滿足は、家婦に於て十分である。何にも性慾を直接遊戲物視して、求めて檢黴頻々たる娼婦に趁らうといふ氣は起らない。唯だ藝者、藝者とまで核心のある心持ではない。言ふと、時々何がなしに起る心の迷ひである。偶には茶屋酒の一杯も飮みたいなあといふ心である。女房との間には、信ずることが生む愛はある。然し開放されたやうな、遊戲本位の會話や所作は迚も續けられさうにもない。昔の黃表紙蒟蒻本あたりに出てゐる遊女買ひのうちの所謂大通は、性交本位ではなく、所謂さうした雰圍氣を懷しむ、尊重する體のものらしい。「寢る」をいふのは野暮だとしたものである。「野暮なお客の床いそぎ」といふ文句もある通りである。目的が氣分にある。その徘徊にある。これ程、拔けない執拗な不神聖な心の根ざしは他にあるま

い。それが、私達のやうに婦を娶つたものであればある程、さうした欲求が強いらしい。家庭は、動もすれば單調になり易いからである。否初めから單調と觀念してかゝらぬからいけないのかも知れぬ。然し私は、その間、かうした不圖した浮れ心の湧くことはあるものゝ、それを遂行すべき餘財を持たない。所謂私は資本家でないからだ。またあぶく錢に豐富な勞働者でもないからだ。それに依つて、私は、さうした浮れ心も、無事平穩に終つて了ふ。さうした時、氣分の轉回に使用されるもの、私の浮世繪の鑑賞並びに軟派書類の披閱である。

人間に享樂氣分、家庭の單調を打破するさうした享樂氣分を欲求する以上は、その存在する限りは我々は何處にか何物にか之を求めなくてはならない。私は幸か不幸か、餘財なきが爲に、書物や繪畫に之を韜晦してゐる。決して生きた人間相手の享樂場面よりも、この方が豐富であるといふのではない。そんな痩我慢はない。然し習慣は不思議なものである。私が多年さうした享樂轉換をやつてゐるうちに、却つてそれが本體のやうになつて終つた。何となれば、此頃偶々友人の資本家などに伍してさうした人間相手の享樂場面に當面することがある。然し嘗て浮世繪に見つゝある辰巳藝者の風姿や、北廓の美人ほどに、彼女等粉黛を凝らした現代の藝者が、一顧の價値を私に與へぬからである。(これは正直な話だ)私は、狹斜氣分も好ましい。所謂藝者にも懷しみを有する。然しそれは、私の

憬である。決して生きた彼女らに趁らうといふ慾はない。さうした所に、私自身は、享樂氣分の危險に對して、安全瓣を自ら發見してゐるのである。

◇

人にこの如くなれと强ふるのではない。唯だ然し少しでも斯うした轉換が試みられるならば、享樂の當面の對象たる藝者階級は、自然とその需要が減退することゝ思ふ。然し人間の性能の發達の模樣を考へると、大體に於ては、この藝者は、益々榮えて行くのかも知れない。即ち男性は、一般少壯期は、性慾萬能、有婦時代からは、性慾が稍その座を退いて、氣分本位の享樂がその座を占める。だから普通に於ては、その氣分本位の享樂に適合したその享樂の供給者たる藝者の絕えさうなことはない。たゞ我々男性が、この享樂を當面の彼女等に求めるか、或はその他の物に轉換するかの問題である。彼女等に罪はない。凡ては男性にこの享樂慾を與へた神の意志、或は神に關係なければ、男性が第二の性として自ら創造した人間の我々自身にある罪である。然し出來得れば、この藝者に趁る要求を根絕さするに若くはない。總ての不神聖や不眞面目がそこから仕切なく現れるものであることは、分りきつた事であるから。況して性慾本位に、藝者に向ふ者などは、一層その心に於て反省しなけれ

ばならぬと思ふ。自己の性慾が然程に、不定不住に他に須つべきものか。少し考へたらば、その非が分ることと思ふ。

電車のなかあたりで、時々美女に出逢ふとする、その時私達は淡い好色的な眼を以てぢろ〳〵眺める。然しそれも何れかゞ降りてしまへば、それなりである。さうした瞬間的な好色氣分、女性を何處までも、男性の遊戯物視する心がいけないと思ふ。凡ては、斯うした心から發生するのである。

『性』の四月號にあらはれた、諸名流の議論は、殆ど肯綮に中つてゐる。然し斯うした男性の遊戯氣分に觸れた人は少かつたらしい。中には、交際場裡の材料として、藝者を問題にしてゐられるのもあつた。然しこれなどは、藝者の發生から考へても、現代男性の一般の要求から考へても迂愚な議論と思ふ。噴飯に堪へないのは、自分のみ清しとする體の、矢鱈にその存在を不神聖として一切否定しかかつた、男性のこの遊戯氣分に理解のないやうな人の多いことである。理解もその存在も無論あり乍ら、それを殊更自己のみは打消してかゝつたやうなその虚僞が、堪らなく嫌に感じられたのである。

要は、この享樂氣分、家庭の單調に飽く心の撲滅、さうした遊戯的の「我」の撲滅にあることゝ思ふのである。

（大正十、四、二〇稿）―大正十年六月、「性」。

性愛と聖愛との相剋

◇

いつも浮世繪の話ばかりしてゐる私としては、あらたまつた題目である。柄にないと謂ふかも知れない。然し偶には、私も人間として享けた凡ての實感を披瀝してみたい、理論は專門の徒に委しておく。私は、今理論の迂遠をしてゐる程、爾程に餘裕がなく、それには餘り灼きつくやうな實感の要求に迫られてゐることを最初に告げておく。手前味噌と人な咎めそである。

最初に、私が大正七年の秋（私の二十九歳）にものした或る執筆の一節を引いてみよう。周吉とは私の假名である。

『寢てからも、女は時々枕許に置かれた湯呑に手を出した。注いで飲んで、盆に載せようとして、カチリト音を立てゝ、ハツと思つた振をした。膝に凭れた彼女の髮のにほひが、今朝は變つた刺戟を持つてゐた。周吉の眼底には、あの時、するりと長襦袢一つになつた女の姿が、なほ幻に浮いてゐた。さうして、あゝした場合にも、矢張り氣分に生き、夢を描く自分が寂しいやうにも思へた。憎い程、

女の深かつた愛が思はれてきた。
田山花袋などの短篇や長篇に讀み馴れた性的愛の濁つた底。………然し神往き魂飛ぶ程の深い愛著の感じが、始めて彼の體にあつた。これ迄の凡ての女、愛は、子供の遊びのやうに思はれてきた。あゝ嘗て知らなかつた深い性的愛の谷、それには、彼のあらゆる人世の智識も、秀拔と自負した頭腦も白紙の如くであつた。女房子もある治兵衞が、小春に溺れて死んだ深い身體の愛著、それがやつと分つたと思つた。
女は囈言のやうに、『あなたは案外弱い！』『どんなにかえらいと思つたら、まだまるつきり御存じないのね』『これ迄の女の方は、どういふんでしたの』といつた。彼は、しみじみ身體の强健な無智な男が羨ましくなつた。書かれたものも、昨日まで二なく思つた浮世繪の女も、畢竟白紙だ。
この眼ざめた身體からいへば、夢よりもなほ下らないものであつた。世上の夫婦が、その單純の愛が塵紙のやうに見えた。凡ての畫家や、作家は、かうした興奮の弱さを自分の創造に逃避した卑怯者だ。自分は、どうかして此の仲間入はすまいと固く思つた。』

◇

斯うした一節もあつた。

『彼は慌たゞしい心にゐた。體の上の愛著の絆をもつと烈しく彼女に與へようと苦しんだり、女の體が眞に彼に屈從する日を見ようとしたりした。疲れて晝眠ざめると、壁際に積まれた彼が數年來貯へた繪の箱や、情事に關した夥しい書棚の內外の書物や、それらが盡く虛僞の、然らずんば痴人の夢のやうに見えた。焦躁が、彼の弱い體を火のやうに走つた。女の弱げに見えて、その實どんなにか肉附きのいい四肢を空間に描いて、眞に憎いと思つた。』

◇

その頃の私は、此の記述にも現れてゐるやうに、私は本當に最初の恐怖と歡喜とを同時に覺えてゐた。また屈辱をも感じてゐた。それは、性愛に於て私の凡てが從來兒戲に類してゐたことであつた。凡ての人間が一度は知る深い恐れと喜び、それが二十九歲の秋の私としては、餘りに遲かつたかも知れない。然し或は一生、此の眼覺めなくして過ぐる人もあらう。それに較べたらば、遲いとはいへ、まだしも私は幸福だつたのである。

勿論その以前にも、私としては男女の愛に未經驗ではなかつた。性愛の入口まで覗いたこともあつた。然し此の二十九歲の秋に會した相手は、私より年少ではあつたものゝ、性愛の經驗に於ては遙かに私の師であり、あらゆる淸純なる惡くいへば幼稚なる性的經驗の男性を凌駕する、それ等を駕御す

るに足る性愛の女王であつた。而して或る意味に於て暴君でもあつた。

◇

その後私は此の時の相手とは異つた他の女性と同棲した。さうして今では互ひに父母といふ境遇を作つてゐる。然し私をして露骨に正直に謂はしむるならば、あの最初の感激は再び來なかつた。それに似たものがないのではない。然しあの驚異はなかつた。戰かしい程の歡び、それは再び現はれなかつた。あるものは、惰勢に過ぎなかつた。それに、現在の私の妻が、性に於て訓練の足りない點もある。性に於て訓練が足りないと今、私は謂つた。誤解されるといかにも私が性を遊戲化し技術化してゐるやうである。性の神聖事たる事は私だつて辨へてゐる。然しそれがあるが儘であるよりは、人間の複雜な鑑賞慾享樂心理に依つて、これを複雜化した所が、別に性に對して不義であり、また神を冒瀆するものであるとは限らない。神は、我々に性的感を單純に與へてはゐないと思ふ。或は私が今謂つたやうなものは、當初から神の意志でないかも知れない。にしても旣に性感ある以上、その複雜化色々な技巧によつての享樂感は、それが全然正當として公許されぬかも知れないが、看過默認くらゐはさるべきものであらうと思ふ。

然し私としても、神が性を單純に與へたのであるか、或は複雜な技巧から來る性的感も附帶して與

へたのであるか、何れとも彼の意志は分らない。神と悪魔とは並び存するといふ。神性と獸性ともに存するといふ。複雜な性的快感、淨いとは徹底的には謂へないかも知れないが、然し之を濁れるどん底と耻かしめることも出來ない。さうした性的快感が若し悪魔であり、果して獸性であるならば、私達はまたその正反した物をまた持つてゐる事に、誇らなくともいゝが、一般人意を强うしていゝとも思ふ。その正反した物とは、名づけた聖愛である。

◇

性的愛に對する言葉として、若し私が選ぶなれば心的愛である。相觸るゝと否とに拘はらず、性的感を超越すると否とに拘らず、自然に相互に流れ出た愛を謂ふのである。これが淨潔そのものとも限らない。その蔭には、矢張り「性」が根を張つてゐる。たゞ性感を基本にした愛よりも、比較的さうした色目の乏しい、色は淡々として水のやうな、然し集まれば紺青の深い色を現はすやうなさうした愛である。性愛は、爛らす色の灼きつくやうな赤。聖愛は、人の心を鎭める溫雅な青である。

◇

夫婦は、夫婦以外の男女關係に比較して、私の謂ふ聖愛に近い。夫婦關係の私の持論は、愛よりも信といふにある。卽ち信は、聖愛の意味と異らない。而してその夫婦と雖も、相手が姙々し、双方親

となるのは、矢張り性愛の結果である。たゞ性愛と聖愛と、何れが第一歩であるか、第一義であるかといふだけの事である。然し矢張り世間實在の夫婦關係もその殆どは、此の性愛がその動機であるやうに思ふ。誰人が、眞に神聖に、姙孕を豫期し、子孫を的確に要求して、結婚するものがあらうか。

（子孫を豫期すること、性愛よりも寧ろ聖愛に近き動機である。）

◇

私は、自分も嘗て然りであつたが、世間の夫婦に於て、結婚して知らぬ間に、相手が姙娠する。やがて兒が生れる。この間の双方の驚き、喜びもあらうが、半ばは當惑もあらう。或は喜びのみ、當惑は絕無の夫婦關係に於ても、驚きはあるであらう。この驚きこそ、實に微妙な事柄である、神の意志を始めて窺ひ知る、動機、好機會である。卽ち双方、この折々の瞬間に於ては、恐らくは、兒孫の要求に燃えてゐなかつた。唯あるが儘の性感であつたのであるにも拘らず、神の意志は斯かる人間の双方にも動いて寔に有難い哉、兒孫を垂れたのである。天意神意と之れを假託するより、他に辭がないであらうと思ふのである。

◇

私は、昨年の秋、始めて父となつた時、斯うしたいみじき啓示に觸れた。同時に想ひ起したのは、

親鸞聖人が、幾人もの子を設けていつたその時々の驚きが幾千であつたらうかといふ疑問である。親鸞、彼は、垢衣の行者に於て徹底してゐた。進んでは自得の信を賣らなかつた。極めて消極的に、個身のみ涙ぐましいやうな法悦に生き、然し罪業を常に意識してその果(はて)念佛を絶たなかつた他力門の隨一である。それ程の彼が、愛慾の彼の結果として生れ出た多くの士女、殊に老境になほ同棲しつゞけた夫人朝女、それらとに心の葛藤があつたかなかつたか。先夫人玉日姫の事は暫らく措き、中年期に於て、漸く性に於て眼ざめ來つた彼が、朝女と情愛をかはした時、兒女の出生を見た時、彼には反省の心があつたかなかつたか。どうした心を以て彼は自分の兒女の顏を見詰めたか。罪業を意識し乍らもなほ頻りに兒女を産み出した彼の性の痛ましさは、痛ましいと思つたか、或はそれを肯定したか。罪業とか煩惱とか、さうしたコンヴエンショナルな言葉では足りない。もう一歩細かくいふと、彼が朝女を愛する時、彼は子孫を生む要求に燃えたか。或は單に已み難き性感の欲求に過ぎなかつたのであるか。矢張り私達と同じやうに、兒の出生を見て驚いたかといふ問題である。

◇

西行といふ男などの遁世の動機は、如何であつたらう。斯うした深い淵のやうな愛慾に疲れ果てた結果ではなかつたらうか。私も此頃、斯うした思ひが頻りにする。樹下石上、そこには愛慾の侶伴は

ない筈である。愛慾を自ら肯定する丈の勇氣のない者が、去つて、その繫紲から脫れむとしたのではなからうか。積極的な强味のあるものは、進んで、それを肯定する筈である。弱げに見えても、西行よりは親鸞の方が强い個性であつたかも知れぬ。或は他力の神髓、凡て個身の現在を肯定した强みかも知れない。それだけ西行たちの孤身の漂泊者は、現在の凡てを肯定することの出來ない、慌しい悲しい魂であつたのであらう。

◇

性感の脅迫を時々恐るべきもの、抵抗し難いものに思ふ擧句、それから逃げたいと思ふ事が此の頃の私にもある。然るに女性の相手、――は當初は、全く無知であつたものが、此頃すつかり性に眼ざめた。……………聖愛と性愛と……………また呪はしいやうな氣分にも打たれる。それから離脫しようと云ふ事を時偶霧のやうに思ふ。殊に此頃のやうな朗々たる秋光に向へば、童貞であつた頃のウジ〳〵したはにかみがちな昔の自分が戀しうてならない。其果起るものは、屹度厭離、此の情である。

◇

然程に私達男性は、性愛に對して熱したり冷めたりする、不徹底にして全身的な要求でないのかも

知れない。遊戯的であり、燃燒的でないと謂ふべきであらう。『時雨の炬燵』の治兵衛が娼婦小春に趁つたのは、此の意味に於て、私よりも緊張してゐたのだ。彼が全的に性感に燃えてゐたのだ。おさんといふ聖愛の相手よりも、小春といふ性愛が剌つたのである。彼は、小春の性感の俘虜であつたのだ。私にそれ程全身的な欲求が性感に於て燃えないのは、當分小春のやうな相手に缺けてゐるといふ點でもあらう。

◇

娼婦のうちには、性感に飽いて聖愛に期待の胸を波打たしてゐるのもある。娼婦たちは性感に馴れてゐるであらう。現に彼此聖愛に渇いてゐるものが少くない。然るに世間凡庸の婦女は、却つてその正反對、滔々として性愛の殿堂に額づかんとしつゝある。性愛の陷穽到る處に開け、またそれと劣らぬ程度に聖愛の陷穽もある。現に聖愛の欲求は、娼婦階級とも限らない。無理解な、全的に愛されてゐない一口に謂へば、性の合はぬ同士の夫婦が、その妻が、子女あり乍らもそれを振捨てゝ他の大きな力に動かされようとする者も尠くないではないか。子女ある以上殊にその多く性の訓練を經たものである以上、彼女等は、性感に於ての滿足は既に十分である筈である。にも拘らず、他に趁らむとするのは、そこに性を離脫した意味の、卽ち私の謂ふ聖愛の相手を欲しがるからである。

色々な年齡、境遇を別にして、さうしてそこに性愛の谷が開かれ、またその好敵手として聖愛の壘が築かれる。彼と此、互ひに相剋し反噬し、或は融化し親和しつゝある。

その相剋は、爭鬪は、私達の個々の心にもある。どちらか一方が全部である時もある。然し間もなく他の物が勝つ。或は双方休戰狀態であり、その體の持主である自分は弱つてしまふこともある。然しこれは、恐らく永劫に解けぬ謎であるかも知れない。それが人間的であるといふのかも知れない。然し餘りに人間的ではあるまいか。

◇

性愛も要らない。聖愛も大した要求ではない。凡てが要らない。唯だ淡々として、無心に陽(ひ)を受けて生育する植物の如くありたいと思ふ事もある。然しその植物にも雌雄の惱みはある筈であると氣がつくと、愕然として身邊の不思議さに打たれる。性愛が本來のものであるのか。聖愛は人間が人間らしく衒ふが爲に急に拵へたものか。さうした疑問も消えない。迷故三界城(まよふがゆゑにさんがいのしろ)――。私達の身に平安な日の打續くのは、何時の事であらうか。

◇

お互ひに――男性も女性も幸福を探求してゐる。それが年老になればなる程、家庭の者であればあ

る程、幸福の在處を求むる者が多い。それに渇いて已み難い欲望に喫くものが多い。幸福は、既に得られた筈ではないか。彼等は同棲しつゝあるではないか。煢然たる孤影にいつ迄もある他に比較すれば、兒女あり配偶者ある一般の兩性は、既に絶對の幸福を贏ち得た筈である。それが、足擦り喫く。何が故にであらう。隴を得て蜀を望む人間の淺慮な慾の深さとは、一ごなしに謂へないものがそこにある。彼等は、同棲し結婚して、性の秘密に觸れた。體驗し果てた。そこに生ずる幻滅感も多少手傳つてゐるのであらう。或は、「こんな筈ではなかつた」といふ失望の溜息もあるであらう。それに依つて、兩性互ひに秘密により遥かな幸福を攫まんとし、至上の物を招致せしめんとして焦慮し奔走する。そこに、從來と異つた二者の活躍の力が流れる。然しその相手が、到頭自分の所期の物を有しないと之を確かめ終るや否や、弱き者は、泣き寢入りとなり、强き者は進んで敢て他に趁らんとする。男性の遊蕩沙汰、女性の淫奔の噂は、一概に叱咤し去る事の出來ぬ、斯うした惱み希求が、彼等にあるのではなからうか。

◇

それに、同棲してあればある程、融合しさうで却つて融合しない。時には反撥の結果を招く家庭もある。私は運命といふことを絶對に信ずるものではないが、不可思議な理法が男女にもありはしない

かと思ふ。或は當事者同士の得手勝手な慾望であるかも知れないが、當初睦まじかつた彼等が、次第に不和となるのは、何ういふ譯か。強ち性感の不滿といふのにも限らない。互ひに相手を猜疑の眼を以て迎へようとする悲劇も起る。

男性の心が不羈であるだけ、女性の心も窺ひ知ることの出來ぬものである。唯男性が世界活動の中心であるだけ、人間相互の規約は男性に都合よく拵へられ、（否、從來の規約は殆ど男性の手に生れた）從つて男性の放恣性の跳梁を看過するだけの物に拵へられてある。從つて女性は、表面には、大した事を仕出かさない。然し彼女等の內心を敲けば、凡てが男性と同じ放恣な欲求に燃えてゐるのだ。然し放恣強ちに咎め去ることは勿論出來ない。唯そこに唯一の女性の弱點は姙孕の一事である。原始的に觀ると、女性の道義心は、姙孕から來る。男性の道義心は、生活の破壞を恐れる所から來る。凡て神の授けた物を、自己自ら潰し惡用しつゝあることは、同一である。

◇

兩性間に於て、最も幸福な事は、性愛に於ても聖愛に於ても、双方が最高絕對の欲求を相手によりて互ひに滿たしあふ、他を顧みる必要のないさうした男女一對の同棲である。そこには、相手の心を攫むも攫まぬもない。既に二者にして一である。

深くなればなる程、分らない事が多い。染著も初めの中は蓋し呑氣である。然しその度が濃くなればなる程、飽き足らぬ度が增して來る。相手の心も體も全部得なくては承知が出來ぬやうになる。『何處までが自分の物か』といふ疑惑が生ずる。それが禍を捲き起して不滿の種を作る。昨日の一身同體も、今日覺めて考ふれば、矢張り路傍の人と同じく、相手は數百步の彼方を步んでゐるのである。斯うした破綻に撞着することは、蓋し少くないであらう。

◇

私の眼の前に、有夫者にして、有婦者にして、斯うした惱みに苦しんでゐる兩性の數々がある。私も時としてその一人である。それに共通の持つて生れた不神聖な享樂趣味は、いつも單調な（然し入れば入る程味の微妙さがある筈であるが）家庭に飽き易く、他に趁らむとする心がある、同時に振切られぬ道義・恩愛の桎に頸をしめられる。

要するに性愛か聖愛かどちらかゞ全部であつてくれたら、いゝのである。その相剋しあふ間は、私は、いつ迄も心を削り自ら肉を抉らなければならぬのだ。『身から出た銹』これ程痛切な熟々考へさせられた事は、此頃他に決してない。

――大正十年十一月、「性」。

個の羅列（抄録）

一

個と個、僅かに二個の問題ではないか。一人の男と一人の女、僅かに二人の問題ではないか。それが何故(なぜ)……。

自分は永いこと、自分の片影を戀ひてきた。恐らく嬰兒としてあつた當初から、この本能は必然的にあつたのであらう。物心覺え初めた少年期の暮からは、一層この欲に渇いてゐた。永い彷徨、永い探求。さうして、丁度――ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば、父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ――かうした昔の聖僧の純なありし世の父母を戀ふると相同じく、恐らくはそれよりも切實な、この探求、『永遠の我婦』思慕の瞳がそこにあつた。

自分は嘗て、自分のある著作の端にかう書いたことがある。

『彼の求めてゐた美！「我が女」！それは、我々の求むるものではないか。彼の知つた苦(にが)き放蕩の淋しさ。それは同じ人間たる我々のまた酌(く)み知る所ではないか。あゝ彼は、永遠にする「我が女」の探

求者であつた。「我が女」それは一生涯求めても或は求められないかも知れない。運命といふ魔術師が果して在るならば、これのみは知るだらう。或は私の宿世(すくせ)からの女は、私の壁一重彼方に住んでゐるのかも知れない。それを氣附かずに他に拾ひ求めて居るのかも知れない。彼もさうではなかつたらうか。』

彼とは、浮世繪畫家のうち、自分の一番好きな歌麿の謂(いひ)であつた。

歌麿の畫を批評して、その美人畫の美人の類型を肯定するが爲に、この論據を下したのであつた。彼の類型的美人畫の表現は、彼の思慕した彼の心の國の美婦(びふ)のそれであつたといふ意味である。この記述の前後に、自分は僅かに歌麿自身の問題——彼の放蕩や性格に觸れて、他は凡てこのやうな文字を以て埋めた。

あゝ、これ矢張り自分のことを云つたのだ。歌麿の女が、さうあらうと、でなくとも、何の自分のこの惱み、苦しみに關(かゝ)はる所あらうぞ。あれもこれも、今またこれも終(つひ)に、我婦ではなかつたのだ。かういふことを何かで讀んだことがある。アダムとイヴ……神が、太古に於て、自分の肋骨を二つに割いた。それがアダムとイヴとであつた。アダムは男性、イヴは女性。爾來、アダムとイヴは再び一個の肋骨にならうと、互に相牽(あひひ)き相苦しんでゐると。それを讀んで、自分はハッと思つた。丁度自分

の古くからの不思議な、甘い少年の夢のやうな或る異性探求の胸とぴつたり相觸れたからである。

永いことかゝつて、自分は、あらゆる眼、あらゆる顔を見た。恐らく路上に、公會に、群衆に相見た、又は一瞥に觸れた異性は何萬といふ數であらう。然しそのうちに何があつたか。たゞ自分は冷たい傍觀者が、群團の一人として相認むるに過ぎなかつた。あゝ永い永い空虚、自分のためにはありし世乍らの廢墟。この人の世の巷には終には、我が片影は求めて得られぬのが。

二

結婚！これも、自分は人並に考へてみた。然し自分の國の周圍では、果して自分の欲する結婚が求めて得られるだらうか。自分の母はじめ、恐らく自分の周圍の大多數は、緣を肯定してゐた。然程にこの「緣」が權威あるものであらうか。結ぶも離るゝも緣か。この數年、自分の周圍には、結婚から起る色んな悲劇が行はれつゝあつた。然し行く者も行かする者も、凡て「緣のものですから」といつてゐた。果して緣にかこつけてしまつていゝ程の、然程のものであらうか。この人の世の上に、何處にその緣のからくりの糸があるのか。その糸の先は、これを操つるは何處の誰か。

常陸帶といふことがある。男女互ひに婚を結ばんとして苧を帶にして一に女の名、一に男の名を書

き、折返して中をば隱し禰宜に結ばせる。惡しかるべきは離れ〴〵に結ばれ、善るべきは帶掛のやうに丸く結び繋るゝ云々とあつて、常陸鹿島の神事であるといふ。こゝに「緣」のあやつり手がある。然し自分の欲求の果が、かうした胡麻鹽頭の神官の手によつて果して滿足されようか。柳の木かげ大道の占師の灰色の手もまた多數の男女に、あやつりの糸を手繰る。これに、この無智な盲目的判斷に自分は果して滿足があるか。

　昔、吉原の巷に、迷信があつた。夜ふけ、厠にふと映る影は、自分の一生連れ添ふべく運命づけられた顏である。一夜、この占によつてあきらめの淡い快感と好奇のはかない喜悅とに耽らうとして、ある妓がこれを行うた。ふと映るは！ありあり癩病の男。妓はアット悶絕したといふ。かうしたことも、今の自分には、嚴肅な問題とならずには居れないではないか。小格子のつれ〴〵、清搔の音もぱつたり止んだ冬の霜の夜、折から沈む淺草寺の殷殷たる鐘、かうした背景を以てなされたこの妓の悲痛な欲求、探望。そこに欲情に爛れ、亂醉に痺れた彼女の體からも、なほしも滾々として湧き出づる眞純の心の泉が欲求の飢があるではないか。かういふことも聞いてゐる。しんしんと更けた夜さり座敷の四隅に鏡をたて、蠟燭の灯にかざした時、わが添ふべき男の影が幻に立つといふことも。得ようとして得られぬ果は、遂にこの自ら作る運命の悲しい幻想に跪かずには居られないだらう。あゝ何た

る悲痛ぞ。自分は徒らに聰明を衒ひ、この心理の切實さ尊さを從來寧ろ滑稽に見てきた。求めて得られぬ探求の苦しみはあつた。然しこれらの假構に頼らうとはしなかつた。然るに何うだ、今は、今は。今の自分は自分の今の心の性根は、今これを欲しつゝあるのではないか。自分がこの人の世に生れ落ちると同時にか或はその以前に、又はその以後にか、Xの間に自分の姉が生れ落ち、既にわがのとして運命づけられてゐる筈である。その姉は、その運命を負うた姉は、今何處にかある。あゝ自分は今日此頃、眞に歔欷くやうな心で、それを求めてゐるではないか。（下略）

―大正八年十月「名古屋新聞」。―

好色者の自白

初め「智的遊蕩者の夢」としたのを、更に此の新しい原稿紙に、爾く書き直したのである。夢ではない、本當なんだ。夢といふて、回避するのは卑怯のやうにも見え、又一つには、自分で自分を甘くさうしてさうそのやうに取扱ひたくはなかつたからである。

さて何を書き出すつもりか。餘り自分の核心と離れた（本當の物とは多少離れたといふ意味。然しそれも程度問題であるが。）考證や其他を雜書を綴り合してそれに肉をつけてえらさうにいふよりも、たまには自分の泣言も述べて見たい、否聞いて貰ひたいといふのである。

自分と江戸軟派とは、今は切つても切れぬ仲のやうに見える。人がさういふ。然し本人自身としては何うだらう。何だか、まだそこに物足らない。端的にもつと直截に、此の自分が表現したくて堪らぬ。それがその野心が他で遂げられず、竊して斯うした思はぬ所へ通じたやうに、心底思はれて仕方がない。然し江戸軟派も此の「自分」といふものゝ或る部分ではある。輪廓の片隅ではある。然しそれを全部のやうに考へ、人からも考へられて來ると、何だか違ひますといひたくなる。では何か？と

いはれても困る。自分は地方に埋れて（埋れるのが當然かも知れない）しかしその割にあらゆる雜筆を書いてきた。作らぬものは漢詩ぐらゐだ。自分の脚本が實演せられる時の妙な感じも知つてゐる。自分の情事（いろごとと今ではルビーが振りたい）を小說に書いて、自分で危なく思つたり人に何とかいはれるのを面はゆく思ふ感じも知つてきた。必ず活字になるといふ事を條件にしてペンを取るあの最初の誇にも慣れてきた。自分の本が市場に現れる時のあの快感、期待も知つてゐる。殘す所何にもない。唯思ひきつて此頃の江戸軟派情調を實際に行つて見た機會はこれ迄たゞの一度もないし、且又二十歳の前後東京に三年ゐても吉原を見ず、（知らずどころではない）靑樓の氣分は生れてから一度も味はず、藝者とか花魁とかに唯の一度も惚れられた事はない。此の方面は經驗に於て全くの白紙である。殘つてゐるといふなら、此の方面だ。うそぢやない、本當だ。但し前にいうた自分の情事は、それでは何かと聞かれると困るが、それは、單にしょ臭い――大人にはなつてもまだ不通だと人のいふ女、それも過去に於て一人といふに過ぎない。唯智識の上、それも本の上や繪の上ばかりだ。そのくせ、人の放蕩し盡したと稱する者や現にそれに在る者と共鳴はあり、時にはその人らの知らぬ憧憬感や熱愛感が、それらにある。自分のやうなものこそ、金持に生れなかつたから幸はひだといふのかも知れぬ。從つて憧憬だけのつまらなさ、然し平穩無事、家內圓滿なのかも知れな

い。

今の女房は、愛人でも何でもなかつた。然しこれを讀んだら、怒られるかも知らぬが、(誰でもない、あの自分の女房に)子供が出來て見て、それから起つた連帶責任者、親愛なる二人の交渉者といふに過ぎぬ。それが今では、唯一の自分の生活の材料半身、伴侶(やつとこの世間並の字が書かれた)といふのである。

さて、茶屋酒を自分の意志から飮んだ事もなし、地上の逢曳も知らず、まして後朝背中を叩かれた事もなければ、待合の石疊の濡れた灯あかりを通るあの期待と稱する緊張さも自分は知らぬ。その自分が、それ程の野暮天が、不通男が「あぶな繪畫集」を出してみたり、「江戸軟派」で、一心面をしたりするのはをかしい。と自分でもさう思ふ。やはり、以て生れた好色だらうと――爾くいふより外にない。子供の時分から泉鏡花氏のものが好きで、同時に、今程ではなくとも、中學二年の時に、すでに唯一つ殘されてゐた蟲に食はれた本箱のボロ〳〵な本どもの中から、「眞情春雨衣」の原本を見つけ出したりして、お多分に洩れぬ人間性能の軟派趣味は增長し、それに現代に殘る唯一の草双紙趣味、人情本趣味の、きまりきつた艷郎艷婦の鏡花氏の作のみを、莫迦らしいと思ひ〳〵、未だに出れば讀みたがるのも、皆、貧乏人の智識的遊蕩、享樂だらうと思ふ。

貧乏人だとはいつたが、氣位ゐは貧乏人ではない。驕傲なんだな。三河西尾にゐて自分の父で十何代。苗字帶刀御免、兩替と質と、お定りの御用商人だつた。三河西尾の松平藩の財政には多少の交渉があつたらしい。家に、まだ殘つてゐる、數代以前の藩主の、我々の祖たち五人の商人の献金を嘉みして、禮の意味で下賜した藩主の文字を木彫にした額がある。こんなものは賣つても錢にならないから今に唯一つ殘つてゐるのだ。それと他に一つ賣つたら錢になりさうなものは、勿體ないが佛壇の佛像と並びに後光の鏡だ。何でも河内の或寺から來たものらしい。元祿以前の年號が付いてゐたと思ふ。子供の時分、多少古物の分る僧が經を誦みに來ては、迚も結構ですな。普通のお寺にも迚もありませんなというた。それが今は佛壇は明治になつて極くお粗末な、小つぽけなものの中に、狹苦しさうに鎭坐まします。そんなものがなまじあるばかりに下らぬ事を懷ふ。祖父や父が、名古屋に出て來ず、西尾にゐて無事でゐてくれたら、澤山はどうせなからうが、三十萬か四十萬の財産はあつて、自分が一生のうちに小出しに使ふ。大學にも元々入れたし、又或は文庫も例の岩瀨文庫以上のものが出來てゐたかも知れぬと。或は今頃は、多額納稅位に大きくしてゐて、貴族院の田紳代議士の資格を得てゐるか、或は御用黨のお蔭で、今度の選擧で當選確實と來てゐるかも知れない。然し若しそれであつたら、今の自分のやうな軟派に對する夢心地はないかも知れぬ。此の「江戶軟派研究」も恐らく生

れなかつたらう。諸君、どちらがよかつたでせうか。さうだつたら今のあの女房も、あの可愛い、軟派研究より、何より自分の生命の次ぎには可愛い、あの子供も生れなかつたかも知れぬ。子供は生れても、もつとボンやりの、話にならぬ、然し小學校だけは優等首席が生れてゐたかも知れぬ。

然し子供や女房の事を思ふと、なかく自分一人の、三人前位ゐの現在の働きでも追付かぬ。(本の印税もそれも本屋によく値切られます。)現在の程度では自分の本が多少裕に買へる位ゐなものだ。自分は着古した紋付羽織でも、女房や子供には盛裝させてやりたい。貧乏というても今では六拾圓のオルガンも買つてやり、此頃などは二人の女兒に合計貳拾七圓のオバーを買はされた。(洋服は夙うの昔。)五歳の小生の娘は、細君に敎はつて今では英語の讃美歌を歌ひ乍ら、滅茶滅茶にオルガンを合はせます。さうして、「ピアノは叩くなのよ。オルガンは押すのよ。」「父ちやん、ピアノを買つて頂戴」といひます。そんな狀態。親父の小生は、小生で、金が欲しい、繪が買ひたい、本が欲しいと思うてゐる。女が欲しいとは正直叫ばぬ。何ていふのだらう。

「好色者の自白」、これでも自白になつてゐるか知らんと思ひ乍ら、筆を擱く。

―大正十三年四月、「江戸軟派研究」。―

著者より

誰しもであらうが、自分もである。此頃、仕事の暇々に、二階からドヤ〳〵と下りては、生みの子の三人が、枕並べて晝寢に眺つてゐる姿を見るべく、私は、樂しみにする。どれもこれも私の作品だ！といふ氣がして來る。（然しその中の一人は、今大患に罹つてゐるが。）これが私の平常相當に自負も持つてゐるあらゆる文筆上の才能及びその結集よりも、其他の何ものよりも尊いやうな、ごまかしのない自分の本當の生産物だといふ氣がしてならぬ。しかし同時に、自分もこんな事を思ふ程、それ程世間的に、普遍的になつたのかなあと思ふ。と思ふと、我ながら、自分の凡庸化せんとする自分を叱咤したいやうな、我乍ら鈍つてきた自分の圭角が惜しいやうな、腹立たしいやうな氣にもなる。本を作るのと子供を作るのと、何らが自分の本當の仕事か。畏敬する坪内氏なんかには、かうした本と子供との相殺的な感情はない筈だ。子供のない人々が本當に幸福だらうか。子供のある自分は、その煩はしい愛情――一面からいふと私の半分以上を奪つてゆくそれが果して不幸だらうか。そんな事まで考へられてきた。迷故三界城かな。本に迷つたり子供に迷ふこともいけないことか。

有島氏が心中した。その記事の出た朝、私は、公務さきで、人々と話をかはした。しかし皆がすべて有島氏以外の心持でゐた。私は氏の心中が凡庸に傳へられてゆくことを悲しんだ。しかしさういふ私にも、氏の心中の核心は攫めなかつた。ダヌンチオの「死の勝利」式か。いや、謙虚だといはれてゐる有島氏には、これ程の相手を奪ふ心はなかつたらう。寧ろ女の方がかうだつたたらう。矢張り、日本人の日本人らしい心中の形式――女から引擦られたものか。治兵衛と小春の治兵衛の立場か。「歡んで死ぬ」といふ意味も遺書にあつた。しかし最後の瞬間までさうだつたらうか。さうして私はあらゆる心中者が最後に屹度行ふといふエロチックな場面を氏にも想像してみた。やはり近松を出まい、いやまかりちがふと心中の心持が不純となつた新内淨るりを出まいと思はれた。近松にはまだ死に對する第二の世界の豫想が強かつた。新内あたりは、唯現實の逃避である。自暴自棄同士である。死んで意地を通すのがまだしもだ。

自分に心中が出來るか。いやこんな下らぬ事は考へたつて駄目だ。しかし自分だつて心中しないとも限らぬだけは豫想出來る。いやこれも下らぬ豫想だ。しかし自分にも經驗することだが、中年の戀はしつこいといふことだけはいへる。さうしてえてして人生を逃避したいやうな投げやりな氣分にもなり易いともいへる。

（七月二十二日夜）　大正十二年八月、「江戸軟派研究」。

溫泉土產

ビンボウ旅行の溫泉話を始めよう。初め古見（名古屋の近く、海水浴場）の寺を借りるかといふ話を持ち出したが、女房の抗議で駄目。平常女中やら助手やら、分らぬ程に使つた禮もあるから、再三乍ら女房の鄕里越後高田に近い妙高山麓の或る溫泉場と決めた。赤倉だけは此方へも響いてゐたから自分では此處にしようかと目算んでゐた。とにかく、女房子供連の四人を七月三十日の朝に少量の金を持たして一先づ在處へと旅立してやつた。金主元はアトからといふ意味である。私は、三十一日の晩にあの八月號の本誌の發送を獨りでやり翌々二日まで用あつて殘り、二日の夕方出立、途中中津川（美濃）の友人の所で一泊、三日朝高田へ立つた。長野で途中下車して、お寺はつけたりで、實は例の名物の林檎を一籠買つてその晩高田へ着いた。高田では、すでに盆踊の稽古を始めてゐた。自分の泊つた女房の在處は、高田の遊廓內にあつたから、地廻り連の踊の稽古、太皷の撥で終夜寢つかれなかつた。翌四日は、食料の準備。其晩、中頸城の關溫泉へ行くことに決めた。話に聞くと、妙高の中腹以下、溫泉が矢鱈にあつて、燕が最も高く（地面である）、關がその中間、赤倉は最も低いとの事。

然るに費用は低い赤倉が最も高く、關が最も安いとの事。然し湯は、關が最も適度の溫度で、且つ一ばん效くとの事。それに燕へも赤倉へも一時間以内の行程(歩いて)。關に根城を構へて、行きたければどちらへも散歩に行けばいいではないかとの男の建言。

高田から逆戻りの關山驛で、一行と女房の母と計六人が下りたのは、五日の朝の十時、自働車で關へ着いたのは、晝少し前。成程凉しい。宿屋は富山屋といつて、高田の町の人の行きつけの所。少々汚ないが、田舍者の鷹揚な所がとりえ。湯は、すぐ前の坂上にあつて、瀧と普通と二個ある。晝からボツ〳〵湯の稽古を始めた。子供も私もその當時は日に二回。しかし間もなく三回。終り一週間は、私は五六回だつた。安外廉かつた。高田で食料を用意(女房の實家の寄附もあつた)したせゐもあるから、豫定通り自炊と決めたが、廉いこと此の上ない。先づ云ふと、大人一人の部屋代日に參拾五錢炭石油拾五錢、布團一枚十錢、湯錢八錢、計六十八錢、小人は二歳以上此の半額である。米は向うで焚いてくれて、一升四十七錢。結局子供二人を大の一人に見て、大人四人が、一日五圓はかゝらない。(米代、座敷、炭石油、湯錢、布團其他一切)高いというても、卵位ゐで、他は高田で買ふ位ゐの野菜や果物の値。結局これ丈が二週間ゐて(十八日まで)、宿屋への拂が、煙草や醬油や菓子や一切入れて五拾圓に足らず、高田で仕入れた食料だつて貳拾圓に滿たぬ。茶代を拾圓おいたが、それでも仝

部で八拾圓以內。唯、往復の自働車が高い。歸りはぶらぶら步いたが、（女房と子供と荷物丈は馬に乘せた）その往復、往は九圓余、歸りは參圓。高田でまだ私は古本屋を漁り、本少々、道具屋で繪を少々買ふだけの餘裕があつた。唯名古屋からそこ迄行くのが莫迦らしい。然し他に比べて結局安價だらう。

とにかく朝晚の凉しさたらない。寒いとは聞いたが驚いた。それに朝夕の霧のひどいこと。町住居の者では迚も嘘としか思へない。關山驛から關まで二里の山路を、途中に茶屋が一軒あるきり、全く高原の氣分だ。夜などは、遠くの方の灯が一つか二つ光るだけで、默りこくつた山の姿が寂しい。しかし星はいつも細かく散らばり、丁度十三日頃からは月が美しかつた。月を見ては湯に入り、湯から出ては月を見た。ここでも盆踊の太鼓の撥はトン〳〵響いた。かうした所にはつき物の、聲のいい追分の名手、老婆がゐて、それが女湯にゐる時は、喝采だつた。槪して平民的な、大抵貧しい人たちが多かつた。然し後には、大分赤倉から逃げて來た連中で殖ゑた。赤倉は、宮さまの見える所から、唄もうたへぬ、肌一つ脫げぬ、警察がやかましいと、この關へ避難した不心得者が多かつた。山には夏といふのに鶯が啼いてゐた。子供が蕨を摘んで來たりした。溫度は、赤倉が八十五度なら、こゝは八十度。赤倉へも時々散步に行つたがつまらぬ所だ。唯高原の中の廣つぱで、遊園地だ。設備が文明だ

といふだけ。温泉場の氣分はない。

暗いランプの湯場、そこでダニに食はれ乍ら、夜十時、十二時に入つたあの面白さ、あのノンキさが忘られぬ。尻きりトンボになつたが、十八日に高田へ歸り、十九日休養。その晩町を歩き、一二三の安い本と繪を買つて、二十日の夜歸宅した。これでおしまひ。

―大正十三年九月、「江戸軟派研究」―

此の餘白に、面白い挿話を書いつけておかう。外でもない、この歸宅前一夜の、高田の町のそゞろ歩きでの獲物の話である。本は、避けねばならぬ性質のものゆゑ、略くとして、繪である。浮世繪の安物が、そこらにありさうだと眼をつけて、一寸した立派な古道具商の店頭に立つた。いゝ鳥と見かけて、お世辭たら〳〵で、中へ案内した。主人は、凉んでゐるより、金儲の方が、餘程凉しいらしい。出すものを見ると、皆黑い物ばかりだ。豐廣、初代廣重などの短册があつた。黑い物には敬意を表して、不問。外を訊くと、「これは二代廣重ですが」といひ〳〵、江戸名所、日本橋雪晴の異り繪の一枚を出した。よく見る迄もない、極印名二個嘉永期の立派な初代の作だ。「二代ですから、キレイです。が二代では仕樣がありませんな」と、此方が引かけに云ひたい事まで先越していうてくれる親切さ。値を聞くと、黑い物の云値の半ばにも及ばぬ二圓だといふ。賣手が其氣なら本當を明すは僞にならぬと、キレイだから〳〵を繰返して、二代承知といつた顏をして買ひ、結局、一圓半に向うから負けてくれた。揃本三册の本とも五圓に滿たなかつた。相當に門戸を張つた家で、こんな番狂はせは、自分としては稀な經驗である。世間は狹いやらで廣い物である。

―大正十五年八月補―

カリタさんの話

荆妻の郷里（越後の高田市）の方で、カリタさんと稱する生殖器崇拜の神樣がある。丁度此の頃私の宅へ來合せてゐる荆妻の母と、荆妻の語る所を綜合して、そのカリタさんなる神樣の輪廓を示して見よう。

去年高田へ私が旅した時、逸早く聞き出したのは、此のカリタさんであつた。是非一度其の神樣の社を見物したいと氣に懸けてゐたが、到頭暑中でもあり、また中々の山路であるといふので、其の所期を果さなかつた。其の時から私の頭（あたま）に此のカリタさんなる、異樣な神樣は在る。荆妻の母は、大分信仰してゐるらしい。

×

名稱　鴈田（かりた）さん。鴈田大明神。鴈田神社。

神社の所在地　高田の北の驛直江津から西、直江津米原間の直江津から四驛目に名立（なだち）といふ所がある。其の名立驛で汽車を降りて、山手へ川について一里半ばかり。其の里程の三分の一位は上りであ

る。割合に嶮しい。其の邊を桑取谷といふさうである。其の山の中腹以上の所に神社がある。其の附近一帶樹が少しく生え、幾分平地になつた處に神社といふよりは、小さいお堂のお宮式の物がある。此のお社のお蔭で儲け出したのか、大分立派な構への堂守の家が、倉まで付いて一軒ある。前にお祭の時使用する神樂殿の小さい物もある。お堂の峠一つ手前に一軒の茶屋がある。參詣人が辨當を使ふ處で、握飯の菜だけ買ふことが出來る。先づこれ位ゐの模樣。

祭禮　新の六月八日。普通の月でも八日は一般に雁田さんの日としてある。此の六月の祭日は、大した變つた事とては無い。お神樂が立つ位ゐである。其の他の月でも不斷は賑はつてゐる。時候柄、春と秋とは格別夥しい參詣人である。

參詣の形式　蠟燭を五本でも三本でも、一本でも多少づつ供へる。其の爲め蠟燭立が五階ばかりあつて、御內陣の奧にも、口もとにも立てゝある。御本體は、今は簾が下りてゐて拜めない。山路で嶮しいから、參詣は大抵五六人や、十人位ゐづゝ連れ立つて詣る。男も女も夫婦連でも、別に此の神樣は悋氣を起しなさらぬ。面白い話は、雁田さんへ行けば落ちてゐる石が皆陽石と陰石だといふ。然しそれは僞で、實際行つてみたら、そんな石は見當らなかつた。詣るには、蠟燭を立てゝ切火をかける人もある。

ある。)

神體　石。男體と女體と二體あるさうである。(してみれば、此の雁田さんなる物、純粹の石神信仰である。)

供物　前に話した蠟燭。それに鰐口の紐(これをオカネノヲといつてゐる)の、赤、白、黄などの紐を供へる。それに旛を供へる。此の旛といふのは、つまり字を書いた晒布で、それを向うにある竿に結びつけて來る。疊んだ儘で供へる人もある。及び提灯。

守札　雁田明神と書いた五分幅の長さ二寸位のもの。

此の神樣の靈驗　一切腰から下の病氣に利く。脚氣、レウマチ、其の他足の惡いもの。寢小便、小便の近い者、痳病、一般の婦人病、男女共に利く。奉納した他人の旛を貰ひうけて、腰の痛い者は腰へ卷きつけ、其の他患部へ卷けば治るとしてある。翌年、お禮詣りの時、自分の名を書いた旛を新調して納める。凡て此のお社へお詣りに行つて、笑ふと其の病氣が快くならぬさうである。(私の宅にも荊妻の母が、社から貰つてきたといふ旛が一つある。……荊妻が輕度の脊髓炎に罹つてゐるが爲に……今宅にあるのは、普通幅五尺位の長さに晒布で、文字は左の通りである。(文字は筆書き。)

奉納　雁田大明神　新潟縣中頸城郡桑取村大字横畑　四十三歳　服部トラ　大正拾年五月九日

此の神様の氏子　信濃。お膝元の越後は勿論、越中、佐渡、能登に及んでゐる。

民間一般の信仰　素人家でも。お伊勢さんと一緒に現に祭つてゐる。神體は、男の物の雁田さんで、女の物はない。その男の物も大抵は石である。人形で男體の首の据ゑたものもあるが、それは普通の家では用ゐない。大黑なども一緒に祭つてゐる。(但し此の大黑は、生殖器崇拜家の大黑ではなく、福神の意味として、それも同居させておくだけである。)一日と十五日には、屹度榊をあげて他の花は供へない。土器に油を入れ、燈心を點す。詣る時は燧石で火を切つて拍手をして拜む。神さんの隅に燧石を常住備へてある。素人家の本尊は男體ばかりであるが、男も女も之を拜み、女もまた拜んでゐる。(然し此の信仰は、餘程一部に止まつてゐるらしく、現に荊妻の友人や知人間には、餘り無いさうである。荊妻も無論餘り此の神樣の信者ではない。荊妻の母は、昔から此の神棚が家にあつたから、滑稽を感じ乍らも、傳統的に信じてゐるのである。此の類を除いては一部の人々と花柳界だけがその信者であらう。)篤信者も中々少なくない、例へば偶然路ばたで拾つた男體の類似石なども、大切さうに雁田さんだというて、之れを神棚に入れておく、さうした人々も尠くないさうである。

花柳社會の信仰と其の神棚　花柳社會は、格別雁田さんの信仰の篤いことは無論である。然し其の信仰には、二樣の意味があるやうである。一つは客を招ぶ爲の信仰と、二つは花柳病祈願の意味とであ

る。（花柳病の祈願には、癩病者の平癒祈願と、營業者の豫防祈願と二樣あるらしい。）昔から花柳社會では、禁厭の一種として男體の物を拜んだ事は、一般の知る所であるが、越後あたりの雁田さんは、それが爲めばかりではなく、病氣の神樣であるのである。さうして彼等の神棚は、誠に雜多な物を祭つてある。

これは私も昨年實見した。私の見たのは、荊妻の母の知合つてゐる高田市の或る女郎屋で、これ丈をわざ〳〵好奇心一杯で、見物に行つたものだ。私の見た彼等の中の或る神棚は、誠に混雜した物であつた。男體の石と女體の石とが、先づその偉大な姿によつて眼を惹く。此の女體石を祭ることは、花柳社會だけの特徴らしい。次ぎには妙な人形（袴をはき、紋附の黑羽織で、首は男體。右手を擧げて指をさしてゐる。）や、なほ二寸位の長さの箱に入れた木造りの男體もある。それに雁田さんの守札、招き猫（これはどこにでもある、單に人寄せの意味らしい。）・紙に摺つた大黑天の繪姿。

私は此の大黑天の繪姿を見、これがまた普通有り觸れたのとは異つて、如何にも好色家らしい顏をして、格好も稍々異つてゐたから、之れがてつきり雁田さんの神像と思ひ込んでゐた。それは大黑天の像は男體の表象で、その崇拜であることを知つてゐたから。然しそれは早合點であつた。雁田さんの神體なるものは、實際的の男體女體の兩石。此の神棚の大黑天は、矢張り同居の意味であつた。それ

は今度荆妻の母から、雁田神社の神體を聞いて始めて分つたのである。それに荆妻に聞いてみても、其の地方では一般大黑天と生殖器崇拜とは、何ら關係がないさうである。また大黑天が男體の表象であるとも、思ひも付かぬさうである。

妙な人形の販賣所　これは全く不明である。昔はあつたらしいが、今は薩張り聞かないとの事。中には面白い人形もある。卽ち上下を着た福助の格好で、その首を拔くと、男體が入れ代るといつた代物も。男女の石も拾つたものばかりではなく、賣買されてゐる處があるらしい。然しこれは私の推測も加へた話である。

雁田さん信仰の分布　此の種の石神信仰の話は、殆ど日本全土に分布してゐる。然しこのカリタさんなる名稱は、餘り私の聞かぬ所である。荆妻は、名古屋で千葉生れの牧師さんから、嘗て生殖器崇拜の事を、カリタさんといひますと敎へられたさうである。一たいこの牧師は、越後の名立在の所謂雁田さんを知つてゐたのか知らなかつたのか。或ひは『生殖器崇拜の事』は、『生殖器崇拜の一種』といふ意味かも知れない。或ひは千葉縣あたりでも、特に、此のカリタさんなるものがあるかも知れない。荊妻の曰ふには、越後の事は知られなかつたらしいとの事。さて然れば、一たい汎く『雁田さん』なる名稱の下に行はれる生殖器崇拜の分布區域は？　及び其の本場は何れであらう。某牧師の知

れる何處かにも、雁田神社があるのであらうか。此の越後のは雁田さんの本家ではなからうか。そんなに雁田神社が何軒もあるのだらうか。漠然東北から北陸方面の信仰で、その本場もそこらにあらうとは思ふが、不明である。

×

雁田さんの語義も不明である。私の念頭にすぐ浮ぶのは、男形の或部の名稱のカリクビである。然しそれは局部の名稱であり、以つて男體全體の名前には稍々可笑しい。或はその本尊所在地の地名から來てゐるのだらうかとも思ふ。

唯一つ私が稍眞面目に聯想し、想起した事は日下部四郎太博士著の『信仰佛利二人行脚』に現はれた刈田岳の話である。刈田と雁田其の間因緣がありさうに思ふ。刈田岳とは休火山で陸前と羽前の両國にまたがり、米澤市の東北、闆上で約七里。岳に刈田嶺神社といふのがある。また舊噴火口をお釜とも呼び、それを崇めて噴火のないやうに願つてゐるさうである。但し此の刈田嶺神社は同書に據れば、此の神は火山を神格化したもので、生殖器崇拜とは關係がないらしい。唯だ賽の河原附近の岡の上に、『大黑天が祀られて、附近は奉納の白米を以て埋まつてゐる』といふ。大黑と所謂雁田さん式の男體崇拜とは、時には無論照應のある事柄であるが、然し此の刈田岳の大黑天は、生殖器崇拜と直接關

係がないらしい。

日下部氏は之を明確にしてゐない。その記事のすぐ次ぎに、生殖器崇拜としての大黑天の考證やさうした眞面目不眞面目の雜談が試みられてゐるが、此の刈田岳の大黑天が、果して此の男性生殖器の意味であるかどうかは、一切書かれてない。それに奉納の物も「白米」であつて、二股大根ではない。若し此の刈田岳の大黑天が、時として考へられるやうに生殖器崇拜であるならば、無論カリタさんの語義や其の本尊を刈田岳に歸して了つてもよからうと思ふが。要するに、私の臆測としては、『刈田岳……大黑天……雁田さんの神體』としたいのである。諸賢の中に、若し此の『雁田さん』に就き、尙より多く知らるゝ人々あらば、示教を仰ぎたいと思ふ。

—大正十年十月「性と愛」。

夫婦岩の一つ

題を別にする程の事でもないが、ついで故、こゝに略記しておかうといふのである。夫婦岩の自分の知る限りに於ける偉大な例の一である。

處は、岐阜縣惠那郡中津町、中央線中津川驛から南へ四五丁、俚稱桃山といふにある。中津川（川の名。間もなく木曾に合流す。）の左岸、ぐら〳〵の釣り橋がある、その西。町からも西に當る。丁度川の橋を渡りきつたすぐにある。其のへん、巨岩が、五六ある、中の二者である。一寸寫眞を此に掲載することも出來ないと思ふ程の眞に近い（格別、男性は）、しかも途方もなく大きなものである。女性の方は、半ば崖になつてゐるから、周圍が計れなかつたが、男性岩は、計るを得た。此の男性岩、歩數で四十歩ある。卽ちこれによつての面積の概算、約二十坪である。高さもこれに準じて相當高いものと察しられたい。女性は、これより見た所大、恐らく五割は大であらう。此の二岩、男は西、女は東、殆ど接近してゐる。すぐはたでは一寸分りかねる、が離れると思はず拍手、首肯といつた物。自分もその偉大に驚嘆久しうしたもの、訪問の度にである。此の岩、附近では別に性的信仰の對象と

もしてゐないらしい。(現在では)。が以前は「夫婦岩」と高札が建つてゐた、が警察から禁じて取除けたとの話。(が、最近また三度び或は四度び目に行つて見ると、夫婦岩、料理亭曙と二行にした標札が建つてゐた。同地の友人に聞くと、最近此の名の料亭が西に出來て、廣告のために利用してゐるとの事。そのためか、以前は無かつた落書が、最近は甚しくあつた。凡てワイ的な落書である。)町の人々も概して今の處、一般には問題にしてゐないらしい。

さて、これだけの巨岩が、迚も人工的に出來も、否加工も全然されてゐないと、自分は信ずる。いかに古代原始民族の自然的信仰の白熱さでも、これ丈は、人工的には出來まい。唯大自然の暗合、偶然のいたづらとより思へぬ。此の岩、男性の尖端だけは、列車中からも見える。丁度、鹽尻の方を向いて、中津川驛に着く一二分前の左手、丘陵の人家の家根越しにある。この丘陵開けて、處々桃其他の樹林がある。川は低くて見えない。

カリタさんの話の序でを以て、紹介のため寸筆。―大正十五年五月稿

雙六谷と『神鑿』

此頃、新聞に飛騨の某倶樂部の主催で、双六谷の探検計畫が發表せられた。私は、双六谷といふ名を讀んで、輪廓は判然しない乍らも、直ちに聯想した或物があつた。あれだ、あのモデルになつた舞臺だと。それは、泉鏡花氏作の『神鑿』（明治四十二年九月出版。長篇）である。あれは、慥かに双六谷であつた筈だと思ひ乍ら、私は、埃に埋まつた右の單行本と及び地名辭書と二つ並べて色々調べてみた。『神鑿』は、最初讀んだ時とは違つて、あの神仙譚めいた物が、多少の實感を以て今度は讀まれた。それも今度の新聞記事から受けた刺戟と、この神變不思議も實在的な事かも知れないといふ、多少鏡花氏の構想に妥協したいやうな心持のせゐもあつた。それには、地名辭書も與つて力があつた。

今、地名辭書の記述を轉載する。

双六　今、上寶村の大字とす。船津の東三里、其の溪流は越中の國界鷲羽嶽より出づ。双六は、此に磐石一座あり、鬼斧神鑿、宛として博局の如く、畫路井然たるを以て此の名を得たり。又材木岩あり、同巧にして異形とす。

○東遊記云、四五六谷は、越中飛騨信濃三國の間へ入り込める谷なり。富山へ落る神通川を逆上り、又其の支流

を尋ねて上るに、甚だ深遠にして、其奥を究むる者なし。近き年、飛州舟津の人、此の谷の奥を究めんとて、三日の糧を用意して、段々川にそひて入りしに、其食も乏しくなりぬれば、魚を釣り食ひて、猶數日の間尋入りしに、ふと伴ひし者の顔を見やりたるに、異形の化物なり。大に驚きて聲をかけたるに、其の呼びたる者の顔異形に變じて、恐しさいはん方なし。互ひに斯く見ゆるからは、此地に變こそあるらめとて、急ぎ逃げ歸れり。

地圖で按ずると、文中の船津といふのは、神通川の川上、飛驒の北べり、丁度高山からは眞北、圖上の直徑高山から六里弱。双六谷は、圖上で船津からは眞東に當る。双六谷は、高山からは東北の方向、圖上直徑が約八里。圖上でも双六谷は、神通川の支流の川上に當つてゐる。圖上、双六谷から越中へは、三四里の距離、吉城郡に屬してゐる。

東遊記の記事は、恐らく訛傳ではなからう。それに、『神鑿』の作者は、東遊記に材を藉りたか、或は作者の郷里に近い關係上（作者は加賀の生）か、或は特別の注意から蒐集したかは知られ、餘程その構想が、さもこの東遊記にヒントを得たらしく思はれる。或は東遊記以外の、豐富な土俗の傳說に藉りたかも知れぬ。

『神鑿』と同時に我々が思ひ浮べたのは、外國にも此種の例の少くない事である。現に高橋五郎氏の『心靈哲學の現狀』（大正八年六月版）に左の如き記事がある。

『英國にブロッケンの妖怪として行人を捩ると信ぜられた者があつて、白晝でも其處は一人旅を忌まれた。凡そ人が該處の巖頭に近くや、屢々前途に大入道の如き自分の姿を認めるのを常とした。ブロッケンとは貉に因める名であつたらしい。英語で貉の類をブロッケとも呼ぶからである。或は獨逸語の『橋』てふ語の轉訛かとも想像される。獨逸語では、橋をブルキッケと云ふからである。寔に茲には一ツの橋が架つてゐて、車馬は通さず單に歩行者のみを通すからである。然るに段々研究された結果、之は行人の影が何うにかして非常に擴大されるのであると解つた。然し未だ其方法は、十分說明し得られぬのである。云々』

よく似てゐるではないか。最後に『神鑿』の荒筋を云ひたいが、大分行數も盡きて來たから一切略く。唯だその一節双六盤の冒頭だけを左に數行抜いて見よう。

「渠（かれ）の前には、一座滑かな盤石の其の色、濃き綠に碧を交へて、恰も千尋の淵の底に沈んだ平かな巖を、陽（ひ）の色も白いまで、霞の滿ちた一座の濁りもない蒼空に、合せ鏡して見るやうな……大さは然れば疊三疊計りと見ゆる……音に聞く飛驒國吉城郡神竇の山奧に在りといふ双六谷の名に負へる双六巖は是ならむ。巖の面に浮模樣、末を揃へて上下に香の圖を合せたやうな柳條があり、虹を削つて畫いた上を、ほんのりと霞が彩（いろど）る

といつた體（てい）に、ぐん〳〵筆が進められて行く。雅俗の妙諦を得た得意の文。丁度、『墨染扮裝（いでたち）の顏の蒼い大入道』と人形の怪なる美女とが、櫻の花片を采に双六を爭ふ場面の序である。鏡花式の山嶽譚中の最も面白い物である。―大正十年八月

見知らぬ町

かうした題を掲げると、何か創作らしくもあるが、大した物を書かうといふのでもない。旅の話なんだ。

旅へ出る度に、私は、いつもこの「見知らぬ町」といふ氣分に打たれる。中には、一生の中に再び來られないやうな、また來ようとも思はぬやうなさうした町がある。この感じは、私達の住んでゐる市街の中にも、時々感じられる事である。うつかり生れて始めて見たやうな町へ出ることは、分り難い町を探す時や、氣紛れの散歩などの時に、よく見受ける感じである。

さうしたことが、旅さきでは、一層感じが深い。住み馴れた町ではなく、兎に角も一度來たくともおいそれとは來られないやうな旅の町、したがつて一層、一生に一度といふ感じが湧いて來る。さう思つて私は、すつかりその町を印象づけておかうとして、緊張した氣分になる。然しさうした印象も、餘程變つた場合や事件の興味でも伴はなければ、永くて一年くらゐの中に忘れられて了ふ。死ぬ迄に再び見られぬ、といふ感じと共に、私が旅先で懷く感じは、尙一つある。それは「何處の

世界にも、人間はゐるな。」といふ事である。それを、露骨に言ふならば、「何處も生殖の世界だ」といふ事だ。「生めよ殖えよ」とは聖書にもあるが、然し殊更斯く教へなくとも、人間は既に勝手に生み殖えてゐる。言語や風俗に多少の相違はあつても、男女が男女を生んで行く事は、違ひは無いのだ。私は、これを見る度にいつも可笑した事と思ふ。さうして旅さきの路上に鼻を垂らした子供の群を見る度、私は、永遠に單調を繰り返してゐる人間の姿を、まざ〳〵見せ付けられたやうな氣がして、遣瀬がない。

私は、生れつき金がない。貧乏人の伜だ。然し私の亡父は旅好きであつたらしい。私の子供の時分に旅へ一緒に連れて行つて貰つた。然しそれも稀に得る機會のみであつた。十歳の時分、父は私と父の男とを連れて、一週間程旅を巡り歩いた。往きは、奈良から法隆寺、大阪、歸りは京都、近江の湖水、大津から汽車に乘つた。私が京阪や奈良附近を見た、しかもゆつくり見たことは、これが最初の最後であつた。その後私は幾回も、成年してから京阪を往來してゐる。然しこの子供の時のやうな、純な驚異に富んだ、さうして成心なくして光景を凝視し得られるやうな氣持は、脫けてゐた。いつもその度に、昔のこの子供の時の旅が、堪らなく思ひ出された。それ以後、法隆寺を見たのは、先々月の十五日、Gといふ友人などと一緒に行つたのが、眞の二度目だ。奈良へは二三度行つてるが、法隆

寺へは立ち寄らなかつた。それがこの間、Gと、今一人畫家のIと、三人で法隆寺を目的にして行つた。

私は、あの斑鳩村（法隆寺村かも知れないが、私は斯く呼びたい）の、麥穗の伸びた畦の中を歩き〳〵、さうして愈々その大寺の金堂や昔乍らに鈴の音する塔や、偶然春期蟲干の最後の日であつて壁畫を見たりし乍ら、私の幼ない時の匂を嗅がうとして焦つた。然しそこに私は幻滅があつた。寺院の價値、建築や壁畫を見る眼は多少出來たであらうが、子供の時のやうな神秘に打たるゝ事や、莊嚴さに感ずる心がなかつた。子供の時見た限りの記憶とすつかり異つてゐた。壁畫も無論昔の方がもつと尊いものに見た覺えだ。境内も、昔見た感じの方がもつと廣かつた、大きかつた。私はかうした變つてきた自分の成心が、怨めしいやうに思はれた。

此頃になつて私は旅を頻りに思ふ。然し旅先へ出て了へば、『また同じ事だ』といふ悲哀に脅かされる。眺める佳景も凡て私の今には、左程各地ともに異つた色がないやうに見えてきた。然し此頃、格別初夏の頃に、小夜更けあちこちの田で鳴く蛙の聲が、折々電車の音の途絶れた間々に聞えて來るのを寢ながらでも聞いてると、私は、急に旅を思ひ出す。さうしてせめて嬉しかつた昔の旅を思ひ出す。今茲にかうした懷しい昔の旅の記憶で、もう一度行つて見たい、それは幻滅かも知れないが——

さうした氣のするものを拔いておかう。
中央本線の洗馬。鹽尻の町。南信の飯田。辰野から電車の沿線。鹽原。那須野。こんなものだ。凡て秋から冬、殊に中央線は大雪の日に行きたい。これらには、私の二十代の熱い心の舊蹟がある。然し私はさう思ふだけで、再びそれを繰り返したらば、丁度此の間のやうな法隆寺の幻滅があるであらうとも思ふ。
それにしても、最近聽いてきたあの法隆寺の高い〳〵塔、あの雲と聳ゆる塔の尖端、ガラン〳〵と響いた鈴（かと思ふが）の音色ばかりは、未だに耳底にこびりついて失せない。若し此塔が、創建以來隆替のないものであるならば、あの鈴の音ばかりは、聖德おん太子も聽かれた筈だ。花と飾つた後宮の后妃も聞かれたであらう。それにしても、此の鈴の音は、太子子孫のあの悲慘な滅びの日にも、相も變らず鳴つてゐたであらう。不思議な音色。私の子供の夢と大人の夢は、それに比べると、永劫と一瞬だ。あゝはかない哉の嗟嘆が湧かざるを得ぬ。そら、今でも鳴る、鳴る、あの音。永劫に滅びの聲のやうに、はた產みの聲のやうに。そら、やかましく耳のはたで鳴つてゐる。
——大正十年七月

人の顔

時々、人の顔ほど可笑しいものはないと思ふ。くすりと笑ひだしたくなる時もあり、びくと驚いて、何者かを凝視するやうな氣の時もある。笑ひだす時は、私が平凡に、唯人の顔の様々なことに氣の付く時である。びくとされるのは、全能だと思ふ人間の自分達よりも、より以上に全能な叡智な、或は狡猾此上ない、或は此上ない惡戯好きな何者か——自然とも謂へない、神とも考へたくない。——強いて謂へば、或る恐ろしい惡魔の、ニタ笑ひでも見せ付けられるやうな氣になる時である。神とすれば、何の爲であるかゞ分らない。遊戯とすれば、かうした閑の戯れに耽るのは、惡魔くらゐよりないだらう。こゝから私の、惡魔の笑ひといふ思ひが起る。或は餘程、茶目ぶつた神々の中の一人の業かも知れない。至上の神は、その神に命じて、

「いゝ加減に、人の惡いいたづらは止したらどうだ、人間が可哀さうだ」といつてゐるかも知れぬ。

惡戯好きな小さな神は、

「わたしの、たつた一つの道樂でさア、平に御見逭しを」といつてゐるかも知れぬ。あんまり、此

の悪戯な神の仕科がくどいから、至上の神は、時に怒つて、叱責を食はすかも知れない。

×

とにかく誰のせゐか知らぬが、人間の顔は千種萬態であることは、をかしな事であつて不思議な事だ。

人間の彼と我との識別には、二つある。一は顔であり、一は名だ。名と顔と、どちらが印象深いか。私のやうな大勢な顔に毎日接してゐる者からいふと、先づ顔の方が印象深い。

×

日本人は由來、顔に注意が眞先に向く。小說でも、普通の會話でも、先づ顔の特徴を述べたり書いたりする。時にはその特徴とその人の個性を、同一に見ようといふ傾きすらある。

式部官や近衛將校ばかりでない。

顔のよいのは、先づ出世の早道だとは、今でも一般男子に信ぜられてゐる。女性を男性の玩弄物に見て來た從來の日本人が、日本女性を顔ばかりの人間に取扱つてきたことは、自然の成行だ。「みめよし」といふことが、どれ程、古來幾多女性の身を傷つけ、境遇に災したかも知れなかつた。過去の小說・物語・脚本の大部分は、このみめよき女性にまつはる悲劇のみである。繪畫などの平面藝術

が、美貌を中心に推移し來つたのも、尤もだ。

時には、音樂なども、その肉聲や樂聲の美から、その彈奏者の顏までも美化せしめる。それは他から顏に美しい幻を被せた場合だが、時には、美貌の者たるが故に、その拙くはなくとも、並の肉聲なり奏音なりが、並以上結構に聞かるゝことも少くない。否寧ろ我々は、此の場合が多かつたことを告白する。況して美貌であり、また格別の奏樂者・歌ひ手であれば、その美貌は一層の美貌として、我々の眼に映る。

豐竹呂昇は、顏のみ見れば、人並の顏で、あゝした顏は、料理屋のお女將くらゐには、ざらにある。それが、より美貌に見えるのは、肉聲の賚だ。私の經驗上で、男子側をいふと、あの新内の大家富士松加賀太夫である。あの爺さん、世間普通の禿頭が、名工の面の如く、美と光澤とを以て私の記憶にある。それもあの肉聲のお蔭だ。

×

兎に角人並の顏があつて、人以上の才能あるか、人以上の顏があつて、人並の才能ある者は、何れも幸福だ。彼等の前途は洋々たりだ。それが藝術家或は藝人の側に格別多い。といつて來ると、此の顏なるものが、我々人生の生殺權を有するものといふてもよい。

醜きは悪漢毒婦の如く先づ思はれる。外面如菩薩内心如夜叉といふが、それは明哲者の側のみで、ぼんくら者流では、まづ内心も如菩薩と見てしまふものが多い。

×

浮世繪の美人畫や役者畫、その女性の顔や男性の顔は、時代の波につれて好尚が代りつゝあつた。そのやうに、現代にあつても、多少輪廓表情の如何に、一般の顔の好尚が變化しつゝある。舊日本式とか、現代式とか、よく我々の耳に聞く詞だ。然し好尚は、大抵ある時代を劃つて、遡つたり降つたりしてゐるやうである。例へば女性でいふと、面長から豐頬に、豐頬から面長に、繰り返してゐるやうである。浮世繪では、時代の推移をよく飲み込んだ、或る大家の筆によつて、この時代好尚の中心の顔が創造される。すると群小畫家は、皆その摸倣をする。延いてはそれが、市井の婦人や男子にも移つて行つて、その畫家のやうな顔が珍重された。歌麿式の顔はその當時頻發し、英泉式はその當時頻發した。今では浮世繪に代つて、女性の顔の推移の中心は、女優や花柳美人の顔が、その祕鍵を握つてゐるやうである。

×

西洋は姿が主、日本は顔が主とは、よくいふことだ。今の日本人一般の好尚は、全部が顔ではない

かも知れぬ。が現代に近い過去まで顏が主であつた。「みめより姿」といふ俚諺はあるが、「みめより心」といふものもある。それは顏本位の選擇を警める爲に、識者の生んだのに外ならないやうである。かの如く時流は滔々として顏に趁つた。偶々姿を謂ふ者があつても、それは顏のよき上に姿のよきを心懸けた、慾の深き者に外ならなかつた。

×

然し寫實に重きを置き理想を疎んずる西洋畫風の移入は、我々の好尙に大きい刺戟を與へずにはをられなかつた。所謂醜きも、單に相對的の言葉に過ぎぬのであつた。一個のみなれば、美も醜もない。醜もまた觀念の鏡で美化し得る。帝展や格別二科會あたりには、美醜の判別つかぬ、全く顏を超絕した顏に出會はす。これはいゝ傾向だ。我々も須らく、如斯く美醜を超絕して、唯目前の相往來する樣々の顏を凝視すべしだ。そこに大なる人生の調和、より複雜な人生讃美の管絃樂が聞かれると思ふ。（大正十年六月）

音樂會にて

今、私は友人の二人と、商品陳列館の階上の廣間の、一脚の椅子に凭つた。中京音樂會の主催で、佐藤謙三氏夫妻の洋樂演奏があるといふのだ。男子席にも婦人席にも、新しいかうした音樂に理解の深さうな群衆があつた。其の人波を押分て、友人の椅子を求めた時、私は、どんなに壓迫と哀愁とを感じたらう。

私は元來洋樂には、理解が乏しかつた。メンデルゾーンやベエトウベンの名を知つてはゐても、その曲譜を實際に聞いたことはなかつた。それに私は、かうした洋樂には大きな反感があつた。半可通な江戸音曲通に（自分がその癖に）反感があると同樣に。けれどもいざとなつたこの夜は、洋樂の無理解から生ずる私自身の哀愁や壓迫されが先に立つて、反感は影を潛めてゐた。

私は懷に入れてきた芳晴畫の手品獨稽古といふボロ〳〵の繪本を靜かに繰りひろげてゐた。江戸末期の黴の生えた餅のやうな臭が頻りにした。これを弄つて七時の開會を待つといふのは、私の最後の反感の表れであつたのだ。

司會者が、壇上に現はれた。何か十分ばかり呟いてゐた。これがはねると、すぐ佐藤氏と節子女史が、佐藤氏はヴイオロンを脇に抱へて、靜かに私達の視界に現はれた。私は初め、素見のつもりでちらと眼を投げてゐたが、漸く羨みの心が湧き出すのを禁めえなかつた。他の群衆もどよめき始めたが、彼等の心理はどうであつたらう。それは知らぬ。私だけには、この夫妻が、同じ藝術に生きて、生活と藝術とこれ程しつくり同一の狀態を續けてゆくのが、羨ましかつたのだ。友人のNも、「この二人は、同期の音樂學校出で、去年結婚してからも、始終かうやつて演奏して歩いてゐるのだ」といつた。私は、友人に聞いた。

「この二人で、どちらがより多く天才だい？　天分の多少は」

友人は、何の氣なしに、「それは、謙三氏の方だらう」といつた。

私は、羨みから、殘虐な氣分に移つて行つた。それは、昔讀んだことのある、ドオデエの作、何とかいふ題の短篇を思ひ出したからである。それは、かうした音樂者夫妻の生活の悲慘な斷末を描いたものであつた。

それは、相愛から成り立つた或る音樂者の夫妻が、初めの間はよかつたが、年月經つに隨つて、夫妻とも互に藝術の上に嫉妬を感ずるやうになつた。殊に夫よりも妻の方が、公衆の喝采をより多く博

するやうになつた。今ある佐藤氏夫妻のやうに、演壇に立つて夫が妻のピアノ演奏に幇助を與へる度、彼は激る嫉妬を禁めえなかつた。遂に女を毒殺しようとするに至る。さうした悲慘を描いたシーンを歴々私は想ひ出した。

知らぬ間に、最初の曲の、ベリオ作といふ幻想的舞踏曲のバイオリン獨奏が始まつてゐた。佐藤氏の獨奏に、節子女史のピアノ伴奏である。ピアノに凭つて、纖手をあやつる節子女史の横顔、瓦斯の灯のもとに仄白く光つたそのしほらしさ。二三歩を離れて、モーニングの襟を肅しく、弓の上下するたび、急躁な音が、大波小波の澎湃するやうに湧き出でる佐藤氏の立てる姿。私は、その二人が、調べの高度に達するたび、聽衆の誰人よりも、この奏樂に感激してゐるのは、彼等夫妻自身であらうと思ふ程、二人には自らの藝術に陶醉する永い瞬間があつた。これを羨み、またドオデエの作の或る陰い影を皮肉に浮べたりして、私は凝と耳を澄してゐた。

私は、始めてしみ〴〵洋樂を聽いた氣になつた。さうして色々なことが思はれた。例へば、日本の音曲、殊に私の愛する三絃の調べは、これらに比べると、たとひ新内の甲高さであつても、この呼吸の塞る程の逼迫した感じがない。洋樂は、露骨である。赤裸々な思ひを　謂はん限りの事を謂ひ盡してゐる。肉體的に强健な、あきらめのない、何處までも自我的な把握的な所がある。江戸音曲の最も

頽廢した豐後節、——人の肉體の切な欲求そのものから生じたといふ——も、此程の奔放さはなかつたであらう。傳存された新内なども、餘程、あきらめである、あきらめのやるせなさから發した溜息である。かうした洋樂のやうな最初からの自我的でなくて、忍從に疲れた果の嘗しの反抗の甲高さである。歌澤などは、他に比較して强さはあるにしても、同じく封建の國の樂である。意氣ではあるものゝ、執着の肉體に萠した根强さはなかつた。何といふ懸隔だらう。

こんなことを考へ乍らも、しかしこれを善いなあと私は頻りに思つた。しかしそれが、かうしたきらびやかな會堂、鵜呑みの心醉らしく見える（さうでない、單なる傍觀者も多少はあつたらう）群衆の一人として、私のあるといふことが腹立しくもあつた。さうして期待したベエトウベンも左程の感激を與へなかつた。矢張り私たちには、この音樂でも最初の一時にのみ興奮がある。愛でも酒でも煙草でも、皆さうだが。すると、矢張り刹那的な新内に逃避するより外は、ないなあと思はれた。それが寂しくもあり、又安定の位置を得た心のうら安さでもあつた。

×

街へ出ると、この私の心持にそぐはぬ流俗の賑やかな群が、再び大通にあつた。月は刄のやうに冷たく光つてゐた。（二月四日夜の事）　——大正八年　月、「新愛知」。

「幼い時」から

五六歳の頃の正月は、私は斯ういふ事を覺えてゐる。

私の母も、また亡くなつた父も若かつた。家は、市の南部の狹苦しい町並の中で、僅か二間の家ではあつたが、一年に一度の仕事も休み、綺麗に掃除もされて、ホツとしたやうな氣分が、家の隅々に流れてゐた。私は、元日の朝風呂に、父のあの頑丈な骨組の體に伴はれて、一緒に湯へ入りに行つた事を懷ひ出した。湯から歸ると、母もいつもに似あはずきちんと髮も丸髷に結つて、着物も着更へてゐた。座敷には、古いものだといふ、昔三河西尾で鳴らしてゐた頃の、何代前かに頂いたといふ藩侯のなにがしの書で元旦と書かれ、その下に「弓も太刀も袋におさまる芽出度さよ」といふやうな句の書かれた軸を、床の間がはりの黒い紙を貼りつけた壁に懸け、中央には置炬燵があつて、そこで、來たばかりの新聞を開けたりした。その新聞は、「大每」であつた。大每はその當時四十五錢位ゐであつたらう。名古屋の市内新聞が、新愛知と中京新聞（名古屋新聞の前身）と扶桑と三つ位ゐで、たか〲二十五錢であつた。その中で、あまり金廻りのよくなかつた私の父が、新聞だけは四十五錢の大每を

長いこと取つてゐた。その大毎には、大きな一頁大の繪附錄がいつも載つてゐた。あの光澤紙の心持よく辷る感じ、元日の晴々した湯上りの手の肌に觸れた感じは、私は未だに忘られぬ。その後此頃になつて「東朝」を既に六七年取り續け、元旦毎に繪附錄を見るが、こんな若々しい涙の出るやうな感じはなかつた。昔からは、大抵、母が古びた三味線を取り出して彈いた。それは名の通り本當に古びたものであつた。然し私の母も父もそれに滿足して、それによつて長唄のあれやこれやを彈かせて、父はチビリ〳〵酒を吞んでゐた。私には妹があつた。二つづゝ下の妹が二人あつた。これらも綺麗に着飾つて、手鞠などを突いてゐた。十錢ばかりの賺い羽子板を買つて貰つて、二人が喜んでゐたりした。あゝその妹の二人も、その父も亡くなつた。

私の父は、傲岸不屈な、貴族的な名門の子らしいものであつた。その割合に、うはべは穩かで深切で、人にも情けが深かつた。然し大抵の時は、せつせと版摺に忙しかつた。父は、自分一代でこの業を習ひ、それを始めたが、私には無論これをやらせる積りではなかつた。「お前は何でもいゝから、えらい者になれ。學者になれ」というてゐた。私はまだ小學校に入らぬ前から、父からこんな事を吹き込まれた。

私の浮世繪の版畫研究も、父のこの版摺業が、自然の感化であらうも知れぬ。

私はその後二十何年。正月になるたび、いつもこの父のほつと息づいた、さうして母に三味でも彈かせて輕い享樂心に浸(ひた)つてゐた、あの頃の正月が、涙催ほす程懷しいのである。　―大正十年一月、「知多新聞」。

○源内と洒落本「譯者三友」

本著第一の、平賀源内に關して、そのヱレキテルの逸話を、洒落本「譯者三友」（秩都紀南子著）に發見した。此の余白に書いつけておく。

『しげ　そりやア丁度いゝ所で御座りました、矢口の作は、平木辨内どのとやらの作だと申ますが、とんだ智惠者さらで御座りますね　無　あいつは遠國へ智惠の買ひ出しに歩くはな、此中もおらんだのゑれきてるとやらいふ物を拵へて、おれが臑(すね)から火を取つた、一度臑から火を取つておくとのぼせがぐつと下つて、どんな女郎にもあつく成る氣遣ひがねへ、ほんに辨内で思ひ出した、稲野や林右衛門はこつちにゐるかの（云々）』の遊客幇間の對話である。

これによつて、年代不詳の「譯者三友」も、源内「矢口の後日」當時の安永八年頃かと類推の附いたもの。それにしても此のヱレキテルの風説は珍である。○尙、本著第二頁に掲げた「物類品隲」は、大本六册、楠本雪溪の畫といふ。尙、源内には、校正物として、「秘傳花鏡」半紙本六册なるものもある。　―大年十五、七、十五稿

鏡花の作品を褒む

鏡花の作を私が見たのは、何時時分のことであらう。『三枚續』を大阪毎日に見たのが、最初であつたらう。三枚續は、明治三十五年正月單行本となつた。新聞に出たのは、その前年三十四年の事であつたらう。三十四年といへば、私の高等小學の二年（今の制度では、尋常六年）私の十二歳の時であつた。その當時、既に私は分らぬ乍らもこれを毎日讀んだ覺えである。然しその當座は、他にもう一つの讀物、相馬大作や越後騷動ほどには、理解と感興とを惹かなかつた覺えである。それにあの一寸では入り難い文章のテキパキが、幼年の私の頭腦には、素直に沁み通らなかつた。然しその挿畫、坂田耕雪といふ畫家の挿繪には、毎日面白味を呼んだ。殊にあの物語の半ばになつて、お夏の愛した軍鶏が宵鳴きするあたりの、隣家の或る老婆が、棒切を以て追ひ歩くその足どりが、はつきり未だに私の頭腦に印象を殘してゐる程、巧みに描かれてあつた。

それ以後、私には、鏡花は暫らく途切れてゐた。（序でであるからいひ足しておくが、日露戰爭頃に出た大毎の、小栗風葉氏作『麗子夫人』といふ姦通を題材にした小說は、私には始めて性の異常を

敎へた物語であり、また同じく耕雪描くの麗子夫人の姿に、私は憧れた。）

父と死別れる十七歳頃までは、私は鏡花に纏まつたものを抱いてゐなかつた。田岡嶺雲の文集『嶺雲搖曳』とかさうした固いものばかり讀んだ覺えである。然し子供の時分から好きであつた人情本や草雙紙趣味は、ほの〴〵と殘つてゐた。家にあつた梅曆の端本、その中の國直描くのある繪、女が褄を開いて、立膝で金盥に向ふ。男が床に坐つて楊枝を使つてゐるその光景は、私の十五歳頃の眼を刺戟した。（『英對暖語』の或一篇であつた）中學四年、父が死んでから稍大平に本を買ひ出した時分、眞先に買つたのは、帝國文庫の梅曆であつた。五十何錢で買つて、一週間程で、あの全千頁以上を讀んだ。

父の死んでからは、宗敎的な、人生問題のものに讀み耽つてゐた。同時に或る再從兄が呉れた帝文の人情本傑作集を讀んだりした。その頃家の本箱の隅から發見した、ボロ〳〵になつた、ある艶畫本、それを竊り披く癖もついた。（春雨衣の初版本の端本四五冊を家に發見したのは、父生存時中學二年、十五歳の頃であつた。）

丁度その頃、私の鏡花癖が漸く芽生えてきた。作文の模範にと買つた大學館發行の『淸風明月』とかいふ古本、大須の境内で六七錢で買つたその中に、鏡花の『玄武朱雀』が、短篇のそれがその儘に

載つてゐた。(これを買つたのは、中學二年の頃のやうでもある)それを餘程永く迄愛讀した。傍ら、蘆花の『思ひ出の記』を徹宵(眞に徹宵)讀んだこともあつたが、この玄武朱雀のある會話の如きは、その儘口うつしになる程、愛讀したものである。同時に、新聞を切り貯めて自製の本にした『三枚續』(分らぬ乍らも殘しておいただけ私の執着がこれにあつたのだ)を再び取り出して讀んだ。今度は大分意味が解るやうになつた。その時分、大阪朝日に「式部小路」が出た。(中絶はしたが)其新聞が取りたいなあといふ事は、いつ迄も私の思つた事だつた。(この「式部小路」は「三枚續」の後篇であつた。)

鏡花のものを盛んに讀み出したのは、私の二十歳、或る恩人から金を貰つて、東京へ勉強しに行つた頃からであつた。私は十五圓の月々の手當を割いて、鏡花を買ひ出した。同時に帝國文庫をボツボツ買ひ始めた。『鏡花集』の出かゝつた時、眞先に買つた。さうして第一卷第二卷とそれを讀んで行つた。私の讀みたいと思つた鏡花の作品が、私の讀むに任せてそこにあつた。私は小躍りした。丁度その頃から、私の戀愛(今から思ふと、夢のまた夢、糟の糟ではあつたが)の中心をなした、ある年上の女達に對するあくがれを唆つたものも、鏡花の作であつた。私は、『誓の卷』や、その續篇ともいふべき『清心庵』に、さながら自分の心が踴つてゐるやうに感じた。

さうだ。その頃私の心を一層この鏡花に誘つたものは、若山牧水君であつた。牧水君と話をする度

に、時々この鏡花の話が出た。彼は、鏡花の作を所々諳誦してゐた。私のまだ知らぬ梗概などを教へてくれた。その頃『白鷺』が東京朝日に出た。私はそれを毎日讀んだ。名取春僊のその挿繪も面白かつた。私の戀を欲した、幼ない時から草雙紙や人情本や、或は艶畫等で刺戟せられた私の心の眼ざめは、却つて空想的に、この鏡花の狹斜趣味、男まさりの美女の幾群に吸はれて行つた。

その頃から、鏡花の作にも好惡の識別が附くやうになつた。妖怪物は嫌であつた。然しすんなりとした情話物や、又は少年の初戀の心持を取扱つたやうなものは、私の心に（未だに）甘い夢の泉を沸々と湧かしめてゐてくれる。馬鹿らしいと思ふ心はある。然しそれが馬鹿らしいと思ふと同時に、讀ませずにはゐられぬ或る力が、私に加へられてあつた。その詩のやうな、齒切れのいゝ印象的な文章も、その頃歌を盛んにやつてゐた私の心持と適合するものであつた。よく分らないといふ事を人から聞かされた。然しその分らない文句が、私には、なまじ他者の分り切つたその代り乾いた物よりは嬉しかつた。一面、私はその頃の自然主義に、相當の興味を持ち、未だに花袋氏などには敬服してゐる。然しその内面には、この馬鹿らしい、鏡花のこの夢の逃避、慰安があつたのだ。

褒むといひ乍ら、私は一向褒める條件の、彼の作品を内容から論じなかつた。然し以上の私の記述の間に、自然と鏡花の作品の魅力、その内容が朧ろげながら現れてゐると思ふ。——大正十年三月。

「燈影」を讀む

「燈影」は、田山花袋氏の近業である。聞けば、「やまと」に連載されたものであるさうな。舊臘の出版で、春早々發賣禁止になつたものだ。私は、ある機會でこれを讀むことが出來た。

私は、その日、一の宮の在（さい）へ用があつて行つた。五時頃汽車に乘り込んだ。外光はうすら弱く、車窓を這つてゐた。私は一心に五十頁ばかりを讀んだ。惜しい所を汽車から降りて、西へ田圃道を辿つて行つた。生憎募り出した雪催ひの烈風に顏を曝され乍ら、冠つてゐると吹き飛ばされるから脫いで持つた私の中折帽と一緒にぎつしりその「燈影」が、そのボール箱の冷たいのが、私の凍えた赤い手の甲の底にあつた。一時間程かゝつて、やつと目指す親戚の家に着いた。私の母が先に邪魔してゐた。叔父叔母、母、この三人は、暗いランプの明りの下で、ほそ〲と私の身の差迫つたある事件に就て相談してゐた。その絶え間絶え間を、サラ〲戸に觸れて行く雪の音があつた。私はその受け答へをし乍ら、火鉢の臺に載せて、「燈影」の頁を辿つた。それを讀みながらも、心の一つは、頻りとこの半月前別れてきた——眞に本意（ほい）なく別れてきたある者を、ある光體の尾の閃（ひらめき）が、暗にあらはれて、私の

眼を刺すやうに、端なく思ひ出してばかりゐた。その者と、「燈影」、この二者の聯絡は、慥かにあつた。その者から受けた短い然し底の底まで突きつめた體や心の記憶が、この「燈影」によつて新しく蘇へされた。「燈影」は私ら二人の甞ての事件とそつくりであつた。唯その範疇が、廣狹の差こそあれ、不思議な本當に不思議な色欲の波濤に掀翻される兩性、箇と箇とのストラッグル、幾人もの心や體を受け入れるに足りる或る一つの心と體、どれも眞實であり熱愛である、深い自分乍ら不神聖と思はれる程の動揺した熱情。さうした心と體との經驗は、私らの上に、また常に繰り返されたものではないか。どちらも罪をいへば同罪。不神聖をいへば同じことである。それがあるが儘のものであるから、仕方がないのだ。

　私が、若し單純な愛にばかり生きた、童貞か、でなければそれに均しい淺い經驗よりしか知らなかつたならば、屹度この「燈影」の如きも、虚僞であるとは爾く暴慢な口を叩かなくとも、例のまた好色本位に輕視し看過したであらう。それが今如實に讀まれた。これ「燈影」を濾過しての私の經驗の蘇りである。これあるがために、私は自分のものとしてこれを讀むことが出來たのだ。恐らくこの書は普通の健全生活ばかりに生命を過してゐる人々には、餘りにグロテスクなものであり、またナンセンスのものであらう。笑ふ者は、自らの空漠たる經驗を耻ぢよ。生の底、畢竟愛欲の海である。衆流、海

中に注がれて一味となる。新聞の三面記事も、諸君の形而上に考へる藝術も、政治も、はた萬事萬端その根柢は、この根帶のたしかな性愛の谷である。それを知らないで、「燈影」を笑ふな。「燈影」は、最近、私が寢食を忘れてといふ誇張は許さぬにしろ、兎に角これに近い興味と感動とを以て讀んだものだ。丁度これを讀むに最も恰當した氣分に今ゐるせゐかも知れぬ。この數年來、私は、面白いもの眞に飽かざる讀物を求めてゐた。潤ひのない通り一遍の生活味を描いたものや、或は所謂白樺派の女中文學や、さうしたものが、どうしてこの私の爛れた頭に迎へられよう。凡てが脚下數百步にあつた。私は寂しいけれど、私の一人だけの背景と氣分とに趁つた。それが、稍滿足されたのは、この「燈影」であり、前には、同じ作者の「殘雪」であつた。

「殘雪」は、ブディズムと一概に言へぬ程の問題が多々含まれてあつた。しかしそれらの問題は、私らには然程の感動を與へなかつた。それが、殊に「小說」といふ形式に於て現はれてゐたから。然るに、「燈影」は、さうした議論は少しも出てゐない。凡てが、一個の「小藤」を中心にした爭鬪、喜ぶべき悲しむべき爭鬪である。千人の中で偶に三四人のぶつかる經驗である。つらいけれども、しかし深刻な歡喜の音聲は、それのみから湧く。私が、次にこの「燈影」を異色ありと認めたのは、所謂遊蕩文學とは、スケールが全く違ふ點である。遊蕩文學の中でも、かうした花柳の女性を題材としたもの

に、その著しいものには、田村西男氏や長田幹彦氏やのものがある。然し此等とは、この「燈影」とは數百歩の隔たりがある。幹彦氏のものゝ上々なるものは、花街の詩である。優婉な三絃のしらべや、友禪振袖はちらついても、そこに私の期待する程の人間の悲哀はなかつた。草雙紙の境地を脱しなかつた。西男氏の作は無論現代の爲永春水―それも感じの弱くなつた―か、その亞流の人情本式である。花袋氏の作には、從來と雖も花柳小說がないではなかつた。例へば「春雨」、「髪」、「殘る花」がそれ等である。「髪」は、やゝ今度の境地に近い。「殘る花」はまたそれを深くした感がある。それらのコンデンスされたもの、それが終にこの「燈影」である。私は、近代の洗禮を受けた西鶴と春水、こゝに現れた――と、この「燈影」を讀みつゝ思つた。スケールの大きさ、會話の巧みさ、深刻の度、殊に冷靜な處は、西鶴、くさし乍らも同感の多い甘さは春水に、卽ちこの二人の現代化を思はせる。同氏は時々西鶴を云はれるが、春水も嫌ひではなからうとこれからも思はれた。さうして私が殊に感動したのは、この「燈影」が、登場者の全部に亘つて、遍滿な作者の愛が同情が、浸み込んでゐる點である。山崎といふ丹次郎式に陷り易い色師も、左程の低級に描かれず、相當な苦悶を表して居り、且那と稱する四十男も、お目度さの型ではなく、却つて情界の澱滓の滓まで嘗め盡した果の、女に對する外形愚なるが如き態度を示してゐることが、際やかに背かれる。小藤とてもさうである。決して單なる多情でも淫奔で

もなかつた。冷酷でもなかつた。山崎に對する愛も眞實であり、丹那の情も尊く身に沁みて受け入れることが出來た。その相剋した心、反撥した愛の二途、しかもそれが、何方も體のみと限らず、といつて心のみと限つてゐない心と體との合體、さうした愛でも、矢張りこの二個に働く愛の不思議さ、その異常さ。それから來る小藤の自責の涙は、卷中の隨處に流れてゐる。縋つたり憎んだり、といつてまた奈落にでも共に行かうといふ張りつめた女の心。悲慘な虚僞の生活から眼醒めた、眞純に對する飢ゑ。凡庸な情愛生活に沈湎して得々たる彼等に、どうしてこれらを受け入れるだけの用意があらう。理解なき彼等は、之を禁止したものと同じく、この小藤の涙にそれこそ何等の感動も與へられないであらう。あゝこれ、こゝに眞の彼等のいふヒューマニズムがあるものを。（未正月二十四日正午）

『英一蝶』と廣重

此頃、八月號の『新潮』を繰つてゐたら、その新刊紹介欄に、滑稽な誤りを發見した。それは、『英一蝶』（小山内薫著）の評である。評文中に、……『英一蝶』は、この江戸末期の天才畫家の性行に托して、作者がその煩悶を披瀝せるもの……とあつて、以下常套な讃辭がつらねてある。私の滑稽といふのは、この一蝶を江戸末期の天才畫家といふのにある。一蝶は、上級の中學生なら無論知つてゐる程の、有名な元祿極盛期の幇間的藝術家、さる廉で、流罪にまでなつた、浮世繪師の一人、浮世繪からいへば草創期に屬するもの、天才とは云ひ難いが、兎に角才人であつた。たしか歿年は、享保九年で七十餘歳。これ程のことは知つてなくとも、將軍綱吉の元祿と結び付けて、誰でも記憶のある畫家。江戸末期云々とは何たる杜撰な語であらう。これたら忠臣藏も、江戸末期の仕事。本當の江戸末期の、諸君愛讀の『梅暦』などは、維新後の作とでも云はなけりやならぬやうになつてしまふ。これで一かどの批評をした積りだから可笑しい。何も新潮記者一人には限らぬ。この頃、世間で大分、傳統主義などの火の手が原因であつたでもあらう、また一部の眼ざめた浮世繪趣味の鼓吹、其他などから此等の江戸

文化に就いても、ロさきばかりの議論や批評をする人が多くなつたが、此等の諸君、果してこの新潮記者と同一轍でなくんば幸ひだ。

同誌に、なほ、白秋君が、例の才筆をあらはにした「海の畫の解說」といふ小品を書いてゐる。その文中にも、屢々『廣重』が引張られてゐる。白秋君のこの頃の生活を、私は知らぬから、果して其後如何程まで、この廣重などに對する鑑賞眼が進んでゐられるかは、斷言出來ぬが、私には疑問が少からずある。他人の話や記事位ゐで、云々するのではなからうと思ふ。けれど、果して廣重の硬軟兩面の一般作品を見ての事だらうか。私には大きな疑問だ。色重といふ匿名で、彼は低級なエロチツクスを書いてゐる。これら特殊な畫を見なくとも、坊間平凡な彼の「浮世畫譜」其他の略畫草畫、又は「柳の栞」の如き挿繪繪本の類を見るも、彼の此の半面、一般浮世繪師が持つてゐた、當然の自己よりと他よりとする好色氣分の濃厚なものゝ一部を、また彼に看るは、容易な事である。此等のものを見、あの藍の色美しいいみじともいみじい風景畫にも接して、始めて廣重の全人格がわかる。たとへば、白秋君でも、その歌のみの君と、君の全部の生活なり思想なりからの君とは、必ずしも一ではなからう。一であるとの議論も、そこらあたりのお先走りの手合から出ようけれども、それは、まだ人間に觸れぬものゝいふこと。畢竟、如何なる藝術家でも、その全生活が、その全きものが、その作品の

個々にそれ〴〵完全に現れてはゐない。近い話がトルストイだつて然うだ。——話が脱線したが、白秋君の廣重を云々するのは、多少根柢があらうが、其他凡て浮世繪に限らず、人間の製作は全部、個々の無數からその全人格を歸納しなければ駄目だ。一個や二個、三四の特徴からそれを知つてゐるとか、善惡の價値判斷をするなどと云ふ事は、作物にしろ、人格の批評にしろ、凡て許さるまじきことだ。

追記——右で、英一蝶の流謫を、ある廉によりとしておいたが、これは、普通は例の五代將軍綱吉の祕事を描いたといふ『百人女﨟』の中の「朝妻船」によるとしてゐるが、然しこれは誤といふ方が確からしい。旗本大名の子弟などの相當身分あるもの、殊に綱吉の生母桂昌院の一族本庄安藝守を唆かしては、遊蕩のお太皷を打つて歩いた。これが原因しての事であらう。即ち幕府は、被教唆者を罰し得ず、逆に一蝶を、一時島に放つたといふのが本當らしい。彼としては、ありさうな事と思ふ。

——大正七年九月。

松方氏將來浮世繪版畫展覽會を見る

十一月十五日、大阪每日主催同社樓上の松方氏購入浮世繪板畫展覽會を見た。以前から今度の展覽會には、多少の期待を持ち、また松方氏の購入された版畫が餘りに評判が高かつた爲、わざ〳〵大阪へ出向いた。大阪へ着いたのは、當日の朝五時。まだ間があるので友人を訪ねた。途中電車内のポスターで始めて同じ松方氏藏品の浮世繪展が、高島屋にもあることを知つた。友人と相談して、先に高島屋を觀ることにした。(大每は十時からであつた)午前中に、都合よく高島屋と大阪每日と兩方を見終ることが出來た。今その時の印象やら、云ひたい批評やらを、なるべく控へ目にいはして貰はう。世間では、大每の擧のみ傳へられてゐるから、大每展本位に筆を進めよう。

あれでは聊か幻滅

勿論我々は多少玄人の中に屬すると自負してかゝるのではないが、あれでは聊か幻滅を感じない譯にはいかなかつた。あの當時、サンデー每日(十一月十八日發行の分)には、澤村氏や誰やかやが、大分提灯を持つて居られたが、あれは、大每に對しての遠慮かと思ふ。私は、あれ程の過褒には當らない

と思ふ。誤解する勿れ、私は松方氏購入の版畫その物の全體の價値を落しめるのではない。あの儘では、大毎社の學藝部か、何か、さうした部の失敗だと信ずるのである。通俗を標榜してかゝつたなれば、あれで十分だ、また成功でもあらう。が苟くも玄人向きにも見させるといふならば、稍失敗だといひたい。それは、外目には、浮世繪の概觀が、一通り陳列されてゐて、浮世繪の通常智識には結構であるが、然し各畫家の作品その物には、大いに問題にすべきことがあらうと思ふ。或は、松方氏購入の全部も畢竟一佛人の個人の蒐集をその儘讓り受けたのであるから、我々の希望するやうな傑作のみを以て、全部陳列し終ることは不可能かも知れない。然しそれにしても、隨分保存からも中等のものもあり、また構圖からも並の物の多いのには、驚かされた。一般概念を得させる爲に已むを得なかつたといふならば、私も大毎社の意を諒とするばかりである。然し一般浮世繪界には、常識の爲にこそなつたれ、新しき智識は得られなかつたことを遺憾に思ふ。唯目星しい物としては、大毎の方では、政信、寫樂、榮昌位ゐである。廣重の近郊八景も聲は大きかつたが、あれは決して初版摺ではない。「吾嬬の杜夜雨」の如きは、然りである。こゝで

高島屋の方を相伴にしたい

高島屋の方は、まだ玄人向に出來てゐた。春信と清長、歌麿と寫樂、北齋と豐國と廣重の七大家の

作品のみ、百餘點の陳列である。大毎よりも質に於て優秀なる作品が多かつた。大體に於て大毎は量に於て勝ち、高島屋は、質に於て勝つてゐた。然し大毎高島屋兩方を通じて、松方氏の藏品を全部斯うだといふのは早計であるが、綜合して忌憚なく言ふならば、一、案外中以下の摺と保存の物も混り居れること。二、傑作といふよりも、寧ろ構圖は中なれど、珍らしき作品といふべきは折々見受けた事。以上である。例をいふと、一、淸長は、雙方を通じて保存に於て惡しきこと。二、北齋は最も保存に於て完全、それに多く上摺を以て滿たされてゐたこと。（寫樂、春信など、之に亞ぐ）三、廣重の如きは、時々初版以下混同されてあること。卽ち廣重は餘り自慢出來ないこと。（高島屋の京都名所の如き）等である。

最後に印象の最も鮮やかなのを列擧すると、淸長（山門雨宿）〇政信（湯上り美人）〇豐春（ヴエニス）〇政演（柱繪、地紙賣）〇歌麿（酩酊七變人と辻君）〇榮昌（廓中美人競）〇北齋（阿彌陀の瀧と群鷄）〇寫樂（一〇八號の芝居繪）等（以上大毎）〇春信（蚊帳と柱繪美人と緣端）〇歌麿（靑樓十二時揃）。（相學拾躰の內、浮氣の相）〇淸長（官女と虛無僧）〇廣重（嵐山と宮の越）其他數枚。（高島屋）

——大正十二年一月、「江戸軟派硏究」。

「あぶな繪畫集」を葬る

數十の讀者の方から、何か特殊なものを出して貰ひたいとの切望を受けて、その擧句思ひ付いた「あぶな繪畫集」である。自分の興味も多少あつたが、然し元々全部その原本なり洋書なり原畫なりを平常見馴れてゐる自分には、唯編纂の勞を投じて、諸君の意に滿たすだけの本意であつた。然しやりかけて見ると、人情、相當の氣乘りもし、又坪內博士などからも厚いお詞をうけて、一層勵んだ。その果酬いられることは、頒布禁止、永久に之を葬らねばならぬことになつたのである。

刊行の遲れたのは、解說の序文を坪內博士のお手許へ直接校正して頂くため、（その御希望でもあつたから）送附してゐたり、それが着くのが遲くなつたりしてゐるうちに、二十日日附の奧附の日まで來てしまつた。やつと着いた校正を印刷所へ廻し、その再校の出るのを俟つ間、それが二十二日に出て、二十三日は日曜日で休み、二十五日にやつと解說だけの製本が終つた。その以前に、家內中を惣集めにして、あの目錄共十八の圖を十八に列べ、それを十八枚づゝ集めては一帙に入れる、その勞力も一通りでなかつた。然し解說の出來上つた時は帙に畫は入つてゐたので、それからは樂だつた。それか

ら發送。然し此の發送も、なるべく痛まぬやうするために、新聞紙で包み、それをまたわざ〳〵厚ボール二枚で挾み、それをハトロンで包み紐で縛つた。惡疽で苦しんでゐる家内を鞭打し乍らやつと第一回の包裝が終つた。あの新聞包みも、ハトロン包みも紐結びも一切家内のやつたことだ。私はその片傍でせつせと此著四月號の原稿を書いてゐた。第二回、第三回、翌日にかけ、先づ遠隔の地方だけの發送を了した。と突然二十八日朝警察からの頒布禁止、殘部押收の憂目を見たのである。諸君も知らるゝ通り、あの解説にはあつたが、春信、春章、芳幾は、どうも或はいけなからうと、爲念製版だけにして摺るのを見合せた。無論普及さるべき性質のものでもないし、少數印刷の事ゆゑ、大丈夫だらうとは思つたが、念を踏んでおいた。それでもいけなかつたのである。歌麿がいけなかつたのか、何たらう。惡い繪を抜かして貰へないかと賴んだ所、本省から解説も畫も全部いけないと命令してきたといはれて、仕方がなく共儘殘部をさし出した。元々營利的な仕事ではなかつたといふだけは、よく諒解して貰へたが、本省と直接談判ではないから仕方がない。これで自分も始めて禁止の經驗を得たわけだ。いやなものだ。愛兒の死と殆ど同じ苦痛だ。それが人爲であるだけ一層つらい。

それにしても可哀想なものは、私の家内である。折角私の仕事を手傳ひ、發送までしてくれた、私の今度の仕事の上の唯一助手であつた、それに今度、とんだ困惑と狼狽をかけた。然し手續が殘部押

収だけで輕くすんだので、ホッとしてゐる。酬いられる所はこれだけでも、何とも思つてゐないらしい。

然しそれにしても不思議な事は、あの目錄十八枚の中には、ひどいかも知れぬといふ政信も豐信も共に解說にある通り內地の二番煎じだとすると、とにかくあの全體の氣分、及び表題がいけなかつたのかとも思ふ。

かうして「あぶな繪畫集」は永久に葬られた。日本で最初、たとひそれが拙い物に終つたにしてもあの纏まつた畫集は、永久に死んだ。今、我兒の五歲、例のみゆきが、昨日の如くオルガンを彈いてゐる。その滅茶滅茶のマーチも、思ひなしか今日だけは、此の畫集を葬る哀曲のやう聞えます。それにしても、私たちの事業までも一括して見ねばならぬ現代日本の混亂が心外である。外國では、藝術品は藝術品として立派に保護されてゐるのに。私は、あの立派な珍らしい程の長序を頂いた坪內博士にも濟まなかつた。唯これからは、物の形骸なく、記錄に留められるばかりを翹首して待つばかりだ。諸君の筆によつて、何とか公論に訴へて頂きたいとも思ふ。

―大正十三年四月、「江戶軟派研究」。

典籍の燒却、古美術の壞滅

今度の東京及横濱其他の震災は、傷ましい限りであつた。わけても東京には、私は哀傷の酷だしいものがある。それは、謂ふ迄もなく、典籍の燒却、古美術の壞滅である。とりわけ私の今やつてゐる仕事に近い軟派本の無數、帝大の圖書室にあつたといふ數百の萄蘭本や、かねがね聞いてゐた安田文庫の古劇物や、好古堂の錦繪類はどうなつたか。暫く後に、小林文七氏の宅も駄目と聞いて、あの無慮何十萬圓の肉筆板畫の無數の浮世繪の運命は。私は、あの時、號外の出るたび、くだらぬ三越や松坂屋、帝劇などの、（さし障りがあるかも知れぬが）燃えたことを報らしてくれるよりも、中々待つても帝大や、京橋、神田、淺草あたりのその私の悲しむ範圍の知れないのが憤ほろしかつた。帝室博物館も苦になつたが、これも中々分らなかつた。今になつて人々は、折々帝大の圖書室燒却のことを、新聞の遲まきの報道や紹介で讀んだりして、喋々するものもあるが、あの當時何人も如何なる新聞も安否を顧慮しないかのやうに見えた。私には、それが實利に墮してゐる人々の弊のやうに見えて淺ましかつた。

なぜ、帝大あたりは、日本銀行の安全であつたと同様に、以前から設備されてゐなかつたのだらうか。金にも人の命にゝ更へられぬと今でこそ人はいふが、然らば何故せめて金と同じ待遇を與へられてゐなかつたか。地下室の設備がなぜなかつたらうか。私は今更に當局者の迂濶さ、腹立たしさは何ともいへぬ。私は、それらを自分が借覽したこともなければ、又今後も借りようとも考へてゐなかつた。然し私は、一身の便宜は不問、物その物としてそれを惜む。當局の迂濶さを憤るのだ。諸君は官學の威を藉り、資を藉り、蒐集し盡した。しかもそれらは多く門外不出であつた。徒らに少數の教授連や、學生の閑餘の繙讀に委するのみであつた。しかもそれらは一旦にして今度燒盡した。天災と謂ふ勿れ。誠に私は悲しい。憤ほろしい。諸君は諸君の官學の倉庫を、なぜ天下の物として廣く利用せしめ、また天下の物としてその安全を計り、且つ警備しなかつたか。横濱の某藏書家は、藏書と共に燒死したといふ。それ程の意氣がなぜなかつたか。——然し今日となつては、凡てが、唯、憾み、憾み。徒らに空に叫んだ所で仕方がない。

唯、今後は、古書の壟斷・獨占は、無論止め、門戸の開放、及び設備の完全を願つておかう。古本の價格釣上の苦は何とも忍ぶより仕方がない。それに浮世繪でもさうだ、好古堂あたりは、復活するかどうか。當分は、甲の手から乙の手へ、仲介人になつて少々の利を見る位ゐのことであらう。迚も燒失

以前のやうな倉に二萬三萬の材料を貯へ得ることは、こゝ數年は難かしからう。古美術を個人や商店が獨占することゝも今後は考へ物だ。文化の平均の發達を望む內閣ならば、此際、否今後、どしどし民間有志又は商店の古美術を買占め、以て日本銀行式の安全の設備を施し、四時開放して國民一般の共有物となさしむべきだ。帝大あたりの今後の古書蒐集も、せめてこの覺悟でやつて貰ひたい。私は、大倉男爵閣下の古美術燒却よりも、好古堂や小林氏や帝大の軟派本を、どれ程に傷むか知れやしない。

私自身でも此頃は、自分の藏書や浮世繪類に、一方ならぬ考慮を拂つてゐる。(他に比較すれば、大したものでもないが、でも數年來蓄積した私の貴重な資料と娛樂の全部である。)九月六日頃は、當地にも例の流言が行はれた。私はおびえた。一身に代る程の金目のものといつてはない、といつて今これを燒かれたら、創作家に變替らぬ限り、明日からは茫然自失だ。それをどうしようかと何れ程にも苦しんだ。坪內氏は逸早く早大圖書館に全部を寄附されたといふ。私は附近に寄附すべき何物をも持たぬ。また喜ばれさうな先方もない。また坪內氏に對する早大程の安全を圖つてくれさうもない。とにかく坪內氏でもさうだが、無論寄附しても、自分が自由に今後使用することは、條件であらねばならぬ。それには、いかに設備が完全でも、遠隔の地では駄目だ。私のやうなかうした非文化的の都市(東京京都よりも一層の)に住むものは、同志相集りて共立保存館を作るか、又は一身郊外にでも住

むかしなければ、駄目だ。

それにしても救はれなかつた歌麿よ春信よ北斎よ廣重よ清長よ、蒟蒻本よ番付よ正本よ、黄表紙よ古寫本よ浮世草紙よ、私は自分の畠だけでもこれだけを並べ得られるその無數の焼却に、黯然たらざるを得ぬ。まだ、大英博物館などに拐はれて行つた方が、その物自身のためには、ましだつたのだ。噫。

—大正十二年十月、「江戸軟派研究」。—

追記 ——右の稿は、震災直後の記述。すでに四年以前の昔語りである。それにしては、東京書店繪紙屋などの復興力の旺んな、迅速な事には驚かされる。同時に、震災以後の古本（洋和を不問）の暴騰にも。洋本（明治以後の刊行物の謂）は、其後兩三年間に、大分良書は再版せられて、古本屋をして失望憤慨せしめるのが多かつた。然しまだ〳〵諸君の震災直後のボロイ儲の方が、大きかつたともいへる。で洋本は、次第に水準が正調を得つゝあるが、特に到底再現の見込ない古書（和本）、就中その軟派本は、相場知らずである。飜刻は流行つても、それが流行れば流行る程、原本趣味延いては其の蒐集を煽るやうなものだ。處へ品物が尠いときた。恐らく今後永久に和本は、下ることなしであらう。貧學徒の我々には恐ろしい時が來たものだ。殊に、單なる金儲や道樂蒐集のために、肝腎の研究資料を横合から掠はれる眼に逢ふ時ほど、痛ましきはない。從つて値の高下など問題にはしてゐられないのだ。

—大正十五、七、十六。

和本手入れ漫談

和本の直し方

これは、諸賢の中では、私以上に苦勞なさるゝ方もあらうから、御承知であらうが、しかし自分は自分だけの實驗である。多少の參考にならば、幸ひである。

虫食ひ本の手入れ。虫は避けられないものだ。それも自分の手に入らぬ前は、何とも責めやうがない。さてこの本には如何に手入れするか。私は余程の虫でも裏打はしない。裏打は余計に虫を呼ぶといつた功利的の意味からではない。感じの惡い事夥しいからである。即ち裏打の代りに、虫のひどいのは、裏打紙を一枚づゝ挿んでおくのである。勿論その前にこてを一度かける。

こてのかけ方

こては、本當は、紙に濕りを負ばしてかける方が、しつかりするといはれてゐるが、自分は濕らしてゐるうちに、折角の本を汚しはしまいかといふ懼から、濕りはかけない。その代り、伸して、何度もこてをかける。そのかけ方も、ぢかは無論焦げる懼がある。薄い紙一枚おいてかけるがよい。大抵

はそれで癖が直る。でもいけないものは、こてをかける代りに、その本の紙の裏に。ドウサを引いてやる。それを新聞にでも一々挿んで、一度乾して了ふ。すれば大抵の皺は、ピンとする。極うすい糊を一刷毛ひくのも、同じ理窟である。かうすればこての厄介になるのは少いのである。

破れの多い本

本のはね目が破れたり、ちぎれて無くなつたりといつたものも、中に紙を挿んで、その皺も伸せば大抵感じがよくなる。

紙質のほけたるもの

紙のはね目が、多年の唾液でよれたり、ほゝけたりしてゐる。こんなのは、丁寧に氣長に、自分の手の指で抓んで、取るのである。そこが和本のとりえで、その部分は多少紙質が薄くはなるが、この掃除で大抵見違へるやうキレイになる。むしるのではない、丁度、ピンセットで抓むやうなもので。和紙は纖維であるから、或る程度まで抵抗力が強い。でかうされても別に大して變りはない、却つてキレイになるのである。

糸の綴ぢ方

大部分昔の糸の殘つてゐるものは、そのまゝそれを使用し、それに今の糸で出來る限り近いのを足

して綴ぢる。全く昔の綴糸のないのは、仕方がないから、その本にふさはしい糸を苦心して見つけては綴ぢる。(但しかうした仕事が私の家内の仕事です。和本を買ふたび妻君のこぼすのは、これが爲です。)若し、どうしても古い糸が間に合はず、新しい糸では釣合のとれぬ事夥しい場合は、この新しい糸を、濕らして灰でしごくのである。或は、墨の中へ浸すかである。然し墨は、むらになり易い。まだ灰(火鉢の灰で結構だ)の方が効果があるやうだ。

表紙の無いもの

表紙の無いのもある。これはどうするか。仕方がないから古本屋で、表紙丈が目的の本(漢籍物や教訓物。殆どツブシに近いもの)を買つて來る。さうしてそれをあてる。但し大本の方がよい。大抵は同じ型でも、工合よく合はぬものである。都々逸本のやうに薄い紙は仕方がないから、今出來の襖張りの紙の、なるべく無地を買つて來る。然し出來うれば今出來の物は避けたい。紙質の良否よりも色が氣に食はぬからである。私の一番困るのは黄表紙の表紙如きものである。あんな特殊なものは迚も今はない。これは、少し面倒であるが、自分で繪具を調合して、刷毛で塗るより仕方がない。モリシタの薄い紙くらゐに引いたら面白いかと思ふ。

—大正十四年八月、「江戸軟派研究」—

「江戸軟派文献」の解說

自分は、本庄氏の「日本經濟史文献」や池邊氏の「日本法制史書目解題」に刺戟されたといふのでもないが、近來切に此の種の物の、我が軟派文學に缺けてゐる、その物足らなさを感ずるやうになつた。先年、京都から大阪の森氏の「風俗研究資料」が出て、稍我徒の所冀の先驅をされた形であつたが、しかしそれも極の簡單で、且つ前二書よりも不便なものであつた。唯さういふ形式の本が現れるといふ事が、大に人意を强うした譯であつた。後、本庄氏の「文献」が出た。「原論」の時よりも整理されて、且つ便利さも增してゐる。唯結構ではあるが、我々には少々派違ひであるだけ、殘念の至りであつた、と同時にこれを得た經濟學徒の幸福を羨まずには得られなかつた。それ以後私の「軟派文献」を作りたい野心は、日增しに增長して行つた。その第一の石投げが、昨年の「小說飜刻物索引」となり、又今度の「隨筆考證物同索引」となつた譯である。この隨筆考證飜刻物索引もホンの骨組である。無論許せば、全部の內容總目次（各篇の內容細目の）にも及ぼしたいが、今は努力を吝まざるを得なかつた。一は、それには材料がまだ不完全であるし、且つ時間をそれのみに奪はれる餘裕さがないから

であつた。

で此の骨組で先づ辛抱するより外なかつた。その中諸君の中で、此の內容細目索引を作つて頂けば、喜んで自分はそれを聲援し、またそれを使用もしたいのである。迚も文献を作る必要上、さして、必要のない本までも、それが過渡期の一個零碎な刊行物であつても、文献の一歩を印する以上は、それに眼を徹さなければならぬ。圖書館の不完全なる此地にゐては、假令完全に藏書をそれらに見るも、一々足をその館に運ぶ時間を有せない自分にとつては、やはり詰まらないと知りつゝ、自らそれらの刊行物を眼當り次第購はなければならなかつた。御承知の如く、どんな零本――以前なれば振向きもしなかつた物でも、單價奔騰の折柄、それも需要に比べて供給の乏しい現在では、迚も容易に手に入らない。それにキレイな本、本とばかり求めてゐるから、容易な事ではない。

樂屋話はこれで打切。偖、自分が、他の善本の出來るまで、稿本でもいゝから仕上げたいと思ふものは、「文献」であるが、その豫定內容をいふと、前編と後編に分つ。前編は、この頃ぼつぼつやり出したやうな諸種の飜刻物索引である。(自分のこの文献は、なるべく原本に據らず、飜刻物に據る事を特色としたい。)まだ手を付けぬのは、淨るり、脚本、音曲、狂歌、浮世繪本の類である。後編は、明治以後の雜著の總目次と索引、及び諸雜誌要目の列擧である。この雜誌といへば、せめて十二三冊で

廢刊したものはいゝが、歌舞伎の百七十何號や風俗畫報の四百七十八號となると中々骨である。まして演藝畫報や新演藝に於てをやである。其他「歴史地理」や「藝文」の類、硬さうな雜誌からも見當り次第拾ひ出したい。然しこれは中々の難事である。自分の許にも少々は持合してゐるが、中々これは個人の藏本でも追つ付かない。古い所では「江戸會誌」といつたものもある。大阪の「近松會雜誌」といつた名の知れぬものもある。それに明治以後數百、數千の雜著が厄介である。迚も一生の中には出來さうもない。その第一歩として、その中、明治以後の自分の蒐集した雜著諸雜誌の總目錄、刊行年代だけでも纒めてみようかとも思ふ。つまり家藏本の一部、その目錄と解題である。

—大正十四年六月、「江戸軟派研究」。

『川柳江戸名物』の效用

西原柳雨氏の新著『川柳江戸名物』を、著者から贈られ、早々拙評の筆を執る筈であつたところ、他用にかまけて、荏苒今日に至つた。此段は著者並に讀者に對し深くお詫びしておく。此頃、それが爲一走り讀まして貰つた。無論此種の書物は、一時的の通讀だけに終るものではない。隨時檢索して使用に便なるものである。目錄が明細に附してあるから、それに依つて隨意所要の項を索くことが出來る。說明も簡單ながら要を得てゐる。しかも同氏のきまめなことには、あらゆる雜書又は諸雜誌の記事類から該博に立證解說せられてゐる。尙其の說明を補ふためには、諸名物の商標、看板、店頭の景など、樣々に挿入された凸版挿繪の數十個がある。此本、全內容は、第一章より第八章に至る。卽ち如左。

▲第一章（飮食物の部）……「和泉饅頭」以下「宮戸川と都鳥」に至る一〇七項。
▲第二章（藥品の部）……「三丁目生藥」以下「鍋屋虱紐」に至る五〇項。
▲第三章（化粧品の部）……「下村山城伽羅油」以下「よし屋化粧品」に至る二〇項。

▲第四章（袋物小間物の部）……「丸角の袋物」以下「唐木屋三味線糸」に至る九項。

▲第五章（呉服店の部）……「越後屋」以下「古着店」に至る四項。

▲第六章（玩具類の部）……「山下の背風」以下「番場の達磨」に至る四項。

▲第七章（書物文房具の部）……「須原屋武鑑」以下「五郎兵衛紙屋」に至る十項。

▲第八章（雜の部）……「江戸紫」以下「淺草紙」に至る十五項。

といつたものである。同氏の既著、類似のものを擧げるなれば、「川柳吉原志」、「川柳江戸歌舞伎」「川柳膝栗毛」等であるが、前二著及び此の「川柳江戸名物」は、川柳に據つた江戸の研究、解說、資料の羅列ではあるが、また廣汎的に夫々江戸風俗事物の研究、若しくは資料を提供して呉れる所のものであることは勿論である。「川柳江戸砂子」は今井卯木氏の舊著であるが、これ又柳雨氏の三著と並行して、江戸趣味又は江戸研究の大觀に基礎づくる所のものである。今井氏の著によつて、各地區の一般を敎へられ、更に個々に入りて柳雨氏の「江戸歌舞伎」により歌舞伎の變遷、解說の簡易なるものに入り、また一方沒却すべからざる踏査區域――卽ち吉原を「吉原志」によりて觀、更に時々流行風俗の中心たる諸名物類を此の「江戸名物」により共の概念を得るなれば、一川柳の解說以外、緯に貫ぬく江戸風俗及び地理の諸研究の素地を爲すことは勿論である。此點より、我々は此種の刊行物の永

久性と不斷に使用の便利とを痛感させられるのである。柳雨氏の「吉原志」も此意味で好著であるが、今井氏の「江戸砂子」と同樣久しく絶版であつたが、共に今度增補せられて再版せられるらしい。今井氏の發行期は不詳であるが、柳雨氏の川柳吉原志は、近刊の筈である。共に我等に好資料の豐富を與へてくれることと、期待に堪へない。現に、柳雨氏の「川柳吉原志」初版本には、自分は、拙著「江戸軟派雜考」執筆當時色々利用させて貰つた。今井氏の「川柳江戸砂子」初版本からも同樣である。御承知でもあらうが、自分らの如き江戸軟派の研究事項に就て、容易に確な典據を敎へてくれ、斷案を與へてくれるものは、繁雜な隨筆類の典藉の大部數のものよりも、此種の川柳又は版畫類であつて、此等の方が、遙かに簡易にして且つ確實なのである。

さうして尙、柳雨氏なぞは、川柳に就ていはるゝ時も、その川柳が何時代の物であるかを、こくめいに調べて明示せられてゐるから、卽ち我々は、勞せずして所用の事項が、此の明示の川柳年代に依つて、何時代の事に屬するかが、容易に確實に知り得られる。卽ち其の事項の上に下された解說と及び使用川柳の年代とに依つて、卽ち此の正確なる傍證より推理を進めてゆけば、當然自分の所要した斷案に到着し得られるのである。かうした至便さは、無論であるが、此種、風俗史、舊事物研究上の好資料であるとの以外に、漫然讀み下してゐても、また面白からぬことは無論ない。普通「江戸軟派」

に通曉する上の、常識・概念を與へてくれる事は、勿論である。

我々が軟本を讀みつゝ、了解に往々苦しむのは、普通に飮食店又は藥店等の特殊名である。當時の作者としては、此等が、一般普通化した智識であるから、そのまゝで文に引用せられてゐても、當然分る事と思ふのは尤もであるが、我々から謂ふと、これが、誠に厄介である。さうしたことの上にも、此種の本が役立つことは如何程であらう。多々益々用を辨じ得られようことは、自分が實驗上、保證するに憚らぬのである。

「川柳江戸名物」それ自身の評には一向觸れぬやうであるが、以上の言を以て、大凡此本の効用は諒解せられたことゝ思ふ。尙、柳雨氏に今後の分も、單に一讀者として願つておきたい。即ち「川柳江戸通詞」又は、「川柳諸興行物」或は見世物。(「川柳江戸歌舞伎」に少許は附せられてゐるが、獨立的にである。)及び、「川柳時花粧」といつたものである。此の中、特に、我らが用ゐて便利に讀んで面白からうものは、最後の「時花粧」である。此の折々の流行、髮形、衣裳、器具、其他明細に亘つた專門の系統的のものがと、思ふのである。

著者よりの獻本にあづかつて拙評を約してからすでに一月半、本日漸く其責を果すを得た。疎懶の點は幾重にもお詫びをする。

—大正十五年三月、「讀賣新聞」。

『元祿歌舞伎傑作集』推挽の辭

結構な本が出來たものである。文運隆興といつた形容も、これあつて始めて肯づけるのである。今自分は、殊更私情を混へて、今度の高野、黑木兩氏の著を禮讃するのではない。從來兩氏とは何等の交渉を有しなかつた共自分が、こゝに筆を執るに至つたのは、我等江戸軟派研究の末班に附するものゝ一に隨喜讃嘆、已まさるの眞情よりと諒して貰ひたい。まして本紙本欄は、自分に贈るに本著二卷を以てし、囑するに該著の批評を以てせられた。でなくもすでに斯界のため、汎くは出版界のために、機會あらば之を宣したいと思うてゐた所である。――乃ち此に喜んで、筆を執るに至つた所以である。

倚、自分は今、冒頭に結構な本であるというた。隨喜讃嘆ともいうた。何が結構か、何がそれ程隨喜に値するか、先づこれを閑かにしよう。

從來我等は、役者評判記又は雜書の類によりて、當時元祿草創期の、我が歌舞伎の、俳優演技、又は、獨白の一部分、更には一般該評判の類を了知してゐた。然しそれ等はそれ丈であつた。當時の脚色が果して如何なるものであつたか、卽ち個々彼等俳優の仕科、科白を窺ふべき唯一憑據ともいふべ

き夫等は果して如何なるものであつたか。我等は永き間、此の疑問を解く鍵を持たなかつた。即ち其處に其等脚色の現存が極めて乏しかつたためである。唯我等は想像した、臆測した。「日本演劇史」（伊原氏）の一七〇頁以後にも、元祿寶永當時の俳優演技、劇脚色の如何に就て記述は試みられてゐる。上の藤十郎、江戸の團十郎、交々あるにはあつても、それ等は知らるゝ如く隔靴搔痒の窮屈さを痛感させるものばかりであつた。

即ち一二を除くの他は、評判記等に據られ、唯一資料たる劇の筋其物が、全く斷片記錄たるに過ぎないが爲である。古名優が如何に扮裝活躍したかは、其幾分を評判記等により想像はし得らるゝにしても、その仕科臺詞の如何は全然不明である。これを以て如何ぞ完璧なる記述を求むることが出來ようぞ。但しそは伊原氏を責むるのでは決してない。全然今回の擧の如き無かりし以前に於ては、同氏の此の記述、又要を摘み緊を採り、決して空文字ではない。唯、今日の此の好著を迎へての、自分の僞らざるの情としては、である。

同氏も嘗て、元祿期の臺本現存不詳を痛嘆はせられてゐる。（「日本演劇史」三九七頁以後）其の遺憾さが、同氏の薄倖なりし努力が、今日に此の好著に依つて、始めて酬いられたのである。即ち伊原氏の略述は、今度の此の「元祿歌舞伎傑作集」に據つて、始めて全生命を贏ち得たのである。即ち從來我等

凡ての元祿期歌舞伎研究の遺憾さが、此に滿ち足らされたのである。埋沒せし臺本は、此に光輝ある復活を見たのである。卽ち元祿期の東西諸名優——東の市川團十郎、山中平九郎、中村七三郎、中村傳九郎、荻野澤之丞、西の坂田藤十郎、水木辰之助、芳澤あやめ、竹島幸左衞門、荻野八重桐の如き、彼等の劇的生活の全鱗も、之に依りて殆ど知悉するを得るのである。

殊に我等の欣幸とすべきは從來諸先輩により、徒らに物なくして影を談ずるの愚を行はしめた所謂歌舞伎の王冠たる市川家十八番物の起原も、實に之に據つて、直接之を明確にするを得たのである。現に「鳴神」の最古資料たる源平雷傳記や、「象引」の原作たりといふ傾城王昭君や、隅田川物の最古作たる出世隅田川や、「不動」其他の憑據となりたる成田山分身不動や、此等初代團十郎物を始めとし、下卷（上方の部）に於ては、百五十日間興行を續けたといふ佛母摩耶山開帳や、合作物として最も古き武道達者（富永平兵衞、平山豊後合作）や、元祿期上方劇中の傑作として名のみを聞いて實を見なかつた「面向不背玉」や、江戸と上方の作風の差を知る好材料たる關東小六今樣姿や、鳥邊山心中の原作たる鳥邊山心中や、鶴屋南北の妖怪劇に均しき女人結緣灌頂や、其の他時代物、世話物、お家騒動物、傾城事、諸種の荒事、振事、或は妖怪、靈驗、怨靈等、我歌舞伎劇上あらゆる趣向の草案は、凡て此の二卷にその粹を蒐め得られたのである。

即ち我等は兩氏の此の新著を以て、歌舞伎文献中の最高位に措く。所以、斷じて妄ならずと信ずるのである。卽ち南北を謂ふ者、五瓶を謂ふ者、正三を云爲する者、況して默阿彌を云爲する者、凡て先づ其等を忘れて、あらゆる後世歌舞伎劇の母胎たりし此に觀よ、汲めよと謂ふのである。

殊に謂ふべきは、初代團十郎の劇作が、比較的多く此の著に編まれた所以である。我等は甞て國書刊行會本『德川文藝類聚』第六によりて、彼の自作を合作とも四編を見るを得た。しかもその少量と、而も例の原文のまゝの誤字當字假名遣ひ樣々なる、讀者には迷惑なる校訂に據つて、その讀み辛いこととに遺憾を痛感してゐたのであるが、今、則ち兩氏の此の刊本を得て、始めて彼が演伎と脚色と兩々相俟つて歌舞伎劇の草創に努力した、その大部分の事實を知り、益々彼の偉大さを明確にし得たのである。

甞て高野氏・南氏の「近松脚本集」二册（明治四十四年）が現れ、續いて其の增補ともいふべき近松の脚本十六を收めたる高野・黑木兩氏の「近松門左衛門全集」（春陽堂版）が現れた。自分は、之に據つて大近松の脚色の技倆を略々知るを得た（淨るりとの比較興味も無論尠少ではない）。然るにその好對手ともいふべき東の初代團十郎の劇作（劇作の上の彼の假名——三升屋兵庫）が僅かにして、他は埋沒の止むを得ぬことを、劇道文献上唯一の缺陷と思うてゐた、それが今度で誠に救はれたのである。

況して其の個々臺本筋書蒐集の困難さ、一部百金に餘る現下和本暴騰の折柄、多年諸家の秘庫に探り天下に索められた奔走の勞苦及びあの假名本位の、誤字誤假名遣ひ勝手たる彼等を、よく此の嚴正なる漢字混りの讀みよきに校訂された筆勞、及び挿繪全部の此の鮮明なる複寫、よく原本の氣分を浮き立たすに努められたなど、擧ぐるに勝ふべからざる編集校訂の著者の勞は、其の斯壇否江戸軟派否々日本文藝學徒のあらゆるより感謝せられて然りと思ふ。

其他の我が歌舞伎昧爽期の作者たる、(多く俳優の兼業であつた。眞の作者は、上に門左、東に中村傳七であるといふ)。上に富永平兵衛、白石彥兵衛、平山豐後、福岡彌五四郎、安達三郎左衛門等、東に中村淸三郎、宮崎傳吉、藤本平左衛門、津打九平次、津打治兵衛、樋口半右衛門、中村淸五郎等、此等元祿寶永年間東西作者の粹は、即ち此處に一堂に蒐められたといふべきである。實に昭代の壯觀たらずして何ぞ。

筆の序である、今自分の、此著を得て、我らの元祿歌舞伎、劇筋書(或は脚本)の、既出飜刻外題の一般統計を試みた、それがある。それを試みに左に載せておく。一は、此の兩氏の新著が該統計中の首座たる事實を示すことにもなり、一は、此の兩氏著の新出三十一編を得て、匆驚、我らの貧弱を喞ちたりし元祿劇の根本資料も、こゝに六十九を數ふるに至つたとを明かにし、以て斯界を賀する唯

一の憑據とし、更には今後、兩氏の補遺卷編集を切望し、併せて他學徒の奮起をも促したいと思ふのである。卽ち左の如し。（統計中の重複を示す部分に曰へる「元祿」とは、今度の兩氏新編を指す。）

○元祿歌舞伎脚本飜刻物統計

◆高野黑木兩氏編「元祿歌舞伎傑作集」二卷　▽上卷（江戸の部）二十四種▽下卷（上方の部）廿種

◆高野黑木兩氏編「近松門左衞門全集」十卷の中▽上方（「元祿」と重複の物三を除き）十三種

◆新群書類從（第三）演劇、一冊　▽江戸（「元祿」と重複の物一を除き）△『傾城一張弓』（津打治兵衞、寶永五年）一種▲上方（「元祿」と重複一、「近松」と重複一、計二を除き）八種▽內譯『娘孝行記』『熊野山開帳』『業平河內通』（以上、富永平兵衞）。『一谷坂落』『當麻中將まんだら由來』『箱傳授』『今川かな手本』『有卦入萬倍曾我』（以上、年代未詳）

◆德川文藝類聚（第六）一冊　▲江戸（「元祿」と重複六を除き）▽『凱陣十二段』（寶永五年）一種

◆德川文藝類聚（第七）一冊　▲上方（「元祿」と重複一を除き）▽『四天王十寸鏡』（寶永四年か）『傾城山崎通』（寶永正德か）計二種

計　▲江戸（二十六種）▲上方（四十三種）▲總計六十九種。

匆卒の際の調査である。誤りあらば正されたい。右の統計に於て知らるゝ如く、今度の兩氏著編が

元祿歌舞伎脚本資料の唯一首座たるべきは肯づかれよう。況して既出本と重複の篇と雖も、挿繪の全部及び校訂の無類親切と嚴正とに於て、また絕高價値を措くべきものあるに於てをやである。

以上、兩氏著を手にし得たる概觀のみである。個々の盛られたる脚本その物の內的說述論評に對しては別問題である。無論我等の研究資料として、幾多の問題を與へてくれるであらう。それは、凡て他日に讓る。及び本著に全部を盛られたる挿繪の、浮世繪役者繪畫家の鳥居淸信以下の好個の研究逸資料であることも、それに起因する凡ても。或は操（あやつ）りと歌舞伎との融通點、折衝點等の考究も、或は後世作者との此等內容の比較論の如きも。其他本著により生ずる新問題は多々あるも、凡ては精讀鑑賞の他日に讓らう。

尙、一言、本著が斯かる貴重文献の出版として、最高最適の裝幀製本を有せることも、世に傳へておきたい。近來出版界――忌憚なくいはゞ、文獻の保存尊重に無關心不注意なるが如き傾向を存する其現狀に顧みて、本著がよく如斯き裝幀の極美と製本印刷の最高能力を發揮し得たるは、一に繫がりて發行者の非營利的態度に出づるとなし、卽ち特殊文獻に對する如斯き出版的良心を、大いに異數なりとして、讃しもしたいと思ふのである。（大正十四年七月二十三日、四女ゆかりの葬後に認之）

―大正十四年八月、「讀賣新聞」。

『江戸軟派研究』創刊の言葉

題して、「江戸軟派研究」と曰ふ。太平の逸民にも非ず、同じく現代の生活苦に掀飜されをる身、さればとてその苦を慘をかうしたことに遁れむとするさる卑怯者にもあらず。寧ろ近代に徹し、現代人に徹ししかも自己の趣味性癖上より、憧憬と思慕とを江戸に求め、その泉を殊に軟派に求めむと欲するなり。これのみ、これのみ。

軟派、一に文學、二に繪畫、三に俗曲、四に演劇、其他曰く何、何。總てを包括するに此の軟派の文字を以てす。研究とはいへど、單なる考證にもあらず、江戸に浸(ひた)り終りて他事なきにもあらず。唯現代の予の眼、解釋に由る。時を絕し、背景を絕して、彼等江戸軟派の肉に徹り、予を見出さんとする也。餘計な事をといはるゝあらんも、そはわが性癖のみ。寧ろ、到る處文藝思潮の野(や)を漁り盡して、終に此に、その安息處を求めたるが故にと謂はむ。

片肱張りて國粹を叫ぶ野暮にも非ず。爪弾きに此の情調はいかにといはゞ通にも非ず。强いて謂はゞ予の唯美主義（しばらく斯く名づく）の標的として最も恰適なるもの、江戸なり、江戸軟派なりと謂はんのみ。情痴の波濤、悲戀の洪水、到る處予の視野を奪ふ。中年の戀をして若し在り得べしと爲さば、予は此の江戸軟派に、中年にして始めて戀したりと謂はん。

頽廢、糜爛、しかもそこに惡の華咲き、惡德の實こぼる。惡の肯定、惑溺の無自覺。元祿、化政、二つの峠を距だてゝ、恍として予をいざなふ。彼等は、梳き零るゝ黒髪と燃ゆるばかんなる脚布と、以て予をいざなふこと頻り也。往かんかな、いざなふ儘に。かざせば朧ろ〳〵、靑羅に包まれたるが如く、はた嬉しき春夜の交會の如し。ひた歩む、予はそこはかとなく。

—大正十一年十月、「江戸軟派研究」。

小唄の會報條

今様の小唄も舟の朧月、朧ろに霞む春の夜の土手を四つ手の灯も走る、ちらほら飛ぶや思ひの糸もみだれて、何をくよ〱と、アレ聞かしやんせ二人が思ひをそのまゝな、アレあの唄も末を待つ。末の松山神かけてかはらじものと合ふ夢の、冬の寒夜のうつゝなや、癡話が嵩じてすねてみた、あやまりたいが辛抱して、えゝ辛氣くやしいとじれつたくなつたをきつかけに、アレ粋らしい、さりとて悲しい月下氷人、唄がきこゆるちり〱と、二人はいつか貰ひ泣。とも形容仕つらんず、すべて江戸のくるわとなさけの海と、背景にして生れた小唄、その起原を尋ぬるに、さても自庵隆達の昔より弄齋坊、道念山三郎、さつてはめりやす上手といはれた藤田楓江、名人上手唄上手、何れまさりおとりはなけれども、種目も様々とり〲に、あるはそのかみの隆達、さつては投節繼節籬節、ぬめり、柴垣、丹前、道念、すがゝき歌念佛、小室に一よぎり、潮來にめりやす、說教よみうり、大津繪端唄、うた澤其の外何々、すべて小唄ともいはゞいはるれど、我らは幕末、うた澤と端唄の外に立ちいでゝ、いきな咽喉で情味たつぷり、形でゆくより情でゆく、表現本位よりも滲透本位、人をとらへて放さぬ體の

さりとて新内二上りの甘味と下種とはこれを欠く、いきで澁くてしんみりと、四疊半のしんねこに粹な叔父さんに賞められさうな、さうした小唄をあがめ聞かんとし、また心に惚れてしみ〴〵と、鑑賞とやらをする者にさふらふ。永當、小唄の趣味とやら、含蓄とやら、雰圍氣とやらに生きんとする者にてさふらふ。エ、面倒な理窟はいらぬ、唯なつかしいやるせない、ひたすら小唄に戀慕の夢、夢かうつゝか切なもの、とめどさゝへど盡きやらず、古曲保存をかこつけに、聞いて懷をはらさんずおゝそれ者に外ならず。ナンカンと、とんだ利いたふうな口をきくも、今年の干支の寅のせゐ、猫と見せて實は虎だといひさうな下手な畫かきに劣らねど、そのくせ好きな小唄のきちがひ、それがし敬まつて白す。

大正十五寅の春吉辰

小唄しんさく
正續
全

叙言

松葉簪、疊ざん。雨の午後、雪降る夕。つひ堪へ情なく彈き出し爪彈の如き物と知らるべし。店淸掻のしやん〳〵と鳴るをぱつたり止めつゝ、淸瀧川のせゝらぎか、一節淸く花やかに、アレ〳〵小唄、わが小唄、うたへるは誰が家の子ぞ。哥麿畫の吉原か、英泉畫の深川かや。然り總てが意氣と張、尚且涙脆かりしわが幻の國の夫に候。

大正庚申夏吉日　　作　者

もくろく

鳥かげ○いりあひ○粉雪ちら〳〵○うす鈍の○うきわれを○明烏の○寝みだれの○忘られられぬ○あだし仇浪○西行さんも○信濃路○あいぢやく○壁○いろ○待つま○ひとりなき○みれん○逢ふはわかれの○お妻かはいや○凍たし浦里○こちらむけ○白菊の○あだ姿○倦がきたのか○あふせ○ある夜の紙治○おなじく○夢うつゝ○浮世繪○花火○ふさぎの蟲○薄情もの○せめて一と目○やるせなさ○困つた連中○浦里いはく○道行涙番鳥○雪折恨松川

小唄しんさく

○鳥かげ

夕ぐれごとのかこち言身の浮きしづみやるせなやぽんとつきでし小皷のそれもしばしの忘れぐさ露をもあびぬ黄水仙よう似たかげのすつきりとしやんとうかぶもうらやまし花にうらみはなからうぞ逢はれぬは花それよりもかうまでも身が忍び寝の名うての紙衣いぢらしし折からばらららふりいだす小雨春さめしめじめと垣根に鳥のかげ飛んで袖をかたしく炬燵のふとんそれも名殘りの涙がにほふさつさなんともならばなれ

○いりあひ

入相のさくらちらほら光りて飛んで小窓のうちのうらみつらみいつかかうした内證のはかない縁がなさけなやきつとめうとの約束をあだに柵せかれはて張も意氣地もかひしよなきわたしがいやでその恨み「うきなさけ添はれぬ仲と知り乍ら花が泣かすかこの身が泣くかちゞにみだれてゆく春のアレあの爪びきも涙がちひとごとにきかれぬわいなきのふけふそさま見たさの朝夕のそれが嵩じてとがとなりかうした憂き目に逢はすのも藻に住む蟲のわれからとみんなわたしの心から鐘が鳴る待たしやんせたれが撞いたかエヽマアいろ知らず

○粉雪ちら〳〵

粉雪ちら〳〵しつとりと袖にはおもきもの思ひせかれてかよふ小車のとまらぬもまた輪廻ゆゑアレ夜烏が啼きしきるホンにおもへば氣にかゝる笠の紅緒に雪つもる折も折とて小格子のわびしい音締ぢやないかいなア

○うす鈍の

うす鈍の大じんさんは金無垢の簪をあたしにやろといふそんなものよか眼が欲しいそれはお前の眼のやうないとしらしい眉かげであたしを見詰めてくれるものヱヽマアほんに焦れつたいほれたをんなは因果もの

○うきわれを

うきわれを淋しがらせようぐひすの來鳴かぬ庭もほそ〲とアレ陽炎の氣忙しいわたしのむねも實々さうではないかいなア

○明烏の

明烏の時ちやんは一腰口に高塀乘り越えたお前にさうした意氣があるならばわたしもかうした苦界にゐまいもの新内聽くたび愚痴が出る

○寢みだれの

寢みだれのあとを鏡にうつしたりうつされもした過ぎしこと思へばホンに川竹のわが身がつらややるせなや

○忘られられぬ

忘られられぬお心がぷつりと絃がきれくさる折からの笛按摩上下ヲ

○あだし仇浪

あだし仇浪浮舟を見ようき舟の身がものわびしわれは君ゆゑ浮舟ぞ乾く間もなき梶の緒

○西行さんも

西行さんも月にはかこち涙したわたしも君には涙干ずホンに暫しもゑ

○信濃路

木々みどり葉うらは枝にかへせども雪のとけるを松川の底までふかいやくそくも藻ぬけのからとうらみ草をんな心はそぢやないとうたふもあるをうす氷張りつめた氣を嬲るかもアレ憎らしいたより春風

○あいぢやく

すさんだる心のとがのおきどころおさんに泣かれ子に泣かれ治兵衛うろ〳〵さりながら小春おもへば魂もぬきさしならぬ體のもだえ戀のねぐらはよそ〳〵と

○壁

あれもよしこもよしいづれわがものとすさんだ心にゐはゐれどたがひにわからぬ事ばかりどこまでこちのものぢややらをんなごゝろはいやさらに不思議ばつたりゆき當る

○いろ

いろといろいろはなに色ぬしもいろいろといふ字のふしぎさよふしぎなことはいろばかりどうせ世の中いろばかり

○待つま

丸い縮んだ火鉢の灰かさうづたかい煙草の殼よそれも待つまの焦れごゝろ湯上り化粧しんねりと座敷着つかねたその傍で白い泡ふくぬるま湯も手ぬるい君の心かもありとは見えてかげ見えぬなが

なが梯子その端の小部屋ひつそりもの思ひ

○ひとりなき

新内の蘭蝶を彈きましよ　梟が啼く杜の太鼓につれない昔が思はれてひとり爪びき賣られた悲しみ肩揚のとれるまでの赤い模樣もつれもつれて涙ぐむ花笠の電燈小格子にお主婦に叱られたやるせなさをどうしようぞいの垣根に草が萠え腫れたまぶたに痛し

○みれん

春はつれなや夜櫻のはらゝはらゝと忍び駕籠わがこゝろ根をうちたゝく往來途絶えた土手路にしら〳〵のぼる星明りあの星もまた前の夜のわかれのいろと見あぐればおもかげうかぶわがみれん

○逢ふは別れの

逢ふは別れのはじめとや別れは逢ふとさだまらず別れも逢ひもせぬがましにそろかしく

○お妻かはいや

お妻かはいや命毛もみじかい夏の燈籠の灯鞘は鮫鞘八郎兵衛が文よむ空を時鳥

○凍えし浦里

凍えし浦里ぬくめどりみどりもろとも顔見合ひ鞘に縋るを脊と手に雪の松が枝踏み越える

○こちらむけ

こちらむけ月のひかりが浪うつ岸のそなたの背に這ひかゝる

○白菊の

白菊のやうなそさまとぬれ羽の鳥よかゝる雫もしみじみと

○あだ姿

黄楊の櫛掻くやつぶしの島田のほつれ懐紙しら〳〵雪もよひ

○倦が來たのか

倦が來たのかそのすげなさはわたしや燃ゆる火さへざえと

○あふせ

おこるは野暮よかうなつたこともみながら世の中のならはし事とあきらめて無理な首尾して逢ひに來たたまの逢ふ瀬ぢや夜ぢやほどに野暮はたゝかずある限りあなたのものと思はんせ手なり足なりどうなりとしつぽり濡れの幕のいろあなたのまゝと思はんせ

○ある夜の紙治

女房のおさんはすがれたうす紙の戀の色紙染紙は小春なりャこそしよんぼりとうきが淺黄の頰かぶりとんだ蝙蝠くらやみをこつそり脫けて宵の露地見あぐる空はふか〳〵と青い地紙の銀砂子星にも女夫ありと見え二つ並んで冴え〳〵とアレその傍にけなるいか

今までじつとゐた星のつひと流れて消えてゆくあれは名づけて亡者星その星もどきふわ〳〵と作なふものは影ばかりなさけないぞえ治兵衞さんこれが色師の果かいなア

○おなじく

おさんに泣かれ子に泣かれ治兵衞うろ〳〵さり乍らあのゝ昨夜のだきしめが戀の諸分のふかさを教へまたもふら〳〵とんだ蝙蝠てつそり脫けたぬけがらでいづれは小春が膝もとへ

○夢うつゝ

うつゝをもうつゝとさらにおもはねば夢をも夢となにか思はむさりながらいかにこの世が夢うつゝ藻ぬけのからであらばとてこん

なはかないとりとめのないで一生暮さりよかせめては夢でありとてもそれを食べるが身のしんじよそぢやないそぢやない夢ぢやとてやがてはつゞく命綱尊い碎片ぢやないかいな

○浮世繪

笄の數も重げになよ〳〵と寢卷のまゝにたちいでて嫌ひな客か遣手かや似てあか〳〵と憎さげに澄した行燈火盞までとゞくと右手は二の腕も拗ねてあらはにかくれたり左手はいらちせかせかとあだに翻ぼるゝ麻の葉の鹿の子しぼりを叱るやういきに壓へたなつかしさ口にふくんだ一かさね懷紙は肌を焦れ紙頓間な凡夫白妙の夢のありかと耻づかしゝ宵か夜明けかいつの夜かそれはふしぎなたまさかの逢瀨に躍る宵ぢや宵ぞえ

○花火

稲妻の光る絶間をアレあがる廣重色に星たけて橋の袂の出合茶屋
花火のやうに氣忙しい戀の灯がちいら〳〵

○ふさぎの蟲

今日も留守好いたはれたは男の上手欺されたでもないけれど初手は火鉢の番の役つひぞなかつたそれのみかえゝ素人らしい愚痴ばかり仇な浮氣も時と仕儀若い身空ぢや許さんせえ

○薄情もの

薄情ものそれは誰がいふ言の葉かどうせをんなは弱いものどんな

にいやなお客でもほかになければ縋る氣になるが稼業のつらさぞ
そまじめで粹で心からに思うてくれればどんなマアたゝき大工も
しつぽりと解けて寢る氣にわしやなつたよしにしなんせお家內さ
んなりやこそ知らずわたしにはさうした甘い色師めく口はふつふ
つ野暮の野暮

○せめて一と目

せめて一と目あつてどうしてかうしてともしもを賴み來は來ても
その屋根の上に大き月暈を被たのがあるばかり

○やるせなさ

やるせなさ紛かすとていでくれば去年なる秋の幾夜さに君を待つ

たる町角の空地に草の繁りつゝ月かげ水と濡れわたり蚯蚓しきり
に啼くわいな

○困つた連中

夢だつて笑ふんぢやないさお前あなた夢がどうやらほんまになり
さうだよ川ばたの萩も薄も雫に濡れて濡れた同士なら厭ひはない
何の惜しかろ袖袂いやはや困つた連中にござそろ

番外

○浦里いはく

降らば降れ雪がふつたとて何のそのわたしのむねがこのまゝに癒

えようものか死ぬほども惚れたこゝろが降らば降れさはさりながら時さんのお出はなぜに遲いやら小夜ふけわたりしん〱と冷えた廊下をあがるにもうきをおもひて涙のあられ部屋に來れば火の氣たえくづるゝ灰の火鉢にもしがないかげが見ゆるかも戀しせつなさ堪へかねてそつと寢そべり疊ざんしたり立つたり坐つたり今日も今日とて心中が三つもあつたと人の噂死んでは實々やくなしと人も敎へて身も知れど死ぬは誠かはかなさか人事ならでおなじことつひしみじみと馴れ染めた染めた淺葱の掛蒲團厚い緣とも深間とも人も知つたる二人仲さはさりながらなさけないさまにも逢はず寢もやらで雪ふる音を聞きゐては心細さがさきに立ち折角かうと張りつめた氣もまゝならずどうやらに弛み果つらしえゝさつても逢ひたや見たや時さんに

○道行涙番鳥

ふたりしてさす傘の柄の濡れぬさきこそ露をもいとへ今はどうともならばなれホンに思へばこの年月辛氣辛苦が數つもり瘠せたわいなと見上げつゝをんな手先に力籠め傘もつ男とらへれば男も思ひはおなじ身の仕様ことなしに獨り寢の人をきらへどしん底は熱い心が溜り場のこれがいつまア晴れるやら若さは早しみじかしと知らぬならねどいまさらに初戀びとのそなたのけたれと添はうぞいつまでも晴れて夫婦を待つばかり男いらへて悲しめばをんなも眼瞼泣き腫らしえゝマアいつそ母さんのあるがわたしは怨めしい大千世界に獨りだち親のない子はどのやうに羨ましかろこなさんも母さん大事これ程も焦れあくがれゐるものをぬしの母さんなに

事も思ふわたしが氣に入らずそれにわたしの母さんはわたしにいやな客とらせあの養父さんと年甲斐もないしよに榮耀するつもりげにや人畜生死の憂き世ながらに親のない子はどのやうにしあはせと泣いじやくりする雨の露地「あきの雨にふたりしてさす傘の袖ぬれまさりけりまれに逢ふ夜を

○雪折恨松川

今さらに逢はねば苦しぢやというてたま〳〵逢へばうかぬ顏うかぬ顏見にはる〴〵と逢ひに來たのと思ふのかおぼろに霞む春の夜のそれとはたがへしと〳〵と炬燵の炭火にほひつゝ二人並んだ影法師襖にくらき小夜くだち戀のいろはの繪いり本ほんにしみじみ

とくによいこのしづけさは情知りそれをお前がうつ〳〵とくだけてものを思ふとはどうしたことゝ怨むればをんな眼瞼をくもらせてそのお心はよく知つてつゝむとすれどこれがマアこれがどうしておもはずにゐられうものか別れての月日は小車かうやつて逢ひに來なした心ねは忝じけなくもうれしくも涙こぼるゝほどなれどわたしにすまぬことあれば途切るゝ言葉聞えずとはまたなにがすまぬとはありし幾夜にたちまさりかくあればこそいふことも悲しむこともないものをなにが不足かすまぬとは男ふるへる聲音にていひもはてば重たげにほつれし髪をふりあげて見れば見るほどいとしさのその眉かげをたばしる涙わたしのすまぬことゝいふは口惜しいけれど因果ものわたしはよその男にもねんごろをばしたわいないえいえさらに嫌な氣や浮氣はふつ〳〵なけれどもあ

なたに別れたそののちを三すぢの絲と酒煙草身を自墮落にもちながらほかに男は持ちやすまい男ぎらひで通さうと初手は覺悟をしたなれどいまさらいふは野暮なれど藝者の操立てるをば立て通したり立てさすはそれは昔の深川のおはおり衆のことばかり今は因果なものばかり奴といはれたこのわたしその心意氣がうれしいというてくれるもあるなれどそれもまことは色餓鬼の齒にきぬ被せた言葉のみをんなは弱いものとへど男はさらに罪ふかい牛頭馬頭たちの心かもあてつけるではないけれどわたしが身の上ほんにマアよい年からげて川竹のかうした勤めどうかして身儘氣儘になるならばとはいへよそに身請され活計歡樂しようではさら〳〵なくていつまでもかうした苦患にゐるよりはあなたと一しよに萱の軒竹の杜とどうかしてあゝしてかうと思ふ斗りさはさり乍らうれた

やな悲しい今の時世ではいやなお客とあたまから嫌へどたまにはすまぬことすまぬ言葉もつがへねばどうしてわたしのこの望み遂げらりよぞいのほんにマア髮の一すぢ爪のさきさきのさきさきまで神かけてあなたのものと思へども心ばかりは思へどもさうは强情張りきれず弱い悲しい人氣稼業この身は料理場の爼板にのせた魚もおなじことそれに口惜しいことなれどかうしたつらい擧句には天魔みいるか體のみでないばかりか心までわが身ながらも儘ならぬこれがわたしは口惜しいどうせかうした汚れた身とてもあなたに添ひ遂げることは叶はじ寧そマアぷつつり思ひ切らうとは思へどまたも煩惱があとさき胸に痞へつゝよしやわざくれこのまゝにたとひきれいに絕れるともあたしはあなたを一生の思ひ出ぐさに信濃なるこの山かげに降る雪の雪もろともに消ゆるとも忘れはせず

とくどき立て膝に縋ればなにとせん方も涙の男もいらへ涙ばかりにかき抱けばをりから一ふし露地そとを『硯ひきよせ書く文のあひたいがいろ見たいが病ひこひし〳〵がさしこんで押へどさがらぬ癪つかへきいてたまらず男の膝わつと一聲泣きいだす男は立つて泣聲の洩れはせずやと立てこめし障子ひきあけ戸を繰ればいつか中庭松が枝のふりつみおぼろ聳立てるかなたの山の雪あかりはだら〳〵も一めんにしん〳〵とふる綿つぶてぽつり黄いろく軒燈が冴えわたりつゝ銃の音きいて驚く生の身の番ひの獸おろ〳〵と遁場もとめていま此處にしばし隱るゝ谷の底そのはかなさに似通ひてわびしい思ひやうやくにもとの炬燵にかへりつゝ情夫はういものつらいものどうせひけすぎ相場だいまかり違へば心中と決つた決うたいひながら強いて笑へばやう〳〵に女も落ちつきえゝい

つそあたしは心とうからに決めてをります笑つてはいやぶしつけなれどあなたさへ御承知ならばなんのその鬼とも組まう蛇も儘よ人はどうともいはばいへあなた故なら八寒の地獄の責苦何のそのならば手柄によらばよれゐよれば撥で色餓鬼の腹を抉るがあたしの身上どうにでもして身を保ち借錢抜かうそれまではイヤもう屹度待つ待つと男のいらへさり乍ら長い月日にひよつとして或は又もいやな目にえゝまアいつそこの儘に番はなれじさつぱりと死んでのけうかさうなつてあなたはおいやと見あげつゝ思ひ上りて云ふ顔はげに男とり命とり男こたびはおしだまり思の絲のとけぬまの緋いろの胴のかけ蒲團炬燵あか〳〵頰をよせてはや轉寐のつめたさか熱さか知らね雪の音ばつたりなだれそののちはうれしい夢を松川の遠の川瀬を行くらしもほのかな艫櫂斗りなり

—正岡臯

續篇小唄しんさく叙

ごろりと寢ねて肱枕、つひさみだれのつれ〴〵に、爪びきならでまたもうか〳〵、口ずさんだる、君ならで紙を泣かせて筆泣かせ、去年の秋から春かけて種々事の忍びぐさ、いづれか獨言ならざるはなけれど、棄つるは惜しやと拾ひ山、積りて續篇一巻正に成り畢んぬ。正編の思ひかけざる好評に、追つかけ味を占めんとの、慾心ならで已み難き、悲しき心の徊徊といふも烏滸なり、たゞ偏へに容したまひね

大正辛酉夏吉日　　作　者

もくろく

○詰の旅路○君の廓○櫺子窓○本來空○御無用○思ひやり○風邪心地
○雪の夜道○師走○比翼の卜書○色彩假俊寛○うつけ鳥○眞のいろ○
傘もつほどに○命○新梅暦○高棧敷○弱氣○柳の蔭に○惡黨づれ○悔
しいばつかり○姐小啖呵條○魔○蘭蝶氣どり○呉れてやろ○格子先○
千里一時○茶碗酒○芝居裏○浮草○春秋棲重著○わかれ○頭痛膏○逢
はぬ昔○おぼろ夜○陷り場處○新壺阪○一しよにならうと○假世契○
蚯蚓鳴く畑○あくえん○十人並○毒苺○娘心○忘れなぐさ

續篇
小唄しんさく

○詰の旅路

戀しさに窓にいづればあかくと庭の柳とすれずれに向ひの樓の灯の海や盃の今宵は十三日踊すりやとて遠近に太皷の冴えて唄聲も張るや手拍子序の調子廓も人の宵の口つひ隣りでは忍び駒吏けゆく壁の影法師此方の垣にほのめかせ男の濁み聲まじへつゝ彈くは高田の容貌よしお妙が音締にさだまつたおなじ憂身の人かげにわれはうかうか上り鯉水の苦しみ火の難儀堰かれてさらに焦れつめ詰の旅路の越路まで忘るる暇はないとてやその果敢なさは悲しさはひとり寂しい天の川床しい影にはなれたるアレあの星ぢやな

いかいな

○君の廓

玉の汗しめて寝た夜のあとのやう乾いて手摺にホツト息向ひさざめく灯がぽつり黠いた小窓の樓の屋根ぴつたり垂れて深みたる空は淺葱のうすがすみいつしか更けて糠星もちらほら夜這ふ眞中へ屋根より塀よりいや高くづんと頭を振り上げて薄墨色に幹ぼけて蓬髮のやうな千々の枝これのみ冴えた濃緑の糸を枝垂れた古柳つひ鼻先の築山に靜かに搖れて見えわたる君の廓を待つ部屋のあはれ一ときあはれ一とき

○櫺子窓

しと〳〵と降るは雨かや涙かや陰氣しんきに曇りつゝ櫺子に縋りもの思ひ床に一輪投げざしの色は褪ずれど菊の花人の便はききもせで永い覆もさびしさう壁にかかつた三味も三味彈かれる折もないとてや主を待ち顏まじ〳〵といぢらしいではないかいな

○本來空

躓づきのあるがほんとでないかいなけふまで生きてゐながらも躓づきといふ程のものとんとこれ迄なう過ぎたいろの戀のと騷ぐのは野暮と思へど眞のいろ眞の惑溺ありやなしよしやわざくれ躓づきの大きなものが轉がつてゐてくれればと出來もせぬ事をたよりにしみじみと待つやはかなき然ほども寂しい命のわが上に火が點けたさに火喰鳥うそか誠か何なりとせめて殘つた火ぞ戀しさはさ

り乍らその相手なくば仕方がないものをむかしのいろは泡ぢやや
らぐつと根までは躓づきをさせなかつた程ろくなものろくなもの
とてなかりしぞヱ

○御無用

かはいと鳴いた明烏そのきぬ〴〵の締め上手あれには眼尻も下り
藤比翼をこめた浮彫の指輪も人に差され指指切り髮切り起請さへ
まして女房がなんのそのさらさら無用ぢや御無用ぢや

○思ひやり

川竹のながれに眼ざめしよんぼりと寂しい心抱きしめ締めて呉れ
ても內證の胸のやり場にけふもまた髮の歸りと言譯けてこの頃癖

の愚痴話ホンにそなたは損な性水々としたその島田髷の手前も耻づかしい婀娜な素振もちらほらとまだ消ぬものを阿呆らしい愚痴な蟲めが欝性がと嗤ふやうには言ひながらその實わしも夙うからに女房はあれどありとても寂しい心うき心そなたの髷も伊達ぢやなしわしの髭さへ男一匹いつそ諸共覺悟していろとのけうかさりとてもそれも今更はじまらぬホイ愚痴な蟲めが傳染つた〱

○風邪心地

ひとり寢の重いふとんに小夜更けて風邪の心地に煎薬を腹這ひながら枕許十種香ならで飲む湯氣のゆら〱茶碗に尾を曳くは寂しいものではないかいなア

○雪の夜道

粗い辨慶の袢纏に黃蛇の目揷して小刻みにオヤだしぬけの雪達磨とゝんがとんで踏みとまり褄をすぼめて手で塞ぐ髮にふわりと豆絞り笄の色冴え〳〵と妹許ならで重い柄を肩に支へつゝくつきりと外して浮いたはすんしやんと溜飮までも下がる顏とつぷり莽れた燻し銀音もしん〳〵さむ〳〵と風に散り〳〵おゝ寒「こんな雪夜に何しに何處へ」おつと焦けまい國芳描く「これは繪のをんなにて候」

○師走

めづらしく差向ひなり長火鉢炭火の灰もほゝけつゝ宵はたけたり燈の搖れて茶の間障子に映りたるそなたの髷はポッカリとぼやけ

た拍子大きな口開けた入道のやうに見えうつかり見詰めてゐたものを彈かれたやうつひと立つ「もう歸るのかまだゐても」「とていつまでも愚痴ばなし儲からないに飽きました」「そぢやとて可惜偶の夜を」鼻を炙りに歸るのか矢張り勤めの氣がねかや部屋割が何う斯う〱とつひ今方の泣言も何處へ棄てたかけろり顏みすみす歸る大だわけ「ほんに歸るか」「歸ります」いひつゝすらり羽織りたる青い肩掛も羽のやう飛んで往來のまたの日をつがへて歸つたその影はわしの弱さを意氣地なさ敲きのめした影のやうその魔のやうに見えてはかなき

○比翼のト書

熱いほどしかけた炬燵のせゐもあろ何か逆上せてうそうそと獨り

讀んでる枕許手燭を消して下におき身をば窘めて夜着の裾ぞろりと襦袢麻の葉の繋ぎ淺くはない風情伏せた拍子に「オヤ何あに」「文の本だよ」「嘘ばつかり」引つたくつたはよけれども「おやまあ好かねえ意地穢な」「何が」「何が」と口喧嘩「ホンに止しましよ知れてゐるどうせ性惡同士でしよ」「さうだよく」

○色彩假俊寛

くづれたる崖の針線色褪せて縋れる草も枯れくや風もないのに黐れくる疎らに生えた樹の間を煙を曳いて消える汽車はや遠方にしらくと頸つらねたその山の信濃へつゞくふた筋の軌道の果をほのくと涙でおくつた去年の秋その立ち馴れし高岳の青いぺんきの避病院いつも變らで秋晴のその森かげに聳ゆるはこころひく

ではないかいなア

○うつけ鳥

春の淡雪しつぽりと濡れてみたさのぬしのいろ前栽に植わつた南天のそれに散り〳〵降りかゝる晝の廓のしんかんとぬしを待つぞえ〳〵引

○眞のいろ

情事のないがホントの情ですえわたしや情には飽きました兄さんとしていつまでも飽かれもせずに嫌はれもせずにありたやホンにえイ

○傘もつほどに

傘もつほどになけれども三つ四つ濡るゝ色苔契床しや今は春やがては花も眞盛りにうきか情か知らねどもさんざふぶきの涙雨さうした別れが來ようならどうせうぞいのえゝまた笑はんす苦勞性

○命

いつまで草のいつまでも變るまいぞえ神かけて彫りかはしたる文身の命命が命ぞえ

○新　梅　暦

偶さかに我儘いひに來たものをお蝶の手前素氣もないあの丹公が胸の中いはねばいとゞ腹立つて歸つたお米が後ろ影それによう似

たコレ花枝そんなに拗ねてつひぞない野暮に返つたコレ馬鹿がと
はいひ乍ら眼に涙

○高棧敷

うきか涙か知らねどもお前と見たる立女形「婦系圖」のお蔦ぶり
身につまされてか玉霰「いゑいゑ涙はわたし故舞臺でうそに跳ね
廻るそれ見て呉れの役者よりわたしの方が眞の役勤め終ほしてゐ
るわいな上手になれば泣けるものこればつかりは愚痴ぢやない愚
痴ぢやないぞえ」折から拍子木の音チヨン

○弱氣

嫌ではないと知り乍ら退屈紛れに拗ねて見る拗ねた拍子に嵩ずる

喧嘩喧嘩嵩ずりやわたしや弱氣意氣地が無くつて負けまするえゝ他人ではなしいゝわよく〳〵

○柳の蔭に

柳の蔭にからころと水も滴る様な投島田粋な爺さん風鈴屋ちりんこ〳〵玉と散るアレ艶めいた裾なぶる

○悪黨づれ

油斷のならぬ男と女うか〳〵乘らじ乘るまいと火鉢を中に差向ひ二人樂屋で悪同士いゝ事しては知らぬ顔人に焼かれて嫌はれて其實左程に曲はない惚れたでもなし飽いたでもとんと無くつて人のいふ甘い話は微塵ない思はせ振が矢鱈好き小股を掬ふ事ばかり

企んでゐて莞爾と回避かしては意氣と意氣ぴつたり合つたが嬉しいと笑んでゐるのは知れたことどうせ二人は娑婆塞げ昔の夢はさらりと脱けたさうぢやないかいな〳〵ァ

○悔しいばつかり

惚れたはれたは一と昔惚れたでもなしはれたでもないのにしみじみ忘られぬ通といはれたこのわたしォヤまあトンタ浮名立つわたしや悔しいばつかりさ

○妲小啖呵條

呆れかへるが笑はせる身賣り切賣り看板にうそはなけれど貴郎にやうそよいかにあたしが性惡だつて意氣を買はれや寢ませうよ

○魔

何を吠づらくよく〵とそんなにわたしが悋けりや面を張るなり何なりと眞底わたしがいとしけりやわたしが我儘どこまでも許してみさんせ玄人なら玄人な程大様に兄哥らしく振舞ふものすればわたしが情のないいかに魔だつて折れませうしみじみ抱かれもしませうよあなたの乳をホイしやぶりもしませうよ

○蘭蝶氣どり

一枚目から拜みたいほど加賀太夫さん時々不通な姐さんたちの咳をさんすが氣にかゝるまこと蘭蝶のお宮さんあの賓頭盧のよな顔にありありうつつて遣瀬ないわたしや此糸ぬしはソレ蘭蝶でなう

て何とせう加賀太夫さんの言はんすことアレとつくりと聞かんせなわたしやあなたの內儀さんに怨まれるよで胸痛いえヽ莫迦らしいつまされてトンダ愁嘆笑はんすなえ戀ゆゑがつかり意氣地ないわたしをあはれと思はんせまたもや隣りの姐小たち飾つた綺羅をひるがへし心に聽く身の邪魔になる何かボソ〳〵話し聲加賀太夫の噂かさもなくば俺ら二人の陰口かまヽよ其な事知らですむいとしうてならぬ大だわけ蘭蝶氣どり此糸氣どりいやはやわしらが不通と極まつた〳〵

○呉れてやろ

その一言が耳ざわりおいらは人の色女寢とつた事も寢とられた事もないしさ欲しけりや呉れてもやらうよそれにまた手前のしやぶ

つた糟同然が何の欲しかろぞおいらにはいろ〳〵は世界に無盡藏ものは言はねど嬋娟しい繪の女までであるものを莫迦な疑ぐり止してくれ

○格子先

今しがた通つた辻占ぱつたりと止んで二階のあの騒ぎ宵のまぎれに飛び立つ斗り格子にしがみしがまれつじつと締めたる手さきと手さき遣手のお倉が聲として「花魁へ」ふつと別れて天水桶の間へしよんぼりアレ主のあの横顔わいの顔わいのくやし浮世が闇ぢやく

○千里一時

しんと更けたる火の氣もたえた長い廊下をせか〳〵とアノ大盡の
物めがせゐで宵から死ぬほど焦れて抜いたぬしは正直知りもせで
さぞ中つ腹でゐさんせう胸ももや〳〵一跨ぎあたふた階段段階階段
アレお町さんのアノ齒ぎしりわいの拍子にトンときれたる鼻緒草
履攫んで眞暗の庭へ縁起でもないおゝ寒ちり毛もとから針柱

○茶碗酒

君を思へば照る日も曇る曇つた空に雪が峰の見え三重にも四重に
も鬱ぎの蟲よ咋夜飲み過して今朝氣が附けば撥がポッキと折れて
ゐた折れようがまゝよ朝から自棄自棄茶碗酒

○芝居裏

あか〳〵と軒燈ひつそり脱ぎすてた紅の鼻緒が一足見えて狹い格子の兩側を挾んだ石甃打水に裾をぬらさじはら〳〵と來かゝる拍子ウタ「僞ぢやござんせぬ實惚れました」おやまあ聞かんせ露背なとはいへわたしの心意氣とんだ道行のチョボかいな二人連れ立つ芝居裏

○浮草

浮氣もの誰のせゐとは愚かなことを人の心を酌みもせで兩股かけた大だわけ女冥利に盡きた奴お前にや愛相が盡き果てたこちや實が好き實が好き好きな筈だよ誠が深いこちや一生でも焦れてみせうお前のやうな浮草は蘆の葉がくれ菰がくれ浮寢の鳥でも探してみなやがて獵師の人の手にかゝつて別れが落かいな

○春秋褄重著

あけぼのの幕や紫ゆかりの君にトンと一夜もあゆち潟ひとり根山のこの朝明を梅もちらほら笑んでもゐるに往きかふ人はいと稀に芽ぐんだ櫻に笹鳴の雀も戀が憂いとてやさつてもうら／＼木下を行けば色んな事が思はるゝよ二た年前の秋さなか寒い晝過ぎ二人で來たは夢かうつゝか幻かその時入つた田樂屋今も煤けてゐるであろそなたが妙に鼻白んだあの古疊もさうであろ男女は不思議な世界二人侘びしい心と心抱き締められ締められて主があらうが越える時や越える堰かれた水も切れる時や切れる行き通つたる蔦葛結んで解けない解けたといふは人の誠か僞かいな勿體ないが申譯ばかりに詣つたあの御堂今も假堂の儘でゐるしや暗い壇の賽

錢箱あの時觸れたお前の袖その八ツ口を黐れたる痲の葉くづしひれ伏して何か專念念じてゐたが私にや却つて可笑しくあつた見渡す岡に林と畠と田舍へ行きたい籠の鳥金ゆゑ堪へてゐるもののせめて一日のんびりとしたいとはその時誰の口並木の櫻も枯れてゐた風は變らで秋風がさびしかつたよかさこそと葉を騷がせてゐたつけがお詣りすませた歸りがけそろ〳〵薄れた夕陽のなかを素破大變と流石に急いだ派出なお前のあの髷に散りかゝつたるその一葉抓んで憎いと棄てたるをお前は覺えてゐるかいなうつかりひよんと消え果てた昔の幻追うてゐるわしの足許じく〳〵とはや陽炎か春陽立つ軒の下つた駄菓子屋の店に吊られた糸袋南京豆の一竿に埃たゝせてそよや風鳩めもククと笑つてる夢じや果敢なし忘れてしまへ

○わかれ

驛のはづれの立ち馴れしこの高岡をたもとほるあはれ破垣君なき
あとの忍ぶ草搦むものなき崖窪の日蔭のかづら白楊の木々はふか
みどりひとり戀らで地の震りひびくは汽笛煙る軌道の尾を曳いて
雪のとけたる山霞われのみぞ憂き夕かたまけてころ〳〵と鳴くや
蛙の雲に冴え木々は朧ろにせめておもかげ見まく欲り仰ぐみ空も
ゆく春の月は暈被ぬ

○頭痛膏

うづく痛みに堪へかねて貼つたり大きな頭痛膏我身で我身がまま
ならぬ壁にひつそり構へたるあの三味せんも憎らしい胴のひかり

も憎らしいかはたれ時かしんみりと聞くにほろほろほろ涙豆腐屋の鈴冴えわたる

○逢はぬ昔

燐寸をするのも辛氣くさ投げた煙管は凶と出た今は用なし棄てられた丁度わが身の辻占かごろり寢返り打つてはゐれど胸は意氣地もなみだの瀬戸よくづれた島田が映つてる壁の一重は時も時隣家の雛妓が足拍子淵習する音トントントンとんだ大詰見てしもたわたしを笑ふ樣で癪年はとつても愚痴はつね逢はぬ昔がなつかしい

○おぼろ夜

「何故にこんなに二人の氣」「落ちつかぬのはハテ知れたこと」「旅

へ行かねばねえうそよ」更けた通りを空の月とき〳〵曇り見下した春の夜寒に酒一つ食べ過した樣な頰の熱り二人行手に脚下へさつと流れる灯の明りとある菓子屋の戶を締める音

○陷り場處

構へた手つき三味せんの胴がふつくら喰ひつく膝の胴になりたや撥ならで情のつぶて玉つぶてそなたの指に緊めらるゝ糸の三筋の夜もすがら綾かけられて色糸のみたいゐたいは山々なれどうつかりゐてはまた浮名それが恐さに立ち上がる彈く手を止めて見返して「歸るといふなら歸らんせも一度怒つてみませうか」折角二人でゐるものをと言はぬ心は井戶端の櫻あぶなし酒の醉ホイ酒の醉にはあらねどもそなたは櫻にまさりたる元木にまさるうら木なし

井戸端なりやとて何のその陷らば陷れ陷ろとまゝよ井戸の蛙と近づきになるも一興さあ〳〵彈いたり彈いたり

○新壺阪

五つ違ひの兄さんと言はれりやをかし色でなし夫婦では無論なけれども滿更赤の他人でもない樣な樣子お互に好いてはゐれど儘ならぬ道樂者ではなけれども道樂の樣な口をきくまかり違へば此方實情身の皮までも剝がれてやろさり乍ら眞底いへば盡きつめたたつた一夜の假寢の夢も見たといふではないわいな

○一しよにならうと

一しよにならうと日を決めに來たるお前も汗ばんで梅もちらほら

咲んだ頃晝から夜更けうかく\と何を話した事ぢややら障子あくれば霜冴えて屋根もしんく\月ばかり戸惑ひしたか朧月

○假世契

くだらない男ばかりか女までそなたを除けたらうぢやうぢやと碌なものとてゐるでないこの婆婆めに飽き果てた然しまだく\死なれないそなたも私をまだ勝しな野郎一匹に思うてくりやれホイ殿さまらしい莫迦な口調獨りよがりと笑ふであろ冗談止した別れても一生世帶を夢見草露に凋れても末枯るとも根はしつかりと結ばれてそれが二人でないかいな

○蚯蚓鳴く畠

往きは一人で歸りも一人たゞし途中は二人づれ一足さきで待つたるは人目來かゝる下駄の音飛んで往來のつばくらめそれがいとしと柳越しむしむし暑い夕暮れの露地の入口待つてゐるやがて並んで町はづれ刈るに間もない麥畑の畦に蹲踞んで月を待つ街の夜明りあかあかととんだ浮氣な聲をして女夫鳴きあふ蚯蚓かあれは電車が走る土手の草蛙ばつたり鳴き止んで俺らに耳をすましてるけれどもうか〳〵時が經たアレ何うしようぞいの仕殘した話はお前の髮のほどその髮の毛にこれ見よと流れた月も憎らしいではないかいな

○あくえん

縁がありやこそかうして逢つた俺の言ふことァお前に聞かれお前

の言ふことァ俺にァ嬉し逢はねばいとどこの世が憂しやこれが世間の理法ゆゑかなしいつそ添うたらどうなることぞ不思議なものはいろかいな

○十人並

阿呆な顔が並んでる男女の飯事でそれでうかうか嬰兒生んでぼんやり齷齪働いてる其様な顔が並んでる苦もなささうな樂もない皆浮世に敲かれて糟の樣な身で欲しがるものはいろでないとささつさ金ばかりだとさ

○毒苺

毒とは知れど觸れたいとさ何が毒やらあの甘さ青い世界にたゞ一

つ娼婦のやうな赤い笑これを生んだも神の智慧摘んで食はなのこの私を生んでくれたもやはり神人より先にえゝいつそ

○娘心

はにかみぐさのはにかみてまもるわがみのはかなさにどうしよいぞいのあからひくこひしさばかりきえずきえずみ

○忘れなぐさ

忘れなぐさと忘れぐさ忘れなぐさもいゝけれどこのごろわしは忘れぐさ忘れぐさをば求めに山へ來は來たものゝ日が昏れて忘れなぐさの花ばかり

—續篇畢

栗林のおさん
朧夜の巻

合本

栗林のおさん（一幕）

はしがき

私の新作戯曲「栗林のおさん」は、西鶴の好色五人女の中から材を藉りたものである。然しそれは素材に過ぎないもので、大分私の空想が手傳つてゐる。或は西鶴に描かれたおさん並びに茂右衛門とは及びもつかぬ者になつてしまつてゐるかも知れない。然し略筋は、あの五人女の記述を追うてゐる。念の爲五人女卷之三の梗概を左に記さう。

「大經師某は、おさんといふ美女を妻に迎へた。おさんはまだ若い娘であつたが、年の違つた夫によく仕へた。三年目の秋、大經師は所用あつて東に赴く。おさんの實家で長年召使つた實體の茂右衛門といふのに、一切を托しておいた。して見れば茂右衛門は相當に才覺の切れた男らしい。その留守宅に事件が突發した。おさんの使つてゐる女中のおりんが臨時手傳ひに來てゐる茂右衛門に懸想して、おさんに文の代書を賴んだ。茂右衛門は初めはおりんを馬鹿にしてゐたが、おさん代筆の文言に絆されて、茂右衛門もその氣になつた。到頭或る夜を約するやうになつた。その晩が、五月十四日の晩。（大經師が旅立つてから、半年以上經過してゐた。）おさんは座興にとて、その晩おりんの身代りになつてその部屋に寢てゐた。茂右衛門が忍んで來たら、アツと驚かし、奉公人達も出會つて笑はうといふ計畫であつた然しおさんは何時となく寢てしまつた。茂右衛門はその熟睡中に來た。奉公人達も待ち疲れて眠つて了つた。おさん。は眼覺めて罪の遂行を知つた。それからまゝよと時々密會をつづけた。翌年春、急に石山詣にかこつけて五百兩を挾

箱に入れて、家を出た。花の散る頃琵琶湖で漁師に頼んで二人入水と見せかけ、その實丹波へ越えた。柏原で茂右衞門の姨を使つたが、姨の息子の岩飛是太郎と結婚せねばならぬ破目になり。その晩逃げ出した。さうして丹後の切戸邊に隱れてゐたが、毎年京に來る栗商人が、大經師の店先で、うかと『こゝのお主婦さんによう似た人が切戸邊にゐる』と口辷つた許りに事露はれて捕はれ、その年の九月遂に粟田口刑場の露と消えた。」

以上がその略筋である。然し西鶴の記述によつて、それを唯一の憑據とすれば、中々未詳な事柄が多い。例していふならば、大經師の姓名は分つてゐない。それにその年齢も、況して姦夫姦婦の二人の年齢も不明である。それに不倫敢行後何年を經て處刑されたのか、卽ち彼等二人の漂泊の年月は何うであつたかなどは、ぼんやりしてゐる。然しその斷片的な原作の記述から類推しようと思へば、出來ない事もない。今分つてる事實、並に私の類推した擧句の事實を左に列記してみよう。勿論此の私の戲曲を讀んで頂く爲に、必要と思はれる事柄だけにしておく。

大經師。（住所並に姓名は不明。年齢は餘程年長けてゐたであらう。何となれば、「年久しく寡居」といふ文字があるから。さうして彼の東に所用ありて、家を留守にしたのは、秋から夏へ、卽ち約半年以上の長日月であつた。）

おさん。（室町邊のある息女。今小町といふ評判があつた。）

茂右衞門。（おさんの實家に年久しく使はる。年齢は不明なれど、彼が自分の姨であつた岩飛の母に、「これは私の妹」と云ひ拵へた點から考へて、茂右衞門とおさんとは七八歳の距離があるであらう。茂右衞門が昔、最後に姨に逢つた年齢を物心の附きそめた七八歳と見ての話である。然るにおさんは當時十八歳であつた類推があるから、私は茂右衞門を二十五歳位とした。

次に、おさんを中心にした、彼女の結婚から刑死までの年月を、私の類推を辿つて列擧して見よう。

彼女の結婚。見染められて間もなく擧式。十四歳。(西鶴の記述には一體に年齢なし。唯見染の記事中に、おさんを十三か十四かとある、それを一切の根據にして。)

新婚後三年目の秋の末。おりんと茂右衞門の戀物語始まる。當時已に大經師關東へ出發。おさん時に十六歳。

不倫の敢行年月日。四年目の五月十四日の夜。(此の日時は原作に記述あり。)即ちおさんの十七歳。

さてそれから出奔となるのであるが、茲に可笑しい事は、近江の僞入水が何時であるか判然せぬ事である。近江の入水搆への年月が不倫敢行の年とするのとその翌年とするのとで、彼等の心理には非常な相違が生じて來る。私は大分迷はされたが、僞入水の文中に、「花は命に譬へていつ散るべきも定め難し。」とかその前にも「東山の櫻は捨て物になして、行くも歸るも是や此の關越えて見しに」といふ文句があるから、僞入水を春とした。即ち不倫遂行が五月であるから、五月とは太陽暦では中夏である。それに此の花の描寫は可笑しい。即ち私は此の記述を出奔後翌年の晩春にとつた。然し西鶴の記述は、然ればその間、二人は何處に何をしてゐたか、さつぱり書いてゐない。とも角、

近江の僞入水。結婚後五年目の晩春。即ち彼女の十八歳。とした。

丹波越の苦しみ。愛の言葉「命にかへての男ぢやものを」とおさんが吐いたのは、僞入水後の間もなき折か、或は初夏。即ち同じく十八歳。

柏原の事件。同じく其の頃。

切戸文殊の示現。其月の終り頃。

切戸附近の潜伏。恐らく六月頃より始まりしものであらう。
茂右衞門の京都事情の探索。その年の秋、七八月の事。
栗商人の噂。八月の末か九月の初め。
刑死。その年の九月二十二日。（これは原作に記入あり）おさん、時に十八歳の秋。
（發見捕縛から刑死までが、私の戯曲では、餘りにその間餘裕がないやうであるが、罪狀明白、奉行は即決したと認めての話である。）

以上で私の用意は盡きてゐるが、さて此の戯曲中に現れる其他は、全部私の空想であり、私の興味である。殊におさん茂右衞門の二人の罪の結晶があつて、それが産後死んだといふ事や、栗商人の八兵衞と、（此の名も假作）啞の八を點出したのも私の假想である。「或る僧」の如きは、益々私の興味である。其他隨處に、原作を餘りに履きちがへた私の興味と空想とがあるであらう。あの「好色五人女」の增補として見られるもよし、または全く獨立したものと見られるもよし、とにかく、私は此の戯曲で、論文の形式に似た稍或る物を含ませた積りである。それが幾分なりとも諒解願へたならば、作者の素意は叶へりである。（作者）

（補）此の「西鶴に據つたおさんの正體」に就ては、同題下に、一層悉しく卑見をつらねた長文を、これ以後物し、すでに此の私考は、拙著「江戸軟派雜考」に收載してゐる。興味あらば、御參照を乞ひたい。

一幕物　栗林のおさん

人物

三作實は茂右衛門。　二十五歳位
お菊實はおさん。　十八歳位
啞の八。　年齡不詳
或る僧。　三十歳位
八兵衛（八の親）　五十歳位
木樵甲。乙。丙。丁。

名のみ現れて登場せざるもの

大經師某。（おさんの夫）　年齡未詳
某。（茂右衛門の叔母）　同
岩飛是太郎。（某の伜）　同

おりん。（おさんの下女）　同

場所

丹後、切戸附近。里に近きある栗林の中。

時代及季節及時間

「好色五人女」の作者西鶴の生きてゐる頃の或る年。「菊の節句近づきて、栗の笑む」頃。或る日の午後より夕まで。

舞臺

切戸附近の或る栗林。

栗林の書割。左手に格別幹太く丈高き栗の樹を据う。眞中栗林の中に、稍土を盛り上げ、此處らあたりに珍らしき姫子松を植ゑたり。

幕開く。

（三作實は茂右衛門。笊を手にして屈み乍ら栗を拾ひ居る。なか〳〵溜らぬらしい風。）

（同時に、右手より木樵の甲、乙、丙、丁、出で來る。）

甲。（聲をかけて）「三作どんや。御精が出ますでねえか。」

三作。（顔を上げて）「おゝ。村の衆で御座りまするか。いやもう拾ひ甲斐がありません。笑みすぎて朽ちたのが多いのですよ。」

乙。（が代りて）「もうそんなに笑んでゐるのでがすかい。」（四人立留つて眺めてゐる。）

（三作。きまりの悪しき思入にて、相變らず屈んで栗を探してゐる。）

（丙。煙草を喫ひ乍ら、）

丙。「なう。三作どんや。お前さま達夫婦が此の村へ來られてから、まだつひ昨日のやうに覺えてゐたに、かうと、お前さん達の此の村へ來られたのが、夏の五月時分だつたかな。」

丁。「さうよ。そんな時分だつたらう。俺ん處の餓鬼に粽を拵へてゐた時分だからなあ。」

丙。「早いもんぢやねえかよ。早い秋になつてで、もうぢき冬といふんねえかよ。聞けば、都の方だちふが、まだお家からは、お迎ひはねえのかよ。」

三作。（相變らず、俯向く。栗拾ふ事少し。）「えゝ。前にも一寸申上げましたやうに、何分繼母とその生みの子に義理を立てまして。いゝやもう一生都へは歸らぬ積りで御座ります。お菊も左樣申して居ります。」

甲。「さう〱。お菊の家にも入り組んだ譯があるつてね。」

三作。「えゝあれも、氣の進まぬ嫁入を嫌つての事で御座ります。私とは本來約婚で、疾くに式を擧げねばならなかつたのでしたが、それが、お菊の親の非道やら、また私の繼母の不承知やらで。」

乙、「それで駈落かよ。いゝぢやねえか。心配ない。友白髮まで添ひ遂げさつせいよ。それにしても先月歿くなつた坊はいたいけだつたぢやねえか。まあ定命とあきらめて、代りをどん／＼生むに限るべいよ。お菊あねえもまだ若いにし。案じた事はねえだよ。」

三作。「えゝ。有難う御座ります。」（と言ひ乍ら、また屈んで、探してゐる。）

丙。「さあ。もう大分日も長けた。歸るべいか。」

丁。「さうよ。さうしべい。おゝ三作どんや。割木はまだあるかよう。」

三作。「毎度濟みませんで御座ります。」

丁。「なくなつたら、遠慮せえず、お菊あねえに取りに寄越しねえ。いゝかよ。」

丙。「さう。俺もやるよ。」

甲。乙。「俺もだよ。」

三作。「濟みません。皆樣の御厄介ばかり相かけまして。」

甲。乙。丙。丁。「ぼつ／＼歸るべいか。」（と云ひ乍ら、四人、左手揚幕へ入り終る。）

（あと、三作事茂右衛門。始めて立ち入り、以下獨白。）

茂右衛門。「親切なお人達だわい。然し私はいつまで、嘘を言うてゐねばならぬのか。あゝした親切な人達を見るにつけ、自分の今が後見られてならぬ。あゝ、思へば妙な因緣だつた。あのおさん（ハッとして四邊を見廻す）……とかうした事になつてから、丁度一年半。短い月日ではなかつた。私としては生命の綱を一度に縮められて了つたやうな氣がする。下女のおりんだと思つたのが、あのおさん。（また四邊を見廻す）暗やみで何も分らず、呆れたおりんだと思つたのが、牛を馬にといふ話もあるが馬以上に乘り換へた許りは、あれからの罪人の境涯。未だに分らないのは、あの時のおさんの心だ。なんぼよく寢てゐたとても、その實知つてゐぬ筈はない。それが、埒つけて夜が明けてから、氣がついて、「かうなつた以上は、お前と果の果まで添ひ遂げよう。さあ逃げて」と來た。自惚れるのではないが、私に初めから氣があつたのではなからうか知らと思つて見る事もある。それとも、あの大經師殿に愛想がつきて、あの家が追ん出たい、奔りたい、その丁度いゝ材料に私が使はれたのではないか知らん。然しそれ以後、逃げ奔つてからの一年越の苦勞、それをついぞ辛いと顏に出した事もなう、けふ此頃では一層情らしい心をあけすけに私に開いてくれるやうになつた。一體私はこれで幸福なんだらうか。不幸なんだらうか。（間）

あの事のあつたのが、去年の五月、忘れもせぬ十四日の晩だ。どうして私はあの日を忘れることが出來よう。あれから、燈臺下暗しの喩へもあるからと、叡山の東の人の一向知らぬやうな或る漁師町に隱れてゐた。その年の末時分から、おさんは、酸い物好きの體になつた。私は今更淺ましく、呆れもしたが、いとしさが次第に増さないではなかつた。おさんもだん／＼生命が惜しまれるやうになつて行つた。さうだ、あの頃が、二人の一ばん落着いた月日であつた。そこに一年近うゐて、詮議が氣になり出し、今年の春、あの知合の漁師の吉どんや龜どんたちに賴んで、罪の苛責を詫びての二人が入水の拵へ。あれから丹波へ越えた。丁度おさんの持ち合した五百兩のお金の半分をあの吉どんたちに遣つて了うた。案外義理難い和郎達だから、京へは沙汰すまいと思つたものの、當座は碌々心配で夜の目も合されなかつた。さう／＼丹波越えの時は、あのおさんが姙娠の吐氣で難儀をした。（うつとりした表情になる。）あの時だつた。苦しい眉の下から、「命に換へての男ぢやもの」と彼女がいうたのは。それまでは、一時の氣紛れか、何か。さうしたあれの氣紛れから、とんだこの私も一生だいなしになつて了うたと悔んだり、憎んだりしたのが、あの時から此の私もしん底あれがいとしうなつた。崖にほろ／＼と山吹が亂れ咲いてゐたつけ。（間）

あれから柏原（註――今、柏原町といふ、戸數一千餘、氷上郡役所あり、福知山へ十四哩半、今丹波線の一驛に

位す、元祿八年以後は二萬石織田氏の食邑たりしが、おさん茂右衞門の當時は幕府代官の所管たりき）へ、私の幼い時の姨を便つて行つた。姨におさんの事を聞かれて、あなたが此方へ緣づいてから生れた妹だと拵へた。さうして京で嫁入るが嫌さに、在の堅い者と一緒になりたい身ぢやと拵へた。と姨は、昔はあんなに欲張りとは思はなかつたのが、おさんの肌金を嫁入仕度の持參金といふたばかりに、自分の忰の是太郎に妻あはさうといふ降つて湧いた難題。をかしいやら腹立たしいやら、姙娠と知らぬ愚しさが笑へるやら、あの內祝言の晚、是太郎が醉つて正體ないのを蹴飛ばして、逃げ出した。それから此の切戶の在。どうやら落ち付いたとは思ふものゝ、これも京へ近ければ、何とも言へない。それに、此の村の啞の八、あれがうるさくおさんに附き纏うてゐる。あれの親父の八兵衞は、京へ栗商なひに行く身すがら、あの大經師の店へも商なひに來たことがあるげな。おさんの姿が變つてゐるから、よもや氣は付くまいとは思ふものゝ、いつ迄隱し終せよう。いつそ始めてこの切戶へ來た時、詣つた文珠さまの示現のやうに、坊主にでもなつて、安氣に此の世を果てようか。あの時も、おさんは、「文珠さまは、衆道ばかりで、男女事は御存知ない」といつて聞かなんだが。坊主になつてしまへば、愚痴なやうだが、おさんとは別れなけりやならぬ。殊に此の頃のあのおさんの私に注いで吳れるあの熱い心。それを今更振りきるのは惜しい、というて、いつ迄斯うした僞拵へが無事に濟まう

やら。この間、そつと京へ樣子を見に行つた時、大經師殿の店の戸口で立聞きしたには「おさんは死んだ」とお客に噂してゐられたつけが。然しあの年老つておさんを二なく可愛がつて居られた大經師殿は、却々諦めてしまはれる御仁ぢやない。湖水の入水も旌へと見貫いて居られはしなからうか。あれから夜になつて河原の芝居を見に行つた、とすぐその傍に大經師殿がゐられた。私は木戸番が狂人ぢや〳〵というた程、下足も取らずに逃げ出した。夕方戸口で立聞きしたあの大經師殿が、夜は私の身の傍にゐた。あんな恐ろしかつた事はない。歸つておさんに話したら、芝居の人の影は、お前の眼のせゐぢやと平氣でゐたが、あの時、木戸口の騷ぎで、大經師殿が、ちらと振向いて、私を見られたやうだつたが。それも氣に懸るし。（間）

先月は先月で、たうとうおさんの產月がきて、生んだは丸々肥つた坊。しかし七日經たぬまにポツカリ命が絕えてしまうた。罪人の子ゆゑ、どうせ日蔭者、死んだがましとは思つたものゝ、愈々となれば、泣かされた。そつとその亡骸を埋めたのが、この栗林。（眞中の姬子松に近づき、）おゝ、印に植ゑた松は生々と伸びてるが、坊の聲はしない。何の因果で、生れてすぐに死んだ。二人の破滅が近づいたといふ惡い兆候でもあるだらうか。（間）

（その土あたりを凝視してゐたが、やがて蹌踉として步み出す。）

あゝやつて木樵の衆が親切にして下さる程、此身の冥加の程が恐ろしい。啞の八の事も氣に懸るし、えゝ一切因果と諦めるか。どうれ、大分日脚も長けた。暮れぬうちに、もう少し奥の方へ行つてみよう。」

（と言ひ乍ら、落ち付かぬ顏の儘、右手へ消える。あと闃然。舞臺漸く暗く光線を增す。暮れ近き氣分よろしく時々頰白の鳴聲などきかすべし。稍ありて、バタ〳〵、花道より、啞の八、登場。）

（啞の八は、若きが如く長けたるが如く、不明。髮蓬ろ、襤褸を纏ひ、眼付ばかり獸の如く光りたり。凡て白痴の表貌よろしく。）

啞の八。「…………」（無言）

（花道の方を指さし乍ら、歡喜ともつかず、悲泣ともつかぬ無言の聲を出だし、つと左手大木の栗に隱る。）

（やゝありて、お菊事おさん登場す。）

（おさんは、年齢二十歳に近くやゝ年よりは熟せたる拵へ。但し着衣は派手なるもの、髮形すつかり世話女房。顏は、大經師が、彼女の十四歳の時、群衆の中より選みに選みしだけありて眼澄み頰はふくらに、稍毛深き性なれば、眉毛はつきりと、うるさき程鬢豐かに、型は心持ち長き顏、顎のくゝりなど愛嬌あり。その特徴として無意識に嬌態を作り、また無意識に色目を使ふこと夥し。とにかく日千兩嬌態三千兩の代物たるべし。）

おさん。（花道にて）「ぬしの歸りが遲うてならぬ。何うしてぞいの。えゝ、人にばつかり氣をもたして。

憎らしい。」（あどけなく然し稍蓮葉に云ひ乍ら、舞臺へ來る。）

おさん。（とつとと舞臺の眞中へ來り、例の印の松へ來て立留る。）

おさん。（落ち着き、且つ慈母の如き崇高さを現はし、小松を抱擁するが如く掻い覗き）「おゝ坊。寂しいだらうねえ。お前獨りで行つて。母ちやんや父ちやんも（急にしんみりとなる。淋しき鳥鳴く。）もう直行きますよ。いつまでも此の世に生きてはゐたいけれど、世間が五月蠅いからねえ。然し今ではないのよ。もう四五年したら、追つ付私達も行かう程に、一人で辛抱して待つてゐてお吳れよ。お土產を澤山持つて行つてあげるよ（間）お前なんかに比べると、母ちやんは卑怯だらうねえ。嘸意氣地なしに見えるだらうねえ。（しよんぼり、袖を合はす。その拍子に、肩は殺がれて、あはれさひた〳〵と溢る。おさんは、斯の如く氣分の頻々と變る女なり。或る時は母姉たり、娼婦たり、或時は處女たり、恰も西の國のダ・ヴヰンチが惱みたるモナ・リザ夫人の如きものと知るべし。）

（と、おさん、跪いて、土に向ひ合掌してゐる。暫らく間）

（啞の八、栗の木蔭から顯はれる。そつと步み寄り、いきなり、おさんの後から、無言、抱き付く。）

おさん。「アツ………。」

（振り捩がうとして焦る。間。やつと振り離す。）

（啞の八、動物の如く、呻り乍ら、おさんの歯に嚙まれたる手首を嘗めて居る。）

おさん。「何をするんだい。八ツ。と言うたとて、聞える筈はないが。馬鹿で不具と來てゐるから恐い者なし。始終猥らしい事ばつかり。此方が、日蔭者（ハツトして四邊を見）だと思つて遠慮してゐりや、いゝ氣になつて。というたとて何も分りやしない。ホンに困つちまふ。なぜ此んな奴、引縛つておかないだらうね。大體親父――あの親父も氣に食はぬ。逢ふ度び私の顔ばかりじろ〱眺めてさ。………アレーツ。」

（八、再びおさんに迫る。暫らく揉みつ擦りつ爭つてゐる、と右手より茂右衛門登場する）

おさん。（逸早く認めて）「あなた！早く來て。（振り捥がうとして）此んな奴、叩き殺しても構やしないわ。」

（茂右衛門、八の執念き面付きに稍恐怖を感じ乍らも、思ひ切つて近づく）

（さうして、おさんに力を添へて、八を振り放つ。八、茂右衛門を睨み据ゑる。茂右衛門、後退りする。おさんも氣味惡さうに、幾分おど〱し乍ら、茂右衛門の傍に寄る。

啞の八。（何と思つたか。いきなり身を飜して、左手揚幕に消える。）

（ホツとして、二人寄り添ふ。）

茂右衛門。「あれ程、一人で出るんぢやないと言うて置いたものを。なぜお前は出たのだ。私はまだい

いとしても、お前は人の眼に付く身ぢやないか。困るねえ。」
おさん。「だつて餘りあなたのお歸りが遲いんですもの。それに今日、うと〳〵緣側でうたゝ寢してゐると、赤ん坊の夢を見たのですもの。でお迎へがてら坊のお墓へ……。」
茂右衛門。「坊のお墓へ。坊の夢を。……さうか。私もなあ先刻坊の事が氣に懸つて此處で散散愚痴を言うたには言うたが。然し今更幾ら言うても返らぬ事だ。諦めて了ふさ。それよりもお互の身の方が大切だ。それに今の八のやうな奴もゐるし。これが因果といふのか。一昨年の五月から、ホンに少し落ち付いたのは、叡山の東にゐる時だけ、それからは始終、追はれどほし。」

（此前後、ある僧、右手より登場。丁度此時分、光線は一層夕の色となり、人影定かならず。ある僧歩み來り、ふと立留りてゐる。普通の行脚僧の扮裝、編笠のせゐで顔は判然しない。背すらりと高く稍痩せがた。態度極めて寂靜。）

茂右衛門。「いつそまた何處かへ、所を替へずばなるまいかの。」
おさん。「いゝえ。嫌です。私は何處へ行たとて、同じ事と諦めました。どうせ世間が目鯨立てる罪人ですもの。どうなりとなるがいゝと思つてるのよ。いつそ早く捕まつて、町を曳かれるなり、首斬られるなり、なつてしまへと思つてるのよ。その方が、氣が濟むわ。然しどんなになつても、私

とあなたは一緒よ。離れることはいや。いゝわ。あなた。」

茂右衛門。「さうなあ。といふものの、こゝが考へ所だよ。けふまで私等二人斯うしてきたことも、思へば不思議な、神佛のお宥しだよ。お前は、また意氣地ないと笑ふかも知れぬが、私には、餘り空恐ろしい。お前は何う思ふかは知らないが、私はこの頃大經師どのが眼にちらついて仕様がない。いつまで一所にゐたとて、これ以上極まり所もなからうと思ふ。いつそ別れたらどうだらう。といつて、（稍ドギマギし乍ら）私はどうするといふ宛もない。この儘坊主にでもなつてしまはうかと思ふ。お前はお前のいゝやうにしたらどんなものだらう。實をいふと、此の頃お前が私に注いで呉れる熱い情、私をしん底いとしいと思うてくれるらしいその情が、私には辛い苦しい物となつた。女の體のもつてゐる不思議を攫んだ、そのどん底の澱まで嘗めた果報者はいいけれど、それ以上の強い日増しに募るお前の體の情には、此方が堪らなくなつた。私は疲れたのだね。酷い言草と怒るかも知れないが、時には、お前がゐて呉れなければと思ふこともある。私は獨りで、侘びしく素枯れて、これからの月日を過したい。どうだらう、おさん。」

（おさん。半ば憤りを含み。）

おさん。「いやです。私はどうあつても。丹波越のあの苦しみの時にも、私は、あなたが命だつた。此

頃では彌增し、命より何より私が身ぢやもの、どうあつてもいや。死んでも。それ程私が憎けりや、——今あなたの仰有つた私の體の憎いといふお言葉ははつきり分りかねますが——殺して下さい。あなたに殺されたら、まだ本望ですわ。可愛い男の手に死ぬんですもの。それがいやなら、何處までも一緒よ。たとひ何度追はれても、何度逃げても一緒よ。先だつて此處へ來たとき、あの文珠のみ堂で通夜した時、あなたも私も同じやうな夢をみた。二人とも出家してしまへ。さうしたら、後生安樂だらうといふ示現のやうな夢を。その時、あなたも、笑ひなすつた。私も無論文珠樣が何御存じ。衆道の世話ばかり燒いてる身で、何生意氣なと思つた。あなたもさうだと言はれたでせう。その口の端も乾かぬうちにそんな泣言、止しにして下さいな。私はいや。別れることはいや。」

（二人とも、ある僧に一寸も氣付かない。）

ある僧。（つか〳〵と進みより、）

「不斷截愛慾、四時煩惱鬼。秋水冷亦明、如鏡如利劍。（と偈を高らかに唱する。）

（二人、驚いて、はつと別れる。）

おさん。「坊さん。あなたは。」

ある僧。「身はこれ、一介の頭陀ぢや。」（聲の鋳、舞臺に冴える。）

茂右衞門。「してまたいつから此處に。」(見返しながら。)

ある僧。「始終は、通りすがり見申した。然し身は、京に何のほだしもござらぬ。あればとて、お前たちに關はりはない。御安心めされ。」

茂右衞門。「すれば私達の素性を。」

ある僧。「いや。立聞く迄もない。お前達の身なり格好、さてと推したり。當てゝみようかな。」

おさん。(氣味惡さうに、)「當てゝみて下さいな。」

ある僧。「この頃、京近くの國々でとり／＼沙汰する、京の大經師の御內方と密夫であらうがな。」

おさん。茂右衞門。「エーツ。どうしてそれを。」

ある僧。「知ればとて、大事ない。あゝ、その驚きやうは。今が今おさんどのとやらは、知れゝばとて大事ない。死なう生きようとまでいはれたではないか。してみれば、矢張り命が惜しいとみえるの。ハヽヽヽヽヽ」

おさん。「…………」(口惜しさうに、然し默つてゐる。)

ある僧。「そこぢや。矢張り私もお二人にお勸めする。」

兩人。「何をでござりまする。」

ある僧。「出家ぢや。出家ぢや。嫌なれば、死ぢや。それも自殺ぢや。」

兩人。「とはまた何故にでござりまする。」

ある僧。「私もなあ。實をいへば、お前達のやうな事があつた。これでもさる武士がなれの果てぢや。同藩の妻を奪うて逃げた。然しその甘い陶醉の夢も、覺めての後は、浮雲の快樂。二人は忽に殊勝になつた。二人は遂に別れたぢや。現に私の相手は、北國の港の遊び女となつてゐる。處は、三國ぢや。私一人出家した。相手は、いつそ尼になるより、生き乍ら、賣色の地獄に墜ちて、苦患の海に慈悲のみ手の來迎を待たうといふのぢや。相手の昔のつれあひは、夙うに自殺したさうな。この私は健氣な相手に負けまいと、私も生きながら漂泊の苦。然し樹下石上も、何の物かは。あの相手が、發心した苦患の海に較ぶれば、何の事はない、極樂と地獄ぢや。私は、罪亡ばしに、私のやうな同じ迷ひの人々を見ると、說いて廻るが、務めぢやと思うてな。つまらぬ要らぬお世話と思はつしやるかも知れないが、誠覺めてしまへば、矢張り聖の說かれたる髑髏を相抱くのぢや。愛慾の甘い涙も打上げる歡びの聲も、畢竟は此の髑髏の舞ぢや。私のつまらぬ悟りの歌に、斯ういふのがある。寢言と思うて聞いて貰ひたい。「とりわけて西に心のとめられつ今宵雲なきありあけの月」ぢや。いゝ氣分だと笑うてくれるな。雲なければぢや。女は男よりは魔。男は女より同じく魔ぢや。

永劫に涯もない單つ調ぢや。迷ひの雲から雲へ、いつ眞如の月が見られよう。夫婦とはいへ、迷ひぢや。さればこそ聖は、今も昔も凡てのほだしを斷たれるのぢや。有難や、世尊も愛慾の海の沈淪から、常住淨樂の涅槃に進み給うた。……ハ、ハ、。何も青道心が、えらさうに說教をするのでもなからう。何も例へぢや。この私が例へぢや。やがては、お前たちも死か、死より淺ましい此の世の人の手に虐なまれるかぢや。文珠の示現がどうとやら言うたが、さうした機緣が過去にあつたならば、なほしもぢや。……私らも何故死なぬかといふぢやろが、それはまだ聖でないだけ、悲しいわい。お互に命は惜しいのぢや。あゝ合會期無、是機緣惜ぢや。えせ聖になれと無理强ひするのではない。せめて身の安全を保たれよと言ふのぢや。如何ぢやらうなあ。」

（兩人、暫らく沈默、然しおさんだけは、何處までも反抗的。）

おさん。「いやです。嫌です。私は何處までも茂右衛門さんと一緒に暮しますわ。たとひ今日が日・京の人の手に縊り殺されるとも。死際の一息までも一緒に。ねえ、あなた。」（と茂右衛門の手を引く。）

茂右衛門。（暫く躊躇ひつゝ、）「でもなあ、おさん。折角之程までに仰有るものを。」

おさん。「いやぢや。いやぢや。」

茂右衛門。「でもなあ。」（と云ひ乍ら、おさんに手を取らしてゐる。）

ある僧。「これ程の二人の仲ぢや。却々では、いくまい。無理もない。（憫むやうに、）それはまづ兎に角として、いつまで此處にゐても詮のない事。どれお前方の歸る方へ、身も參らうか。」

おさん。「それがいいわ。」（すつかり以前の甘えた氣分となりて、茂右衛門と連れ立つ。）（茂右衛門も躊躇し乍ら歩み出す。ある僧續く。三人花道へ）（間）

（この時、舞臺の暗から八の親、八と現れる。）（八、頻りに父親に何か手眞似にいうてゐる。）

八の父親。「ヨシ／＼。お嫁に貰うてやるやる。（間）俺は、お金ぢや。栗よりボロイ儲けぢや。（左程惡人らしからず、愚直にして慾心のみ深く、）ヨシ／＼。明日にも京へ行き大經師どんに言うて、俺は、お金を貰うてやる。（間）矢張俺の眼は違ひなかつたなあ。天晴金儲けの蔓ぢや。」（ポーンと手を叩き、躍り上る。）

啞の八。「…………」（これも手を拍ち躍る。）

（その拍子に、幕を下す。）

（一九二一・一〇・一一作、一九二二・四・九補）

―大正十一年四月連載「名古屋新聞」―

朧夜の巻（ひとまくもの）

人物

主水と呼ばるゝ若侍。

おれんと呼ばるゝ年増。

安と呼ばるゝ遊び人。

新内流しの男。

時代

江戸末期。或る年の晩春。夕方から夜へ。

第一場

此脚本の序となるべきもの。背後舞臺の半ばに垂れた淺黄幕。

右から安と呼ばるゝ遊び人。左から主水と呼ばるゝ若侍、登場。安は、また取られたといつた形。

若侍は、せか〳〵とした足どり。

ばつたり行會はす。
安。「あゝ。若丹那。若丹那ぢや、ござりやせんか。」
主水。（心付き）「やあ。安か。どうしたい。」
安。「どうしたいたあ、御言葉だ。御覧の通りだ。素つてんてんでさあ若丹那、丁度いゝ所だつた。これから、お借りに上らうとしてた所なんで。うへーえ。」
主人。「借りるツといつて、さうは駄目だよ。俺も此頃は思ふ目が出ないからな。」
安。「嘘云つちやいけませんぜ。何だかそわそわと、丁度藪鶯のさゝ鳴つて格好でがすぜ。またこれとでがすかい。」（ト小指を出す）
主水。「お察しの如くさ。ぢや、また逢はう。」
安。「おつとと……（袂を捉まへる）冗談ぢやありませんや。お呉んなさいな。一枚で結構なんで。多分たあ云ひませんや。お願ひだ。お願ひでがす。偏へに、眞平らに。へーい。」
主水。「うるさいツ。（間）手めへに見込まれたら、だにみたいに、吸はずにはおかないんだからな。（間）よし、ぢや安ツ。手めい今夜、俺の云ふ通りになるか。ぢや貸してやらう。」
安。「なりますとも。その代りにあ一枚ぢやすまされませんぜ。」

主水。「よしよし。」

安。「ぢや、まづお呉んなさいな。」（手を出す）

主水。「穢ない奴だなあ。まだだよ。それにやるといつたつて、俺の懐ろぢやないんだよ。」

安。「へーえ。ぢや埋りませんや。つまらない。」

主水。「それが案外、埋るんだ。安ツ。ちよいと耳を貸せ。」

（主水、安の耳に囁く。間。）

主水。「ねえ。いゝか。分つたらう。」

安「ふーん。お安くないな。であなたは飛んでもない作者だねえ。作者でさうして性のわるい色師と來てやがらあ。」あんまり芳ばしくがあせんぜ。仕方がないや。無い時あ、嬶でも殺せだ。やつつけろだい、やりやせう。」

主水。「その代り、酒手は、お望み次第。先方が御持参だよ。ぢや、いゝねえ。はぐれないやうにな。」

安。「分りやした。おつとゝと……暫らく待つた。手附けを。手附けをお呉んなさいな。」

主水。「俺あ、ないんだよ。あいつから取れよ。」

安。「だつてさあ。とても一杯引つかけなくちややりきれやせん。それに今夜の御用にや、どうしても

一杯元氣で遣つつけなきあ、脂が乘りませんや。どうぞ、手附けだけは、若丹那から。」

主水。「どうも、うまいことといふなあ。感心したよ。まあいゝわ。ぢや、ほんの飲代だけだよ、輕少だよ。」

（懷中から財布を取出し、何干か攫んでやる）

安。（それを見て）「輕少とお言葉通りですね。が勘辨してあげやせう。大分、あなたもからツけつらしいから。」

主水。「それをまた搾り出す貴樣がゐるんだからな。ぢや行くよ。手前いざといふ時あ凄く啖呵をきれよ。」

安。「そこは横飛承知之助御存じのわつしでがす。しからば後刻、いざ對面な仕りやせう。」（侍のなりを眞似て、しやれ乍ら左へ入る。）

主水。（見送つてゐたが）「馬鹿だな。彼奴は。」（ふと心づいて急いで右へ退場）

第二場

舞臺右手に、立木五六本。すべて櫻の滿開、大分散つてゐる。左手に店をしまつた葭簾小屋がある。水茶屋であらう。背景は、田圃。その彼方は、あか〳〵と灯の點いた賑やかな町。蛙がふんだんに聞えてゐる。

おれん。町女房らしき拵へで、櫻の根形に蹲がんでゐる。

（おれん。背伸びをし乍ら、立上る。）

おれん。「どうしたんだらうねえ、あの人は。あんまり人を焦らすぢやないか。待たしたことはあるが待つたことは始めてなんだから、何だか勝手が異つて、變で仕様がない。主水さん――。おつとどつこい、禁句。」（と、自分で口をふさぐ）

主水。「あいよ。」（と云ひ乍ら、葭簾を捲つて、小屋から顏を出す）

おれん。「何ですの、人を馬鹿にしてさ。來てたの。」

主水。（歩みよつて）「來てたさ。先刻此所物案じの體と御座いといつた時に、すーつと此の葭簾へ入り込んだ。それから默つて樣子を見てた。」

おれん。「人がわるいわねえ。」

主水。「そこがまた取りえといひます。」

おれん。「馬鹿仰有い。」（と笑ひ乍ら）

主水。「どうだつたい。家の首尾は。」

おれん。「かうして此處へ來てるからは、いゝにちがひないぢやないの。」

主水。「さうか。大抵、肴屋の吉が心得てゐるから、どぢは踏まねえ、とは思つてたが。」(間)

おれん。「あなた。至急な相談つて、何でしたの。」

主水。「それか。うーん、本當だよ。」

おれん。「何でしたの。」

主水。「まあゆつくりいはうぢやないか。」

おれん。「何だか、仰有いな。それが爲にわざ〳〵出て來たんぢやないの。」

主水。「それが爲にかい、ぢや相談がなけりや、來ないんだね。」

おれん。「さうぢやないさ。しかし、氣になるからさ。」

(おれんの言葉は、時々娘の如く甘えたる叮嚀になるかと思へば、斯の如く姐御氣どりの亂暴なる物言ひに變ることもありと承知ありたし。)

主水。「こゝへ引張り出しただけのことさ。用事はこれだよ。相談といふのも、これさ。」

おれん。「さう。本當。(間)どうせ、そんなこつたらうとは思つてた。」

主水。「明察。明察。(間)がしかしな、おい、おれん。いゝ加減に引拂つちやどうだい。」

おれん。「今の所をでせう。」

主水。「さうさ。」

おれん。「さうね。もう別に要事つてありやしないが。」

主水。「でもあの平兵衛が、可愛いゝんだらう。」

おれん。「えゝ。お察しの通り。」

主水。「馬鹿！　聞きたくねえヤ。」（びしやりと女の鬢を打つていふ）

おれん。「あなたは手が早いわね。可愛いゝんだらうと云ふから、さうだと云つた迄ぢやないの。何でもないわ。その可愛い平兵衛を袖にして、斯うして逢ひに來てる、そんならあなたは、何でせうね。」

主水。「知らぬ。」（苦笑つてゐる

おれん。「それ御覧なさい。お互ひ樣だわ。」

主水。「だけどねえ、おれん。俺だつて、偶には、ぢんすけも起るといふものだよ。偶に逢つてる位ゐぢや、物足りないからな。それに先は町人とはとへ、とに角お前の持主だからな。威張れないよ。俺は。それに斯うなりや、可愛い手まへを一日だつて、もうこれ以上あの平兵衛の手許にア居らせたくないよ。お前はもと〳〵大空の鳥なんだからな。山川を自由に飛んでた體ぢやないか。もう好い加減に引き揚げろよ。その中に地金が出たら困るだらう。」

おれん。「地金は、もう出てるわ。(間) さうねえ、大抵、胡麻化せるだけは胡麻化してしまつたから、あの親爺には、もう御用は無しさ。あなた、軍用金は出來ましたよ。」

主水。「さうか。しめしめ。ぢや早速それを。」

おれん。「おつと、どつこい。それは駄目よ。あなたにあげたら、またたつた一と勝負でころりだわ。」

主水。「でもないぜ。これでも大分此頃は賭り方も上手になつたよ。惡黨ぶりをあげたよ。」

おれん。「もと〳〵あなたは、惡黨だわ。しかし育ちが育ちで、何處ともなう、まだ正直だわ。うぶだわ。そこにまたわたしが惚れたのかも知れないけれど。」

主水。「お言葉。お言葉。」

おれん。「もう、わたし歸りますよ。」

主水。(ハツとして)「何だい、まだいゝんだらう。今來たばかりぢやないか。今夜アゆつくりしてゝいいんだらう。」

おれん。(蹲がみ乍ら)「歸るといつたつて、どうせ歸しちや下さらなからうしさ。だつて、こゝにこんなことをしてたつてつまらぬぢやないの。何處かへ行きませうね。」

主水。「飲んでもいゝね。しかし此頃は、大分不義理だよ。」

おれん。「此の頃はつて、念を押さなくともいゝわ。初中終なんでせう。姐御が隨いてりや大丈夫さ。」

（ぷと何處からとなく、新内が聞えて來る）

「おまへのお主朋輩衆・お國の親御、御兄弟、御一家中その外馴染のおかたにまで疎みはてられそのやうなみぐるしいなりになし、御苦勞さするは誰れがわざ。ゆるしてくだんせ、何にもいはぬ。わしとてもまたこな樣を戀し床しは、この身の因果。お前に添ひたいばつかりに、いかい苦勞をくろすけのお稻荷さんへ日參し………」（浮世の別れ霜の一節）

（三味線を彈き乍ら、頰冠りをした男、右から登場。此時分、主水もおれんと一しよに蹲がんでゐた。顏を二人共に俯せてゐる。月が出ないから、一めん薄暗く、二人の顏も判然しない。新内流しの男、振り返り振り返り、左手葭簾のあたりで、つと立ち留り、二人の方をじつと見てゐる。（稍間）主水、堪りかねて立ち上る。つかつかと男の方へ歩み出る。男驚いて左手へ消える。）

主水。「ハヽヽヽ。ハヽヽヽ。」

おれん。（これも立ち上る）「あなたも大分人が惡くなつたわねえ。以前、こんな破目になると隱れたものだつけ。」

主水。「圖々しいものさ。それも誰かのお仕込みかな。」

おれん。「御冗談を、わたしだつても、もとは隠れましたわ。」（間）
おれん。「とに角こゝを引上げませう。ね。」
主水。「うーん。まあ待て。」
おれん。「だつて、もう此んな所に倦いたわ。」
主水。「今に月が出るよ。此處は月がいゝよ。」
おれん。「そんな風流氣は、どうだつていゝぢやないの。さあ行きませう。何處かで休んで、一杯飲んでまた何ぞ彈いて聞かして上げますわ。」
主水。「さうなあ。（あたりを見廻し）どうしたといふんだらう。」
おれん。「えツ。何ですの。」
主水。「何アに、此方のことさ。」（主水、なほ暫らく躊躇してゐたが）
主水。「ぢや、行かうか。」
おれん。「えゝ。行きませう。」（おれんもぼんやり他事を考へてゐたらしい。氣が付いて行きかゝる。）
（二人やがて、右へ入り終る）（稍間。前場の安と呼ばるゝ遊人、急いで左手から登場する。酔つてゐる）
安。「遅くなつた。一杯ひつかけてゐたうちにとろ〳〵ツと一と眠り。驚いて驅けつけたが……」

（と云ひ乍ら、四邊を探してゐる。丁度、その時分、月、樹間の向うに、大きく現はれる）

安。「アッ。お月坊だ。かうーツと、所は土手の水茶屋だと、先刻、若丹那が云つたね。をかしいな。ゐないぢやないか。」

安。「ゐない。影も形もゐないや。どろ〳〵ツと消え失せやがつた。しまつた。儲けぞこなつてしまつた。しまつたな。若丹那とレコがぴつたりくつついて何かくしや〳〵話してゐる。そこへ間男見つけたと呶鳴り込む。得意の俺の啖呵で、ぐづり込む。それを若丹那がまあ〳〵と宥める。レコも中中者には違ひないらしいが、惚れた弱味と、現に手證をとられた弱味から、凄文句も並べられまい。結句、たんまり、ちよつとしたことが五枚や六枚にはなる。それが緣となつて、これからでもチヨイ〳〵お店へ拜謁と出かける。そのたんび若丹那と山分けにしては、俺は、飲む、打つ、買ふさ。しまつたな。若丹那もだが、この俺さまもだ。しかし、惜しいことをしたな。寢なけりやよかつたんだ。（間）まあいゝや、また今度といふ時もあらう…………。寢なけりや、寢なけりやか。………。」（これより小唄もどきで）

寢なけりや、かうした因果も愚痴も泣いじやくり。ちよいと起きなんし…………か。ハハハ……。（尻を捲り、やぞうを拵へて）一人で道行と洒落ようか。（振返り）お月さまが、覗い

て笑(わら)つてらつしやる。あばよ。」（右へ消える）

（舞臺靜寂。思ひ出したやうに、
騷がしい蛙の遠音。
折から時の鐘。
月は冴えたり。）

靜かに幕………。

—1922.7.26.—

軟派漫筆　畢

大正十五年十一月二十日印刷
大正十五年十一月廿五日發行

軟派謾筆

（定價金參圓）

著作者檢印

著作者　尾崎久彌
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　瀧澤一郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍

東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話大手五一・四二一〇）
（振替口座東京一六一一七）
發行所　春陽堂

尾崎久彌著書

江戸軟派雜攷

定價金五圓五拾錢
送料金貳拾七錢

（內容一班）原始的な稚兒物、「好色むらく坊」と作者桃隣、西鶴に據るおさんの正體、大近松の破倫物、半二の「心中紙屋治兵衛」、馬琴初期の黄表紙、近世墮胎史雜考、婚姻男子訓から、賣比丘尼考、鳥追から女太夫、藝者の起源、俄、並に吉原俄考一九の「三都口眞似」、「江戸名物詩」、「大地震末代噺種」浮世繪師の心理、浮世繪の肉體美、浮世繪の賣春讃美、死繪考、東風吹江戸繪榮、浮世繪風景萬雜談、廣重畫最初の「東都名所」廣重の立齋に就いて、浮世繪漫錄、本朝艶畫考、艶本に於ける春信の推奬、エロチツクスに滲む心持、藤十郎擬間男の作、「踊形容」に就いて、新内の話「昨日の花は今日の夢」評釋藤蔓戀のしがらみ。

浮世繪と廢頽派

定價金貳圓七拾錢
送料金拾八錢

（內容）浮世繪美人畫の四大家、春信の性の國、歌麿の性の國、神性と獸性と、モナリザの微笑、浮世繪の逆輸入、フエノロサの版畫優越論、摺物師の悴、或種の變態性慾か、秋を背景にした江戸の艶男艶女、廣重の他力境、廣重の催情風畫、構圖の踏襲、草雙紙の外題袋、國芳畫より、浮世繪裸體目錄並に解說、浮世繪挑發畫風考、美人と風景十二首。地者を棄てたる記、エロチツクスの內容と體係、會本の諸形式、月成は二代焉馬、艶道俗說辯と不知足山人、魂膽遊婦窟の所見、新刻圖彙について、廣義のあぶな繪、「あぶな繪書集」繪圖解說、浮世繪エロチシズム沿革誌並に其の目錄挿繪解說。等。木版手刷特製本、挿入寫眞數十葉。

尾崎久彌著作目錄一斑

夢を描く	歌集菊洋假	大正二年八月 名古屋一人一篇社
浮世繪の印象	譯著四六洋	大正八年七月 東京天佑社
小唄しんさく	創作菊半和	大正九年十月 名古屋小唄研究會
類聚西行上人歌集新釋	評釋四六洋	大正十二年十二月 東京修文館
あぶな繪畫集	編著四六四倍帙入	大正十三年三月 名古屋江戸軟派研究發行所
遊里不調法記・馬士の歌袋・伊勢名物通神風（合本）	校訂四六和	大正十三年十一月 同
どゝいつぶし根元集	校補四六和	大正十四年二月 同
御船哥大全	校訂四六和	大正十四年二月 同

江戸軟派雜考	著　菊洋	大正十四年六月	東京春陽堂
樂屋ばなし・三津瀬川上品仕立役者評判よせ（合本）	校訂四六和	大正十四年七月	名古屋江戸軟派研究發行所
近松淨瑠璃讀本	校註四六洋	大正十四年十月	東京三學社
浮世繪と廢頽派	著四六洋	大正十四年十二月	東京春陽堂
續々膝栗毛（乾卷）	校訂四六和	大正十五年二月	名古屋江戸軟派研究發行所
洒落本集成（第一卷）	校訂四六洋	近刊	東京春陽堂
浮世繪美人大首畫乃研究	著　菊洋	同	同
江戸小咄本	校訂四六洋	同	東京坂本書店
江戸時代小説・脚本・淨瑠璃・隨筆飜刻物索引	編　菊洋	同	東京春陽堂